583
583-15
1200501523071

9.1.15

納本

南總里見八犬傳

貳

文學博士 笹川種郎校訂

東京 博文館版

帝國文庫 第廿七篇

583-15

目次

第八輯……三
卷之一……一三五
卷之二……一五三
卷之三……一七九
卷之四上套……二〇三
卷之四下套……二一七
卷之五附錄……二三〇
第九輯上帙……二四一
卷之一……二四六
卷之二……二七二
卷之三……二九八
卷之四……三三五
卷之五……三五三
卷之六……三七九
第九輯中帙……四一一

八犬傳第八輯自序

曲亭主人。江戸隱士也。別號多有。名平居綴文處。爲著作堂。其次名小書齋。爲鸞齋。繙國史舊錄。奇文諸雜書時號彫窩。閱儒書佛經。諸子百家之書時號玄同。自序於稗史小說時號簑笠。耽戲墨時號曲亭。編兒戲小策子時稱馬琴。下俚巴人。其曲不高。和者彌〻衆。是以馬琴曲亭二號。著于世云。曲亭山名。見淡書陳湯傳及大明一統志。馬琴取野相公案婦詞句以命之。相公詞曰。才非馬卿彈琴。未能身異鳳史吹簫。猶拙。見菅原爲長十訓抄。是它有雷水。狂齋。半閒。信天翁。愚山人數號。約一十二號。皆臨時隨意。莫弗署矣。或笑其別號之多。主人乃辨之曰。古人有表字。而無別號。或稱本貫。或以所居地名相呼耳。近世別號。始自儒流。間亦有堂閣樓臺精舍草菴。則名此而號某堂某樓主人。此後世有別號。所以至二三。不足怪矣。時好名者。相羨以爲雅事。因無其堂閣樓臺。亦自號某堂某樓主人。夫有名而無實。是爲虛名。虛名與身俱亡。不傳于後世。雖有十數號。與坊賈記本錢字號一般。非但文人墨客有別號。貴賤有家號。又有綽號。萬物有方言。多異名。至諸家本草。乃藥物異名最煩多。非學而得焉。識別殆不輙。故老氏曰。名可名。非常名。漆園亦曰。名實之賓。名實兩忘。始可知非常之名也。由此觀之。余之有十數號。猶無也。古之高人。許人聞名。不許人見面。余胡爲望高人。然惜身而不思名。比肩於稗官者流。而意織筆耕。不數造化小兒與之爲狡獪也。豈思名者所庶幾。能察是意者。可俱評稗史焉。未得是意者。何憑知作者之觀世寫情。有寓言以奬忠孝。戲謔中辨貞淫。猶且正是非昭法戒。又善懲隱慝禁竊盜之旨哉。雖然。集虛假之詞。而綴虛假之文。事之與文。素所無之。徵諸華胥乎。抑討於南柯乎。胸中有物。則求之于內。胷中無物。

則求之於外。內外撮合。然後許多脚色出焉。於戲噫嘻。誰徐悟立談之旨於言外。世人多不思之。奸閥稗史者。啻喜虛假之詞之奇中出奇。且有千情萬形可笑可悲。可怒可罵之闔合。已矣。不閱者。不擇巧拙。亦唯謂虛假之詞之誣世惑俗。一毫無益於名教。而擯斥之。至甚焉者。燒琴烹鶴。其故何也。爲膠柱不解。不悟幻境爲仙家。除此之外。厭常喜怪。是故徒好聽鬼而不樂觀鬼。昔者葉公好畫龍。而遯眞龍。當時呈畫龍者賞矣。致眞龍者黜矣。余亦爲婦幼。呈畫龍也久矣。尙幸不能致眞龍焉。此拙編所以行于今。儻有與余同愚者。而思及于此。乃觀畫龍。如觀眞龍。其油然有所感。而肅然知所懼。一日有客。余對客腐談如前條。時八犬傳第八輯。全稿方成。欲序未果。即次是言。代序以顏于簡端。

天保三年如月望

蓑笠漁隱撰

南總里見八犬傳第八輯上帙五册總目錄

卷之一　第七十四回
　牙ノ牛悌瞋辭ニ答恩錢一

同　卷　第七十五回
　趕ニ醉客一小文吾遇ニ次團太一

卷之二　第七十六回
　庚申堂俠者囚ニ賊婦一

同　卷　第七十七回
　盡ニ衆賊一酒顚脅ニ旅舍一

卷之三　第七十八回
　北母自恣ニ賞罰一

同　卷　第七十九回
　齋ニ家廟一良臣贈ニ異刀一

卷之四上　第八十回
　斬ニ殘仇一毛野與ニ莊介一戰。

同　卷下　第八十一回
　荻野井返命僞刀還ニ舊主一
　卸ノ朽磯九墜ニ殘雪窖一
　懷ニ短刀一假瞽女按ニ摩犬田一
　廢毀院義任送ニ船蟲一
　傳ニ內命一由充招ニ二客一
　東使雙賜ニ首級一
　憩ニ茶肆一奸佞試ニ落葉一
　舒ニ傳來一小文吾和ニ兩雄一
　三犬士再會宿因重話表

同　卷　第八十二回
青柳獸店胤智題ニ詩歌一　穂北驟雨禮儀喪ニ行裏一

上帙五冊目錄　終　下帙五冊續刻共　發行

南總里見八犬傳第八輯下帙五冊總目錄

卷之五　第八十三回
得失易レ地勇士遇レ辰　片袖移レ禍賢女獨知
同　卷　第八十四回
夜泊孤舟暗資ニ窮士一　逆旅小集妙懲ニ鄉豪一
卷之六　第八十五回
傾レ志夏行留ニ四賢一　占レ夢重戸說ニ讖兆一
同　卷　第八十六回
道節再謀ニ復讐一　、大巧滅妖賊一
卷之七　第八十七回
談ニ天機一老獸惜ニ舊洞一　照ニ蕉火一勇僧入ニ貔穴一
同　卷　第八十八回
湯島社頭才子賣レ藥　聖廟老樹從者走レ猴
卷之八上　第八十九回
呈ニ奇功義俠寧ニ寃囚一　詳ニ秘策一忠款鋤ニ奸佞一
同　卷下　第九十回
司馬濱船蟲羈ニ淫　閻羅殿牛鬼劈レ賊

同巻　第九十一回

鈴森毛野撃三絲連一　谷山道節射二定正一

下帙總目錄　終　本輯上下二帙分卷共十冊刊布

いはのやのかにまろおぢが、八犬傳をめでよろこびて、よみたる八うた。

たをやめの花のたもとにおひたてど　こゝろは雲をしののをすゝき
あたうちてたのみよりつるとしころの　めくみもかへす犬川の波
これやこのやしなひとりていぬかひの　ありておやには似さりけむ蜂
もゆる火の中にのがれて犬山の　わさすてつるも心たかしや
きえぬべき露のしら玉　神も手にとりてもていぬえにはふかしな
おひかゝる犬田のくろのすまひ草　したにくちたるあのくつちかな
おほろけのかりの色かはをみなへし　あたをもつくすはなのひとゝき
いぬむらのかきねのくす葉うらみをも　かへせる露のた玉うれしき

蟹麻呂者。伊勢松阪人。殿村常久一稱也。別號巖軒。善研究國學。而所發明不勘矣。是以其著宇通保物語年立。千種根左志。各一卷有之。皆刻于家。然性謙讓。而不遊於名利間。是故其書雖刻成而自非知音之友。未嘗與諸人。嗚呼可惜焉。文政十三年。庚寅秋七月十六日病沒。享歲五十二。是歌易簀之前月所詠云。因附錄簡端。楮餘。

蓑笠漁隱再識

南總里見八犬傳　第八輯　卷之一

東都　曲亭主人編次

第七十四回

牛を肝て悌順答恩錢を辭ふ
朸を卸して磯九殘雪窖に墜つ

再說、犬田小文吾悌順は、那龍種なる暴牛の、突もて來ぬる勢ひ猛く、當るべうもあらざりしを、些も騷ぐ氣色なく、閃りと反して左右の手に、角を楚と捕駐たり。然ども怯ぬ怒牛の奮激、四蹄を壤に踏入までに、推倒さんと角へども、小文吾も亦一身の、力を極め挑あふて、一歩だにも退かず。千曳の石の地中より、見れ出て立たる如く、又烏獲が奔牛の尾を援留めしも恁やと覺えて、和漢に傳多からぬ、稀有の壯觀でありければ、初に酷く蒐散されて、辟易したる牛力士們は、亦這緯の爲體を、看つゝ再胆を潰して、彼よ／＼。と計りに、手を抗足を空にしつ、衆皆四下に聚ふものから、怕れて近くは找み得ず、呆れて齊一目戍りてをり。然程に小文吾は、權且牛を疲して、曳と被たるちから聲と、共に烈しき修煉の剽姚、左へ推させて、耶と右へ、揉回したる打擂の本事に、然しも悍かる須本太牛は、鈍や頑童に放下さるゝ、牴兒の似く地响拍して、撞と仰反倒れけり。これを觀るもの思はずも、感じて喝と采る聲、谺に答て夥しく、霎時は鳴も已ざりける。登時力士幾名か、走り蒐りつ力を勠して、牛の四足を捉るもあり。又翠丸を摑むもありて、毛をもて糾る牛麋に、鷄の羽多くものせよ。と罵りつ辛くして、鼻に融しつ、太やかなる、絆索を楚と繫著て、哨子鳴らして牽起せば、牛はそが儘鎭りて、身振ひしつゝ立時に、小文吾を見て怕れけん、兩三歩逡巡して、牽るゝ隨に阿容々々と、蕃山のかたに退きけり。有恁し程に小文吾の、案内に立たる磯九郎は、逃も果さ

て又立聚ふ、衆人と共侶に、間遙に小文吾が、勇敢膂力を目擊したる、こゝろ宛醉るが如く、初は阽み後は又、咱さへ面を起すと思へば、事鎭ると慌しく、はや稠人を搔分て、走り近づき小文吾に、聲をかけ腰を折めて、その歡びを演るにぞ、那大力士牛裁判們は、二頭の牛の主と聞えし、須本太角連二を先に立して、含笑ながら出て來つ、皆小文吾にうち對ひ、跪坐て齊一額をつきて、俺們はけふの結番の、此彼二頭の牛の主、虫龜村なる須本太郎、逃入村なる角連二、竝に大力士某甲某乙、牛裁判們で候也。當所の牛の角突は、年毎に間斷なければ、牛の放るゝことも、あり、又暴牛もなきにあらねど、牛力士們が修煉して、軈て捕牙候ひしに、須本太が牛の龍種なればや暴出せしより手に乘らで、不慮の悪劇に及びしに、鬼神を欺くおん身の勇力、輒く牛を推滾して、那厄難を鎭め給ひし、御恩は三國山より高く、又衆人の歡びは、千隈川より深かるべし。小坪で鰐を手捕にしたる、朝夷三郎義秀も、牝鹿の角を裂にきといふ、泉小二郎親衡も、皆是見ぬ世の人なれば、虛實いかにかあるべからん。駭憶ふはおん身の力量、眼前に觀て初て知りぬ。今も亦恁る勇士の、在たるこそ不思議なれ。願ふは本貫尊號旅館を、巨細に名告せ給へかし。記錄に留めて後々迄の、話柄に做まく欲す。いかで／＼。と慇懃なる、言語齊一乞問れたる。犬田が答を俟ずして、找み出たる磯九郎は、さもこそあらめ、と誇負に、はや須本太們にうち對ひて、噫大爺達まだ識らずや。這個刀禰は東國より、武者修行の爲來ましたる、姓は犬田世稱を、小文吾となん喚れ給ふ、海内無雙の猛者なれば、旅亭も一倍擇れけん、小千谷の鄕に名もしるき、石龜屋次團太が、一大得意の客人也。なれどもさせる欵待なし。けふこそ這里の闘牛を、觀せまゐらせんと豫より、約束せられし哥々の名代、おん鄕導に立たれども、悪劇で興も忽地に、鮫守の磯九郎を、認らぬことはなからんを、咱們を閣て當面に、事問稟すは無禮ならずや。と訛音高く窘れば、牛裁判は力士と俱に、驚きながら仰見て、現いはるれば磯九主、高名耳に聽くものから、未だ面を識らざりければ、敬なき業を致したり。允し給へ。とうち陪話るを、小文吾は傍痛し、と思へばこれを慰めて、各々介意し給ふな。武士たるも

のは戰場にて、名ある勇士を擊てゝそ、聊功に誇りもせめ、暴たる牛を制たりとて、何でふみづから負むに足んや。やよ、うち措し給ひね。と技に誇らぬ言の葉に、花をもたせて美しき、答に大家感じたる、そが中に須本太郎は、牛裁判們にうち對ひて、能ある鷹は爪を隱す、といふ鄙語も故あるかな。最大人しき目今の、おん辭に儘しては、御陀に立し甲斐もなし。幾千人の老弱男女が、幸ひにして怪我もせず、絆はや無異に治りたる、歡びもまうすべく、おん報ひもせまくほしきに、今宵のお宿を仕らん。この義を取持給ひてよ。といふに頷く牛裁判們は、又磯九郎にうち對ひて、哥々、目今聞れし如し。誘虫龜へおん伴せん。宜く稟し給ひね。と憑めば有理、と磯九郎は、小文吾を見返りて、何方今宵は小千谷まで、還らせ給ふべくもあらねば、牛主達の所望に任して、那里に泊り給へかし。こは又自然の道理也。誘快々と。勸るを、推辭難たる小文吾は、才にその意に隨ひて、そは左も右もの事ながら、報ひを受べき俺にあらず。聊たりとも用意せらるゝ、管待は初より、固く斷りまうす也。這義を遂へ給ふな。といふに歡ぶ須本太郎、角連二さへ直實だちて、けふ御助力に遇ざりせば、怪我するものも多かるべく、且小可が眞黑牛の、突殺さるゝこともあらんを、人畜共に恙なく、恁まで愛たく隈廟の、祭祀を果せし歡びは、只是大人の賜なり。翌も逗留し給はゞ、小可も亦お宿をせん。哺虫龜の翁、素より田舍の事なれば、おん欵待の何かあらん。然しも他鄕に異なるは、糧食にはあらで米の飯、秋冬ならば鮭もあり、小鱈もあれど今頃は、稍雪閼の新世界、野蔬すら尙稀なれば。と相槌打るゝ須本太郎は、含笑ながら頷きて、現錯語なしちがひなし。只手製の御酒ばかり、御意に入れんと思ふのみ。日は傾きぬ誘給へとて、はや小文吾が後に從ひ、先にも立つゝ夜は鳴く、虫龜村へ倡導にぞ、磯九郎さへ又更に、最も興ある心地して、亘擘を掉りつゝ意氣揚々と、犬田が側に隷從ふて、俱に引れてゆく程に、須本太牛を揉倒した る、大力殿をよく觀んとて、今まで殘留りたる、老幼男女幾隊か、樹下結縷草穫に立聚ひて、拭翳袖披き低語て、見えずなるまで目送りけり。却角連二は中途にて、今宵は所要ありと倡へて、辭して家路に還りしかば、大力士們も

便路に儘して、別を告るも多かりしを、牛裁判們は恁る時の、所役なれば、と憑れて、なほ小文吾を送りゆくめり。爾程に小文吾は、はやく須本太が宿所に到るに、日の最長き比なれば、向暮として暮もせず、下晡の宿ながら、田舍は殊に長閑なる、その一布地を看回らして、衡門より找み入るに、主人は素より富裕にて、本邨第二の長なれば、妻子あり、奴婢も多かり。鄰には小厮を走らして、けふの始末を恁々。とはやく宿所へ報たりければ、妻も兒子も小文吾の、名を聞知りつ、こゝろを得て、大家齊一出迎へたる、欵待態大かたならず。客房へとて案內をしつゝ、上坐に推升して、茶を看め果子を薦め、妻も兒子も暴牛を、捕鎭められし歡びを、云々と演などす。登時主人須本太郎は、婢妾輩がもて來ぬる、酒杯を受とりて、みづから小文吾に薦めけり。けふは祭祀の恒例にて、家毎に酒肉の儲あり。況牛を出せしものは、各々その捷を祈りて、准備に置しからざれば、有べき限り酒菜を取出て、處狹まで安排べたる、主客の辭讓熟鬧しく、牛裁判們も立替り、入代りつゝ提撕て、只管犬田を稱賛す。これにより磯九郎も、席末に列りて、思ひの隨に飲もしつ、啖ひもしつゝ笑ひ興じて、人より先に醉たりければ、傍痛きこと多かり。既にして盃の、數番巡りし時、須本太郎は又更めて、小文吾に羞めていふやう、偶お宿は仕れども、猛の事にて意に儘せず。田舍料理の似而非饗饌、最恥かしく候也。就て一二種の餚あり。こは暴牛を鎭め給ひし、おん報ひとまうさんは、烏滸がましくも思召べし。只獻盃の餚にこそ、と臠し給ひね。と演て後方を見かへれば、牛裁判們がこゝろ得て、次房に准備をしたる、縮麻織五六反と、永樂錢十貫文を、手に〳〵取てもて來つゝ、小文吾が目前へ、恭しく安排べて、共侶に薦るやう、只今主人の稟せし如く、相應しからぬ東西にはあれど、暑に向ふ折なれば、縮は軈て御旅中の、汗衫にも做さるべし。錢は當所の恒例にて、暴たる牛を辛くして、捕鎭るものある時は、牛の主より出すこと、三貫文と定めたり。遮莫けふの暴牛は、大力士們すら蒐散されて、殆難義に及びしを、料らず大人の御助力にて、絆立地に鎭りたる、その歡びを稟さんとて、聊主人の心を用ひし、折乾にて候也。敬なき東西を、と叱らせ給

はて、受收給ひなば、主人はさら也俺們まで、いと辱く思ひまつらん。この義を承引給ひねかし。と口說くを小文吾聞あへず、そは又要なき人情也。縮にも既にいひけらし。武士たるものが暴牛を、捕鎭めたりとても、然までに功とすべきにあらず。那折牛を牢めずば、俺身も矢庭に突倒されて、傷つくこともありぬべし。爾れば人の興のみならで、這身を思ひし故なるに、約束違ひて甚麼ぞや。力士のごとくせらるゝは、只是意外の恨み也。その義は決して受旦し。と推辭をうち聞く磯九郎は、折敷搔遣り拔み出て、袖卷揚して小文吾を、佶と睨へて、莞爾とうち笑み、小可醉ていふにはあらねど、大人の了簡甚歹かり。寡慾も事によるべきに、人の資助になりながら、報ひを固辭ことやはある。こは小可に任させ給へ。今より小千谷へもて還りて、哥々に羨せん。といふを小文吾冷笑ひて、何を和主が知るよしあらん。角力の折箱と思へる歟、嗚呼なることを。と禁れども、磯九郎は耳にも掛ず、醉たるものゝ癖なれば、理なきことを囂々と、繰返したる高聲に、小文吾は只呆れ果て、取るにも足らぬ醉狂人と、口角ひ益なし、と思ひかへして再いはず。牛裁判們はまだ醉ぬ、酒よりはやく興醒て、此彼ひとしく磯九郎を、推鎭んとて捫擇したる、迭代りの辭のかず〳〵、果しもあらぬ殺風景に、主人はいとゞ胸苦しく、ひとり小文吾を慰めて、人も我も酒ばかり、怪しきものは候はず。寡言なりしが多辯になるも、柔和なりしも諍ひ怒るは、咸狂水の所爲なるを、御こゝろに掛け給ひそ。且く綷の鎭るまで、いと徒然に見え給へば、別席におん湯漬の、夕飯をまゐらすべし。背門のかたには褊小なる、乾淨舍に庭もあり。北國の風土にて、桃も櫻も千葉紅梅も、昨今一度に皆開て、茅の軒端に爛漫たり。けや黃昏に及びしかども、折から霽たる夕月夜には、聊眺めなきにあらず。誘おん案內を仕らん。立せ給へ。と正首なる、心づかひを小文吾は、はやくも猜してこれのみ辭はず。且く這里を外すには、好潮間ぞと思ひしかば、應をしつゝ遽しく、刀を引提て立にけり。爾程に磯九郎は、小文吾が這席に、在らずなりては誰にかも、憚るべくもあらざれば、いよゝます〳〵罵り狂ひて、牛裁判們の意見を用ひず、舌もまわらぬ醉ふり立て、各々いはるゝことなれど

も、咱們が哥々は年こそよりたれ、地方で一二と指れたる、角力の拔手なりければ、暴たる牛の一箇や二箇、組止ること易からんを、けふは火家の回背にて、其首へいなねば濟ぬとて、個磯九郎を客人の、鄕導に立られしに、這首の主人が恩義の酬ひに、牽たる縮と樂錢を、受られずとて損さしては、還りて哥々にいひわけなし。朸一本貸し給へ。今より肩にうち乘して、はやく宿所へもてゆかずば、又客人が人柄爲りて、空辭退して果は亦、咱們を哥々に叱らせん。日の暮ぬ間に快ゆくべし。錢も縮も兩個に分て、袱借りて裹ずや。と席薦敲きて急せしを、牛裁判們はなほ和諭て、和主のいふよし無理ならねば、そを用ひぬにあらねども、よく思ふても見給へかし。這里よりして小千谷まで、一里や二里の路にはあらず。日は暮たるに重荷を擔ふて、通宵走るは益なき所行也。然とも翌まで俟れずば、馬を央ふて駝して遣りね。眞夜中比に必屆かん。この義は都て俺們に、任して和主は快就枕りね。やよ哺々。と右左より、只管賺すを磯九郎は、半分聞かず疾視嗟りて、牛より起りし事也とて、馬を央ふて何にせん。多寡の知れたる連繕錢、小角力も取る俺なるに、重荷とせらるゝことあらんや。けふは初の九日にて、眞夜中までは月もあり。足の炎にあらねども、五里や三里を走ればとて、甚ばかりのことやはある。快擔爲りて遞興さずや。と頻りに狂ふ生醉も、慾には錯はぬ卑劣の本性、留るべくもあらざれば、牛裁判們は賺難て、かくまでいへば是非もなし。慾に暴立て、なほこのうへの悪劇に及ばゝ、裁判人の甲斐なしとて、主人に怨みられやせん。放て遣るもよかるべし。と聶きつ、商量したる、そが中に一兩名、庖湢のかたに赴きて、袱朸草鞋まで、手々にもて來て擔爲る程に、自餘のものは磯九郎を、やうやくに推鎭めて、やよ磯九主聞給へ。恁は和主の望に儘して、錢も縮も擔爲りたり。草鞋もとゝにあり。身裝して出ずや。といはれて歡ぶ磯九郎は、二裹の擔荷を見かへりて、是で好これでよし。然らば罷らん。客人にも、主人にもよくこゝろ得てよ。といひつゝ立を、庭門より。と辭をかくるそが一人は、先に走りて推開く、胡枝の折戸も卷石近き、緣頰にはけや磯九郎が、裳端折り草鞋を穿に、瑠支へて邪魔になる、中刀取らし手傳ふて、裹の上に挿む。裡

面なる二人は朸の兩端、耶と吊揚て乘せて遣る、重擔を肩に受とりて、物とも思はぬ血氣の壯佼、倭僧ながら出てゆくを、心もとなく思ひたる、裁判人們は目送り果て、舊席に坐を占れば、酒客に怕れて次房へ、避たる給侍の婢妾們と、共に小厮も出て來て、亦復酒を鷹るにぞ、牛裁判們は磯九郎の、噂をしつゝ小厮に對ひて、さるにても醉たるものに、十貫文の錢をもたして、夜道を遣るは心もとなし。詎々にても見隱れに、送りゆくこそよかゝめれ。這義を奥へまうしてよ。と心を屬れど小厮們は、磯九郎が人もなげなる、似而非廣言を憎がりて、生應して早には立ず。偶立しも奥にゆきて、いはれしよしを、恁々と、執次ものはなかりけり。有恁し程に小文吾は、又那乾淨舍にて、夕饌をたうべなどして、うち譚ふこと半晌あまり、夜ははや初更の比及に、主人に引れて又舊の客房に來にければ、牛裁判們は磯九郎が、絆の趣箇樣々々、恁々なりき。と報知するを、小文吾聞つゝ驚きて、そは安からぬ事にこそあれ。這首よりして小千谷まで、一ヂ二里の路にはあらず。況千隈の夜河あり。醉狂人の錢帛を擔ふて、一個ゆきなば危からずや。縱恙のあらずとも、他が乾父次團太は、市人なれども俠氣あるに、情由を知らずば某が、財帛に愛て夜深しに、一個磯九郎を還しにけり、と思ひやすらんいと恥かし。時は啣移りしとても、醉たるもののことなれば、いまだ遠くは去べからず。快趕留ん。と立揚るを、須本太郎推禁めて、宣ふよしは理りなれども、みづから趕せ給ふにも及ばじ。僮僕輩を走らしてん。裁判達も心つきなし。よしや禁めても留らねばとて、切て小厮の一兩名も、倶に遣るべきことなるに。といふを大家聞あへず、そは俺們も脫落なく、那人々に恁々と、いひつることはいひしかど、なほ饗膳の最中でありけん、奥へ通達せざりしにや、今までその義に及れざりき。と報るに主人は眼を睜りて、そは那奴們が等閑也。快甲も來よ乙もいね。提燈點して出ずや。と頻りに焦燥て呼立るを、小文吾禁めて且等給へ、幾個人を走らして、引戻さんとせらるゝとも、俺身みづからゆくにあらずば、磯九郎はなほ云々と、强情張て從ふべからず。思ひがけなき今宵の饗應、歡びは述盡しがたかり。今より暇を給はるべし。いで〳〵。といひつゝも、立を主人は禁

（相川の驛路に次團太賦男女をとらえたる）

め難て、しからんには是非に及ばず、然とて遠路の夜行也。篋轎をまゐらせん、うち乘りて、やよ走らし給へ。といへば小文吾頭を掉て、そは淺からぬ馳走なれども、その義によりて時を移さば、いよいよ及び難かるべし。允し給へ。といひ捨て、身裝しつ慌しく、はや玄關に立出れば、主人はなほも奴僕輩を、兩三名呼立て、若們はおん客人に、從ひまつりて快ゆきね。と辭せわしく吩咐て、却後方に合寓たる、牛裁判們にうち對て、各位もとてもの事に、一人途まで送らせ給へ。咱們は篋轎を、吊して迹より趕著ん。這義を憑みまうす也。といふに大家異議もなく、そは宣ふな、こゝろ得たり。甲乙は且く遣りて、主共侶に續きて來よ。迹をたのむ。といひかけて、走り出たる一兩名、後れて來ぬる奴僕輩を、呼掛々々急がして、一町あまり先だちたる、犬田に喘ぐ遲牛の、月を便りに趕ふたりける。案下某再說、鮫守磯九郎は、醉に乘しつ牛裁判們の、皆禁めたる意見を聽かで、十貫の錢五反の縮を、獨朸にうち掛て、須本太が宿所を出しより、只管路次を急ぐものから、又只踉々

蹌々と、歩の運びの危かりしを、幸ひにして滾もせず、跌きもせず辛して、路二里餘來にければ、夜ははや二更の比になりけり。磯九郎は性として、角力を好めば然ばかりの、膂力なきにあらねども、思ひしよりは持壓りして、背の汗に推流されけん、酒の醉は醒にけり。霎時こゝらで憩んとて、そが儘に擔をうち卸して、推袒ぎつ月を瞻仰て、腰なる手拭を拔出し、胸毛を浸せし汗を拭ひて、彼此を見かへるに、今來し方の山路なりしは、相川村にてありけんかし。這里は件の村盡處にて、陜野もあり水田もあれど、樹下藪の蔭などには、殘れる雪の多く見えたり。夜艾の野田のことにしあれば、宇津の山邊にあらねども、人には遇ぬ也けり。と口號つゝ悔しさに、獨熟思惟るに、嚮には酷く醉にけん、人の意見を聽ずして、恁る重擔を遥々と、もて來ぬるこそ俺ながら、勞して功なき事なりけれ。是よりなほも苦辛して、小千谷の宿までもてゆきぬとも、錢も縮も俺が東西ならぬに、人も憑ぬ擔奴をせしは、只是酒の所爲なれども、痴漢也、と人にいはれん。然とて棄てはいよ〳〵いなれず。益なかりき。と獨言て舌うち鳴らす後悔の、今さら此に立よしなければ、思ひかへしつ擡起して、肩に載せんとせし折から、忽地婦人の叫ぶ聲して、やよ哺妾を助けてたびね。助け給へ。と呼かけたり。登時磯九郎は、思ひがけなき喚聲に、駭きつ且怪みて、急に四下を見かへれども、それかと思ふ人影もあらず。原來是狐狸の、今俺が疲勞れて悔しく思ふ、心の空虛に馮入りて、魅かさんと做にやあらん。いと嗚呼也。と罵りて、袒推斂れつ邊しく、眉毛に屢唾を塗りて、ふたゝび杣に手を掛つゝ、快擡んとする程に、亦復喚聲頻りに起りて、助け給へ。と叫びしかば、磯九郎はいよゝます〳〵、疑惑ふて去も得やらず、隅なき月を燭にして、なほ彼此と看回らすに、聲は正しく樹下なる、殘雪の邊にて、その人士中にある賊とおぼしく、形狀はなほも見えざりけり。越に熟尋思を做すに、こは北國の習俗にて、冬春雪の深かる比、獵戸們が雪を穿て、窖藏の如くにしつ、その雪窖に躱居て、鳥を捉ること毎にあり。今は四月の初旬にて、里なる雪は消果たれども、日光に疎き巨樹の下、藪蔭などにはなほ雪の、小山のごとく殘れるあり。恁れば那里はちかき比まで、鳥を捕るもの〻、穿做したる、雪窖にもやあらんずらん。然ば夜行をせしもの〻、愆て件の窖に、陷りしより出がたさに、人の扶助を求る歟、これも亦知るべからず。いで〳〵といひつゝも、聲するかたに立よりて、見れば果して雪窖也。下は漸々解初けん、さまで深くは見えざれども、上はなほ巖の如く、堅うして且滑也。おもふに違ざりけり。とひとりごちつゝ聲をかけて、害に墮しけ甚なるものぞや。聲は正しく婦人に似たり。何等の故に夜を更て、獨こゝらを過りたる。情由なからずや、いかにぞ。と聲振降して喚り問へば、窖内より答ていふやう、疑ひ給ふは理りなり。妾は千隈の川邊なる、農夫某甲の妻に侍り。けふは那二十村なる、隍廟祭祀で侍るから、牛の角突を觀にゆきて、黄昏時にかへり來にける、這邊にていと大きなる、反鼻に逐れ狼狽て、思はずもこの岡に、陟避んとせし程に、身は雪窖に陷りて、出んとするに手がかりなければ、心いよ〳〵驚憂ひて、人の扶助を俟ものから、日の暮たれば往還も絶て、聲喚嗄せし二响許、悲しさ限りあらざりき。いかで霎時のおん手を勞して、扶揚させ給へかし。宿所に還らば良人に告て、そのおん報ひは仡とすべし、いかで〳〵。と哀み乞ふて、伏拜む手は見えねども、聲は涙に隱りたる、憂苦さこそ、と磯九郎は、聞つゝしば〳〵頷きて、そは亦不慮の災難也。雪は殘れど暖なれば、蛇も蚖も出つらん。那雪頻吹にあふたるものを、穿もて出せし事はあれども、恁る窖に墮たるを、拮るはこれを肇とす。霎時等ね。といひかけて、舊處に退きつ、兩箇の裹を締著たる、索を釋き杣を外して、引提て軈て窖邊に、來つゝふたゝび聲をかけて、やよ哺女中、俺今上より這杣を掉る也。和女郎はこれに楚と携りて、曳るゝ隨に出て來よ。取な外しそよくせよ。とこゝろ得さしつ杣の杪を、徐に手繰降すにぞ、那女房は幾番も、歡びを演るのみ、早には携らざりけるを、磯九郎は焦燥て、何を胡徐々々快せずや、未歟々々。と問ふ程に、由斷を覘ふ件の女房、杣の杪に手をかけて、力を極めて曳と引く、卻含を取られし磯九郎は、吐嗟と一聲叫びも果ず、身を倒に雪窖の、底まで撞と落てけり。當下件の女房は、透さず短刀拔拿て、乘しかゝりつ磯九郎が、胸前刺んと閃めかすを、磯九郎は臥ながら、身を遣錯

はし、睨退々々、怒れる聲をふり立て、騙賊奴、謀られたりとても、長の知れたる女流の大刀擊、腕戰ならば目に物見せん、覺期をせよ。と敦圍悍く、矢庭に丁と反覆して、刃を奪取んとせしを、女人も不測の癖者にて、なほ奪れじ、と角ひたる、手さへ臂さへ支ては、進退便なき雪窖の、そこはかとなく挑みけり。浩處に一個の癖者、手に竹槍を引提て、竹叢蔭より突然と、顯れ出つゝ些も猶豫せず、拿たる槍をとりなほして、はや走りよる窖内には、磯九郎が辛して、賊婦を膝に組布て、刃を奪ふて刺んとするに、振落しけんあることなければ、いかにせましと思ふ折、件の癖者聲をかけて、船虫首尾はいかにぞや。と問れて僅に力を得たる、賊婦は下より聲ふり絞りて、やよ遲かりし。刺外して、組伏られしを知らずや。といふに駭く癖者は、こゝろ得たり。と揷突に、禹煞と刺たる修煉の竹槍、憐むべし磯九郎は、右の膳を裡掛までに、刺串れて霎時も得堪ず、云と嘘きて仰反る處を、船虫透さず反覆して、短刀搔撈り、拿るよりはやく、重て串く十々滅の刀尖、春過るまで殘りたる、雪より脆き磯九郎が、露の命は果敢なく滅て、黄泉の客となりにけり。有恁けれども癖者は、突留たる槍をなほ緩めず、ふたゝび擊をふり立て、船虫樣子は甚麼ぞや。と問へば答て、上首尾上首尾。奴家も十々滅を刺たれば、死天の山路へ走りたり。槍に携りて快出ん、やよ援辷らし給ふな。といへば癖者頷きて、然らば携れ。と竹槍を、引拔きつ又繰降して、携を徐に手繰つゝ、はやくも岡へ引拮けり。登時船虫は、袖うち拂ひ鬢搔抗て、嚮に暗號を定めしに、薄情やおん身の遲かりければ、奴家は竟に組伏せられて、命も既に危かりしを、那奴が身には寸鐵なく、奴家が持る這短刀を、その折はやく捐しかば、辛くも利運になりにたり。今宵はなどて鈍かりしぞ。と怨じて軈て短刀の、鮮血を拭ひ、鞘に斂めて、帶の間へ揷めば、癖者四下を見かへりて、其首に脫落のなかりしかども、慌らば那奴に曉得られん、と思ふによりて些ばかり、術延になりしも沒怪の福慮、渾家に恙あらざれば、そこらの憾はいはずもあれ。歡ぶべきはけふの造化、終日牛の角突を、覗つゝ飽まで飲食して、甲夜過てかへる這路にて、最重げなる裹物を、朸に掛たる大男子を、迥に見しより猛可の計較、必錢

てあるべし。と思ひにければ間道より、先へ走りて形のごとく、諜し合せし脚色の精妙、先や獲物を一覽せん。渾家も快來て見給はずや。と聶きつ歩速に、擔荷のほとりへ立よりて、俱に引解く裹の内を、見つゝ此彼莞爾と笑て、料るに違はず永樂十貫、地細の縮も五反あり。又中刀も、取抗て、腰に跨つゝ、哺船虫、這儘擔ふて走りなば、人の怪むことしもあらん。錢は俺咸駝ひてゆかん、縮は渾家ものせよ。と聶き頷く賊男賊婦が、錢を合して一袱に、包むを背へ駝せてやる。縮は輕し。と船虫が、拿抗て肩にうち掛けし、その袱の織色も、是一對なる虎狼の野心。手拭取出て共侶に、面を罩めど影淸き、月には有驟憚りて、夫婦潛々笑しげに、うち譚ひつゝ千隈河の、津を投てゆく程に、迥に晃めく小提燈、前路のかたより來るものあり。是則別人ならず、石龜屋次團太が、須本太牛の暴たるよしを、人の噂に聞知りて、小文吾のうへいといたう、心もとなく思ひしかば、獨みづから夜を更て、那里を投て急ぐなる。とは知らねども强盜夫婦は、折歹かりと思ふのみ、只一條なる畷路の、避躱るゝに便なければ、然らぬさまにて船虫を、先に立して行ちがふを、次團太灯光に佶と見て、癖者等。と喚かけて、提燈左に取なほす、右手を伸して袱裹を、引留れども怯ぬ强盜、そが儘弗と振斷て、ふたゝび進むをよせ立じとて、丁と突たる拳の冴は、炎所違はぬ修煉の勁擂に、胸を撲せし次團太は、思はず苦と叫びつゝ、兩三歩倭僂て、忽地撞と倒れたる、音に見かへる船虫は、一反許行脫て、あぶないことや。といふ口を、みづから窒ぐ不敵の擧動、這首管はずに快ゆきね。と手をもて諭す夜偸の、重擔に撓ぬ足快く、迹を埋めて逃亡けり。

第七十五回

醉客を趕て小文吾次團太に遇ふ
短刀を懷にして假譬女犬田を按摩す

且說く毒婦船虫が、何の程にか越後に來つゝ、又强盜の妻になりて、良人と俱に右の如き、大惡事を做せし緣故を、看官猜し得ざるべし。原るに船虫は、嚮に信濃の沓掛にて、籠山逸東太緣連を誑惑りて、那木天蓼の短刀と、盤纒三

十金を竊取り、當晩旅宿を逃亡て、足に信して走る程に、當時越後半國は、緣連が主なりける、長尾景春の所領なりしを、知ざりければ忌むよしもなく、那里は米魚の鄕なれば、由緣の人はあらずとも、這身の所寓を討るに、便りよからんと思ひつゝ、知らぬ山路を辿々も、辿て越後に赴きて、なほ彼此と蹌蹌つゝ、有一日古志郡なる、金倉山の麓路を過る折、思はず剪徑に撞見て、懷にせし金を、奪略られんとしつる折、賊は一人なりければ、船虫も木天蓼の、懷刀を引拔きて、且く挑戰ひしを、件の賊はものともせで、竟に刃を擊落して、金を遺なく略てけり。然けれども船虫が、女流に似げなき胆勇の、擧動をふかく感じて、敢亦これを殺さず。且その獨行をすなる、來歷を詰るに、故鄕は武藏のものなるが、近曾良人を喪ひければ、ふたゝび所姻を討んとて、些の由緣を心當に、遙々這地に來つれども、その人も亦世を去りて、迹絶にきと聞えしかば、憑む樹下に雨漏りて、進退殆難義の折也。陸奥には母黨の、親族あれば那里を投て、赴ばやとおもへども、盤纏なくてはその義も得ならず。うちも累ねて薄命なる、這身のうへを知る人あらば、詎か哀れと思はざらん。鬼の目にも涙あり。地獄にも佛なきにあらず。願ふは目今略れたる、その金三が一ッでも、分ちて返し給ひね。と口に信する虛談を、强盜聞て、しからんには、越に一箇の商量あり。俺も亦いぬる比、女房を喪ひて、譬ば脫劍に粒なきごとく、縫刺薪水の拔はさら也、出納共に極て便なし。俺身は今年四十二歲、和女郎も四十許なるべし。恁れば此彼年庚門第、相應しからずとすべからず。和女郎今より機を易て、俺と夫婦になるならば、常綺羅さして寵愛せん。這商量に乘らずや。と含笑ながら口說きけり。現鬱寇は敵を擇まず、窮女は夫を擇まずといふ、鄙語に似たる船虫は、聞つゝ肚裏に思ふやう、繫ぬ船の楫を絶て、よるべの岸もなきこの折に、偸兒也とて承引ずば、俺身は矢庭に殺されん。後はともあれ望に任して、從ふときは憂を轉して、驩と做すに庶かり。思念に及ぶことかは、と胸を決めてうち頷き、神の結びし過世ありて、いはるゝよしの食言ならずば、否にはあらぬ伊奈舟の、最上川ある陸奥へ、いなでおん身に從はん。必な見棄給ひそ。といふに歡ぶ强盜は、氷人な

しに布金齎す、妻を娶れる心地して、然らば宿所へ伴去ん。這方へ來ませ。と手を拔きて、小千谷のかたへ將てゆきけり。又原るに這强盜は、童子鬻子酒顚二と喚做したる、一所不住の山豪也。當時戰國の沿習にて、神社佛閣も軍兵の、亂妨を免れず、頹破に及ぶも多かる中に、小千谷と塚の山の間なる、山院の荒て無住になりたるあり。これにより酒顚二は、這荒廢院の庫裡ばかり、傾きながらなほ遺りしを、廼己が住所にしつゝ、ある時は博徒を聚合て、袁彥道の技に耽り、錢なき折は夜掙をして、山にも立、人の家にも、竊入つゝ梁上の、君子となる夜の多かりしに、船虫を妻にせしより、同氣必相求め、同病必相憐む、牝牡一對の殘賊なれば、夫を資けて共侶に、屢惡事を做す程に、この日も相川なる、畷路にて、夫婦竊に諜し合せて、磯九郎を殺せし折、船虫が雪害にて、十々減を刺したる短刀は、是則別刃にあらず、いぬる年沓掛にて、緣連を誑惑りて、金もろ共に竊取りたる、木天蓼丸の短刀也。船虫越路に流寓ひて、酒顚二の妻になりにし後も、外に出ることある毎に、那短刀を懷にして、身の護に做せしとぞ。害心あるもの防害ありとは、恁ることをやいふべからん。間話休題、爾程に小文吾は、その夜頻りに磯九郎を、趕留んとのみ思ひしかば、牛裁判甲乙と、須本太が家の僮僕輩の、從ひ來るにも來ざるにも管はず。只顧路次を急ぐものから、十刻ばかり後れたる、ことにしあれば趕著かで、相川村をもうち過ぎつ、那畷路に到るとき、月は漸漸に傾きて、眞夜中比になりにけり。恁る折から前程の路に、倒れたるものありしかば、先に進みし小文吾が、逸速く見出して、訝りながら立よりて、月を便りによく見れば、是則別人ならず、小千谷の逆旅主人なる、次團太にてありければ、こは什麼いかに、と驚きて、喚活んとする程に、牛裁判們も自餘のものも、走り著つゝよしを聞て、抱き起しつ諸聲立て、喚ぶこと約半晌許、次團太俄然とわれに復りて、小文吾を見て不審しげに、思ひがけなや犬田の大人、小夜深たるに這人々と、俱に這邊へ來給ひしは、故こそあらめ、いかにぞや。と問へば小文吾さればとよ、俺は只管磯九郎を、趕留んとて夜を更て、走りて這首まで來つる也。その故は箇樣々々と、向に須本太郎の宿所にて、

磯九郎が醉に乘して、衆人の諫を用ひず、牽出物なる錢と縮を、はやく小千谷へもてかへるとて、擔ひ出せし綣の趣、又小文吾がおもふよしをも、言約やかに說示して、和主は亦何等の故に、この所へ來て倒れたる。磯九郎には逢ずや。と問かへされて次團太は、眉根を顰め沈吟じて、そは亦不慮の事なりき。磯九郎は日屬より、酒癖歹きものなれば、きのふも今朝も儆めて、おん身に隸て遣せしに、喫醉たるのみならで、大人共侶に這人々を、勞せしはそも小可まで、面を甑する白物也。那暴牛の風聲の、甲夜に小千谷へ聞えしかば、小可宿所へ走りかへりて、なほ此彼と問合せしに、區々にして分明ならねば、大人の安否を知まくほしさに、ふたゝび宿所を立出て、この畷路まで來る程に、夜はは宵中の比になりたり。折から兩個の癖者の、袱裹を駝ひしあり。行ちがふとき灯燈の、灯光に見ればそが一人の、衣は鮮血に塗れたり。偸兒ならんと思ひしかば、癖者等、と喚かけて、後れて走る一個の賊の、袱裹を引留めしに、憶はず胸を擂られて、輾轉びつゝ氣絶やしけん、喚活されし今までも、爾後の事をしらず。傾く月を見て料るに、一晌ばかりも經たりけん。寔に危き事なりき。とばかりならで心にかゝるは、磯九郎が事にこそ。と報るに驚く小文吾も、自餘のものも僉訝りて、そは又怪有の事也けり。小千谷より這畷まで、來つる大哥も他に逢はず、趕蒐來ぬる俺們も、逢ずなりしは疑ふべし。那癖者等が背に駝ふたる、裹の色はいかなりしぞや。と問へば次團太袖引伸して、那袱はこれに似て、花田のごとく見えたりき。といふをうち聞く牛裁判們は、いよ〳〵疑惑の胸安からず。そは俺們が磯九男に、貸て那二種を、包せし袱も、縹色にてありければ、此彼共によく似たり。といふに小文吾又駭きて、しからんには磯九郎の、生死存亡心もとなし。鄕に翁（次團太をいふ）が那癖者に、撞見たるも這邊であらば、迹なからずや。索て見ん。といへば、大家有理と應て、右と左に立別れつゝ、廻れば弦と弓張の、提燈抗て共侶に、涉獵れば果して岡の邊に、細紐の麻索あり。又消殘りし雪の中に、一條の竹槍ありて、血に染たるを見出せし、大家齊一胸を潰して、取抗つ共に見て、噫痛ましや、これあるからは、疑ひもなく磯九男は、件の賊に殺されけん。

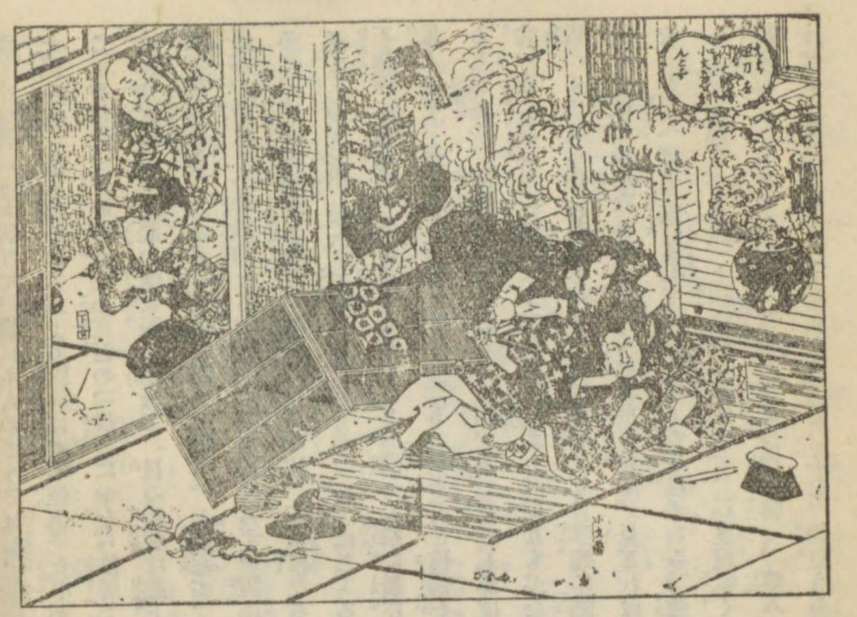
なほ亡骸もあらんず、と罵りつ又立噪ぐを、小文吾ヤ、と喚鎭めて、見よ、這雪を踏跡りたる、人の足跡多かるが、前面の岡の樹下なる、穴の邊に續きたり。要なからずや、索よかし。といはれて進むそが中に、次團太はいちはやく、那雪窖の邊に到りて、窖の內をさし覗くに、突立たる杁ありて、その杪才に見えしかば、原來磯九の亡骸は、這窖にこそあるならめ。提燈降して快く見ずや。といふに大家こゝろ得て、那細紐の麻索に、提燈一張結著て、窖の底まで繰降すに、深六七尺に過ざれば、亡骸正可に見えてけり。さればこそとて罵りあふたる、須本太が家の僮僕輩は、皆畊作に熟たれば、這雪窖をものとも思はず、且提燈そ引抗さして、一人ゝ、件の麻索を、繩階子にしつ降立て、又一條の麻索もて、磯九郎の亡骸に、結著つゝ引するにぞ、上なるものは力を勠して、左右して引出しけり。當下窖に入たるものも、又繩階子に足を掛て、推續きて出て來つ、又只甲夜の噂をしつゝ、咸磯九郎を悼むのみ。そが中に小文吾は、恁るべしとは思はねども、那醉狂を陷みて、趕ひつゝ來ぬる甲斐あらずとて、嘆息の外なかりしを、次團太さこそと慰めて、先見虛しからざれば、本意なく思ひ給ふとも、今さらに又何とかすべき。他はわが家の食客にて、親胞兄弟もなく、妻子もなければ、歎きを遺す羈はあらず。亡骸は俺香華院へ、墾らんこと勿論なれども、枉死のものて候へば、相川の村長に、告て古例に儘せずば、後難揣りがたかるべし。これにより小可は、那村長許赴きて、形のごとくに相謀ひてん。大人は這人々を、一兩名伴當にして、小千谷の旅舍へ還らせ給へ。自餘の人々は俺が與に、なほ權且亡骸を、戍りてかへるを俟給ひね。と辭せわしく部をしつゝ、走り去んとせし折から、虫龜村なる須本太郎は、甲夜に宿所に遣りたる、牛裁判們と共侶に、篋轎を吊しつゝ、小文吾の迹を趕ふて、走りて這里に來にければ、小文吾軈て立對ひて、その親切を勞ひつゝ、次團太を見返りて、招き近づけ引會して、却磯九郎が枉死のよしを、報て亡骸を視せしかば、須本太は更也從ひ來つる、牛裁判們も思ひかけねば、胆を潰して嗟嘆に勝ず、返らぬことを云々と、いひ出て僉後悔せしを、次團太も亦歎息して、彼が枉死は各位の、敎諭を聽かぬ愚物の醉狂、自業自得

といひながら、乾父乾兒の好ある、小可は又一層、不便に思はざるにあらねど、然とて歎くも又益なし。快相川の長に報てん。允し給へ。と云かけて、又立去んとしてけるを、須本太郎推禁めて、その義ならばおん身みづから、那里へ赴き給ふに及ばじ。相川の村長は、老拙と親類也。當主は總角なるをもて、老拙をさ〳〵後見して、事あるときは差配せり。老拙恁て候へば、明日宜く沙汰すべし。且亡骸を引執て、埋葬の事肝要ならん。といはれて次團太異議に及ばず、そは便よきことにこそ候へ。後證の爲にまうす也。這竹槍に血の染たるは、賊が磯九郎を刺たるならん。又朸と細糾の麻索は、磯九郎が擔に用ひしを、那强盜が錢と縮を、奪ふてこれを棄たる也。これらはおん身預り措て、後々までも穿鑿の、照驗にせられんことを、只管懇みまうすのみ。那盜賊は二人ゝなりき。一個ははやく行脫しを、夜視なりければ、慥に認定ず、後なる一個も手拭もて、深くも面を罩みしかば、それも安定にいひ易からねど、眼、圓に鼻高く、身長五尺五六寸、六尺にも近かるべし。この義もこゝろ得給へかし。又磯九郎が受たる痍は、見給へ右の膳より、裏を掛たる一箇所と、吭に十々減を刺れしのみ。といふこと毎に須本太郎は、頷きつ嗟嘆して、その義は具にこゝろ得たり。けふは甚麼なる凶日なりけん、俺牛暴れて幾千萬の、人の怨劇になりたるを、幸にして犬田の大人の、助力によりて無異に治り、その歡びを演る間もなく、又這凶事に遇にけり。磯九男の恁なりしも、原はと推せば俺家より、起りし事で候へば、左を見ても右を見ても、心苦しく思ふのみ。といふを小文吾慰めて、禍福は糾ふ繩の如し。仁義をなして災害に、遇る例もなきにあらず。況這磯九郎は、人の教諭を聽ずして、死地に入りたるものなれば、誰か貴老を怨むべき。俺は恁こそ思ふなれ。といへば次團太も亦慰て、但小可が當惑は、今相川なる村長許、ゆかずといふとも亡骸を、這儘にては遣しがたかり。柩の准備を爭何せん。といふを須本太郎うち聞て、その義極めて不便也、尙眞夜中で候へば、里に到りて求るとも、速に整ふべくもあらず。俺這筬轎は、犬田の大人を乘せまゐらせん、と思ふて吊して來にけれども、這里よりして小千谷まで、路次幾もなくなりたれば、大人に用捨を願ひまう

さん。快々これに亡骸を、斂めて送らせ給へかし。といへば小文吾感嘆して、その義寔にしかるべし。縱この事あらずとも、俺いかにして轎子の、馳走を受て還らんや。といへば次團太不樂しげに、そは辱きことながら、尙巳時なる轎子を、亡骸斂めて棄させんは、最惜しかるべきことにこそ。といふを須本太郎聞あへず、そは亦要なき遠慮也。時の用には鼻でも煮ぐに、轎子一箇を何とか思はん。快々斂め給はずや。と諭して軈て轎夫們に、絆恁々と吩咐て、僮僕輩にも手傳せ、却磯九郎の亡骸を、件の轎子に斂めけり。恁而又須本太郎は、僮僕輩兩三名を、隷て遣さんといひしかば、牛裁判們も小千谷まで、送らんとてはや身を起すを、小文吾も次團太も、推禁めしば〳〵固辭て、竟にその義に從はず。轎夫們を勞ひて、提燈一張借たるのみ。然けれども須本太郎は、衆人を將て千隈河なる、津口まで送行て、別れて虫籠村へ還りけり。夜河は二更を限りとして、子時より寅時まで、船を出さゞりけれども、相川の村役をも、兼たる須本太郎が送りゆきて、術よく誘へたりければ、件の津に障りなく、一個の筥師起て來つ、はや小文吾を船に乘せて、前岸へ渡しけり。爾程に次團太は、小文吾と共侶に、件の轎子を舁しつゝ、その曉がたに宿所にかへりて、妻にも奴婢にも恁々と、磯九郎が枉死のよしを、報知せこゝろ得さして、轎夫們に酒を飲せ、飯をも喫せ錢を取せて、虫籠村へ還し遣し、却磯九郎の亡骸は、桶柩に斂め、那轎子にうち乘して、香華院へ送りて葬りけり。こは是枉死のものなれば、里正に訴へ、寺僧に報て、萬事法度に從ひたる、そこらのことは諄々しさに、言省て具にせず。看官宜く察すべし。却說犬田小文吾は、這里に要あるものならねども、磯九郎の枉死によりて、主人は事の多かるを、慰めもせでふり捨て、出てゆかんはさすがにて、おもふにも似ず三四日と、なほ又逗留せし程に、眼中猛可に疼痛を覺て、日を歷る隨に甚しく、物を見ること得ならずなりけり。こはいぬる年渡海の折、風波の暴に推流されて、伊豆の大島三宅島に、月屬を經にければ、八重の潮風に面を撲れ、熟ぬ魚肉に脾肝を損ねて、今這病痾の發りしならん。轎にも恙ありけるを、津國有馬の湯治によりて、瘥りにき、と思ひしに、なほも餘毒の耗ずやありけん。那

四犬士に別れしより、今に至りて環りも會ず、曳手單節の往方はさら也、侄親兵衞が生死存亡、犬坂毛野の在處すら、知るよしもなきそがうへに、盲目にならばいかにして、這宿望を遂やはせん。思ひしことは水に寫く、文字にも似たり化し世に、化し俺この物思ひ、苦しきものは病痾にこそ、と獨つら〳〵過去を、懷ひつゞけて日を彌れば、次團太は正首に、這里の眼藥那里の洗劑とて、日毎に薦めざることなく、醫師にも診せなどして、療養等閑ならざりければや、五月初旬になりし比、小文吾が眼中の、疼痛はやうやく癒るものから、權且も眼を開きて、物を見んと欲すれば、亦復疼て堪がたかり。この故に夜となく日となく、垂籠てのみをるを、次團太は慰かねて、辭敵にならまく思へど、その身の經營、人のうへにも、此彼となく拘連ひて、宿所に在る日は稀也けり。是より先に須本太郎は、使を小千谷へ遣して、磯九郎が與に香奠を次團太に餽りけり。この折小文吾が眼病の、大かたならぬを聞知りて、みづから訪んと思ふ程に、その身も猛可に類中風の、病痾發りて行步克はず、うち臥たるよし聞えしが、是より病こと年を歷て竟にむなしくなりしとぞ。こは後々の事なるを、筆の次に寫すのみ。虫龜村の事、この下に話なし。爾程に降みふらずみ、檐の玉水音をのみ聞く、五月中旬になりにけり。怎而有一日次團太は、例のごとく宿所にをらず、その夕つかたにかへり來て、小文吾が徒然を、訊慰めたる語の次に、眼病は肩癖の、凝よりも起るといへば、按摩もその効あるなるべし。いぬる比より一個の瞽女の、齡四十許なるが、黃昏毎に笛吹鳴らして、這邊を過らざる日は稀也。這鄕には昔よりして、女按摩のなかりしに、他は何處より來るやらん。人々に朝膀がられて、療治の評判歹からず。這里に宿投る旅客の、召よせて肩癖を、拍せたるも尠からず。大人も今宵は那瞽女に、肩まれ腰まれ摩し給ひね。然ばかり効のあらずとも、寂然として只獨、をはしますには優べきに。といへば小文吾頷きて、按摩は素より好まねども、療治の爲には歟ふべからず。その瞽女來なば召し給ひね、利くやきかずや試みてん。といふに次團太こゝろ得て、辭して納戸へ退りけり。怎而はや夕饌果て、點燈時候になりしかば、宿の婢妾が件の瞽女の、手を披きつゝ俱して來

つ、小文吾にうち對ひて、鄕に主人のまうされし、按摩刀禰を將てまゐりぬ。といふを小文吾うち聞て、然らば療治を憑む也。俺も亦いぬる月より眼病にて不便也。女中よ這里へ按內をして、背の方に坐らしねかし。といふに婢妾はこゝろ得て、件の瞽女を小文吾の、後方にやをら推居て、霎時もあらず遽しげに、庖湢のかたへ退りけり。當下瞽女は小文吾に、冷熟を演安否を諮ねて、目の病著は逆上によりて、發るも瞽のことに侍れば、且おん肩より揉和らげて、爾後阿鍼をまゐらすべし。許させ給へ。と差寄て、擎肩癖の手拍子は、修羅の鼓にあらねども、噫危きかな小文吾が、命はこの時風前なる、燈燭にしも異ならず。詎か知るべき這瞽女は、是寔の盲目にあらず。甚なるものぞと原るに、亦那賊婦船虫なり。船虫はいぬる比、二十村なる鬪牛を、觀にゆきたる折、憶ずも、稠人の中よりして、遙に小文吾を見出して、一たびは怕れしが、懲にこゝろに掛れば、それとはなしに彼此と、人に尋ねて小千谷なる、石龜屋に逗留の、客なるよしを云々と、聞つゝ縟に歡びて、いかで那奴を狙擊て、前夫並四郎の、怨を復さばや、と思ふにぞ、是よりして假瞽女に、なりて小千谷を徘徊しつゝ、人の與に按摩を執けり。これによりて石龜屋に、宿投りし旅客の、肩癖を擥たることも、兩三番に及びしかば、小文吾が眼病にて、物を見ることの得ならぬよしさへ、旅舍の噂に聞知りて、既に十二分の喜悅あり。便りもがなと思ふ程に、今計らずも喚入られて、最輒も犬田が身邊に、近づくことを得たれども、小文吾は日屬より、疼痛に懲りて眼を開かず、夜は殊更に燈燭の、光を厭ふて行燈すら、近くは置せぬ折なれば、怎ても他を些も見ず。見ざれば知る由なきものから、船虫は又俺が瞽音を、聽覺をることもや、と思へば言寡にして、肩を摩り背を推すのみ。透を得ば懷なる、木天蓼丸を拔出して、背をや刺串ん、押へて頸を搔くべき歟、と腹に問ひ腹に答て、いまだ輒く手を下さず。然とは悟るよしもなき、犬田が身には那靈玉の、擁護愆つべくもあらねば、按摩の指頭皮肉に答て、疼みて堪がたかりければ、おもはずも聲をかけて、やよ今少許寬うせよ。怎推されては堪がたかり。といふを、船虫うち笑ひて、妾が指にちからはなけれど、よく經絡に從ふて、穴



（短刀を閃し賊小婦小文吾を刺とんをき。）

所に當れば通ずること多かり。そが御こゝろに稱はずば、緩う致すもいと易かり。と答る間に懷なる、短刀を潛と拔出して、左手に肩を摩りつゝ、右手には柄を握拿て、拔放さんとする程に、小文吾猛可に胸うち騷ぎて、吭を〳〵といふ聲の、忽地耳に入りしかば、心に深く疑惑ふて、按摩を休るに優ことあらじ、と尋思をしつゝ又推禁めて、已ね〳〵、然でも痛かり。翌の夜に又憑むべし。大義にこそ。と勞ふたる、辭の下に船虫は、短刀晃りと引拔て、左手に楚と小文吾が、衣領掻抓み引著て、吭を搔んと閃めかす、刃の光は目にや見えけん、小文吾透さず船虫が、利手を丁と捕止て、原來這奴は癖者なり。睛は見えずとも若們に、輒く擊るゝ俺ならんや。と罵りつ引被ぎて、肩を越さして面前へ、觔斗を拍して投伏せたり。這响曉に次團太は、駭きながら走り來て、見れば犬田に組布れたる、女按摩は假聲者にて、手に短刀を拔拿たれば、問でもしるき賊也けり、とおもへば情田を聞くに及ばず、壁に掛たる擔索を取て、犬田に代りて船虫を、はや犇々と綑めけり。登時後れて走り聚ひし、

妻はさらなり奴婢們まで、怕れて舌を掉ふもあり、或はその兇惡を、憎みて捶よ毆けよとて、いと羆しく罵りしを、次團太大く叱禁めて、恙なかりし小文吾を、祝して且その眼病中に、便なき折の剽勁を、只管感じて已ざりけり。畢竟今小文吾が、船虫を生拘りて、後の話說甚麼ぞや。そは又這次の卷に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳 第八輯 卷之一 終

南總里見八犬傳　第八輯　卷之二

東都　曲亭主人編次

第七十六回

庚申堂に俠者賊婦を囚ふ
廢毀院に義任船虫を送る

却說石龜屋次團太は、綱めたる船虫を、且緣頰なる柱に繫ぎて、他が所持せし短刀を、拿抗つゝ左見右見て、鞘に斂めて小文吾の、身邊に措て却いふやう、小可は那賊婦の、僻瞥女なりしを知らずといふとも、懋に大人に薦めし、疎忽の辜を爭何せん。寔に危き事なりき。是禦せ這短刀は、燒刃に大く曇りあり。近屬人を斫たるもの歟、是も亦知るべからず。よりて思ふに那賊婦は、必是旅客の、枕搜の類にあらで、水滸の母夜叉母大虫に、似たる强盜なるべき歟。しからずば人の爲に、おん身を狙擊んとしたる、刺客にもや候はん。思ひ當らせ給ひぬる、よしある事歟、甚麼ぞや。と問ふを小文吾うち聞て、いはるゝ趣寔によしあり。俺も亦然は思へども、いと朽をしくも見ることの、今さら自由ならざれば、正可に厶とはいひがたけれども、那奴が辭は武藏にて、鷄尻の並四郎と喚做したる、奸賊の妻なりし、船虫に似たる所あり。その故は箇樣々々と、今より五稔前の秋、那並四郎が小文吾を、宿所に留めしその夜丈、殺して盤纏を奪略んと、計較たる絆の趣、並に件の並四郎は、小文吾に擊れしを、船虫はなほ詭りて、些も怨る氣色なく、小文吾を出し遣りて、途にて千葉家の鄕役なる、畑上語路五郎の手を借りて、搦捕せんと謀りしかども、又小文吾に杪を摘れて、その奸計行れず、絆立地に發覺て、倒てその身を綑められ、石濱の城へ牽るゝ折、竊に資る人ありて、逐電せしと聞えたる、その事の爲體、又那嵐山の尺八と、小篠落葉の刀の事まで、その崖略

を說示して、頗ふに那假瞥女奴は、これ並四郎が妻船虫にて、遠く這頭へ流落來つゝ、俺がこの旅舍に在る事も、眼病にて稍久しく、垂籠てをる事も、這奴何の間にか聞知りて、夫の怨を復さんとて、遂に今宵に驅べる歟。這一條を除きては、仇做す婦女子あるべしとは。這身に取りて記憶なし。といふに次團太駭嘆じて、既にその事あらんには、今さら疑ふべくもあらぬ、那奴は件の船虫とか、喚れし賊婦で候はん。いで〳〵。といひつゝも、又身を起して四下を見るに、柱に掛たる一條の、霹拂の小竹杖あり。これ究竟。と遽しく、引提て船虫に　仫と立對ひ疾視て、やをれ賊婦、今大人の、いはれし由を聞つらん。汝は那並四とやらんが、鬼妻船虫にこそあらめ。何の比より這頭に來て、何處を宿にしたるぞや。その身一箇にあらずして、必支黨なからずやは。懷にせし短刀も、贓物にて近き比、人を殺せしことあらん。出處來歷支黨まで、問はるゝ隨に招道せよ。いはずば目に物見せんず。と罵りつ杖ふり抗て續ざまに撻懲せば、船虫は吐嗟と叫ぶ、聲苦しげに戰して、やよ主霎時等給へ。恁なるからは何をか慝ん。且いふよしを听給はずや。と悲請ふて已ざりしを、次團太はさもこそとて、權且呵責を止めけり。登時船虫は頭を擡、吻と息つきて、哺主、妾は武藏なる。人の妻ではあらずかし。故鄕は則下野にて、赤岩村に隱れなき、赤岩一角武遠と、喚れし鄕士は恥しながら、妾が良人で侍りにき。爾るに良人武遠は、いぬる年故ありて、籠山某甲といふ武藝の弟子に、闇擊にせられにけり。過世歹くて仇を擊べき、兒子一箇もあることなければ、俺身女流にあなれども、那籠山が往方を索ねて、良人の怨を復んず、と思ひ決めてその日より、神に祈り佛に誓ひて、絆の便宜を願まうせしに、ある夜の夢に良人の寃家は、這越路なる魚沼の、郡にあらんと正しき示現に、心勇みて舊里を、潛出でつゝ辛くして、獨這地に來つれども、由緣の人のあらざれば、亦定めたる宿もなし。女按摩に形狀を變て、盲目と見せて里人にも、又旅客にも彼此と、近づくことを得たりし甲斐に、計らず這里に喚入られて、初て大人を見てけるに、面貌年庚聲音まで、那籠山と一對にて、不思議に肖させ給ひしかば、別人也とは思ひもかけず、霎時由斷を覘ふて、擊果

さんとしたりしに、思ふにも似ぬ大人の大力、投伏せられしは沒怪の幸ひ、細められし折に又、心を屬てつら〳〵と、見れば寔にその人ならず、那籠山には小鬢の内に、一寸許の舊痍あり。又這大人にはその痍なし。性起たる折なれば、其首まで念を入れざりし、疎忽の辜を允させ給へ。這短刀は良人の紀念、妾は、則犬村氏にて、名をば憲井と喚れ侍り。人に知せぬ宿望も、俺身の素生もうち諦て、報まゐらするは疑ひをも、這綁縛の索をしも、はやく解れん爲なれば、是を御緣に仇討の、後見をして共侶に、寃家を索ね給はらば、こよなき慈善で侍らまし。哀しきかな。と聲立て、口に信する搗鬼の、巧はさしも武藏野に、ありといふなる逃水の、水ならなくに假涙、虚泣しつゝ伏沈むを、次團太見つゝうち聞つゝ、有理と思ふ氣色にて、口顧嘆息したりしかば、小文吾呵々と冷笑ひて、翁よ、那奴が巧言虚談に、惑ふて實事とな聽給ひそ。他倘寔に烈女にて、良人の爲に讐敵を、擊んと欲するものならば、俺に刃を捉止られて、本意を得遂ずなりぬとも、忽地に胆落て、怕るゝことはなからんを、投伏せられし時に及びて、必死を極めしものに似ず、賊心言語に顯れて、綱められても羞ることなく、陳ずるよしの巧なるも、只その命を惜むのみ。彼紫の朱を奪ひ、碱砆の玉に混ずると、いふことあるを思はずや。俺は一切こゝろ得がたし。といはれて次團太忽地に、曉りて外股うち鳴らして、賢察誠にそのよしあり。這奴飽まで撻懲さずば、いかにして實を吐くべき。術寛かりき。と呟きて、ふたゝび撻んと立對へば、船虫よゝとうち泣て、恁までいひしをなほ疑ふて、强顏き人の恨めしやとて、蹉跎しても疾視ても、檻の獸となりし身の、今さらにすべなかりけり。折から次團太が角力の弟子に、泥海土丈二、百堀鯽三と喚做したる、兩個の壯佼這里に來つ。既にして船虫の、生拘られたる緣由を、奴婢們が噂に聞知りて、覗んとて早く次房にをり、方纔次團太が船虫を、撻んとしつるを闕窺て、やよ喃大哥、と喚かけて、簀戸の陰より遽しく、共侶に立出て、次團太にうち對ひて、大哥這奴が大胆なる、刀劍三昧せしよしも、又その陳ずる趣を、搗鬼ならんといはるゝよしも、その大略を聞得たり。現鷹咫なることのみなれば、責問れんこと勿論なれども、這首

にて答を中給はゞ、亦復酷く號叫びて、さぞな四鄰を駭さん。恁るものには例もあるに、庚申堂へ將てゆきて、神慮儘にし給はずや。といへば次團太頷きて、寔にその義しかるべし。然ば這里へ將てゆきね。三夜簽樓の梁に、吊りて宵毎に鞭撻なば、なでふ首伏せざるべき。准備をせよ。といそがせしを、小文吾霎時と推禁めて、神慮儘といふよしは、鵜にも聞たることながら、そは里人の私刑にして、その刻薄に過たるを、後難あらば爭何せん。願ふは領主へ訴へて、官府沙汰にし給へかし。といふを次團太聞あへず、地方の風儀を知り給はねば、恁宣ふは理りなれども、然では不便の事多かり、當所は前内管領、長尾判官景春主の封内にて、主は近曾上毛なる、白井の城に在す也。又當國には春日山に、長尾家の城ありといへども、路遠ければ訴訟人們の、往還に日數を費すのみ。主在さねば讞斷に、動もすれば非理の裁許あり。是その不便の一ッなり。又這里よりして程遠からぬ、三島郡片貝に、長尾家の別館あり。其首には領主のおん母君、簸の大刀自と喚れ給ふが、年來住せ給ひつゝ、みづから政事給へば、亦是女儀の臆斷にて、畠員の沙汰も渉からず、巷談衢說に聞えたり。是その不便の二ッ也。錢さへ日さへ費すまでに、勞しても功有がたき、領主の廳へまゐらんよりは、神慮儘に優ことなし。こは此地方の私刑なれども、昔よりしてこの事あるを、領主にも聞えたり。免許を稟しことならずとて、なでふ後難あるべきや。やよ、うち任し給ひね。とこゝろ得顏に說示しつゝ、却壯佼們に船虫を、牽立さして共侶に、張燈引提て遽しく、里盡處なる庚申の、荒廢堂投て出けり。恁而その夜亥中の比に、次團太一箇かへり來て、小文吾に報るやう、那賊婦奴は形のごとく、庚申堂へ牽もてゆきて、軈て矮樓の梁に、吊りて土丈二鯽三們に、笞を執らし鞭撻して、幾番となく責問ひしに、素より心太き癖者なれば、撻るゝ毎に叫びしのみ、いまだ招道せざれども、寔も明後も三夜の間、那首にゆきて責懲しなば、竟に裘りて實を吐くべし。よりて土丈二鯽三にも、絆恁々とこゝろ得さして、途より宿所へかへしたり。他們は年來小可が、角力の弟子で候へば、翌の夜も又いなんといひにき。這里よりして荒廢堂まで、約十町許あり。人家を離れて奥まり

たる、蕃山の腰で候へば、白晝でも人の往還罕なり。非如那里へゆくものありて、賊婦が梁に吊られしを、見るとい
ふとも憐みて、資るものは候はず。這頭の人は並て咸、神慮儘を知ざるものなく、神慮儘にせらるゝは、歹人なるを
知れば也。抑〻件の庚申堂は、年々の鬪戰に、荒果しより人も詣らず、神像さへに亡なりて、今は要なき荒廢堂なれ
ども、毀も得せでそが儘に、うち捨置く神慮儘の、私刑によりて這郷に、歹人徘徊せざればなり。然れば件の賊婦奴
が、なほ詭りて陳ずるとも、三夜に及びて死なずもあらば、千隈河に推淪めて、地方の害を除くべし。こは只大人の
與のみならず、這郷人們の爲なれば、といふを小文吾うち聞て、その義はこゝろを得たれども、那假瞥女を强盜歟、
然らずば刺客ならん、と思ふは只是推量なり。いまだ招道致さずば、食餌を與へ、苦痛を緩めて、賺して問ふも可か
るべし。然るを三夜を限りとして、惶りて殺さば不仁に似たる、後悔ありとも甲斐なからん。恨らくは俺睛翳みて、
他を見ること自由ならねば、なほ疑ひを釋に由なし、就て這短刀は、那假瞥女が東西といへども、燒刃の曇り尋常な
らねば、人を砍たるものに似たり、といはれしにとりて又思ふに、鄰に磯九郎を殺したる、那盜賊もこれらをもて、
照驗となることしもあらん歟、是も亦知るべからず。然れば這短刀は、和主權且預り措て、那穿鑿をもし給へかし。
といはれて次團太異議に及ばず、先小文吾の身邊なる、那短刀を拿抗て、宣ふ趣寔に爾也。又那賊婦を謎撓て、這
短刀の出處をも、問はゞ磯九の仇を知る、便著もあらん歟、料りがたかり。小可預り措くべきのみ。夜ははや既に深
初たり、快々睡り給ひねかし。と告別しつ短刀を、引提て奥へ退りけり。爾程に小文吾は、睡られぬ隨に通宵、身の
病著と草枕、旅宿の憂苦を遣り難て、獨つら〳〵思惟るに、俺が風眼も早晩と、三十餘日になりにけり。然しも主人
の親切に、醫療藥甲乙となく、薦めに任して取替引易、久しう用ひたりけれども、只疼痛のみ退きて、物を見るこ
と克はねば、恁ばかり便なきことはなし。草根木皮の效なきも、又神佛の冥助によりて、世に難病の癒るもの、亦
これなしといふべからず。然ばこそあれ往歲、俺身石濱の城内に在りし時、馬加大記が邪計にて、毒害せられたりけ

ん、と思ひし折の多かりしを、年來所藏の靈玉を、口に含みつ、玉液の、奇特によりて腹痛癒り、不思議に恙なかり
しも、亦神佛の冥助ならんを、憶ざりしは疎なりき。今も亦靈玉の、奇特を祈らば翳む睛の、雲も挾霧もうち拂れて、
天日を瞻る應驗あらん、と尋思をしつゝ、遽しく、枕搔遣り身を起して、夜も日も肌膚を放さゞりける、身護囊の紐解
披きて、玉を取出つ、祈念して、幾番となく眼包を拊れば、撫るまに〳〵銷然と、眼内の邪熱退冷て、心地清爽に
なりにけり。よりて且試に、枕邊遠く措したる、行燈を徐と引よせて、戸盞を揭てうち對ふに、目眸くもあらずな
りしかば、憶ず莞爾と獨笑して、是則靈玉の、妙應奇特に疑ひなし。恁まで靈驗灼然なる、神寶を身に付ながら、
三十餘日禱も得せで、他所に藥を求めしは、駝ひしその子をうち忘れて、人の抱る稗兒を、見つゝ羨むに似たりけり。
かへす〴〵も疎なる、俺が怠慢を許させ給へ。と念じて亦復眼包を拊れば、物を見ること初にかはらず。枕に被る黴
塵まで、夜視にも鮮明なりければ、いよ〳〵歡びます〳〵勇て、翌は夙めて那荒廢堂へ、ゆきて假瞥女をよく見てん。
その折にこそ船虫歟、船虫ならぬ歟、檢定て、疑ひ其首に氷解せば、推量をもて只管に、人に任して身の爲に、人を
戮する愆なからん。嗚呼爾也、と胸にのみ、思ふ心のいそがれても、夏の夜ながら今宵のみ、尙生憎に明やらぬ、丑
三の鐘响く比霎時睡眠に就にけり。不題話表、犬川莊介義任は、曩に犬川道節と共侶に、甲斐州に旅宿をしつゝ、
石禾の郷の片邊なる、指月院に宿投りし夜、料らずも、大法師と、蜑崎十一郎照文に面會して、曩に行德にてありし
事、犬江親兵衞のうへまでも、聞つゝ哀歡わくよしもなく、權且逗留したりしを、又道節と商量して、迭代に東北
なる、諸州をうち巡りて、なほ又犬塚犬飼犬田、丼に生死存亡の、知れずと聞えし親兵衞の、うへをも索究んとて、
、大照文にも恁々と、思ふよしを說示して、莊介は去歲の如月、獨指月院を立出て、武藏に到り、下總に赴きて、行
德の里人に、犬田父子の事を問ひしに、小文吾は故郷に還らず、この故に文五兵衞は、住も熟たる家を售て、市川な
る妙眞と共侶に、安房の親族許赴きしが、その次の年の春にやありけん、世を去りにき、と聞えしかば、思ふにも似

ず、駭歎じて、いよ〳〵疑惑の胸安からず。然るにても小文吾は、曳手單節を將てゆきながら、這行德に還らずして、什麼何處へか身を寄せけん、こゝろ得がたき事にこそ、と思ふものから云々と、又里人に問へばとて、正可に知らるべきにあらねば、そが儘蹕を旋らして、眞間國府臺まで かへり來つ、更に常陸に赴きて、秋の比より玉鉾の、陸奥に旅宿をしつゝ、今玆の春まで那地にあり。五十四郡を徧歷りて、宰都の濱まで漏すことなく、足に信して涉獵りしかども、索る人に得も遇ねば、やうやくに思ひ捨て、越路を投てゆく程に、春過て夏もはや、五月中旬になりにけり。素より急がぬ逆旅なるに、大八の犬江親兵衛は、神躱といふものにて、往方知れずと聞えしかば、山に遇へば峯に登り、谷に臨めば嶮岨に立て、身の危きをものともせず。この故に又日屬を經て、越後州魚沼郡の、山里を過る折、其邊の蓍山纂山をも、漏さじとて杖を曳きしかば、この日も山路にゆき暮て、小千谷の鄕へは十町許も、ありぬらんと思ふ程に、夜ははや初更の中刻になりけり。うちも續きし五月雨の、天珍しく霽亘りて、十八日の月鮮明に、山峽より升りたる、前路になほも小山ありて、其首に故たる佛堂見えけり。登時莊介思ふやう、左ても右ても宿殺後れし、今宵は露宿に曉すとも、思ふに倍して疲勞たる、足を且く休めんとて、件の堂に立よりつゝ、軈て朽たる板緣に、尻をうち掛兩膝捺りて、却堂内を見かへるに、柱傾き破れ、壁は風雨に洗れて、不破の關屋の廂ならねど、洩る月影の隈もなけ蟾兒の網に包れて、素紗に臨す飛白に似たり。四壁は風雨に洗れて、不破の關屋の廂ならねど、洩る月影の隈もなければ、猶彼此と看て知りぬ。高座破落て、神像在さず、板席菌を生じて、狐兎跡を印したり。這堂三間四方にて、大厦ならねど矮樓あり。土木初は工を盡して、磨建ずばいかにせん、心ひとつに慰難て、悵然として照る月や。嘉吉應仁の年間よりして、都鄙に鬪戰絶ざれば、神社佛閣も大かたは、兵火に燒れ、亂妨に毀れて、蹟なくなりしも多かれば、是も亦その類にこそ。今より五稔前つ秋、(文明十年七月二日) 俺身武藏の大塚に在りしとき、東人の仇を擊たるを、軍木卒川簸上們に誣られて、死刑の場に臨みし折、思ひがけなく犬塚們、那三犬士に拯れし、地名は

庚申塚なりき。それは武藏の鞦嶋郡、這里は越後の魚沼郡に、那三犬士を索來て、遇ぬ憾をおなじ名の、庚申堂に憩へども、離合は時あり。有爲轉變の、世の去住の苦しさよ。是より信濃に赴きて、那里でもなほ得遇ずば、一トたび甲斐へかへりゆきて、犬山生と誓るべし、とは思へども去歲の春より、如干の州を巡る來て、吉左右あらずば犬山に、俟つゝ在りし州の名の、甲斐なきものと思はれん。いかにせましと胆向ふ、心ひとつに慰難て、悵然として照る月を、霎時眺る折しもあれ、這荒廢堂の樓上に、人の呻吟く聲せしかば、莊介駭き且訝りて、肚裏に思ふやう、荒たる堂舍に夜を更て、人の處るこそ怪しけれ。若是家なき山賊歟、しからずば妖怪山鬼の、俺が剛膽を錐さんとて、猛可に聲を立たるならん。要こそあれ、と尋思をしつゝ、徐に裡面に找み入て、朽て歩臺間遠になりたる、階子に攀りて樓上に、陟りて見れば月光の、下屋よりよくさし入りて、殘る隈なく明かりけるに、怪むべし一個の女人の、年齡は四十許、面貌の醜からぬが、最も緊しく細られて、梁に吊られてありけり。思ふにも似ぬことながら、莊介騷ぐ氣色もなく、うち對ひつゝ熟視て、やをれ汝は何物ぞ。人にはあらで變化ならば、那元人の小說に、見れしと聞えたる。亦紅孩兒の類にて、その窮阨の姿を示して、漫に俺に戲るゝ、似而非魔行にこそありつらめ。烏滸なる事を。と冷笑へば、女人はよゝとうち泣て、然な宣ひそ神かけて、賤妾は妖怪變化にあらず。這里よりして程遠からぬ、小千谷の鄕なる客店に、月屬仕へしものに侍り。曩に良人は身まかりつ、貧賤き兒に寓居て、劬勞介意をしたらんより、人に仕へて口のうへ、身の皮さへに搾ん、と尋思をしつゝ兒にも告て、那客店へまゐりしは、今玆三月の初旬なりしに、主なる人の早晩に、薄情や賤妾に眷想して、折々夜跂て口說れしを、些も倚せず辱めて、逐返したる怨みにて、箱硯に宿置たる、粒銀一顆失たりとて、最喋々しく穿鑿したる、果は賤妾に濡衣を、被せて件の粒銀を、竊みたりと理も非も分ず、撻つ毆きついひ解くよしを、いひも解せぬ殘忍邪慳、主の威光を輝して、身動させぬ綁縛繩、僮僕輩にも手傳して、けふ黃昏の比よりぞ。這荒廢御堂に牽もて來つゝ、人に見られぬ樓上の、梁に吊りしのみなら

ず、おもひの隨に鞭撻て、翌の夜も又明後の夜も、答を當てなほ死なずば、蘆簀卷にして千隈の河へ、推淪めんとて出てゆきしは、半時ばかり前なりき。恁れば賤妾は寃屈の罪に、居所の羊となりにたり。方纔九死にして一生を、得がたしとこそ思ひしに、幸ひにして旅ゆく刀禰と、見えさせたまふ方ざまに、遇まつりしは奈落迦にて、彌陀の御光を拜むに似たり。儘いふ事に詭りあらば、州に名だたる彌彦の、神の御罰を禀まつらん。願ふはやく疑ひをも、這細をも解卸して、兄の宿所へ送らせ給へ。そは再生の御恩に侍り。噫堪がたしや苦しや。と身を戰して、血走る眼に、禁難たる紅涙、樹間の雨と降沃ぐ、凋る花と憂かりし事を、誠しやかに口說きけり。莊介これをうち聞て、年來犬田小文吾に、仇なす賊婦船虫也とは、神ならぬ身の知るよしなければ、思はずも嗟嘆して、聞くがごときは東人の不仁、儷の薄命、憐むべし。家兄の宿所は何處ぞや。その姓名は何とかいへる。と問へば、船虫涙を禁めて、兄の宿所は這地方より、半里ばかりも侍るめり。片山里なる獵戸にて、名を酒顚二と喚れ侍り、隣に疎き孤屋にて、いと也貧く侍れども、俠氣あれば乾兒多かり。賤妾が厄を糶助けて、宿所へ送り給はらば、さぞな歡び侍りてん。只おん慈悲を願ふのみ。といへば莊介頷きて、そは亦自然の道理也。先解卸して得させんず。と應て軈て腰刀に、附たる小刀子を拔拿て、左手にやをら船虫を、抱抗つゝ梁に、掛たる索を斫棄て、扶卸しつ、兩手を縢げし、その軍索を解れたる、船虫は手を捺り、足を揉りつ亂れたる、髮を搔よせ推紈ねて、跪きつゝ莊介を、伏拜み又伏おがみて、思ひがけなきおん慈善、何の世にかは忘るべき。手さへ足さへ皮肉疼みて、なほ難義には侍れども、駝れまつらんは憚りあり。徐にあるきて退りてん。いかで送らせ給ひなば、なほこのうへの御恩にこそ。と懇むを莊介推辭難て、いはるゝ趣餘義もなし。宿投後れし折なれば、路の便宜は左も右も、宿所へ送屆け得させん。徐に階子を踏へて降よ。といふに船虫又伏拜みて、大かたならぬ御洪恩、さこそは兄も感心して、今宵のお宿をしはべらん。允させ給へ。と手を膝に、掛てやうやく身を起すを、莊介はなほ勦りて、扶けて俱に樓上より、降りて外面に出る時、壞れし壁の鏝卷

竹の、太やかなるを推折て、船虫に取せしかば、船虫は受戴て、杖とし突て迚る〳〵も、莊介と共侶に、夜の山路を熟たる如く、ゆくこと約半里許、童子鬻子酒顚二が、隱宅へはやく來にけり。這里は山院の荒迹なれば、處々に礎あり。只松柏の老たるが、彼此に繁立て、見亘す限り外に家なし。然ども酒顚二が隱家は、原山院の庫裡なりければ、荒たる隨に廣やかにて、坐席は二房か三房かあるべし。這夜件の酒顚二は、支黨の惡棍を、十五六名相聚へて、酒うち喫てありけるを、船虫は然とも知らねど、俺詭りし趣を、はやく良人に聶報ずば、這旅客と對面の折、應答不都合なるべし、と思ひにければ莊介を、霎時門頭に立し置て、遽しく門の戸を、推開き又引闔て、閃りと裡面に找りしを、酒顚二も及支黨も、灯光に見つゝ聲をかけて、今宵は奈どて遲かりし。今も今とて丙丁と、噂するまで等久たり。といふを船虫手を抗て、推禁め又外面へ、指し示して酒顚二の、身邊に跪居て恁々と、今宵の首尾を聶くにぞ、酒顚二は含笑ながら、幾番となく頷きて、却同惡の甲乙にも、聶き續して箇樣々々〳〵と、はやくこゝろを得させしかば、そが儘俱に身を起して、奥へ躱るゝもの多かり。殘るは才に一兩名、啖散せし盃盤を、咸壁下に片寄て、其頭に席を儲てをり。爾程に莊介は、憶はず船虫を送り來て、且く門頭に鵠立たる、折から月は雲に入りて、這四下の光景を、巨細にはまだ見ざれども、綽の趣意外に出て、訝しからずといふものなし。非如主人は獵戸也とも、恁る地方に住做せしは、要なからずや。應怠也。裡面の容子を見て後に、這疑ひを釋よしあらん、と思へば阿容たる氣色もなく、主人の案内を俟たりしを、裡面より一個の支黨が、遽しく立出て、莊介にうち對ひて、誘とて軈て案内をすれば、莊介は引るゝ隨に、草鞋の紐解捨て、儲の席に著程に、酒顚二も亦身を起して、找み對ひつ叮寧に、且その長途を勞ひて、小可則當家の主人、酒顚二と喚るゝもの也。女弟の必死を拯はせ給ひし、御洪恩の趣は、日今他が報たれば、具に承知仕りぬ。おん身は何州の方ざまにて、獨行をし給ふやらん。願ふは名告らせ給へかし。倘武家方の主用にて、只管路を急せ給ふ、おん脚力にはあらずや。と問へば莊介頭を掉て、否、某は東國の浪人、姓名犬川

莊介と喚做すもので候也。いぬる比より故ありて、友を索ねて彼此と、遊歷一稔に及びたり。爾るに今宵思はずも、山路の荒廢堂に憩ひし折、那樓上に令妹の、綁縛せられし爲體を、見るに忍びずその故を、聞けば寃屈の呵責に似たり。寔に不便の事なれば、已ことを得ず解卸して、請るゝ隨に夜と共に、送屆けて俺們も安心。この義によりて今夜半夕、止宿致すも不測の緣。曉なば別を告んのみ。やよ某に管ずに、且令妹を勦り給へ。といへば酒顚二、さン候。女弟は納戸にうち臥さして、既に將息の術直あり。節骨の疼む處へは、膏藥を打べしとて、乾分們にそのよしを、吩咐て候へば、御こゝろにな掛給ひそ。他は近曾孀婦になりしを、兒子ひとりも候はねば、去歲より這里へ召とりたれども、小可も亦妻子なければ、奉公せんといふに儘して、小千谷の鄕なる客店へ、炊妾にとて遣せしに、又有まじき東人の殘忍、情慾の遺恨に濡衣を、被せて殺さんとせられしは、怨むべし嗚呼憎むべし。この義は巽日鄕長に、告てせんすべ候はん。といひつゝ傍を見かへりて、噫漫也。憤を、洩さんとて長もの語で、おん管待の後れたり。快夕饌をまゐらせん。准備をせずや。と急がせば、『惡棍輩のこゝろ得て、立んとせしを莊介は、遽しく推禁めて、その義は決して無用也。晝の割籠の飯の殘りて、舊の儘にてありけるを、この黃昏にたうべしかば、俺們はものゝ欲しからず。一房を借りて睡んのみ。と推辭を酒顚二强難て、小夜深たればまゐらする、東西とてはなけれども、然ではあまりに無造作也。尙手をつけぬ餚もあれば、心ばかりに歡びの、盃を薦めまつらん。甲よ乙よ盃盤碗碟を、洗淨めて裝易よ。といふを莊介又禁めて否某は生來沙量也。路の疲勞のなきにあらねば、只這儘に睡し給ひね。喫得ぬ酒を浮られて、徒に天を明さんより、遙に優たる管待ならん。この義を憑みまうすにこそ。といはれて酒顚二頭を搔て、然までに固く辭ひ給ふを、なほ御こゝろに任せずば、倒て無禮に候はん。急がせ給ふ旅ならずば、權且這里に留りて、古迹を遊覽し給へかし。その折には小可が、鄕導を致すべく、おん管待を仕らん。夜ははや既に深たれば、就寢り給ふもよかるべし。這里は名だたる雪國なれば、蚊さへ蠅さへ稀なれども、微雨の比は屋棟裡より、夜は只蛭

の落ることあり。よりて蚊帳を用る也。壯佼輩よ南向の、八席房に臥簟を儲て、案內をせよ。と吩咐れば、兩個の支黨こゝろ得て、はやその處に蚊帳を垂て、枕よ臥蓆よ蒲團よ、ととり出し來つ莊介に、誘とて案內に立つ程に、莊介は酒顚二に、歡びを演、刀を引提て、軈て臥房に入りにけり。

第七十七回

衆賊を盡して酒顚旅舍を脅す　內命を傳へて由充二客を招く

却說莊介義任は、獨枕に就たれども、又身を起して霎時も睡らず、手を叉き頭を低て、肚裏に思ふやう、這里の主人の面魂、一癖あるべく見えたるに、乾分と唱る一兩名も、又獵戶の模樣にあらず、矧席上にありし盃盤碗碟の、一個として具足せず、碟子は唐山舶來の、宣德製の如くなるに、折敷は剝たる會津盆也。東西皆輕重巧拙の、あるだにも疑しきに、家は寺院の庫裡に似て、在俗の住ひにあらず。柱斜に壁壞れて、檐より夜半の月は漏れども、酒肉に奢れる爲體、那人柄に相應しからず。今亦臥房に入りて見るに、蚊帳は則蒲葱の紗にて、裙緣に紅絹を用ひたり。亦是微賤の東西に似ず。蒲團も四布の絹なるに、臥蓆は極めて麁物にて、枕は古材の斫株也。これらによりて推量るに、那酒顚二は山賊にて、兩個の乾分は支黨ならん。向に主人が俺を相て、武家の主用に路を急ぐ、脚力なり哉、と問ひし時、未だ心のつかざりしを、今又思へば俺が懷に、要金ある歟、と竊引しならん。此も亦疑ふべし。恁れば女弟と唱るものも、必是賊婦にて、人の爲に生拘られ、那荒廢堂の樓上に、繫れてありけんを、俺が思ひ足らずして、他が巧言を眞事と听たる、慈善は仇となりぬべき、機崩は越に顯れたり。察する所當らずとも、由斷のならぬ今宵の旅舍、只用心に優ことあらじ、と熟思をしつゝ四下を見るに、緣頰の戶は足らざるにや、半分は闔ずありければ、子二刻比の月の光、障子を照らす庭面に、高く歌女の聲す也。絆ある折に進退好。出るに便万からず、と思ひつつ又後方を見るに、短鎗竹槍桿棒なンどの、多く承塵に掛てあり。又その邊に竿に串きたる、裂織の草鞋の、締を融せ

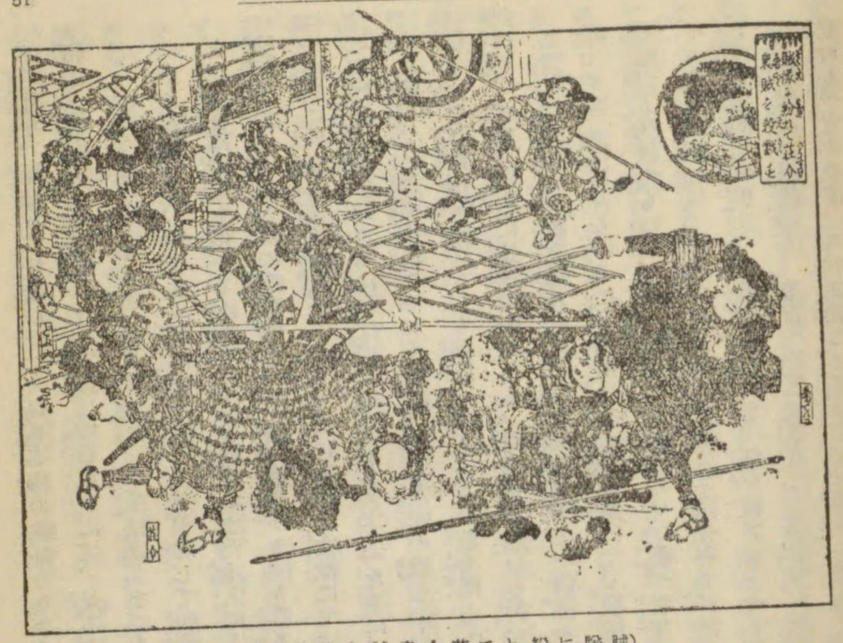
しがいくらもありけり。折から奥にて人許多、うち譚ふ聲してければ、莊介耳を側て、俺なほ恁てあらんには、他們も亦由斷せで、闕窺ることなからずやは、熟睡をしたる如くにして、臥つゝ聞ん、とそが儘に、ふたゝび枕に就けり。爾程に酒顚二は、席を易奥に到て、襖に躲れたる支黨と、圓居をしつゝ船虫に、酒を飲し勦りて、那荒廢堂に綱められたる、緣故を尋るに、船虫讎を潛して、おん身に報るは面伏なれども、奴家が乃者日毎々々に、絆に假托て外に出しは、讐を擊んと思へばなりき。その故は箇樣々々と、曩に近鄕二十村なる、鬪牛を觀つる折、犬田小文吾を闕窺たる、絆の趣を初として、小文吾はその比より、小千谷なる客店の、石龜屋次團太許、逗留しつゝ風眼を、患て垂籠てをるよしを、其後撈聞し事、これにより船虫は、假瞽女と做り、按摩を執りて、小千谷を徘徊せし程に、けふ小文吾に召入られて、近づく事を得たりしよしを、遣もなく聟示して、奴家が武藏に在りし時、故夫鷗尻の並四主は、那小文吾奴に殺されたり。その折奴家も搦捕られて、石濱の城へ牽るゝ夜艾、不測に人の資によりて、那地を脫去りたりき。こは此五稔已前の事也。爾るにいぬる日鬪牛の折、那奴を闕窺たりしより、舊怨みに堪ざれば、擊果して故夫の、怨をいかで復さん、と思ふものからおん身に報なば、快からぬ所あり。舊さに厚くて新しきに、情義薄しとせられん歟とて、初よりしていはざりき。却爾後を聞給へ。けふ曛昏より小文吾に、近づきて彼が肩辮を、擊こと久しかりけれども、那奴は皆目見えざれば、奴家也とは些も知らず。粤にいよ〳〵便を得たれば、懷刀を拔出して、頸を搔んとしてけるに、幸なく那奴に刹手を捉られて、投伏せられて事成らず。その折主人次團次が相計て、神虛任に做さんとて、兩個の乾兒に手傳せ、奴家を軈て人煙靄處なる、戾申堂へ牽もて去て、梁に吊しつ三人して、思ひの隨に鞭責て、翌の夜も又明後の夜も、鞭責てなほ死なずば、千隈河へ推淪めん、と罵誇りて出てゆきにき。勿論那小文吾奴も、その身に記憶なきにあらねば、奴家を船虫ならん歟、と疑ふのみにて目の見えねば、そこらは便りよかりしかども、那儘にして三夜まで、呵責に遇はゞ死ぬべかりしを、折もよく那旅客が、其首に愈ひ

て見出したれども、初は妖怪なるべしとて、輒くうけも引ざりしを、奴家が妙にいひ瞞めて、送られてかへり來つる也。これのみ沒怪の幸なれども、那次團太は小千谷の老俠、鄕の扞城を做すものなるに、蝨の塔より塘崩れて、這隱宅を襲著られなば、後の祟りを爭何せん。そこらの用心し給へかし。といふを酒顚二うち聞て、眼を睜り拳を揉りて、そは安からぬ椿事也。石龜屋奴が事はしも、俺知らざるにあらねども、鄕にて口を利けばとて、いかばかりのことをやせん。先にすれば人を征し、後るゝときは征せらる。亦是自然の勢ひ也。媼內は所要ありて、塚の山へ遣したるに、いまだ還り來ざれども、その他の火家は這里に在り。今宵這里へ推寬て、小文吾次團太いへばさら也、闔宅の奴們鹽にして、渾家の與に怨を復さん。大家夜入の准備をせずや。と敦圉悍く罵りしを、船虫急に推禁めて、そは愉快き事なれども、這里に一箇脫落あり。今宵宿せし犬川とやらん、莊介とかいふ逆旅武人に、夜入の事を知られなば、後難免れがたかるべし。といへば大家辭齊一、それのみならで邪魔になる、那旅客の臥簟の邊に、器械草鞋皆これあり。是も不便にあらずや。といふを酒顚二冷笑ひて、毒を啖はゞ碟を破るべし、人を厭はゞ殺すべし。然ばかり邪魔にならずとも、那逆旅武士莊介は、身の皮も歹からず。友を索て一稔あまり、旅宿をしぬるといひしを思へば、必盤纏多かるべし。軍神の血祭に、殺して後の患を除かば、只是一事兩全也。宿鳥は鰥にいと易かり。熟睡しぬらん、結果けよ。といへば、船虫然なりと應て、そは手短なる軍配也。快甲ゆきね乙ゆきね。といへども立ず僉目を注して、那旅客の面魂、倘武者修行のものならば、素より本事もさぞあらん。そこらを思量らずに、一人や二人でゆかれんや。といふを酒顚二又冷笑ひて、役には立ぬ弱虫們、健啖には豪傑なれども、一箇の敵手に十四五名、俱に蓬き音を出して、逡巡することやはある。俺がせんやうを見よかし。といひつゝ巨刀引提て、立勢ひに勵されて、恥はしくや思ひけん、大家齊一竊歩しつゝ、一房を隔し莊介が、臥簟に潛よりつゝ見れば、鰥は垂たる隨にして、何地ゆきけん影もなし。大家猛可に駭噪ぎて、原來那奴は耳聰く、密談をはや聞知りて、逃亡たるか躲れし歟。庭の樹の蔭

簀子の下まで、隈なく索ん皆出よ。と詈動くを酒顚二推禁めて、那奴は他郷の旅客なれば、擊漏せしとて惜むに足らねど、翌石龜屋へ尋ゆきて、這方の事を告られなば、殃厄これより起るべし。夜は丑三とおぼしきに、那奴を索ねて徒に、曉さば悔とも及んや。快々夜入の准備をせよ。と辭激しく惱立れば、大家聞て一議に及ばず、はや嚮々と身を固めて、器械引提て出んとせしを、船虫は奥の房より、喚禁めながら出て來つ、酒顚二にうち對ひて、おん身をはじめ這人々が、名殘なく出てゆきし後、那犬川が立戻りて、欺れたる腹愈に、奴家を殺すことありとても、身單にては防ぎがたかり。切て留守にも一兩名、遺して戍らし給はずば、危からん。といふ折から、外面よりかへり來るものあり。是則別人ならず、曩に（去年文明十三年十一月）武藏なる四谷の原にて、主の淡雪奈四郎に、痍を負し盤繞の金子を、遺りなく奪とりて、はやくも影を躱したる、亦那惡僕媼丙也。媼丙は去歳の冬、越後の塚の山に逃れ來て、博徒の黠計に入りしより、竊みし金は淡雪の、消るがごとく使果しつ。却せんすべのなき隨に、遂に酒顚二が手下になりて、春の比より這里にをり。この日は塚の山に所用ありて、今朝未明より出たるが、原盜兒の事にしあれば、倒夜行を便利として、深夜にかへり來つるなり。酒顚二初は單身なりしに、船虫を妻にせしより、支黨やうやく聚嘯て、恁大勢になりしとぞ。間話休題、酒顚二は折もよく、方纔媼丙がかへりしを、見つゝ遽しく喚近づけて、やよ媼丙、緯急なれば覿面に、意中を盡すに遑あらず。俺は今より火家と俱に、小千谷へ夜入に赴く也。亦俺がをらぬを覘ふ仇の、あるべき歟料がたかり。和郎は素より才覺あり。心も悍きものなれば、今宵の留守を委る也。事情を知まく思はゞ、後に船虫に聞ねかし。といひつゝ種子島の小鳥銃を、懷よりとり出して、這炮銃は北國に、今なほ稀なる東西なれば、俺年來祕藏して、利を得たること尠からず、今宵はこれを遺し置て、權且和郎に預てん。仇入來ぬと見るならば、火蓋を披て擊留よ。と辭せはしく說示して、その鳥銃を遞與すにぞ、媼丙はまだこゝろを得ねども、いはるゝ隨に應をしつゝ、宣ふ趣うけ給はりぬ。是たにあれば幾人でも、闘へ足は掛させず。御こゝろ安くお

ぼされよ。といふに酒顚二頷きて、又船虫に恁々と、留守の用心その義を示して、さらば進め。と同惡を、先に立して出てゆくを、船虫は媼丙と、共に祝して目送りけり。却說犬川莊介は、是より先に臥房にて、奥なる酒顚二們が密談を、听くこと約半晌許、間遙に隔れども、護身囊に收めたる、那靈玉の奇特によりけん、船虫們がいふことまで、その懷に響くが如く、譬ば五十瀨なる響石の、人語を移すに異ならで、言詳に聞えしかば、或は驚き或は歡び、獨竊に思ふやう、俺が推量に違ふことなく、酒顚二は是賊の頭梁、又俺が今宵送屆けし、船虫とかいふ妖狐奴は、その女房でありけるを、欺れぬる鈍ましさよ。然るにても小文吾は、當日故郷に還らずして、這地に旅宿をしたること、必その故なからずやは。五稔以來索ねても、得遇ざりける三犬士の、隨一人なる悌順は、這里よりして程遠からぬ、小千谷の郷なる石龜屋次團太といふ客店に、久しく逗留しつる事、及風眼によりて見ることの、克はずといふよしまでも、賊婦の口より洩聞えて、今宵初て知ることを、得たるは奇也妙なるかな。什麼いかにせん衆賊們が、今より那里を襲擊ば、眼疾不便の犬田の窮阨、十にして九分九釐は、免るゝことかたかるべし。然ばとて俺身ひとり、目今那首へ潛寄て、酒顚二と船虫を、擇擊に做すならば、殘るは烏合の小嘍囉、咸立地に逃亡て、犬田が厄は釋べけれども、不知案内なる賊巢は、主客の勢ひ既に異也。前後許多の敵を受て、利を得んことも亦かたかり。その危きに臨んより、所詮竊に退きて、他們が出てゆく折に、紛れて共に小千谷に到らば、問ずして石龜の、宿所を知ることいと易かり。恁て那里の門頭にて、名告て酒顚二を擊捕らば、主人次團太四隣の市人、志ある壯佼は、走出相援けて、衆賊を俱に擊もやせん。恁做すときは小文吾の、大厄を糊くのみならで、賊の根を斷巢を枯らして、地方の害を除くべし。吁爾也、と肚裏に分別既に決りければ、潛やかに身を起して、柱に掛たる草鞋を、取卸し穿締て、又承塵なる九尺の短鎗の、その宜きを擇取て、小篠の兩口さしも現、騷がで早き劍刀、身裝して緣頰より、出てゆく事一反あまり、程よき竹藪に躱ひて、衆賊を這里に俟つゝをり。爾程に酒顚二は、鏘矩衣手甲脚胄、鉄打たる顳卷

に、脩刀を跨へて、右手に短鎗を挾み、器械拿たる十四五名の、支黨を後に從へ、先にも立せし火急の隊配り、大家急げ。と逸足出して、走る跡より莊介も、鎗引提つ、隊に紛れて、共侶に走りしを、折から五月の天なれば、驟雲屢月を隱して、朧朦となる隨に、酒顚二も自餘の賊も、竟に莊介を認ずして、只是火家の一人ゝ也、と思へば些も疑はず、見かへるものもなかりけり。怎而童子隱子酒顚二は、石龜屋次團太の、門頭にはやく推寄來つ、門の戸烈しく敲かして、主人次團太快出よ。這里に宿せし他鄕の客人、犬田小文吾に怨ありて、復讐の爲來つるもの也、命惜くば小文吾に、索を被て推出せ。異議に及ばゝ闔宅の奴們、一人も漏さず斫盡さん。這里開ずや。と諸聲立て、勢ひ猛く呼づたり、間近く臥たる奴婢輩は、驚覺つ吐嗟とばかり、怕れて答るものもなし。登時主人次團太も、覺て奥より走り來て、且戸節の間よりして、來つるものを覘ふに、面魂皆猛惡なる、癖者通て十六七名、短鎗竹槍脩刀を、手に手に拿りし異形の打扮、是絲林錦楓の、儔ならんと見てければ、原來那假瞽女の同類なるもの聞知りて、襲來つるに疑ひなし。俺はともあれ犬田の大人の、病眼に敵を爭何せん。はやく背戸より落さんず、と尋思をしつゝ暫もせず、竊に踵を旋して、犬田が臥房に赴きけり。然れば四隣の里人の、共に驚覺るもありしを、賊徒の多勢に害怕れて、恁る折には一人として、援になる者なかりけり。既にして外面には、酒顚二頻りに焦燥て、恁まで喚ぶに應もせぬは、逃亡たる歟、寢惚し歟。戸を打破て稠人らずや。いと手緩し。と罵たる、聲共侶に一個の支黨、准備の垣槌を振抗て、門の戸韆粉に打摧きて、走入らんとする程に、思ひがけなきその隊より、犬川莊介顯れ出て、大喝一聲閃かす、鎗の刃尖は地上の電光、瞬間に件の賊の、腋下ぐさと突伏せて、裡面に知する聲高やかに、犬田も主人も驚くべからず。犬川莊介こゝにあり。面亭の賊は俺咸殺さん、背門に用心せよかし。と兩三番喚りて、駭噪ぐ小嘍囉を、又兩三名突仆す、勢ひ宛猛虎を駈て、群羊を屠るに似たる、向ふに前なき武勇の剽姚、克ふべくもあらざれば、賊徒は怕れて辟易しつゝ、あれよ〳〵。とばかりに、擊るゝ者ぞ多かりける。思ひがけなき光景に、酒顚二も亦驚き



（賊隊に紛れて莊介衆賊を殺戮す）

ながら、怒れる聲をふり立て、原來甲夜の逆旅武人奴は、間諜者にてありけるよ。不意を擊れし故にこそ、聊、勝に乘らるゝとても、多寡の知れたる孤客の鎗頭、いかばかりのことやはある。快推包みて擊留よ。と罵奬されし支黨は、又莊介を擊んとす。半分は裡面に稠人るを、小文吾は次團太と、俱に刃をうち振りて、先に進て近づく賊を、斫靡け薙伏せて、逃るを透さず趕立々々、門頭に出て戰ふたり。その間に莊介は、酒顚二と鎗を鬪して、一上一下と術を盡す、犬士の武勇に草賊の、當るべうもあらざれば、酒顚二竟に腕亂れて、怯むを得たり、と莊介は、鎗を騰へ反揚て、オツと嚔て晁かす、刃尖の牙に酒顚二は、吭を丁と刺串れて、仰反仆れて死てけり。殘る賊徒は立足もなく、逃るを小文吾次團太們、又莊介も共侶に、這首に趕詰那首に擊留、最も烈しく攻たりければ、賊の屍は算を紊して、大かたならず擊れたる、それが中に辛くして、脫れて廢毀院なる隱宅へ、走かへりし小嘍囉は、一兩名に過ざりけり。登時犬田小文吾は、莊介に聲をかけて、絕て久しや犬川生、什麼いかにして俺

が厄難を、聞知りて援給ひけん。只是不勝の歡びなりき。といへば又莊介も、いそしく走り近づきて、俺が來歷は一朝に、說盡すべくも候はず。和殿は頃日風眼にて、見ること自由ならざれば、垂籠て在する、と聞しにも似ずいとめでたし。といはれて小文吾、さればとよ、小生はけふまでも、酷く目を病煩ひて、藥餌の效もなかりしを、やうやく心つくよしありて、甲夜より祕藏の玉を取出て、念じて病眼を拊ること、半晌にして目翳退き、一皆にして明なると、烏夜に燈燭を得たるが如し。この義はいまだ主人にも、報る遑のあらざりしに、夜盜大勢推寄來つ、と聞とそが儘起出て、主人と俱に草賊們を、聊討捕候ひき。と答る間に次團太も、おなじ處に立聚合て、却莊介に名告をしつつ、共に歡びを演て、又いふやう、寔に由斷は大敵にて、衆賊の夜入に准備はあらず。加旃おん客人は、(小文吾をいふ)病て皆目見え給はねば、いかにともせんすべなさに、必死の覺期で候ひしに、豈思はんや犬田の大人の、眼病夜中に痊可て、進退自由のそがうへに、おん友達の折もよく、這地に旅宿し給ひて、はやくも賊を滅し給ひし。袷と云恰といひ、歡び譽るにものも候はず。といふを莊介聞あへず、そこらの口誼は姑く措て、なほ緊要の一議あり、某は料らずも、甲夜に恁々の山路なる、荒廢堂に憩ひし折、那船虫とかいふ賊婦の、梁に吊られしを、見出しつゝ訝しさに、まづその故を諮ねしに、那奴巧に欺きて、箇樣々々といふにより、その網を解卸して、乞るゝ隨に他が宿所へ、送遣したりけるに、宿所は故たる孤屋にて、廢毀院の跡に似たり。且船虫が兄也、と詭りしは賊の頭梁にて、酒顚二と喚做すもの也。某初はこれを知らず、軈て那里に止宿して、那黨の密談を、具に洩聞たりければ、疑心やうやく氷解して、那船虫は當初、武藏なる阿佐谷の奸賊、並四郎が妻なりし事、幷に件の並四郎は、犬田生に擊れし事、這回又船虫は、假瞽女に打扮て、怨を復さんとせし事まで、漏さず听しはわが懷なる、靈玉の加護ならんかし。恁而賊首酒顚二は、這首へ夜擊に推寄て、妻船虫が新舊兩度の、怨を一時に復さんとて、議すること既に急也。登時某思ふやう、不知案內なる這所にて、多賊を擊んと欲せんより、他們と俱に小千谷に到りて、石龜屋の門頭に

て、猛可に起て拉がば、賊首を殺し易かるべし、と尋思をしつゝ箇樣々々に、計りて俱にこゝへ來つ、思ひしごとく酒顚二をも、又支黨をも討捕にき。爾るに賊婦船虫は、媼內とかいふ一個の賊と、俱に留守して那首にあり。方纔酒顚二們が擊れしよしを、聞かば必逃去るべし。那奴は前後兩度まで、草賊と夫婦になりて、毒惡竊盜せざることなく、犬田生を害せんと、しつるも前後兩度にあらずや。恁れば天も人も借ざる、罪人なるを走らしなば、蛇を殺して頭を摧かず、後の患を遺すに似たり。這里より賊巢へは、才に半里許なり。誘給へ天も明なん。ゆきて船虫を屠るべし。やよ快々。といそがして、その崖略を報しかば、次團太は聞つゝも、且驚き且感じて、頻りに耳を傾けけり。就中小文吾は、听事毎に感嘆して、遖微妙き犬川生、敵を知り己を知らずば、進退その度に當らんや。是兵法の貴む所、計略感ずるにあまりあり。いはるゝ如く船虫は、俺身の仇たるのみならず、大辟不赦の罪人也。誓て那奴を殺すべし。只鄕導を憑むのみ。といふ辭いまだ訖らず。又那土丈二鯽三は、師匠なりける石龜屋へ、强盜入りぬと傳聞て、同志の壯佼十名ばかりを、敲起し駈催して、六尺棒を突立々々、天の明る比來にければ、次團太は小文吾と、俱に土丈二們を勞ふて、絆の趣を說示し、和郎們は過半こゝに在りて、比屋の人々と共侶に、よしを鄕長に報、指揮に儘して、衆賊の尸骸をともかくもせよ。俺は這方ざま達と、賊の隱宅へ趕擊して、その根を鋤んと思ふ也。この義をこゝろ得よかし。と諭して裡面に走り入て、逃躲れたる女房嗚呼善、幷に奴婢們を喚出して、又示すこと上の如く、手配遺もなかりけり。爾間に小文吾は、莊介を先に立して、賊巢へいそぐにぞ、次團太は鯽三と、壯佼五六名を將て、僉後れじとて二犬士の、跡に跟てぞ走りける。有恁し程に廢毀院なる、酒顚二が隱宅には、溷六穴八と喚做たる、兩個の小嘍囉逃かへり來て、酒顚二もその他のものも、犬川犬田兩勇士に、擊果されし絆の趣、箇樣々々と報しかば、船虫も媼內も、只眉に火の焦たるごとく、駭噪ぎて立て見つ、居て見ても計の、出る所を知らざれば、走るに不如と尋思して、身裝して臂近なる、金錢衣裳を腰に著、背に駝ふて共侶に、立去んとしつる折、船虫は溷

六と、穴八にうち對ひて、俺丈夫の運竭て、火家の人々と共侶に、果敢なく擊れ給ひしを、歎けばとても今は益なし。顧ふに犬田と犬川奴が、里人を駈催して、みづからこゝへ推よせ來つる歟、然らずば石龜屋次團太が、片貝殿（景春の別館）へ訴て、軈て捕手を向らるべし。居つゝ綱を受んより、媼内を將て投すかたへ、落てゆかんと思ふかし。汝達も宜き東西を、駝るべき限り擔造りて、家に火を放、煙に紛れて、何處へ也とも影を躲しね。迹を憑む。といひ捨て、笠ふかくしつ、慌しく、東を投て出てゆく。後邊に從ふ媼内は、大きやかなる袱裹を、楚と駝つゝ種子島の鳥銃を携て、趕ものあらば擊留んとて、眼を配る不敵の退際、今より後の胸算用も、あふか合ぬ歟、手拭は、算盤紋を頰單、二一轉變早急の、一時退散、五二倍死、二引て殘る二人連、樂み去て苦の世界、九死加四苦六溺六と、穴八算に告別、明ゆく天を不樂しげに、樹の下闇の路もなき、路を討めていそぎけり。姑くして彼此の、茂林を離るゝ鳥の聲、山鼻遠くあから引、東は晴れし微雨霽の、朝日に向ふ莊介は、小文吾と共侶に、賊巢に近づくこと、二町あまりになりし時、小文吾を見かへりて、那媼内とかいふ奴は、酒顚二が預けたる、鳥銃を持る也。うち入るときに心して、篇面にな立給ひそ。といふに小文吾こゝろ得て、いそぐ去向に忽然と、自燒の煙立升りて、瓦刺々々々と、音するにぞ、二犬士これを佶と見て、原來はや、船虫們が自燒して、逃去るにこそあらめ。逃とて何處へ脫さんやとて、飛が似くに猛火の邊へ、喘々て走著きけり。登時溷六と穴八は、取るべき東西を皆擔造りて、擡出しつ隱宅へ、火を放ち却退きて、庭に措たる件の重荷を、擔ひ抗んとせし程に、朽は折れ擔桑も斷て、東西皆滾出たるうへに、火粉忽地燃徙りて、燒失ぬべく見えしかば、二賊は吐嗟と狼狽躁て、引出さんとしつる折、二犬士走り近づきて、那爲體に些も猶豫せず、草賊等。と喚被る、聲に驚く溷六穴八、逃んとするに後のかたは、既に猛火に遮られて、一歩も退くこと得ならず。前には二犬士立塞りて、脫るべうもあらざれば、此彼齊一跪きて、許させ給へ。とうち陪話るを、二犬士軈て獃倒して、解たる擔桑を搔拿つゝ、はや數珠繋に綱めて、且風脇に率もて退け、船虫と媼内們

が、往方を緊しく責問ふに、二賊答て、船虫は、媼内を將て逸早く、東の方へ落亡たり。小可們は又箇樣々々と、跡に遺りし絆の趣、ありつる隨に首伏す。二犬士これをうち聞て、そは朽惜き事なりき。他賊は左まれ右もあれ、那船虫を走らせしは、熊を殺して胆を採ざる、憾に何ぞ異なるべき。遠くはゆかじ趕蒐てん。と俱に敦圍き罵る折から、次團太は鱠三と、自餘の壯佼們を從へて、やうやく走著しかば、二犬士は船虫們が、逃たるよしを報知して、部をしつゝ趕蒐けり。そが中に莊介は、留りて這里にをり、一個の壯佼に索を執して、又溷六と穴八を、責て酒顚二船虫們が、來歷素性を問ひしかば、二賊は慮すことを得ず、傳聞たる趣を、遺なく招道したりける。是によりて船虫が、酒顚二と相計りて、磯九郎を殺せし事も、又船虫が信濃路より、流落來つゝ酒顚二と、夫婦になりし事はさら也。媼内は他郷にて、主に傷け盤纏を奪ふて、亡命したるものなるよしも、總て具に顯れけり。爾程に小文吾次團太鱠三は、各々里の壯佼を、一兩名從へて、はや三方に立別れ、船虫們を趕たりけるに、樵路熊徑岐道多かる。山野は草木の隈のみなれば、何地ゆきけん趕も得著かず、まだ早飯もたうべねば、大家饑てかへり來にけり。當下莊介は、又溷六們が招道にて、鄰に酒顚二船虫が、計りて磯九郎を殺せし事、幷に媼内が來歷まで、初て知られし緣由を、小文吾次團太們に報しかば、大家聞つゝ駭嘆じて、いよ〳〵遺恨に堪ざりける。就中次團太は今船虫を獲ずといへども、磯九郎の仇發覺て、その一人ゝなる酒顚二は、莊介に擊れしを、是切てもの事也とて、又改めて莊介に、その歡びを演にけり。恁而あるべきにあらざれば、小文吾莊介次團太は、生拘の二賊溷六穴八は、鱠三們に牽しつゝ、午の貝吹く比及に、小千谷の宿所へ還りけり。抑件の溷六と穴八は、年尙二十二三なるべし。溷六は身長高く、面色白くして、小文吾に似たる所あり。又穴八は色薄黑くて、身長は高からねども。筋骨の逞しげにて、うち見る所何となく莊介に似たりけり。夫燕石の玉に似たる、犁牛の子の羊に似たる、物よく相似て、その質異也。矧陽虎の孔子に似たるも、又山猿の顏延之と、何尙之に似たりしも、只是外面のみにして、内心何ぞ同からん。かゝる故に但貌をもて人を取れば、

聖といへども必謬る。邪溷六と穴八の、犬田犬川によく似たるも、亦比へて知るべきのみ。間話休題、再說次團太は、小文吾莊介に相俱して、小千谷の宿所にかへり來つ、先二犬士に饌を羞め、盃を羞めたる、その管待大かたならず。幷に土丈二鰤三們の壯佼の、この曉より這里にをり、那首に赴きたる幾名にも、酒を飲し飯を啖して、留守の首尾を問などす。然ば土丈二們は曉かたに、四隣の人々と共侶に、よしを鄉長に報知して、時を移さず件の始末を、領主の陣屋に告訴せしかば、有司速に到來して、尸骸の實檢事訖り、賊の頭梁童子簡子酒顚二、その支黨に至るまで、梟首すべし。と宣掟て、なほ顚末を糾問せられ、衆賊を擊たる武勇の旅人、犬川莊介犬田小文吾們が歸來なば、宜く御沙汰あるべきに、稟出よ、とおん下知あり。いと安らかにその事果て、今纔還らせ給ひにき。と報るに次團太歡びて、衆人を勞ひつ、又二犬士にも件のよしを、恁々と聞え知らして、みづから鄉長の宿所に赴き、二犬士かへり來たれるよしと、又二犬士が賊の隱宅にて、溷六穴八といふ二小賊を、生拘たりし趣を、箇樣々々と演述して、這義も訴給るべし。と憑てかへさに比屋なる、市人許立よりて、公事に勞したる、歡びを演などす。煩雜いふべうもあらざりけり。爾間に小文吾は、病後の浴湯剃梳して、莊介と俱に客房にをり、會話の數々なる、曳手單節が事の趣、又並四郎船虫が事、馬加大記常武が、妬忌奸計あるにより、次の年の五月まで、その身を石濱の城內に、禁錮られたる事の顚末、幷に犬阪毛野の事、そが復讐の智略勇敢、その折毛野の資によりて、石濱を逃去りし事、依介が事、父文五兵衞が遺言の事、又親兵衞の事などは、莊介も照文に、聞にきといへば事省て、却小文吾は犬阪毛野を、索ねて鎌倉に旅寢をしたる、爾後渡海の船破れて、伊豆の孤島に光阴を送りて、やうやく浪華に便船しつゝ、國地にかへることを得たる、有馬の湯治、這地の遊歷、二十村なる鬪牛の折、暴たる牛を杆めし事、小角力磯九が醉狂枉死、その身の眼病、靈玉の妙應奇特の事までも、次第条さず說示せば、莊介耳を傾けて、頻りに感嘆の聲を得絕ず、聞果て又その身の去來、荒芽山にて離散の折、犬山道節と共侶に、犬塚犬飼們の行方を索ねて、四國に漫

り九州に赴き、京擲五畿內をうち巡りて、甲斐州に到りし折、石禾の指月といふ道場にて、大法師に名のりあひ、蜑崎照文に面會したる、そこらの事を始として、莊介は去歲の春、なほ又四犬士を索んとて、獨指月院を立出て、武藏に赴き、下總を徧歷して、行德の里人に、犬田がかへり來ざりし事、文五兵衞は安房州にて、身まかりにきと聞知りて、常陸下野陸奥出羽まで、長き旅宿に二稔の、光阴を過せし憂苦の顚末、乃者這地に來つれども、なほ四犬士（犬塚、犬飼、犬田、犬江）に得遇ずば、甲斐の石禾に立かへりて、又道節と誓らんと、思ひし事の終りまで、唔譚に時を移しつゝ、過にし事を思ひ出、聞くに就ても痛ましき。興四郎音音が忠死義沒、曳手單節が薄命存亡、又親兵衞が悲なく、有やなしやと思ひかね、慰め難て共侶に、嘆息の外なかりけり。姑して莊介は、又小文吾にうち對て、迭に苦行の甲斐ありて、和殿に環會しかば、俱に石禾にかへりゆきて、犬山に歡せ、又出なほして犬塚們の、三犬士を索ぬべし。といふに小文吾領きて、その議寔にしかるべし。然るにてもいぬる年、墨田川の頭にて、果敢なく別れし犬阪毛野も、亦俺們と同因同果の、過世あらん歟、料りがたかり。那折は緯急にして、俺に等しき痣もやある。又相似たる玉をや持る、と緯問ふ遑なかりしを、思へば今さら遺憾しけれ。倘後々まで緣盡ずば、なほ再會を俟んのみ。と聶聶く閑談に、夏の日ながらけふばかり、短しと思ふ横日影、下哺になりにけり。浩處に次團太は、遽しく走り來つ、二犬士にうち對ひて、目今片貝なる御別館より、執事の老臣、稻戸津衞由充大人の使者として、荻野井三郎と名告れる一個の若黨、雜兵十名あまり從へて、轎子二挺を吊しつゝ、客人達の迎として、光臨のよし鄉長より、告知されて候也。快々准備をし給へかし。といふを二犬士は聞あへず、そは又要なき事にこそ。俺們は初より、異姓の兄弟多くあり。相別れしより往方を知らぬも、なほ兩三名あるなれば、尋あはまく欲する折也。何の求る所ありて、領主の執事に對面せんや。宜く推辭給はるべし。といふ辭いまだ訖らず、件の荻野井三郎は、鄉長に案內をさして、みづからこゝに來にければ、二犬士は已ことを得ず、出て荻野井に對面す。登時荻野井三郎は、執事由充の使

として、迎に來つる口狀を、いと慇懃に演るものから、二犬士は初のごとく、辭ひて承も引ざりしを、三郎聽かず推返して、その義は左まれ右もあれ、こは由充が私の、使には候はず。領主長尾殿のおん母君、簸の大刀自御前の內命にて、饗應の義を奉りたる、猛の准備も候へば、姑く時宜に從ひて、那首に赴き給はんこそ、公私の歡びなるべけれ。今さら辭退に及んや。といふに二犬士は推辭難て、しかりとも俺們は、行裝のみにて禮服なし。明日衣裳を整へて、是より推參致すべし。といふを三郎聞あへず、その義も由充豫より、思はざるにあらざれば、おん袴を齎したり。と應て後方を見かへれば、兩個の雜兵こゝろ得て、精好の袴二領を、柳箱の蓋にうち載て、恭〳〵しくもて來つつ、いざとて二犬士に贈るにぞ、莊介も小文吾も、恁までに懇切なる、那老臣の招待を、返すは無禮なるべし、と思へば先その歡びを、述て聊退きて、俱に件の袴を穿て、刀を引提て立出れば、三郎は轎子二挺を、檐下に舁寄さして、快々乘せ給へ。といひしを、二犬士は從はず、俺們は千里獨行、旅より旅に熟たるもの也。然ばかりもなき路の程を、這轎子は要なしとて、歩よりゆかんとしたれども、三郎は又云々と、鷹めて小文吾莊介を、轎子にうち乘しつ、轎夫們が前後齊一、擡起し、舁出せば、雜兵左右に從ひて、片貝を投ていそぎけり。當下荻野井三郎は、生拘の小賊、溺六穴八兩名は、綱めたる儘徒に乘して、跡より稻戸殿へ將て來よとて、雜兵四五名遣し置て、その身は廳て轎子の、後に跟つゝかへりゆく程に、途にして日は暮けり。恁而莊介小文吾は、片貝に到りし時、那別館の門前にて轎子を立出て、引れて、老臣稻戸津衞の、宿所にぞ赴きける。津衞は大家の冢宰にて、威權あるべきものなれば、宅地はいと廣やかにて、從類も尠からず。老僕若黨三四名、手燭を秉て二犬士を、玄關に出迎へて、そが儘書院へ案內をしけり。看茶の禮訖りし時、稻戸津衞由充は、荻野井三郎を從へて、出て二犬士に對面して、その功を褒め武勇を稱へ、且內命のよしを演て、盃を鷹めらる。主客の辭讓言果て、津衞は嘗獻の爲にとて、稍とり抗たる土器を、忽地殿と擲て、寄れや兵們と喚りたる、聲もろ共に廊下なる、幕の陰より顯れ出る、捕手の力士二三十名、走蒐りつ

後より、組むを見かへる莊介小文吾、こは何事ぞ。と驚きながら、搔抓ては投退投退、霎時は俱に挑みしかども、大勢なればものともせず、彌がうへに折累りて、押へて索を掛にけり。畢竟津衞が理不盡に、二犬士を綱めたる、事情は甚麼ぞや。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳 第八輯 卷之二終

南總里見八犬傳　第八輯　卷之三

東都　曲亭主人編次

第七十八回

北母自賞罰を恣にす
東使雙で首級を賜ふ

復說、莊介小文吾の二犬士は、功ありながら賞を得ず、稻戸津衞に謀られて、矢庭に搦捕られしかば、俱に怒れる聲高やかに、蓬きかな執事由充、俺們倘罪あらば、先そのよしを詮議して、禁獄すべき事なるに、一言隻句もその義なく、詐引よせ多勢をもて、手籠にせしは甚麼なる故ぞ。武士に似げなき鄙怯の擧動、その情由聞ん、いかにぞや。と敎圍き罵る勇士の憤激、飢れし鬢髮逆立て、綁縛の索もおのづから、斷ぞしつべき怨の眼光、飛もや寃る、と力士們は、舌を掉ひ縝に怕れて、いよ〳〵索を取縮たり。登時津衞由充は、憶ずも嘆息の、貌を改め恭しく、二犬士にうち對ひて、事情をまだ告ざれば、怨みらるゝは理りながら、こは某の本意にあらず、便是寡君景春のおん母公、箙殿の處分によれり。先やその意を說示さん、怒を治めて听ねかし。抑〳〵寡君景春公に、二箇のおん女弟あり。皆是箙大刀自御前のおん腹にて、御鍾愛淺からず、第一のおん女弟は、武藏州豐嶋郡大塚なる、大石左衞門尉憲儀主（兵衞尉憲重の子）に妻せられて、大塚殿と稱へたり。長尾白石大石小幡は、原憲實管領の四家老にて、共に掎角の勢ひあり。又その次のおん女弟は、おなじ州同郡、石濱の城主なる、千葉介自胤主の內室にて、船場殿と稱らる。寡君はいぬる年より、兩管領（山內扇谷）と不和の後、大石千葉の兩雄も、をさ〳〵志を運れて、當家無二の御方也。これにより五箇年前、和殿門が大塚にて、出場を關せし折、大石殿の家臣なる、鶴木五郎二、[illegible]

を初として、擊れし雜兵、尠からず。剩戶田河の頭にて、陣番丁田町進も、戰歿の聞えあり。その折屬役仁田山晉五が、擊捕にきと風聲ありし、犬士は通て假首級にて、實は力二尺八と喚做したる、俠者兄弟なりけるよしも、當時大石殿よりその報ありて、大刀自御前も知食たり。又只この事のみならず、犬田生はその次の年、石濱の城內にて、且開野とかいひし假少女に、千葉の冢臣馬加大記、その子鞍彌吾、從類まで、悉皆擊れし夜叉、竊に且開野を相資て、俱に逐電したりしよし、這義も亦船場殿より、おん母公へ恁々と、おん消息ありしかば、はやく這里にも聞えたり。爾るに今番和殿們が、小千谷の鄕なる客店にて、酒顚二と喚做たる、夜叉の强盜支黨まで、一箇も漏さず擊捕たる、その絆の趣を、那鄕長が聞えあげたり。恁而件の訴狀を、大刀自御前の欒して、這犬田小文吾といふ浮浪人は、曩に武藏の大塚にて、同惡のもの兩三名と共侶に、大石家の陣番屬役、幾名か射て殺して、額藏とかいふ罪人を、奪去たる癖者也。爾後又石濱にて、馬加大記が擊れし折も、惡少年を相資て、逐電したるものぞかし。又這犬川莊介といふ旅人は、必件の額藏ならん。鄕に大石殿の使として、仁田山晉五が來つる折、那犬士とか唱たる、惡黨の事を諸聞しに、晉五答て、さン候ふ。那罪人額藏は、當日同類の資助によりて、法度を犯して逃亡たる、その後犬川莊介と、姓名を更めて、諸國を徧歷しつるよし、世の風聲に聞えたり。在下が那折に、擊捕たるも同類なれども、犬塚犬飼犬田なンど、喚做すものでは候はず、力二尺八といふ弟兄の、俠客で候ひしを、其頭の穿鑿手の屈かで、梟首の名字相違せしかば、主君の咎を蒙りて、面目を喪ひにき。是よりの後那奴們が、跡見れなば聞えあげて、搦捕まく思へども、今に至りて便りを得ず。いと朽をしく候、といひしを思へば莊介は、額藏なること疑ひなし。恁れば他們が强盜を、擊しはその功なきにあらねど、そは苟且の小事也。縱他們が手を借らずとも、這里より捕手を遣して、搦捕ること難からんや。おもふに莊介小文吾は、その身の盤纏を奪れじとて、奮擊したる當夜の挿き、領主の與にせし事ならねば、非如舊惡あらずとも、賞るに足らぬものぞかし。況五逆の罪人なるを、その義によりて許さんや。速に

召捕て、小文吾は石濱へ、莊助は大塚へ、奉渡し遣して、那首の法度に儘しなば、咱兩箇の愛壻の、家風正しく武藝
耀きて、隣國までも怕れつべし。忽諸にして走らせなば、後悔其首に立がたし。快々准備をせよかし、と亦他事もな
く仰しかば、某諫め稟すやう、御諚では候へども、那額藏とか喚れし小賊は、東人蟇六夫婦の仇なる、籔上軍木を
擊し也。爾るに軍木五倍二は、薄病にして當坐に死なず、その身の私曲を見かへらで、籔上宮六の弟社平、丼に卒川
菴八們と、諜し合しつ額藏を、盜兒也とて誣たるを、陣番丁田町進も、籔上軍木を贔屓により、虐賓いよ〳〵分明なら
ず。この故に額藏は、寃屈の罪に落されて、既に死刑に決りしを、那額藏の義兄弟、犬塚犬飼犬田なンど、喚做す勇士
兩三名、竊にこの義を聞知りて、憤れども訴る、所なければ已ことを得ず、法場を鬧して、必死の友を拯ひし
よし、世の風聲に聞えたり。しからば籔上軍木の黨、丁田さへに擊れしは、奸曲邪智の致す所、自業自得といふべ
き歟。この年御主君大石殿は、在鎌倉なりければ、この義も亦分明ならず。よく玉石を辨ずるものゝ、これなきにも
や候はん。又旦開野といひし女田樂は、犬阪毛野胤智と、呼做す智勇の少年也。他は則千葉の老黨、粟飯原首胤度
が、妾腹の獨子にて、胤度一家讒死の後、相摸州足柄郡、犬阪村にて生れしよし、しる人ありて正可にいへり。然ば
こそあれ犬阪毛野が、馬加一家を擊果せしは、その親の爲、胞兄弟の、爲に怨を復せし也。又那馬加常武は、則千葉
家の逆臣なりしを、當時その事發覺れず、死後に至りていふものあれども、石濱殿（自胤をいふ）は後々まで、知召さ
ずやおはすらん。下情多くは上に通せず、左右に藏を造るの故歟。譬ば月の明なるも、浮雲これを掩ふが如し。矧や
犬田小文吾が、石濱の城に留められしは、馬加大記の奸計にて、これも亦石濱殿の御本意には候はず。恁れば犬田小
文吾が、犬阪毛野の資によりて、那城内を脫去りしは、その身を安くせん爲にて、惡心ありし故にはあらず。臣曩
に關東へ、おん使を奉りて、大塚石濱の兩城内に、四五日逗留したる折、志ある人々の、夜話に初て傳聞たる、
趣は右の如し。この義に據れば那莊介は、舊名額藏也とても、憎せ給ふべきものならず。よりて思ふに小文吾は、

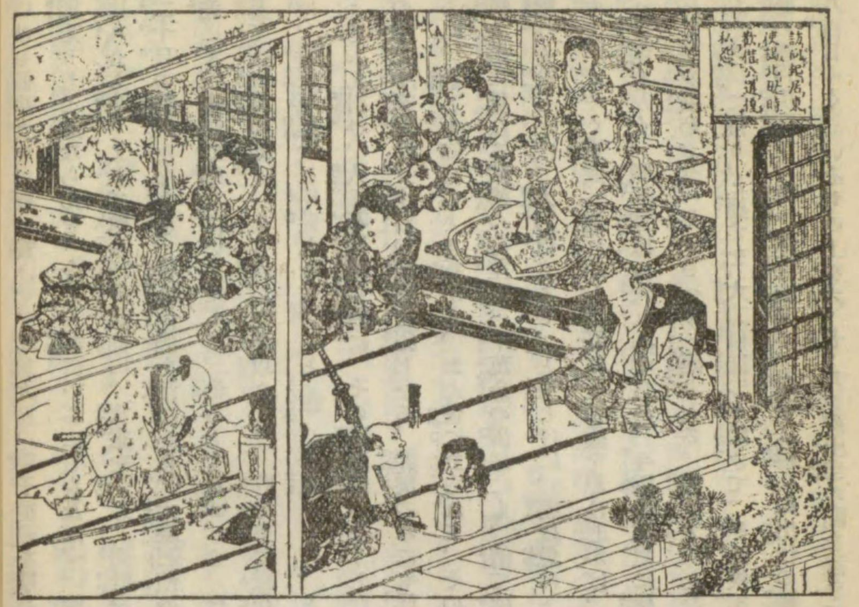
石濱殿に對しまつりて、野心なき事しられたり。臣件の二犬士の、今番衆賊を擊捕たる、武勇の揮きを聞候に、
寔に一人當千なる、豪傑の士ならん。願ふは禮を厚くして、はやく高祿を宛行れ、留めて御家臣になし給はゞ、
他們も亦恩を感じて、忠義の爲には死をだも辭せず、堅を破り鋭を劈く、軍功なくばあるべからず。然るときは是公
私の大幸、當家の重寶このうへなし。最憚あることながら、千慮も一失なきにあらねば、只穩便のおん沙汰こそ、
あらまく欲しう候へ。と辭を盡し理を演て、直言數刻に及びしかども、良藥口に苦しといひけん、譬喩はこれ歟。大
刀自御前は、聞も果さず御氣色變りて、曲彔掻遣り仡と睨へて、やをれ由充何とかいふ。女流の主ぞと侮りて歟、指
揮がましき似而非談義、然ばかりの事知ざらんや。縱莊介小文吾們は、素より惡意なきもの也とも、法度を犯し、有
司を害して、法場を鬧せしを、なほその罪にあらずとて、允さば今より下として、上を犯さぬものもなく、律令立
ず法度廢れて、國治る時なかるべし。俺身女流にあなれども、武威東北に揭焉く、兩管領にも憚らるゝ、長尾景春
が母ぞかし。今景春は東國に在り。俺兒の留守を預りながら、大石千葉の女壻達の、與に罪人を捕捉ずば、州民是よ
り侮りて、景春の武威衰へん。恩祿その身に不足もなき、主君にだも思ひ易て、那罪人們を最惜まば、由充汝は不忠
の臣也。不忠の臣は誅すべし。然でも拒む歟、諫る歟、いかにぞや、と敦圉きて、おん臂近に措れたる、護身刀を拿抗
て、勢ひ烈しく見えさせ給へば、諫めて聽れぬ女儀の臆斷、爭ひまうすは益なし、と思ひかへしつ些も騷がず、稍平
伏たる頭を擡げて、然までに御召ならば、又何事をか稟すべき。御諚に儘して二犬士を、搦捕てまゐらせん。さばれ
莊介小文吾は、萬夫無當の勇士也。大勢をもてうち向ふとも、擊るゝもの多かるべし。この義はいかゞ仕らん、と
稟せば大刀自沈吟して、智者の千慮も哄すに術なし。他們が衆賊を擊捕たる功を賞め招寄せて、帷幕の内に力士を伏
置き、不意に起て拉がば、捕捕ること易からん。努勿洩しそ、よくせよ、と遣る方なく示させ給へば、某これを
奉り、宿所に退り手配りして、儀のごとくに謀りたり。大刀自御前は御こゝろ雄々しく、封内の訴訟を、听つゝ政

事給へば、今に初ぬことながら、這義におきては、その理に稱はず。宜き沙汰とは思はねども、某その家臣として、君を蔑する方なければ、非法と知りつゝ詭りの計を行ひにき。景春當所に在しなば、絆恁までにおよばんや。俺が諫言をも容られて、罪もなき勇士を誅する、誹謗を免れ給はんに、合期せざるは各位の、只是幸なきのみならず、當家の與にも不幸也。這里より密使をまゐらせて、よしを主君に告稟すとも、景春はおん母君に、大孝行にましませば、今さらに這議を制めて、各位を助よ、と仰すべうもあらずかし。左ても右ても勇士の微運、救ふに由もなかりける、大厄難を爭何せん。只是までの命運なりき、と思ひ諦め給ひてよ。と理り迫ても良臣の、慰め難し理非明辨、多く得がたき心操を、俱にうち聞く二犬士は、恨みも解けて今さらに、嘆息の外なかりけり。姑して莊介は、小文吾を見かへりて、犬田は何と思ひ給ふぞ。簸殿の讞斷は、公道ならず聞ゆれども、婦人に稀なる勇敢智計、この年來長尾殿の、鋒さき强しと世の風聲も、搗鬼にはあらざりけり。それにも優て有がたき、執事の忠信、理義明亮、感ずるになほ餘りあり。武士は己を知るものゝ、爲にこそ死ぬべけれ。俺們既に執事に知られて、その罪にあらざるよしを、いひ解れても聽れざりしは、便是天なり命なり。又何事をか爭ふべき。死を俟の外あらずかし。といへば小文吾點頭て、いはるゝ趣寔に爾也。俺們不幸薄命にて、往ところとして奸人の、爲に這身を危うせられて、一ト日も安きことを得ず。犬阪毛野を除くの外は、纔に這里に執事あり。今善人の手に死なば、是切てもの事ながら、憾る所は犬塚犬飼、兩個の義兄弟に環りもあはず。且親兵衞と曳手單節が、存亡さへに知るよしもなく、犬山生にも再會せで、刀下の鬼とならんこと、過世甚麼なる業報なりけん、心にかゝらざるにあらねど、然とて歎くは愚痴なるべし。覺期極めて候は。と答て俱に臆する色なく、由充にうち對ひて、言をわけたる敎諭の趣、具に承知仕りぬ。十室の邑にも忠信あり。執事は得がたき知己なるかな。豫より俺們が、與に寃枉を糺れても、その甲斐なくば今さらに、又怨むべき由もなし。はやく頭を刎給ひね。不測の値偶にて候ひき。と齊一答てふたゝびいはず、共に眼を閉て

をり。由充これをうち聞て、嗟嘆に堪ず左見右見て、逋徵妙き勇士の覺期、世に志氣あるものは、詎も恁こそありたけれ。今示せしは俺が私の、密談なるを洩し給ふな。權且その身を禁獄して、重て上の御沙汰に依らん。逢見ることもけふ初て、けふを限りの別とならん。惜むべし〳〵。と繰返しつゝ、後方に侍し、荻野井三郎を見返りて、罪人莊介小文吾は、霎時一室に閉籠置て、この曉がたに俺身みづから、獄舍へ送り遣さん。和郎は夥兵們共侶に、緊しく那身を戍るべし、と最嚴に吩咐て、腹心の夥兵兩三名を、留めて二犬士をうち戍らせ、その餘の力士は要なしとて、身の暇を取せしかば、大家退り出にけり。却說その詰朝、稻戸津衞由充は、毎のごとく出仕して、則簸大刀自に、昨夜二犬士を搦捕て、獄舍に繫し置たるよしを、具に聞えあげしかば、大刀自歡び斜ならず。その手配を稱へ、功を譽て、しからば件の罪人們は、生拘たる儘大塚と、石濱の城へ牽し遣して、那首で刑罰致させん、とは思へども路遠ければ、そも又容易に做しがたかり。加以先度のごとく、又同類が聞しりて、途にて奪取ることあらば、外聞實義を喪はん。這里にてはやく誅戮して、首級を兩所へ遣すべし。快々首を刎させよ。と火急の下知に由充は、些も推辭氣色なく、仰うけばり奉りぬ。首級にして餽らせ給ふ、おん計ひはいと愛たし。しかれども正五九月は、異邦唐の武德年より、佛者の說に因循せられて、屠殺を禁ずるよしあれば、罪人を誅戮せず。當家もこの義に從ひ給ひて、約這三箇月は、御先代より死刑のものを、誅させ給ひし事候はず。今は五月に候へば、次の月まで俟せ給へ。緊しく禁獄せしものなれば、何時まで置せ給ふとも、逃去ることは克ひがたかり。霎時の障りに候かし。と稟すを大刀自うち聞て、寔にその義を忘れたり。然ば且く俟んのみ。折々獄舍をうち巡りて、をさ〳〵非常を箴めよ。と遣す曲なき老夫人の、指揮に從ふ由充は、こゝろ得果てぞ退出ける。是よりの後由充は、みづから獄舍をうち巡りて、罪人の病著あるには、藥を與などしたる、そが中に二犬士をば、殊更に憐みて、獄卒們を箴ければ、莊介も小文吾も、初よりして呵責を受ず、三たびの食も物足りて、死囚牢にはあなれども、他の罪人と一所に措れず、苦しと思ふ事は

なけれど、獄舍に入りしその日より、兩人共に醉嘎れて、ものいふことのならざれば、その身はさら也、獄卒們も、病痾の所爲歟、と思ふにぞ、よしを執事に聞えあげて、醫師を招き、湯劑を與へて、將息等閑なかりしかども、藥餌の效驗あることなく、いよ〳〵醉は立ざりけり。左右する程に五月は過ぎて、北國も三伏の、暑熱に勝ずなりにけり。時に關東なる女壻達より、暑中訪問の使者到來して、岳母簸大刀自へ、各々土宜の人情あり。大塚なる大石家より、今番の使者に立られしは、曩に戸田河の水中にて、力二尺八に擊れたる、陣番丁田町進の弟と聞えし、丁田畔五郎豐實と喚做すもの也。又石濱なる千葉家の使者は、馬加大記常武の妻戸牧の姪なる、馬加蠅六郎鄕武にぞありける。鄕武原は千原氏にて、自胤の扈從なりけるを、常武一家擊れし後、才に由緣のものとては、只這壯佼のみなりければ、軈て常武の苗迹に立られて、馬加氏を冒さしめ、那祿半分を給はりて、近習頭になされけり。當時常武の歿後に及て、その逆意ありけるよしを、稟すものなきにあらねど、他と一味のもの多かれば、今さらに馬加の、苗迹を立給はずば、孝胤主に笑れ給はん。御沙汰を願ひ奉る。と頻りに傾け稟せしかば、自胤遂に已ことを得ず、老臣們と評議の後、千原蠅六郎鄕武を、卽便常武の迹として、その格式を升されたり。那常武は下總なる、千葉孝胤の近習なりしに、主に叛きしことありて、走りて石濱の城に來つ、千葉の城の爲體を、詳に演說して、仕へんことを乞稟せしかば、漸々に寵用せられて、竟に權臣になりたる也。然ば件の奸黨が、その苗迹を絕給はゞ、孝胤主に笑れん、と稟せしはかゝる故也。現小人は過を、飾るをもて賢とす。自胤是非の間に惑ひて、その佞辯を受容たる、智略もさこそと知るべきのみ。閒話休題、爾程に簸大刀自は、大塚石濱兩所の使者、丁田畔五郎豐實と、馬加蠅六郎鄕武を、身邊近く召寄て、兩個の息女達よりまゐらせ給ひし、消息を欝して、那里の安否を諮などしつ、却犬川莊介と、犬田小文吾を搦捕たる、緯の趣箇樣々々と、遺もなく說示して、那莊介は大塚なる、莊官蟇六とやらんが惡僕にて、こよなき罪人なるよしは、畔五郎も知りてぞあらん。小文吾はそが同類にて、件の額藏を奪とりしも、又旦開野とか

いひし假少女を、竊に資けて、馬加大記、親子從類を擊せしも、他が所爲と聞えたり。この義は當日蠅六郎が、見も聞もせしことならんを、今さら具にいふにしも及ばず。爾るに他們が連立て、這地に來つるは天の冥罰、みづから網に入りし也。よりて執事稻戸津衞に、密意を示し、奇計を旋らし、搦捕して最緊しく、獄舍に繫せたりけるは、前月二十日の曉がたなりき、豫は他們を活ながら、大塚石濱の兩城內へ、牽遞與さんと思ひしかども、路遠かるに倘中途にて、事いで來なばいかにして、悔るとも及ぶべき。はやく首を刎さして、首級を餽るに優ることあらじ、と尋思を易ても五月の間は、そも做がたき以あれば、昨今まで默止したる、折から汝達が主の使として、恁同日に來にけるは、時日を延せし甲斐ありて、いと歡しう思ふなれ。といはれて勇む豐實鄕武、おもはず俱に雀躍して、そは有がたきおん計ひ、大塚石濱兩主君に、その義を傳へまうしなば、さこそ歡び給ふべけれ。烏滸がましうは候へども、件の額藏小文吾は、主君の法度を犯したる、罪戾のみにも候はず、在下們が先代の、與にも共に這すまじき、讐敵で候ふに、然とも知らでよき折から、おん使に立られて、その首級を給はらば、面を起す奇妙の家裏、今に初ぬ事ながら、御女儀に稀なる武邊の御差配、千萬金の御恩にも、倍て感戴仕りぬ。寔に珍重々々と、稱へて齊一額をつきて、その歡びを演しかば、大刀自さこそ、と笑しげに、善は急げと世話にもいへば、汝達は太義ながら、翌の朝開に當所を退りて、はやく東武へ還れかし。旣にその義を思ひしかば、稻戸津衞にこゝろ得さして、那罪人們を誅せよ、と吩咐たれば程もなく、頭顱實檢に入れんずらめ。今霎時這里に侍りて、津衞がまゐるを等ねかし。と留て軈て左右なる、女房に茶を看めさせ、果子さへ齊一賜りたる、恩爨大かたならざりけり。浩處に一個の女房、目今津衞が出仕して、おん次房に侍り、と稟すを、大刀自聞つゝ頷きて、そは俟不樂たり。快召ね。と仰に恁と喚續の、濱ならなくに立浪や、衞の襖戸引開て、稻戸津衞由充が、生平に替らぬ出仕の禮服、肩衣袴の飛驒信濃、越後に名高る良智の人品、年の齡は八百日ゆく、いそぢの上を六ッ七ッ八ッの土圭の間を過ぎて、おん前遙に伺候せしを、大刀自招き近づけて、津衞歟。鄕



に吩咐たる、莊介小文吾を誅せし歟。折もよく東武なる、兩個の壻達の使到著は、思ふに倍て便宜なれ、件の首級を齎して、遣さば好家裏ならん。快實檢に入れよかし。といそがされても爾氣なく、さん候。仰に儘して犬川莊介、犬田小文吾兩名は、獄舍より牽出さして、既に誅戮仕りぬ。然ば首級を御覽に入れん。と應て後方を見返れば、次房に侍りたる、兩三個の童扈從が、こゝろ得て俱に携出る、那二犬士の首函に、袱包を拿添て、はや由充の左手のかたに、やをら措てぞ退きける。登時箙大刀自は、件の首函をつら〳〵見て、哺津衞、俺身が今その兩個の首級を、見つればとても豫より、面を認りしものならねば、眞僞は玆に定めがたかり。そは先丁田畔五郎と、馬加蛔六郎に見せよかし。這人々は初より、認りしこともあらんず。といはれてはやくこゝろを得たる、畔五郎豐實は、執事由充にうち對ひ、且その所役を勞ひて、目今御前の仰のごとく、某は五箇年已前、兄町進が額藏を、拷問の折遣際して、闕窺しこと候へば、聊認りて候也。といへば蛔六郎郷武も、亦由充にうち對ひて、

某とても小文吾に、ものいひしことはなけれども、先代大記が宿所にて、那假少女旦開野が歌儛たる當晩、小文吾も席上に、在りしを、閃と見し事あり。遽外にして夜視ながら、今も忘れず候ぞや。といへば由充微笑て、そは最宜き證人也。爾ば各内覽して、眞僞をまうしあげ給ひね。と答て兩箇の首函を、誘とてゑが儘差寄すれば、豐實は犬川莊介と、牌付たるを受取りつ。郷武は小文吾の、首函引よせ共侶に、蓋を搔遣り、左見右見て、寔に是は記憶ある、那莊介に疑ひなし。(句)是は正しく犬田小文吾、(句)眉毛鼻梁年歳まで、(句)曩に見たると些も違はず、(句)畔五郎殿、(句)蛔六殿、(句)御邊も、(句)咱們も、(句)鑒定に、(句)錯誤はなけれども、同是證據になるべき、這們が所持の東西あらば、東武へ還りて披露の折、いよ〳〵便宜に候はん。(句)然樣々々愚意も同前、(句)やよ稻戸殿、(句)這ふたりの行裏に、見つべき東西は候はずや。と問へば由充傍なる、袱包をうち開きて、然也莊介も小文吾も、單身逆旅にてありしかば、包裏は有やなしや知らねど、爾る御所望のあらん歟、と思ふによりて携しは則他們が、兩刀也。且見給へ。と拿出しつゝ、遞與すを受取る豐實郷武、是にも付たる紙小牌を、見つゝ迭に彼此と、取つわたしつ共侶に、觀ること約半晌ばかり、郷武おもはず膝うち鳴らして、奇なるかな、這犬川莊介と、牌に寫されし兩刀は、寡君自胤の祕藏し給ひし、小篠落葉の大小刀に、表裝寸尺些も違はず。今より十七八年の昔なる、寛正六年の冬十一月、栗飯原首胤度が、籠山逸東太に擊れし折、その中途に盜兒あり、嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、奪去にき、と聞えたり。當年は某の、十四五歳の冬にして、童扈從でありければ、這兩刀の名刀を、幾番となく目にも見つゝ、手にも觸たるよしあれば、今に至て忘るゝことなし。但刀尖に些の疵あり。この義は記憶候はねども、這小篠落葉の兩刀は、千葉家相傳の東西にはあらず。寛正四五年の比にやありけん、件の栗飯原胤度が、鎌倉に使せし折、那地にて購求めて、寡君にまゐらせたり。これをもて人を砍るときは、秋ならずともその四下なる、木の葉おのづから落ることあり。譬ば那村雨の名刀の、拔けばその刀尖より、水氣出るといふに似たれば、小篠落葉と名けらる。

小篠は則刀の甑に、是金の雪篠あり。落葉は件の奇特によれり、といふ人も候ひしを、錺してみたる事なければ、奇特の事は安定ならねど、その他は證迹分明也。おもふに額藏の莊介は、這兩刀を竊取たる、那盜賊の子にもやありけん。首級と共に賜りて、石濱殿（自胤をいふ）にまゐらせなば、さぞな感悅し給ふらめ。いと有がたきことなりき。と來歷を演說しつゝ、はや上坐にうち對ひて、その歡びを稟すにぞ、豐實も亦小文吾の、兩刀を拿抗て、含笑ながら後方なる、由充を見かへりて、執事これを知り給へる歟。御前這刀を鑒せ。こは曩に小文吾們が、額藏の莊介を、奪略て逃亡せし折、他們が爲に擊れたる、簸上社平が大刀にこそ候へ。表裝總て初にかはらず、鞘は銀の巴蛇にて、鍔に上字の間彫ある。在下當年件の社平と、職分同僚なりしかば、是生平に見る所、紛ふべうも候はず。是も亦小文吾們が、那折に竊取て、年來腰に帶たるならん。給といひ恰と云、恁まで正しき證據はなし。大刀をも稟賜りて、披露に及ばゝ主君の歡び、このうへや候べき。いかで御許容あれかし。とこゝろ得貞に請稟せば、簸大刀自領きて、此彼共に腰刀さへ、舊の主さへ正可に知られて、出處分明ならんには、贓物たること疑ひなし。そが中にも、莊介が兩刀は、自胤主の祕藏せられし、東西とし聞けば不測の會計、首級と俱に三口の刀を、大塚石濱の兩城内へ、遣さんこと勿論也。津衞も這議をこゝろ得よ。と指敎に由充額をつきて、仰うけ給はり候ひぬ。思ふに倍たる三口の刀の、來歷こゝに見れしは、恐ながら壻君達へ、御深志いよ〳〵屆せられて、最も愛たく候べし。首級は溽暑の比なれば、小瓶に斂め酒に浸して、遞與さば腐爛るべからず。倘道中にて那同類の、奪取んと欲することの、是あるべき歟、料りがたかり。但用心に如ことなし。といひつゝ傍を見かへれば、豐實鄕武眼を睜りて、その義は心安かるべし。縱同類の聞知りて、跟覘ふとも俺們兩人、こゝろを合して守護做ときは、いかにして〳〵、指でもさゝすることはなし。といふを由充推返して、そはその該の事ながら、盜兒の間はあれども、戍人の隙なしといふ、鄙語も候へば、倘愚意に由るときは、各位の具足櫃なる、鎧の胴に首級の小瓶を、重匣にして從者に持し給はゞ、詎か莊介

小文吾の、頸なるよしを知るものあらんや。これ未然の禍を、防ぐ用心なるべけれ。といはれて豐實鄕武は、有理と思ふを爾氣なく、俺們も亦恁せん、と思ひしかどもまだいはで、助言を受るに似たれども、そは左も右も仕らん。然のみ苦勞にし給ふな。と輸惜みたる不減口を、由充は爭はず、又大刀自に稟すやう、畔五郎も、蠅六郎も、御媚者の使者で候へば、首級も大刀も顧ひの隨意、遞與して還し給ふとも、けしうはあらぬ事ながら、一個の副使を立られて、俱に東武へ遣し給はゞ、壻君達のおん返答も、はやく聞えて便宜なるべし。賢慮いかゞ。と問まうせば、大刀自屢頷きて、厥々それもよかゝめれ。什麼詎を遣すべき。甲か乙かと問れたる、由充頭を傾けて、此彼と擇み給はんより、臣に隷させ給ひたる、荻野井三郎宜しからん歟。他は莊介小文吾が、旅宿に赴き詭計りて、將て來つるものなれば、那顚末を具に知れり。然ば大塚石濱にて、問せ給ふことあらん折、おん答に委みなく、具に聞えあぐべきもの、他ならでは候はず。と稟せば大刀自又頷きて、現荻野井三郎は、執事隷の若黨なれども、津衞が妻の弟也、と聞たることもあるぞかし。然るこゝろを得しものならば、副使として遣さん。翌は未明に首途の、准備をさせよ。と急して、却豐實と鄕武には、歸東の暇を給ひしかば、僉共侶に言承しつゝ、うち連立て退出けり。

第七十九回

家廟に齋して良臣異刀を返す
茶店に憩ふて奸侯落葉を試す

話表石龜屋次團太は、小文吾莊介の二犬士の、片貝へ招待せられしかば、饗應賞祿然ぞあらん、と思ふによりて掛念せず、一日二日と歷る程に、忽地風聲耳に入りて、那二犬士はその夜艾、執事由充の宿所にて、許多の力士に搦捕れて、既に禁獄せられしよしを、報るものさへありしかば、駭きながらなほ疑ひて、實事ならじと思ふにぞ、軈て片貝に走りゆきて、此彼と探問けるに、その事果して搗鬼ならず、件の莊介小文吾は、大塚の大石殿と、石濱なる千葉殿に、舊惡あるものなるよしにて、片貝殿（簸大刀自をいふ）の憎ませ給ひて、壻君達のおん與に、恁地祟あり。性

命有ちがたかるべし、といはざる者もなかりしかば、いよ〳〵驚きます〳〵憂ひて、その曛昏にかへり來つ、妻の鳴呼善によしを報て、土丈二鯽三いへばさら也、子品子儀を僉召聚へて、那二犬士を救ひとるべき、衆議を凝らし、便直を旋らし、是よりの後密々に、執事の家に便りを求めて、若黨荻野井三郎們、その方ざまなる屬役にも、人情を多くしつ、小文吾莊介が罪過の讞斷を、輕くせられんことをのみ、只管に憑みしかども、執事稻戸由充は、その心ざま正くて、萬事に私あることなければ、次團太が人情を、叱り退けて些も受ず、これにより荻野井們の屬役も、各よくその職を守て、賄賂の路を斷ければ、次團太が准備相違して、徒事となるものから、切て獄舍へ食餌を蝕りて、二犬士に鷹んとて、又その准備をしたれども、莊介と小文吾は、死囚牢とか名けたる、緊しき獄舍に繫れたれば、親子妻妾たりといふとも、食餌を遣すこと稱はず。況親しく對面は、夢にも許されがたければ、次團太竟に術計竭て、獨頻りに焦燥のみ。思ふにも似ず日屬を經たる、六月の某の日に、那二犬士は首を刎られ、折から武藏の大塚と、石濱より來つる兩個のおん使、丁田畔五郎豐實、馬加蠅六郎鄕武と喚做すものに、執事の若黨荻野井三郎を副られて、件の首級を大石千葉の、兩家へ贈遣さる。よりて丁田馬加は、荻野井と共侶に、きのふ片貝を辭し去て、既に歸東に赴きぬ、と報るもののありしかば、次團太驚き且うち歎きて、然るにても那二犬士は、武藝勇力心術まで、世に又儔多からぬ、俊傑と覺るに、功ありながら賞を得ず、賸領主の嫺者の興に、舊罪科あればとて、雙て首を刎られし、片貝殿のおん計ひは、執念深き女儀の僻事ならん。好遮莫兩所の使者の、迹を跟、趕蒐て、いかで首級を奪取て、死後の恥辱を雪ずば、俺豈俠者といはれんや。要こそあれ、と深念をしつゝ、土丈二鯽三們幾名歟、腹心の壯佼を、猛可に聚合謀し合して、大塚石濱兩所の使者の、去向を尋ね趕擊して、首級を奪んと議する程に、忽地障る事いで來て、本日を空に消せしかば、既にして二日後れたり。且火家にも異同ありて、衆議亦一決せざりしかば、密謀寛に整はで、おもふにも似ずなりにけり。案下某生再說、稻戸津衞由充は、大石千葉兩家の使者の、荻野井

三郎と連立て、伴當を將て東路へ、辭し去りしその夜丈、志念すよしあればとて、妻子も奴婢をも皆睡らして、獨家廟に龕居つ、更闌るまで看經の、聲蕭然に聞えけり。抑由充が家廟の下壇には、方一間の板席あり。又その下は土窖にて、深六尺許なるべし。重篋をもて造りしかば、些も水氣入ることなし。こは急火災あらんとき、佛器を斂る爲にして、生平に開かぬ所にあなれば、外より出入るものはさら也。妻子の外は奴婢們だも、これを知るもの稀也けり。間話休題。然ば由充はこの夜丈、丑三の頃及に、闔宅のものの咸、熟睡したるを覘知りて、竊に件の板席を、推抗つ拿除きて、框をほとほとと敲きしかば、暗號なるべし土窖より、階子を登り推續きて、兩個の壯佼出にけり、是則別人ならず、犬川莊介義任と、犬田小文吾悌順也。看官、莊介小文吾は、既に死刑に行れて、首級を東武へ齎せしに、今又這里にその人あり、そをいかにぞ、と原るに、由充は初より、這二犬士の義氣胆勇、その進止を見て猜するに、非道を做すべきものにあらず。曩に武藏に在りし時、郡群小に憎れて、領主の法度を犯せしは、是已ことを得ざるの故にて、その罪にあらざる也。救ばや、と思ひしかば、辭を盡し理を推て、箙大刀自を諫めしに、用ひられねば是非に及ばず、莊介小文吾を誑引よせ、矢庭に搦捕せしを、なほ獄舍へは遣はさず、そが儘一室に閉籠置て、なほ又思慮を旋すに、今朝二犬士の生拘たる、酒顚二が手下と聞えし、溷六穴八と喚做す小嘍囉は、その面影さへ、身丈年庚、總て莊介小文吾に、毫も違はずよく肖たれば、竊に件の兩賊に、藥を飲し聲を嗄して、却二犬士の單衣を、被せてその曉がたに、死囚牢へ遣したり。こゝをもて獄卒們は、溷六と穴八を、二犬士也と思はぬもなく、爾も溷六穴八は、詰旦より啣も、ものいふことを得ざりしかば、只是病痾の所爲ならんとて、藥を乞ふて飲せしかども、その聲いよ〳〵嗄果て、馬脚を露す破綻なければ、眞僞を知るものなかりけり。恁而六月の中浣に至りて、大石千葉の使なる、豐實と鄕武が、各主君の使として、同日に來にければ、大刀自則由充に、二犬士を斬れと下知せしを、由充は辭はずして、軺て溷六穴八を、獄舍より牽出さして、卽便頸を刎てけり。只この機密を知りたるもの

は、若黨荻野井三郎と、腹心の老兵們、兩三名に過ざれども、ムにすら誓書を寫して、緊しく口を鉗しかば、後々までも洩ざりけり。然けれども由充は、那豐實と郷武が、疑ふことのあらん歟、と思ふによりて莊介と、小文吾が兩刀を、添て實檢に備へしに、豈憶んや、莊介が腰刀は、昔年粟飯原胤度が、籠山緣連に擊れし折、並四郎と船虫が、馬加大記の密意を稟て、奪略て逃亡たる、小篠落葉の名刀也。又小文吾が帶たる刀は、庚申塚の法場にて、犬飼現八が分捕したる、簸上社平が大刀なりき。現八これを莊介に與へしに、莊介は親の記なる、雪篠の刀（卽小篠落葉の兩刀なり）を得たりしかば、則これを信乃に讓りぬ。爾後五犬士（信乃、道節、莊介、現八、小文吾）、小集して、又荒芽山を立退く折、信乃亦これを小文吾に、贈與たりしより、小文吾これを腰に放さず、その身を搦捕られし夜丈、莊介が兩刀と、共に由充の手に落て、絆のこゝに及べる也。然とは知らぬ豐實も、郷武も件の刀に、各記憶あるをもて些も狐疑の心なく、那假首級を眞として、その鑑定に誇りしかば、由充は謀る所、十二分に行れて、犬川犬田の兩勇士は、萬死を出て、一生を保ちて還首に躱れてをり。こは由充が賢を愛して、竊にその君の非を補ひたる、誠心の致す所、いはでもしるきことながら、由充は初より、家廟に供ずる茶頭飯菜、及裝物の果子までも、日毎に密內へ餽下して、よく二犬士を養ひければ、莊介も小文吾も、三十餘日に及ぶまで、饑ることなかりけり。只這勦りのみならず、土窖には席を重布て、火盤あり茶器もあり、炭は折々袋に斂しを、密々に餽りしかば、二犬士は稍久しく、土中に在りて地氣を受ず。爾も盛暑の折なれば、土中は倒清涼にて、暑熱を忘るゝ可なれば、些も恙あることなく、安らかに身を有ちたり。こは是作者の自註にて、莊介小文吾が死して復、世に見るゝ禍福凶吉、說くこと都て右の如し。看官善惡應報の、違ざりしをおもふべし。間話已訖。紹劃說、莊介小文吾は、俱に害內より出て、由充にうち對ひて、舍藏の恩、再生の、歡びを演しかば、由充聲を密まして、假首級の事、豐實郷武が事、那條の首尾箇樣々々と、遺もなく說示して、今はしも心安かれ。大石千葉家の兩東使は、鎧櫃に首級を藏めて、けふ曉がたに立去

りにき。去向は信濃路なるべきに、御邊們も潛出て、快投かたへ赴き給へ。抑今番某が、祕計は御邊們の興のみならず、俺が老夫人のおん僻事を、竊にこゝに補ひて、辜なき勇士を殺さじ、と逆おもふによりて也。昔者唐山、東海の孝女の如きも、寃枉に誅戮せられて、三稔旱魃の祟あり。然ばこそあれ賢を寃げ、辜なきを殺すときに、天神地祇、俱に怒りてその國に、禍を降すこと、和漢に先蹤最多かり。今さら數るに遑なかるべし。某這義を思ふによりて、竊に御邊們を救ひしを、知らで他人に厚くして、主君には忠ならず、と後世評するものもあらん歟。そは由充を知るものならず。只是賢を寃げず、その辜なきを殺さずして、君の過を補ふを、忠ともいはめ、義ともいふべし。是某が職分なれば、俺が私を行ふて、公道を喪はず。爾るに疑惑の一條あり。犬田生の腰刀は、大石殿の家臣なりし、簸上社平の大刀なるよし、丁田畔五郎豐實が、認りて恁々といへる也。そは那社平を擊れし折、分捕したるにあらんずらん、と猜することは猜せしかども、犬川生の兩刀は、昔年千葉の家臣と聞えし、粟飯原首胤度が、籠山逸東太の爲に枉死の折、盜兒ありて竊去たる、自胤主の祕藏の副佩、小篠落葉と名けられたる、その大小の刀なるよし。又是馬加蟲六郎郷武がよく認りて、その來歷を正可にいへり。勿論重代の東西にはあらず、今より十八九年已前、胤度が鎌倉にて、購求めて自胤へ、まゐらせしよしその義もいひにき。犬川生はそをいかにして、今まで腰に跨給ひしぞ。什麼傳來を聞まほし。と問れて莊介、さン候。晩生が兩刀は、亡父犬川衞士則任が記也。父は則伊豆人にて、堀越御所の莊官なりしに、諫書を奉りたる、おん咎により自殺しつ、贓て家財を籍られて、常日沒官せられしとぞ。その折件の兩刀も、那籍の內中にありて、官物になりにき、と爾後母のいはれしを、小耳に留めて記憶たり。父が枉死は晩生が、五六歲の時なりしを、七歲になりける冬の比、母は旅宿に世を去りしかば、晩生は大塚なる、莊官蟇六の小厮にせられて、年來那家に仕へたり。よりて東人蟇六夫婦の、仇たる簸上宮六を、擊果せしにより、禁獄せられて、首を刎られんとしたる折、犬田をはじめ異姓の兄弟、甲乙に拯取られて、死なざることを得

たりける。その折俺身に寸鐵なければ、犬塚信乃戌孝が、晩生にとて讓られし。兩刀は父の遺愛にて、寸尺表裝、家の紋、刀尖に些の疵ありし迄、豫聞しに違はねば、歡び受て五箇年來、一日も腰に跨ぬことなし。その間なる傳來は、這犬田こそよく知りたれ。といひつゝ傍を見かへれば、小文吾も亦膝を找めて、執事聞給ひねかし。六七箇年已前、小生舊里にありし時、坊賈の手より十五金に、購得たる兩刀ありしを、親の意に稱はねば、そが儘に祕措きしに、犬塚犬飼が流寓て、値偶せし折にその兩刀を、出して信乃に贈りにき。爾後又犬塚が、犬川に贈りたる、絆の趣は方纔莊介の、話說にて分明ならん。といへば莊介沈吟じて、此彼思ひ合するに、晩生が父の遺刀は、昔年沒官せられし後、堀越の御所滅亡の折、何人の手にか傳々て、鎌倉に到りしを、粟飯原首が購求めて、主君へまゐらせたるならん。爾後首が枉死の折、其首に覘ふ賊ありて、竊て人に售けんを、又此彼と傳々て、行德に到りしかば、犬田が購得たる也。資財雜具に常の主なし。賣るものあり、買ものありて、傳々て又故の、主に還るも往々これあり。又怪むに足らざること歟。と迭代に說示せば、由充は耳を澄して、聞くこと約半晌ばかり、只管に感嘆して、逋微妙き刀の傳來、疑惑はこゝに冰解せり。それにも優て一奇事あり。俺が本貫も亦伊豆にて、親は則堀越殿(足利政知)に、仕へたるもの也ければ、犬川生の先君子、とその交り疎からず。某弱冠なりし比より、衞士大人に從ひて、文學を受武藝を做ひし、師弟の恩義も亦深かり。加以某が、年十七八なりし比、繼母の讒により父に逐れて、親族許寓居せし事あり。その折に衞士大人の、父を諫め母を和諭て、召返させ給ひにき。恁る德義の君子なりしに、惜むべし暴君の、非法にその身を措難て、竟に刃に伏給ひたる。その折に某は、親の喪に籠居りしかば、襄事すら一臂の力を、盡さで空に過したる。爾後も又後室御母子の、他鄕へ起立給ひし折、亦俺繼母の身まかりて、憂に丁りし比也ければ、然ともしらで人傳に、程經て聞て最大、遺憾くは思ひしかども、往方をしらねばせんすべも、歎彌倍す君家の斷絶、政知亡させ給ひしかば、某們も亦流浪しつ、些の由緣を心當に、這地に來つゝ幸ひに、淺き文學武藝をも

て、長尾殿に仕しより、漸々に登揚せられて、老夫人に隸られたり。恁舊緣はありながら、世に同苗字の人多ければ、犬川生を衞士大人の、獨子なりとはいまだ曉らず、又那刀を見るといへども、許多の年を歷し事なれば、思ひもいでず。しかはあれど、賢良尙義の兩勇士の、寵柱を憐む爲に、心を盡してその死を救ひし、誠は則求ずして、俺が師に返す舊恩舊義、素懷に愜ふ不勝の歡び、察し給へ。と聶きの、橋ならなくに犬川に、深き情の渡津衞、遭て別て八百日ゆく、越の長濱長からぬ、天や明なんと惜みけり。莊介はつくづくと、聞つゝ坐に感涙の、進む眼包をしばたゝきて、原來執事は拙父の、弟子でをはせしよ。二親の世を去りにし比は、才に寒暑を覺しのみ。その弟子をも朋友をも、聞知りたるはなかりしに、家傳の刀の來歷より、不測に執事の素生さへ、說諦されしは亡親に、再會見る心地して、舊故の情に堪ざりき。然る舊緣のあらずとも、執事の德誼の高きこと、唐山漢の高祖の時、季布を久しく舍藏て、竟には漢の良臣に、做しゝ朱家にも優べきに、錦の上に花を添たる、心操こそ有がたけれ。晩生倘幸に、良主に仕へて、一軍の、大將を奉り、料らずも長尾殿と、鋒を交ることあらば、爲に三舍を退くべし。伊豆には三島箱根權現、當國にては彌彥の、神も捨ずば照覽あれ。這義に背くべからず。と誓ふ勇士の心の誠に、小文吾も亦感激して、小生は只次團太を、俠者なりきと思ひしに、執事は眞の豪傑なるかな。折にあふたる俺身さへ、初に倍して憑しく忝くこそ候なれ。といへば由充額を拊て、二兄の賞美は分に過ぎたり。某いかでか當らんや。就て又一議あり。向にも既に示せし如く、各の兩刀は、首級に添て老夫人の、實檢に備へしに、那豐實と鄕武が、傳來を演ゝ證据の爲に、まうし賜りてもてゆきにき。只返されしは犬田生の、中刀のみにて這里に在り。犬川生の兩刀は、是先考の記ならば、さぞ最惜く思ひ給はん。世の常言にも所藏の寶は、身の差替といふことあり。得失は皆時也、と思ひ諦め給へかし。千萬金の名刀なりとも、命に易る東西やはある。といひつゝ袱に包たる、四口の刀を取出して、這三刀は新刃なれども、鋭味に皆覺あり。願ふはこれを受收めて、跨て縞に立退給へ。亦薄義には候へども、這一包は黃金

十兩、盤纏の爲に贈りまゐらす。いかで笑納し給へかし、這他は某預り置たる。兩個の行裝も這首にあり。こゝろ徐に身裝して、曉かけて出給へ。門戸は夜中不通なれども、曉七鼓より木夾あれば、入るも出るもいと易かり。木夾も亦這首にあり。留別の盃も、甲夜より竊に准備をしたり。酒菜はなくとも復遇がたき、別を惜む寸志にこそ。といひつゝもはや手匣の內より、盃銚子、兩三種の、餚も共に取出して、潛やかにぞ薦めける。登時莊介小文吾は、刀を受て金を取らず。遺る曲なき由充の、心配りの歡びを、丁寧に演訖りて、莊介が又いひけるやう、貴敎のごとく那兩刀は、親の記て候へば、這身と俱に惜けれども、既に人手に渡りては、今さらに詮方なし。倘折を得て那兩刀を、とり復すことあらば、便りに就て這刀を、返しまつらんとこそ思ひ候へ。これすらあるにいかにして、金を賜るよしあらんや。といへば小文吾も亦いふやう、小生們はその裏の內に、貯祿の盤費あり。且小生が腰刀は、簸上社平が大刀なれば、惜むに足らぬ東西ながら、犬川の刀と共に、贓物にせられては、遺恨なきにも候はず。武運竭ずば亦那刀の、手に入ることも候はん。金子は推辭奉る。といふを由充聞あへず、頭を左右にうち掉りて、斷金の交りは、受るも授るも時宜に依るべし。介意ありては後々まで、快らず思はんのみ。枉てこの儘受給ひね。と只管薦めて已ざりければ、二犬士竟に推辭かねて、受戴きつゝ共侶に、行裏にぞ收めける。恁而盃を遣替して、既に數獻に及ぶ程に、鷄鳴忽地曉を、報て別を促すにぞ、由充は潛と立て、緣頰に隱措たる、二藍の背笠、二雙の草鞋を、莊介小文吾に遞與せしかば、二犬士いよ〳〵感佩して、歡びを述別を告て、兩刀を跨、行裏を駄ひ、齊一緣頰に立出つ、草鞋の紐手ばやく締びて、那木夾を右に拿、左に背笠を引提て、庭門より共に出てゆくを、由充は唯々憐々と、無異を祝して目送りけり。爾程に莊介小文吾は、那木夾をもて一二の城戸を、障ることなく出てゆく程に、天はほのぼのと明にけり。こゝに至て野鳥の、籠をはなれし心地して、由充の鴻恩德義を、且感じ且走る程に、兩人竊に相譚ふやう、稻戸執事の慈善にて、兩個の頸を瀆れしとても、武士たるものが兩刀を、仇の爲に奪れて、贓物にせられて

は、死するに劣りし恥辱也。那兩東使丁田豐實、馬加鄕武とかいふ奴は、きのふの朝片貝を、立去りにきと聞たれば、只一宿の遲速也。夜を日に續て趕蒐なば、途にて遭ぬことやはある。伴當共に擊留て、俺們が兩刀を、とり復して後にこそ、甲斐の石禾へ赴くべけれ。他們が去向は信濃路ならん。といはれしこともあるものを、誘いそぐべし、いそがんず。と示合しつ饑たる鷹の、立鳥を見し勢ひにて、齊一走る壯夫が、玉なす汗は六月の、炎暑に撓ぬ血氣の早行、その日は大道（三十六町一里）十五六里を、飛ぶが如くに趕たりける。話分兩頭。信濃路や、岐岨の高峯の雲わきて、ゆくらん人とかへり來る、旅宿は幾夜ふる事の、昔を今に語續ぎ、いひも傳へて夏寒き、諏訪の太湖風渡る、浮寐の鳥と尾を揚らし、羽をも枯して世を不樂つ、世に棄られつ、野ぶせりの、這里に兩個の乞兒あり。路の傍の塘隄の下に、木枝折葺く伏小屋は、穗家の芒歟、門田の蘆歟。水草織做孤簾、筵屛風を合壁、現淺ましき蠬虫の、父とは鳴ず、はゝき木の、帚を拿らで悟貞は、那寒山子拾得に、似て非人とは知られたり。そが中に一個の乞丐の、年齡は四十許、夔の一足にあらねども、故疾なるべし足跛たるを、鎌倉蹇兒と喚做したり。又一人ゝは少年にて、襤褸ながらの夏衣、麻歟生絹歟蟬の羽に、素肌の衣通りし、身の皮膈からざるを、相摸小猴子と號たり。恁而這兩個の乞兒は、這里を徂徠の旅客と、諏訪の祉に詣る人の、袖に乞んと俟程に、這日も既に往還稀なる、土旺半分の日午に、臥疲倦たる鎌倉蹇兒は、筵壁をうち敲きて、やよ喃鄰の相摸小猴子よ、午になりしに東西欲しからずや。けふは朝より幸なくて、貰ひし錢は七八文、餅でも買ふて啖まく思へど、足が立ねば例の如く、里へいぬ折憑むぞや。といへば小猴子は點頭て、そはこゝろ得てをるけれど、尙五六文挿得ねば、豈飯料には足らぬ也。儞は全身肥滿皆腫て、病氣もなく見えながら、腰の立ぬは甚なる故ぞ。角力の怪我歟、蛭兒の神を、祈り過せし祟歟。と問つゝ呵々とうち笑へば、鎌倉蹇兒は舌うち鳴らして、噫又打譚て嬲るなよ。俺も初は鎌倉にて、泔を流せし米町なる、某甲屋の小官人、阿乳母日傘で育られ、懷手してくらしたる、癖が失ねば商賣は、精進物より嫌ひにて、十六七の春秋より、大磯がよひ

化粧阪、鷄蛋の四角と、月の出る、晦知らずの嫖蕩遊樂、五間間口の庫布の、傾くまでに奢りては、使ひも足らず又さらに、賭鈔に耽りて親の東西、他の東西さへ借倒し、身さへ倒して竟には亡命、久離せられて彼此と、一宿寓りの歇舟、ゆく先毎に衝流されて、磯にも著ず、山掙ぎ、箱根で雲介したる折、薄情や便毒を踏出し、骨に滕みて長櫃を、舁れず瘡をかくまでに、歩ぬ二足三文の、錢にも金にも憎れて、坐行乞兒になりたるは、親の罰ぞと思へども、子で子にあらず血をわけし、甲斐こそなけれ汗蝨、汗に糾れたる身の垢脂は、草津へ湯治のかへさより、這里に閑居の山住ひ、伴ふものは簀卷鷹、小猴子と俺と只二名、經讀むすべもしらざれば、心細げに憐愍を、往還の人の袖に乞ふ、行狀仍て件の如し。却又和郎はいかなる故に、宿なしとまでなりにたる。年は二八か、十七歟、升りて十八十九文、擇取にさせても賣かねぬ、容止も醜からず。搨も磨きて美服被せて、人肉經紀宗大に見せたらば、梅孺丸歟、と思ふべく、箱根で邂姑王、鞍馬で遮那王、僧正坊でも辨慶でも、視紊ふ縹致をもちながら、然とては解せぬ奴、龍陽になれ、と口說ても、情しらずで糠に釘。きかしてくれよ、素生は奈何。と問へば小猴子は冷笑ひて、儞も輕き口ほどに、足が達者であるならば、男子一疋なるべきに、可愛や浮世を陜布の、胸襟合がたき竹柱、狗兒の産室に異ならぬ、寐物語に身の懺悔、いふて益なきことながら、落ればおなじ谷川の、流れを共に飲むことも、暑熱を凌ぐ相宿なしの、一樹の陰も他生の緣、人は見かけによるものかは。無て七癖、八歳兒も癇積、九ッよりして出奉公、とうちん香に名もしるき、俺舊里は小田原にて、年期猴子の初より、小錢竊みて買喫ひ、使の出かけ、湯のかへさ、團子點麩蠟薩摩芋、飯鮓醴酒柿蜜柑、大福もち論健啖にて、何でも四文を摠購盡に、夜擡舗では常花主と、いはれた義理歟、動もすれば、高手に鬼を搗做ひ、日毎に東人主管の、目視を翳めて抓入む、賣溜錢の置所、挾き袂と共侶に、綻びけらし、日來の横著、倶吟味より傍輩が、猛可に尻を割褌に、結著たる一分金、刺縫蓬棉衣の松坂も、伊勢としいへば只得も、這身這體脫參宮、同氣同病相憐む、友達誘引て乞食の開端、五十三驛六十日、百會揃れぬ菅笠は、三蓋無安の同

行三名、叱る親なく東人なしの、已が隨なる腰戰飯は、枵杓一本、剌鷹一苞、餬ふてありくおもしろさ、還り後れて夥計には、先へいなれて、端なく、赦免に漏れし俊寛に、似たる艱苦も心から、信濃三界流落て、露宿に明す袖乞の、緣起は通て是まで也。噫鈍ましや虚々と、口を唇きていとゞしく、腹は北山、南の町へ、走一走して東西啖ん。錢をおこしね餅買ふて來ん、有歟ある歟。と垂鷹の、間より手を差出せば、鎌倉寒兒は、遽しく、白梅桶を傾けて、爾らば憑む。と七八文、遞與すを受取る相摸小猴子は、南を投ていそぎけり。休題再說。大石千葉兩家の使、丁田畔五郎豐實、馬加蠅六郎鄕武は、長尾家より添られたる、荻野井三郎と共侶に、片貝の別館を立出て、歸路に赴きしその日より、那假犬士兩個の首級は、稻戸由充の助言の隨に、深く鎧櫃の内に藏めて、奴隷們に擔しつ、且小篠落葉の兩刀と、簸上社平が舊刀は、亦是緊要の東西なればとて、各その腰に跨て、其身々々の腰刀は、倶したる若黨に持せけり。さばれ這豐實と鄕武は、妬忌逞しき小人にて、功を貪る癖ありければ、今番荻野井を副使にせられて、倶に東武へ赴くを、心の内に懼ばず、兩人竊に諜合しつ、いかで三郎をはふらかして、他より先に逸速く、歸まゐりて主君々々の、恩賞に預らばや、と思ふ計較ありければ、旅舍を三郎と共にせず。約北陸中山道は、客店の坐席間數なしとて、進むにも止るにも、恣にして他を交へず。日毎に朝立を遲くして、日の升るまで臥てをり。夕も亦これに準じて、必日の暮ざれば、旅舍に就ことなかりしを、荻野井三郎訝りて、有一日豐實鄕武に、這事をいひ出て、目今炎暑の折なるに、朝はは早く旅舍を出て、日午にこそ休息すべきに、遲く出で日午にも、憩はで急ぎ給ふ故に、動すれば伴當の、大く後るゝもの多かり。顧ふは翌より朝涼に、旅舍を出、路をいそぎて、亭午の比は伴當に、少且憩し給へかし。といふを豐實聞あへず。和殿はその一を知て、いまだその二を知らざりけり。今番は尋常なる逆旅にあらず。首級といひ、這刀と云、那同類が聞知りて、跡を跟け、隙を覘ひ、奪略んと欲することの、これあるべき歟料りがたかり。然るを未明に旅舍を出なば、是盜賊に糧を齎し、仇に刃を借に似て、最も危きことならずや。烏

澀なる人ぞ。と冷笑へば、三郎かさねて、しからんには、などて夕は日をくらして、遲く旅舍に就給ひぬる。這義は危く候はずや。と問ふを鄕武側より、その義も亦謂あり。曉には路ゆく人なし。こゝをもて危しとす。夕には二更の比まで、里人睡らず、路ゆく人あり。この故に危からず。日午にだも憩ざりしは、使節の日時の後れんことを、怕れ思ふの爲にこそあれ、和殿の知ることならんや。と窘られて三郎は、且羞てふたゝびいはず。素より旅舍を俱にせざれば、是よりの後朝立に、東使の必誘ふを俟て、共に旦寐をしたりける。爾程に豐實鄕武は、三國山より上毛なる、沼田へは出ずして、故意信濃路に赴きたり。これも亦山路の程にて、はふらかさんと思へば也。恁而豐實鄕武は、信濃の岡田に宿投りし夜、伴當們に囑示しつ、次の日は毎にもあらぬ、曉かけて、旅舍を出て、頻りに路を急ぎつゝ、捷徑をのみ走りしかば、這日の比過る比、はや六七里の路次を經て、下の諏訪に邊り來にけり。這頭は順路ならざるに、曉かけて出たるを、那三郎はいかでか知るべき。是よりいよ〳〵路を急がば、他は必趕著かで、一宿は後れつべし。諸士以上なる俺們が、執事隷の若黨と、肩を比てゆかれんや。這里まで來つれば後安かり。折から酷暑の日午にて、有繫に疲勞ざるにもあらず。且俺們が伴當も、後れたるが多かれば、霎時湖水の頭にて、汗を納るゝもよかめれ。とうち譚ひつゝゆく程に、果して湖水に向ひたる、塘隄の頭に出茶屋ありけり、寂寞として守る人なけれど、豐實も鄕丙にも外にも発兒あるのみ。茶博士は壹飯たうべに、宿所へやかへりゆきけん、寂寞として守る人なけれど、豐實も鄕武も、却已べきにあらざれば、共侶に找入りて、発兒に尻をうち掛つゝ、齊一湖水を眺めてをり、這時までも後れずして、從ひ來つる伴當は、馬加の若黨と、二領の鎧櫃を擔ひたる、奴隷纔に二名のみ。這們が手づから茶を汲とりて、主にも薦めその身も喫て、割籠を披きて啖ふもありけり。當下馬加鄕武は、跨たる刀の柄を拊て、丁田生は這名刀を、何と思ひ給ふやらん。いぬる日片貝殿の御前にて、某已に稟せし如く、小篠は甃に雪篠あり。落葉の刀は人を斫るとき、四下の樹葉おのづから、零ることありと或人いひにき。這義は寡君千葉殿も知召さることなるべし。は

やく虛實を試て、然る奇特のあるならば、歸りまゐりて恁々と、稟して御感に預るべきに、緋物は得易からず。さりとて狗子を斫るも要なし。遺憾きは這事のみ。といへば豐實頷きて、その義は咱們も願はしけれ。仄に傳聞たりし、那村雨の刀のごとく、刃に鮮血を染るとき、樹の葉が零らばいよ〳〵名刀。折から四下の夏樹柆、這里には老たる椎もあり。緋して見たきものにこそ。といひつゝ遙に見出して、彼御覽ぜよ馬加刀禰、那首の塘隄の薦屋の內に、ひとり臥たる乞兒あり。他們は素より好人ならず。做しゝ積惡の業報にて、家を逐れ世に棄られて、野ぶせりにこそなりつらめ。しからばはやく這世の暇を、取するも是一功德、然は思さずや。とそゝのかせば、鄕武歡び身を起して、手を翳しつゝ得と見て、遺愛たき非人の全身、足跛たりと見ゆれども、骨逞く肉肥たれば、緋物には究竟也。聲に最も苛鋭く罵りけり。浩處に南の町より、稍かへり來る相摸小猴子は、這爲體を遙に見て、驚きながら逃もせず、竊歩しつゝ近著て、椎の樹陰に闕窺をり。爾程に鎌倉蹇兒は、思ひがけなく旅ゆく武士の、伴當們に手稠にせられて、胆を潰しつ戰慄れし、眼を睜り聲訥らして、やよ刀禰蓬惴り給ふな。甚なる御用歟知らねども、這身に犯せし過はなし。見給ふごとく跛蹇にて、一歩にても運びがたかり。許させ給へ。といはせも果ず、大家いよ〳〵聲ふり立て、坐行にもあれ、无脚蟹でも、出じといふとて出さで已んや。快々來よ。と左右より、手を捉り腰を推立て、宙に吊して茶店の頭へ、そが儘撲地と推居たり。登時馬加鄕武は、大刀の緒解て擺にしたる、野袴の稜袴み、落葉の刀を引提て、豐實と共侶に発兒を放ち立出て、佶と睨へたる面魂は、間でもしるき屠殺の准備に、然らごも怕るゝ鎌倉蹇兒は、魂已に身に添はず、吐嗟と叫て平張たり。畢竟馬加鄕武が、落葉の刀を緋すや否。そは亦次の卷の首に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳 第八輯 卷之三 終

南總里見八犬傳 第八輯 卷之四 上套

東都 曲亭主人編次

第八十回

殘仇を斬て毛野莊介と戰ふ
傳來を舒て小文吾兩雄を和ぐ

復說、馬加蠅六郎鄉武は、落葉の刀を引提て、発兒をはなち立出て、鎌倉寨兒にうち對ふ、勢ひ凄じかりければ、寨兒はいよ〳〵駭怖れて、吐嗟と叫ぶを、左右より、若黨奴隸が手を拿へ、項を抓て動せず。登時鄉武聲高やかに、やをれ乞丐奴、今さらに、叫びたりとて許さんや。然とても故なくて、汝が首を刎るにあらず。先や末期の引導に、說示さんず、听ねかし。抑儂が這兩刀は、小篠落葉と命けたる、世に多からぬ重寶也。就中落葉の刀は、鋭きこと莫耶に異ならず。こをもて人を斬るときは、時ならずして四下なる、木葉忽地零ることあり。因て落葉と命けらる。譬ば故管領家、持氏主の名刀なりける、村雨丸と相似たる、奇特あるよし或のいひしを、いまだ錚して見しことなければ、主君に聞えあげがたかり。東武へ歸城の路次にして、錚物になりぬべき、東西あれかしと思ふ折、料らず汝を見出したれば、絆のこゝに及べる也。左ても右ても世に棄られて、活る甲斐なき庇弱不具の、乞丐になりしはその身の業報、問でもしるき天罰にて、然ぞ死たうは思はんが、惡業いまだ盡ざれば、得も死れぬを一擊に、殺すは武士の慈善ぞ、と曉らで譟ぐ愚さよ。覺期極めて合掌せよ。苦痛をさすることにはあらず。こゝろ得たる歟。と身勝手を、並立てぞ誇貞に、諭せば丁田豐實も、找よりつゝ乞丐に對ひて、寨兒よ汝は果報めでたし。目今主のいはれしごとく、死を樂ふても死がたかるべき、その命根を一刀に、斷るゝは是幸ならずや。況茁なも裂くといふ、名高る落葉の

名刀にて、苦痛も覺ず往生せば、後の世はさぞ安かりてん。然ればその身を錚されて、木葉を落す奇特あらば、是遍主は主君の御感に、預りて祿も增すなるべし。爾らんには汝が興に、法師を聚へ經を讀する、追薦佛事ならずやは。瀨に寓る龜の浮木より、遇がたかるべき大檀那に、遭ひしはこよなき造化なるに、その歡びを稟さずして、命を惜む息は白物也。迷を醒せ、曉ずや。と理りめかして打つ合槌に、胸ぞ苦しき鎌倉寨兒は、戰れたる膝に手を、掛て權且息を吻き、龜めし項を稍鶴して、眼を瞬り、左見右見て、刀禰達さのみ惴らせ給ふな。宣ふ趣おん身に取りては、理りなる歟知らねども、己は一切こゝろ得がたかり。約生とし活物、朝に生れて夕に死する。蜉でも命は惜しかるに、乞丐なりとて殺さるゝを、歡ぶものゝあるべきや。身は野曝しの家もなく、足は跛ても手は腫ても、苦みあれば樂みも、あればある世の常情にて、日毎に携る竹杖にも、千載の齡あるを羨み、夜な〳〵宿る松蔭にも、萬代までとおもふなる、心も知らで誇貞に、薄情や恩でもなき事を、恩に被けつゝおそろしの、刀の奇特を試さんとて、命を取るゝは、過はなし。死して千歲を歷たらんより、生たる一日が優れり、といふことあるを思はずや。這里に往還の人を俟つ、右や左の袖乞でも、望しからぬ刀の手の內、その御法捨は御無用也。宗旨が違ふ通らせ給へ。といはせも敢ず鄉武は、眼を瞪らし聲苛立て、這奴甚大胆也。屠所の羊となりながら、今さら命を惜めばとて、助けらるべき事にはあらず。覺念せよ。と罵れば、豐實も亦冷笑ひて、恁まで因果を哺めても、なほ悟らぬは愚物の本性、常言にいふ驢耳彈琴、益なき問答時もや移らん、快々錚し給へかし。といふに慌る鎌倉寨兒は、才に覺期を極めけん、なほも近著く鄉武を、推禁め、仡と睨へて、刀禰達恁まで陪話まうしても、聽給はずば是非もなし。今は何をか隱すべき。某も是武士の果、年來寃家を擊んとて、外見塘に世を潛ぶ、假り乞丐と知らずして、侮り給はゞ怪我もやあらん。いまだ本意を遂ずして、素より怨もなき刀禰們と、擊果さんはこゝろにず、好ましからぬ事なれども、そも允されずは脫るゝ路なし。誘御敵手になるべき歟。といはれて驚く鄉武豐實、伴當さへに氣味好からねば、憶ずも手を放ちけり。然け

れども郷武は、阿容々々として已ぬべき、勢ひならねば些も怯まず、いよ〳〵聲をふり立て、却咤きたり、誘へたり。眞の仇討ならんには、鉾網襲衣刀劍、武器の准備のあるべきに、爾る東西なきは當座の慢語、脱るゝ便直であらんず。といひつゝも又近著くを、鎌倉寒兒はなほ寄せじとて、身邊に遺たる息杖を、掻拿りつゝ、郷武の、胸前近く衝著て、高い山阪、長櫃に息杖、息がきれます命の建場、いな〳〵其首にて御覽ぜよ。といはれて伶行く郷武は、然しも目鼻の阽なさに、面を皺めつ苦笑ひして、丁田主、嬲せ。命取るゝ悲しさに、這奴は心亂れけん、乞丐の技には相應しき、似而俳優にあらずや。といへば豐實もうち笑ひて、足は跛ても口ばかり、現朝牓なるものはなし。勿論世には蹇兒の仇擊、非人敵討なンといふ、故事なきにあらねども、這奴が寃家は甚麼なるものぞ。君父の讐歟、妻敵歟。その情由聞ん、いかにぞや。と問ふを寒兒は見かへりて、言あたらしき貴問の一條、某がこの年來、姿を寠して所在を索る、寃家は親の讐にもあらず。又妻敵にも候はず。只是金が寃家にて、親には家を追出され、親類の門塞りて、竹馬の友も見かへらず。二世と契りし空枕、一夜の夢のなつかしき、柳巷がよひも錢なければ、俺から其首に路絶て、無慙や熟妓にすら、蜂吹れつゝ恁成果しも、皆是金の所爲なれば、いかで那奴に環會て、俺這怨を復さんず、と思ふものから運微くて、才に貲ふ鑑一チもんの、面汚しなる筵小屋、孤を布寐の夢にだに、打ことならぬ金闘技の、さえ捷れても世に遇ねば、人には乞丐よ寒兒よ、といはれて彌る月も日も、照らし給はぬ形きなさ、憐み給へ、やよ喃。と口說を斫かず郷武は、足踏鳴らし焦燥て、いはして措ばさま〳〵なる、世迷言聞く暇はあらず。呼吸の音留ん。と拔閃かす、刃の光に鎌倉寒兒は、苦と叫びて息杖を、拿落し又掻取て、立まくすれど羽脱鳥の、網掛に苦む絶體絶命、なほも逃んと突立る、杖は三尺五寸の軀に、浴せかけたる郷武が、刀の冴はこの世の別路、憐むべし、鎌倉寒兒は、背の眞中一刀に、斫られて仆るゝ身は二段に、大腸小腸見れて、鮮血も其首にみちの〳〵、清水に似たる柳蔭、椎の杪をうち仰ぐ、郷武も豐實も、伴當門さへ共倒に、零ぬ木葉を本意なげに、うち眺め又眺めても些も奇特なかりしかば、郷武刃を拿なほして、喃丁田主、思ふに偖たる刀の鋭味、持たる杖さへ腕さへ、掛て六段に胴餘鉾しの、手答もせぬ天晴鋭焠、箇程に微妙かりけるに、いまだ落葉の奇特を見ず。然ることありと正しげに、いひつる人の搗鬼歟、益なかりき。と呟けば、豐實これを慰めて。某とても本意なし、と思はざるにあらねども、鄙語にいふ論より證据。鉾して見ずばいかにして、虚實を正可に知るよしあるべき。況刃の鋭味の、世に捷れしを目前に、見しは寔に名の下に、虚語なしとこそいふべけれ。恁れば乞丐の擊れしも、亦是無益の殺生ならず。よき折からに相伴れて、旅宿の憂苦を解したり。刃のみかはおん身の手擊、いとも愛たし、めでたし。と只管感ずる空賞に、武蔕爾とうち笑て、しからば刃を洗淨めて、なほ又前路を急ぐべし。と應て左右を見かへれば、一個の奴家がこゝろ得て、茶店の檐下に汲措きたる手桶の水を引提て來ぬるを、快々せよ。と郷武が、出す刃は夏寒き、氷を洗ふ卷向の、檜柄杓の日南水、奴隷がやをら拿抗て、鍔際より刀尖まで、かけ流し又被ながせば、懷搔探る若黨が、

（乞兒を斬て郷武名刀を試す）

軈て刃を拭んとて、鼻紙出して五六枚、累ねし儘に推揉みしを、伸してふたつに折たりける。爾程に相摸小猴子は、久しく樹蔭に躱ひて、絆の始末を闕窺をり、方纔若黨が主の刃を、拭んとせし後より、閃りと出てそが項髮を、掻抓み引よせて、一丈あまり投退て、衝と郷武に近著て、刃を引提し右の手を、扼りたる無敵の擧動、思ひがけなき事なれば、倶に呆るゝ郷武豐實、これはいかに、とばかりに。伴當さへに逡巡りして、主從齊一うち目戍るを、見かへりもせぬ相摸小猴子は、腰に夾みし手拭を、左手に拿て兩三度、拭ふ刃を熟視て、父が擊れしその折に、紛失せしと傳聞く、落葉小篠の兩刀を、身に帶たれば寃家の餘類、その姓名も既に知る、馬加としも名告れるは、又那龍山緣連が、由緣のものにはあらずして、逆臣大記常武の、親族にこそありつらめ。しからんには是寃家の半隻、索る仇にあらずとも、今撞見ひしはその身の不幸、伴れたる惡友は、まだ聞知らぬ丁田某乙、助劍做さば猶おもしろし。小篠落葉の兩刀を、遞與して倶に刃を受よ。と罵誇る少年の、さしも形狀は窶れても、多勢に撓ぬ胆勇廣言、名告らでしるき八士の隨一、犬阪毛野胤智が、浮世を潛ぶ假乞兒、這里に光明をふる郷の、州名かけて苟且に、相摸小猴子と喚れても、果敢なくその身を鉾されて、終の煙と薪樵る、鎌倉寨兒の似而非猿樂に、亦似るべうもあらざれば、いよいよ駭く郷武豐實、此彼迭に目を注したる、そが中に郷武は、怯れを見せじ、と聲高やかに、原來這奴はいぬる年、舞子に化て俺が先代の、親子從類なごりなく、擊も果して逃亡たる、犬阪毛野でありけるよ。汝が仇は人も知たる、只那龍山逸東太綫連なるを擊もせで、常武大人を怨みしは、その義に違ひし無法の闇擊、天道ゆるし給はねば、今そのざまになりながら、身の惡執とは思はずや。汝が親の東西ならぬ、這名刀に心をかけて、俺們さへに仇とし罵る、似而非廣言は夏虫の、火虫に等しき無慙の白徒、死に出しは又一層の、是家裏を獲たる也。曩に汝と共侶に、石濱の城を逃亡たる、犬田小文吾悌順は、近屬越路に流落ひしを、片貝殿の知らせ給ひて、同惡犬川莊介と、倶に首を刎られたり。今その曾殺と這兩刀を、片貝殿より賜りて、武藏へ還る路にして、汝が首を相濟なば、俺が先代の怨を復す、

是私の幸のみならず、石濱殿の奉興にも、面を起す武門の大功、御感も八入に增さらんや。其首な遺そ。と熟圍つつ、拿られし腕を振斷て、首を擊んと晃かす、左手の方より豐實も、倶に刀を引拔きて、走らば斫らん、と構へたり。登時毛野は些も驚かず、郷武が不管三七廿一に、擊閃かす刃の下を、飛鳥の如く翔潛る、縱横無導なる修煉の剽姚、瞬く閒も難ぐ刀尖を、左りへ流して推止る、刀を丁と挑拿て、怯むを透さず礮と斫る、拳の冴に郷武が、首ははやく地に落て、軀も礑と仆れけり。思ふに倍たる少年の、武勇に驚く豐實は、こは朽惜しや。とばかりに、逃走らんもすがにて、伴當進め。と喚かけて、推拿籠ん、と主從四名が、拔連ねたる刃の電光、競ひ蒐るをものともせざりし、毛野は左右に受流し、前後に當る奮擊突戰、霎時もあらせず一個の奴隸を、ばらりずんと斫伏せて、返す刀に若黨が、肩に深痍の血は瀧通淌、苦と叫びて一反ばかり、走り仆れて息絶たり。伴當二名擊れしかば、豐實いよ〳〵心慌て、拳も狂ふ危窮の受太刀、毛野は得たり、と踏入て、疊かけたる太刀風に、支ゆべうもあらざれば、豐實怵へずしたゝかに、小鬢を斫られて吐嗟とばかり、一聲叫びて逃走るを、脫さじと趕ふ犬阪の、後に殘る一個の奴隸が、擊んとしたる刃の光に、毛野ははやくも身を沈まして、左へ外す至妙の掙き、小鳥を抓む若鷹の、勢ひ當りがたければ、奴隸は刃を打落されて、痛痍を負ひつゝ逃たりける。恁りし程に莊介は、小文吾と共侶に、馬加丁田兩東使の、跡を趕ひ夜を日に繼て、信濃路投ていそぎしかば、這折獨逸速く、諏訪の湖水の頭まで、來つゝ前面を見亘せば、乞兒とおぼしき少年が、血刀引提て鵠立たり。癖者ならん、と思ふにぞ、竊に後方に近づきて、樹蔭に倚て覘ひけり。毛野は奴隸を趕捨て、又豐實を趕まくせしに、往方も知らずなりしかば、逃なば逃よ那奴們を、一箇も漏さで擊ばとて、又いかばかりの益やはある。と獨語つゝ單衣の、袵折返して刃の鮮血を、二三遍推拭ひ、遺たる鞋を拿抗て、やをら斂めて郷武の、屍骸を撈りて小篠の刀を、拔拿りつ左見右見て、落葉の刀もろ共に、腰に跨つゝ愀然と、犬田が事を思へば歟、嘆息の外なかりしを、纔に思ひかへしけん、獨連りに頷きて、小塘隄の方にゆかんとせしを、莊介透さず後方

より、走り蒐りつ刀の瑞を、握り留めて引戻せば、毛野は引れて伶仃ぐ足を、又踏固めて見かへるのみ、些も騷ぐ氣色なく、冷笑ひ又見かへりて、汝も擊れし馬加們が、伴當ならば逃もせで、冥土の伴の願しさに、命を捐に出たる歟。と問せも果ず莊介は、怒れる聲を振立て、噫意氣過ぎたる癖者かな。俺も馬加丁田們を、趕つゝ這里に來て見れば、心得がたき汝が擧動、今那主從三名を、擊果したるのみならで、俺もをさ〳〵獲まく欲する、小篠落葉の兩刀を、奪取りしは方に是、人を殺して不義の利に、飽まく思ふ山豪ならん。遮莫擊れし者の、與に怨を復すにあらず。時宜に儘してその兩刀を、俺に返さば許しもせん。然らずば頸を置ていね。彌勒の出世にあふまでも、只やは去せん快返せ。と罵りつ又引よするを、毛野は閃りと振斷て、面を對し仡と疾視て、原來汝も要ある奴也。年齡を推計るに、俺が怨敵にあらずとも、這兩刀をよく知りて、心をかくるは那親族歟。しからずとても身の分際を、思はで漫に爭はば、受ても見よ。と敦圍て、晃りと引拔く落葉の名刀、眞額臨で擊つ刃尖を、莊介はやく刀の鍔に、受て彼此身を反す、程もあらせず又擊つ大刀を、復引外し、拔合して、一上一下と手を盡す、勇士と勇士の烈しき大刀响、丁々戞と委みなく、受ては流す瀧の糸、風の柳に三日月の、左右に紊れて狂へども、亂れぬ拳は武術の精妙、二龍雲間に鬪ふ時、雨金鱗を零すが如く、兩虎深谷に爭ふ折、風黃毛を吹に似て、迭に疎鹵はなかりけり。浩處に小文吾は、路次にて草鞋を易るとて、思はずも莊介に、後れて走る諏訪の湖の、頭まで來て迥に見れば、誰か知るべき莊介は、身のざま賤しき少年と、戰ひ既に闌なり。小文吾は這光景に、駭きながら些も擬議せず、飛が似くに近著て、見れば件の少年は、認遣れもせぬ犬阪毛野也。こは什麼いかに、と許りに、又驚きつ歡しさに、一入聲をふり立て、やよ犬川生止り給へ。犬阪生も且等ね、小文吾なるぞ忘れし歟。いふよしあるを听ずや。と連りに叫びて禁れども、毛野莊介はなほ煞結びて、死活を爭ふ折なれば、犬田を見かへる暇もなく、喚禁るを耳にも掛けず、鎲を削る勢ひの、止るべうもあらざれば、小文吾はせん術なさに、心ともなく四下を見れば、茶店の傍に長やかなる、石の榜爾の有けるを、是究竟と兩手を掛て、引拔きつさし抗て、目今毛野と莊介が、煞結びたる刃の上へ、件の石をうち掛て、壓に打して、やうやくに、その戰ひを制めけり。登時毛野莊介は、刃を石に布れても、握持たる刀の柄を、放さず俱に佶と見て、茲に初て制めし人の、小文吾なりしを知りたりければ、毛野は只頭犬田が膂力を、且感じ且歡びて、絕て久しき小文吾主、俺がこの仇と戰ふて、擊果さんとしつる折、禁められしは甚麼なる故ぞ。と問へば小文吾含笑て、曩に墨田河の頭にて、別れし折は緯急にて、告るに遑なかりしかば、和君はいまだ知らざるべし。是這人は俺が爲に、過世ありける異姓の兄弟、犬川莊介義任と、喚做す勇士で候ぞや。縱怨のありとても、俺面を顧て怒と共に、刃を斂め給ひねかし。と、諭し禁めつ又莊介に、うち對ひて、哺犬川生、這少年はいぬる比、具に和殿に報知したる、孝烈無雙の犬阪生也。情由は知らねど爭ひを、止めて和睦し給ひね。惴らば後悔あらんず。と諭せば莊介點頭て、原來這少年は、和殿の噂に聞知りたる、犬阪生でありけるよ。させる怨はなけれども、這人東使主從を、はや三人まで擊果して、俺が重代の兩刀を、奪取りつゝ小塘隄のかたへ、走去んとしつる折、某料らず這里に來て、那爲體を闕窺たれば、刀を他手に渡さじ、と思ふ心の惴りしのみ。素より和殿に由緣ある、犬阪生でありけるを、神ならぬ身の知る由もなく、一擊に雌雄を決せんとて、迭に挑戰ひしは、危かりき。とうち陪話れども、毛野は疑ひなほ解ず。哺犬田生聞給へ。某はなほ這人の、名さへ面を認ざりければ、又是和殿の義兄弟、深き好のあらんとは、思ひもかけず爭ひし、初を推せば刀の所以のみ。小篠落葉の兩刀は、原是千葉家の重寶なりしを、俺父の擊れし折、偸兒ありて奪去りき、と傳聞しも久しくなりぬ。爾るにけふしも石濱なる、千葉殿の家臣と聞えし、馬加蠅六郎鄕武と名告れるが、這兩刀を帶て來つ、相伴ひしは大塚なる、大石の家臣にて、丁田畔五郎豐實といふものなるよし、從者に持せし鎧櫃に、付たる牌にて知られたり。恁而鄕武豐實は、那首の茶店に憩ひし折、那鄕武が發語しけん、這落葉の刀をもて、人を斫れば四下なる、木葉を落す奇特あるよし、人のいひしを鋏して見ん。誘とて贋がて這頭にて、鎌倉塞兒と喚做た

る、乞丐のをりしを伴當們に、引出させて斬棄たり。遊戯も事によるべきに、忌憚ざる那們が擧動、某は初より、樹蔭に立てその光景を、見るに得堪ず走出て、矢庭に鄕武主從を、三名まで擊果したり。こは是不慮に鎌倉寒兒の、仇を報ふに似たれども、豈しからんや鄕武は、則馬加常武の苗迹なり、とみづからいひにき。恁れば俺が親弟兄の、寃家の餘類なるのみならず、虛實は知らねど犬田生の、首級を齎したりなンど、いひ誇りたることあれば、豐實さへに逃さじとて、既に痛痍を負せしに、一個の奴隷共侶に、那奴ははやく逃亡たり。頗ふに這個兩刀は、原千葉殿の重寶なりしを、當年恁々の義によりて、滸我の御所（成氏）へまゐらせよとて、俺が父便節を奉りたる、その路次にして枉死の折、紛失したる東西なるを、仇の屍骸ともろ共に、うち棄て措べくもあらず。この義は俺身物情を、稍知る比より實母氏に、說示されし顚末を、思ひ出つゝ方纔その刀を、見れば遺恨のやる方も、涙ぞ進む懷舊の、腸を斷つ心の哀しみ、是苟且のことならんや。這後もなほ武運に稱ひて、那緣連を擊捕らば、その折にこそ便を討めて、這兩刀を千葉殿へ、返してよしを報稟さば、親の汚名を雪むべく、俺が宿念を果すに足れり、と思ひしものをいかにぞや。今さら是を犬川の、家重代の名刀なりき、といはるゝことこそ不審けれ。犬田生は始より、その義をこゝろ得給へる歟。と問ふを小文吾うち聞て、緣故を詳にせざれば、その疑ひは然ることながら、その兩刀は犬川生の、亡親の紀なるよしも、その後亦他手に渡りて、千葉家の東西になりし事も、循環て亦舊の、主に還りし傳歷を、某具に知りたりき。言長ければ且く閣て。犬阪、和殿に問ふことあり。といひつゝ手ばやく裳を褰げて、左の股を見して、見給へ無禮なる所爲なれども、和君も又俺身に等しく、形牡丹に似たる痣の、その身のうちになからずや。又只その痣のみならで、自然と文字の顯れし、祕藏の玉のあるならば、這俺們が義兄弟、骨肉にも優す宿因あり。曩にこの義を問ふべかりしに、辭急にして別れたる、遺憾さを今こそ果せ。そこらの物はなからずや。といはれて毛野は駭きながら、然也、さなり。と頷きて、袖巻抗て右の肘を、示せば果して二の腕へ、かけて牡丹に似たる痣あり。當下毛

野は衣領を拶りて、某が祕藏の玉は、年來這里に弃めてもてり。玉には則智の字あり。こは後にこそ見せまつらめ。是らのことを逆より、いかにして識られけん、奇也々々。とばかりに、尙疑ひは解ざりしを、莊介さこそ。と含笑て、犬阪生今さらに、何ぞ疑ふ事のあるべき。犬田が玉には悌の字あり。又俺が玉には義の字あり。痣は此にと衣領寬開て、示すを見れば是も亦、身柱よりして右のかた、胛に相似たる、牡丹花の痣ありければ、毛野はいよ〳〵駭嘆じて、まだその故を曉らねども、恁る奇特を見て知りぬ。思ひしことは非也けり。今よりして俺兄と、憑んとおもふ和君們に、這兩刀を惜んや。といふに歡ぶ小文吾莊介、しからばはやく刃を斂めて、俱にこの地を退くべし。長物語は災害を、招くに似たり快々。と顰め諭しつ小文吾は、石を傍に拿捐れば、毛野莊介は刃に塗れし、壤を拭ふて共侶に、誘とて粧に斂めけり。恁りしかば犬阪毛野は、先に立つゝ犬川犬田を、一町あまり奥まりたる、塘隄の背へ退かして、這里は外見の稀なるに、去向を商量し給へかし。といふに小文吾莊介は、しかるべし。と應つゝ、草折布て坐を占けり。登時毛野は恭しく、莊介にうち對ひて、某眼はありながら、富士筑波をも知らずして、酷く無禮を仕りぬ。鄕にもいひしことながら、這兩刀は俺亡父の、故主の東西と聞たるのみ。知らざりし日は是非もなし、和君の重寶ならんには、留措くべきものならず。今こそ返しまゐらする、受收め給へかし。といひつゝ軈て兩刀を、拔拿りつ差寄するを、莊介受ず推戾して、苦樂を俱にし患を分つ、分顎の交りは、爾あるべきことながら、おん身の興に要ある刀を、親の紀念なりとても、某も亦惜んや。勿論その刀の甄なる、雪篠は俺家の服章、傳來分明なるよしを、知られて所要に立られなば、今より望む所なり。和君の仇なる緣連の、所在を撈るよすがにも、なるべきもの歟料り叵かり。こは這儘に措き給ひね。と推辭を小文吾推禁めて、返さんといふ犬阪生も、受じとて辭ふ犬川も、義を重しとせる所以なれば、介意あるべきことならねども、某をもて論ずれば、時宜に任して舊主へ、返すを自然といふべきのみ。犬阪生听給へ。這兩刀の來歷の、始をいへば箇様々々、終は恁々なりけりとて、犬川衞士が自殺の折、

刀を沒官せられし事、又年を歷へて小文吾が、舊里に在りし時、件の二刀を購求めて、後に信乃に贈りし事、却爾後に犬川の、家傳の名刀なるよしの、知られしによりその折に、信乃が莊介に返せし事、今番の厄に片貝にて、又這刀を沒官せられて、那假首級と共侶に、小文吾が刀さへ、石濱大塚兩所の使者に、遞與されにきと聞えし事、稻戸津衞が好意にて、死を免れしその夜丈、竊に異刀を贈られしを、跨て那里を潛出たる、その崖略を云々と、辭短く詳き示せば、毛野は只管歎賞して、寔に東西には離合あり。刀と主と凶吉禍福に、別れてはあふ意外の奇談、感するにほ餘りあり。然までに傳來あらずとも、今退きて按ずるに、逆臣馬加常武の、苗蹟を立し千葉殿に、這兩刀を返すとも、咱們親子の忠信孝義を、おもはるべくもあらずかし。況當日這兩刀を、寃家龍山緣連が、竊取りしにあらざればば、これありとても那所在を、知るよすがにはなるべからず。願ふは今より犬川生、這義に懸念あることなく、刀を收め給ひね。と連りに慫めて已ざりければ、莊介やうやく承引て、かくまで厚く諭さるゝを、受ずもあらば朋友の、信を知らぬものに似たれば、今さらに固辭がたかり。誨に從ひまつらんが、和君は亦何をもて、その身の衞にし給へる。寃家を索る年來の、准備はいかに聞まほし。と問れて毛野は莞爾と笑て、その義も心安かるべし。這兩刀を還すとも、某も亦年來、竊に藏弆の二刀あり。且是よりや見せまつらん。といひつゝ懷を搔撈りて、手早く出す七首を、拔けば玉散る新月の、四下に輝く天晴名作、鋭味さこそ。と莊介小文吾、俱に感嘆したりける。當下毛野は七首を、拿直し鞘に斂めて、これのみにては强敵を、尙征するに足ざれば、この外に大刀もあり、鏘網襲衣肱甲脚盾も、苞に藏め土中に隱して、南の塘隄の腰にあり。いで〳〵。といひながら、早身を起し走り去て、件の苞を引提て來つ、解開かんとしたりしを、小文吾急に推禁めて、這里は那首へなほ近かるに、時を移さば人に知られて、進退難義に及ぶべし。纏に某犬川に後れて、走りて這方へ來る程に、行裝ひせし一個の武士の、小鬟に痍を負ふたるが、路傍に憩ひてをり、某を喚留めて、咱們は武藏の大塚なる、大石殿の家臣也。諏訪の湖水の頭にて、辯者に狼藉せら

れて、かくの如くに痍を負ひにき。藥のあらば賜へかし、と請求るにこゝろ著て、見ればそが跨たる刀は、片貝にて沒官せられし、俺腰刀なりければ、是なん丁田畔五郎興實ならんと猜したる、心勇みし醉高やかに、原來汝は豐實歟、越路よりして汝們が、後を趕つゝ今來ぬる、犬田小文吾を知らざるや、と名告るに駭く豐實は、訝りながら身を起して、刀を拔んとしてけるを、拔しも果ず頭顱擊落して、件の刀をとり復し、易には由充の養たりし、刀を屍骸の邊に遺して、更に走りて犬川に、趕著得たるのみならず、犬阪生に再會せしより、件の豐實鄕武們の、緯の趣具に知ぬ。是見給へ。と拿復したる、刀を二犬に示すにぞ、毛野も听つゝ笑坪に入りたる、そが中に莊介は、感ずること大かたならず。思はずも額を拊て、遖微妙き計ひなるかな。某とても家傳の刀を、犬阪生より得たりしかば、津衞の刀は鄕武の、屍骸の邊へ遺してゆかん。攜に那人に別るゝ折、倘俺們の兩刀の、再手に入ることあらば、這換刀は便に就て、返し進らせん、といひつるに、要なき東西を何時まで留ん。是も亦鄕武の、屍骸の邊に遺し措ば、那荻野井が拿抗て、越路へもてゆくこともあらん。縱その義に及ばずとも、季札が挂し徐國の君の墓の劍と見るまでに、情深かる稻戸に、志は致すべし。然はとて軈て件の二刀を、引提て早く身を起せば、毛野も俱に、とゆかまくせしを、一小文吾やよと喚禁めて、酷暑に往還の跡絕しとても、時移りしかば茶店の主人が、はや村長に報たりけん。爾らば衆人聚ふべし。且荻野井は後れたりとも、今までも來ざらんや。又逃亡たる伴當は、和君を認りし者ならんに、漫に那里へゆくは危し。和君は這里を立去りて、甲斐のかたに赴き給へ。某は犬川と、俱に笠もて面を隱して、其頭を過る旅客の、似くに見せて那兩刀を、遺し措して趕著ん。這義をこゝろ得給へかし。といへば又莊介も、犬田の意見その理あり。うちも揃ふてゆくは要なし。快立退て俺們を、程よき路に等給へ。衿に染たる血を衆隱して、やよ目咎られ給ふな。と諭すに毛野は推辭難て、恁いはるればせん術なし。某は甲斐のかたへ、約は十町の內にして、葬淨處に等ん。那里に赴き給ふとも、便万くば近づかで、快引返し給ひね。と心を附けつ、屬らるゝ、毛野は藁苞引提て、

立別れゆく諏訪の湖や、上つ祉を伏拜み、遙に禱る久後と、今も恙はあら栲の、狹き袂に風戰ぐ、樹立涼しき青柳の、驛路投ていそぎけり。爾程に莊介小文吾は、郷武們の擊れたる、邊を霎時徘徊して、縡の動靜を覘ふに、村長なンどおぼしきものは、いまだ一個も聚ひ來ず。程遠からぬ里人と、路ゆくものゝ走違ひて、罵譟ぐをうち聞くに、茶店の翁が晝飯たうべて、稍かへり來ぬる折、郷武主從の枉死の骸を、初て見たることなれば、胆を潰しつ引返して、先はや縡の趣を、祝殿に告稟さんとて、そが儘走去りしといふ。這里は諏訪の神領にて、神職の宿所へは、近くもあらぬ程なれば、其首より人のいまだ來ず。茶店の主人も在ることなければ、思ふに倍して便りよかりし。莊介は携たる、那兩刀を潛やかに、郷武の屍骸の邊へ、遺し措つゝ退きて、又小文吾に聟くやう、俺們が假首級は、溷六穴八と喚做たる、小賊の頭顱なれば、惜むきべものならねども、俺が姓名を冒されて、梟首せらるゝことあらば、一時の權にもせよ、快からぬ所あり。心裏恥しきことならずや。といへば小文吾點頭て、その義は亦某も、豫こゝろに掛りたり。件の首級は、郷武們が鎧櫃に秘置よしを、傳聞たることしもあれば、引出し湖水に淪めて、走らば遺恨なかるべし。やよ快々。といそがせしを、莊介憂時と推禁めて、首級を奪ふは易けれども、然では荻野井三郎の、難義に及ぶこともやあらん。那三郎はいまだ見え來ず。その所以ありて後れたりとも、竟に寄來ぬことやはある。那身に酋害あらせては、情深かる由充の、恩を仇もて復すに似たり。よりて思念を旋らすに、件の首級は小瓶に斂め、酒に浸して鎧櫃に、祕措にきと聞たれば、快その酒をとり捨て、箇樣々々に做ならば、是三郎の越度にならず。矧炎暑の比なれば、頭顱は程なく腐爛れて、梟首しがたくならんずらん。この義はいかゞ。と聟けば小文吾聞つゝ含笑て、その議寔に奇妙也。爾らば人の聚合ぬ間に、手ばやくすべし。誘給へ。といそがしつ又共侶に、舊所に赴きて、那伴當が茶店の邊に、卸し措たる、郷武と豐實の鎧櫃を、葭簀の蔭へ擡入れて、推開きつゝ兩箇の小瓶を、出して酒を酌み猟て、茶店にありし釜の湯を、件の小瓶に吸入れて、故のごとくに斂めけり。這頭は無下の田舍なれば、物觀ん

と思ふ人もあらず。這時までも往還は稀にて、聚ひ來るものなかりしを、二犬士は造化精妙、といはで目と目を合せ緒の、薄き草鞋に足輕く、竊に其首を退きて、犬阪毛野に約束の、甲斐路を投し走ること、既にして八九町、前面の岡なる樹の下蔭に、毛野は久しく俟つゝをり。恰纔小文吾們が來ぬるを見て、走り出招きよせて、那里の首尾を諮ねけり。登時小文吾莊介は、那處の動靜首級の事、箇樣々々と遺もなく、迭代に聟報て、恁れば今は那頭に、おもひ遣す隈もなし。和君のうへも俺們の、去來さへに此彼と、報べきことも尠からず。問ふべきことも多かるに、今宵の旅舍にて盡すべし。誘共侶に。と倡導ふにぞ、毛野は聞つゝ歡びて、後に跟き先に立して、倶にゆくこと二里あまり、青柳の驛に來にければ、晡時にぞなりにける。猶もゆきなばゆくべかりしを、迭に急がぬ逆旅なれば、這驛路なる茗店に、はやく宿りを投めけり。話分兩頭。爾程に荻野井三郎は、這朝豐實郷武に、欺れたることなれば、未明に件の兩東使の、旅舍を出しを知らずして、十刻あまり後れしかば、心頻りに焦燥のみ、伴當們をいそがして、快起著んと欲せしかども、この日は殊に暑かりければ、主僕疲勞れて思ふにも似ず、日景斜になりし比、洗馬鹽尻をうち過て、諏訪の湖に程遠からぬ、小松原まで來つる折、と見れば路傍なる、夏草の繁きが下に、仆臥したる旅人あり。方纔荻野井們が近づく隨に、忽地に頭を擡げて、やよ片貝の人々よ、賚け給へ。と喚りたり。當下荻野井主從は、訝りながら立よりて、熟視れば別人ならず、こは郷武の奴隸にて、鎧櫃を擔荷たる、似兒介と喚做すもの也。腰より下は血に塗れて、行歩不便に見えしかば、三郎酷く驚きて、みづからその故を問ふに、似兒介才に身を起して、主にて候郷武は、襦に丁田殿と共侶に、諏訪の湖の頭なる、茶店に霎時憩ひし折、落葉の刀を弄びて、小塘隄の下なる跛蹇乞兒を、鉾斬にしてけるに、その折年十七八なる、一個の乞兒が走り出て、俺東人を扼り、矢庭に刃を挑取て、主はさら也若黨三十平、及丁田の奴隸さへ、皆擊果され候ひき。その爲體は恁々也。箇樣々々の術者なれば、只這三名のみにあらず、丁田殿も痍を負ふて、迯走り給ふ程に、在下も亦かくの如く、左の膝を砍られたり。かなふ

（小文吾路に豐實を擊・東使を經て荻野井に變を聽く）

べくもあらざれば、後れて來ぬる傍輩に、よしを告んと思ひつゝ、辛くして引外して、逃て這里まで來にけれど、痛痍の苦痛に瞑眩きて、仆れて且く黑白を覺ず。やうやく俺にかへりたる、今より些し先の程、馬加丁田兩個の伴當、若黨奴隸八九名、後れて來ぬるがゞち連立て、折よく這里を過りしかば、遽しく喚近著けて、那大變を告知せ、身の介抱を憑みしかども、大家駭騷ぐのみ、主の先途を見し後に、左も右もせん這里に居れ、とばかりいふて勸るものなく、湖水のかたへ直走りに、走りて一人もかへり來ず。晝だに往還稀なるに、暮なばいよ〳〵知る人あらで、命果敢なくなりぬべし。あはれ拯せ給へかし。いかで〳〵。と苦しげに、口說くを三郎うち听て、駭呆るゝ伴當を、遽しく見かへりて、恁る異變を聞ながら、霎時も猶豫すべからず。俺は那里へ快ゆきて、件の容子を檢索せん。若們は一兩名、這似兒介を肩に被て、推續きて跡より來よ。痛痍なりとも灸所にあらねば、死ぬべうは思はねども、這が東人の不覺の枉死の、證據になるべきもの也かし。よく勸りね。と吩咐て、飛が似くに走去れば、一個の若黨鞋奴、空手のものは遺れども、その餘は伴に後れじとて、喘々ぞ走りける。恁而荻野井三郎は、鄕武們が擊れたる、茶店の邊に來て見れば、既にして地方の役人、諏訪の祝の家臣某乙、深澤の村長、下諏訪の驛長なンど、此彼となく來會して、絆の詮議區々也。これにより茶店の主人と、鄕武豐實の伴當の、後れて這里に來つるものに、那顚末を質問せしに、茶店の主人は農夫にて、折から山田の畊作に、閑宅の男女暇あらねば、手代のものなきにより、權且店をうち空て、晝飯たうべに退りたる、その間の事なれば、絆の始末を知らずといひけり。又鄕武豐實の伴當們は、東人殊更路次を急ぎて、捷徑をのみ走りけん、思はず大く後れしに、その路違ひて遲速あり。この故に絆過ぎて、適纔這里に來にければ、仇を認るよすがもあらず。迷惑この義に候。と言語齊一陳ずるのみ。一箇も證人あることなく、茶店を距ること數十步にして、乞丐とおぼしき一個の男子の、胴斬にせられしあり。這が所爲歟、と思へども、又豐實も首を擊れて、這里を距る事五六町なる、田畔に屍骸のありしを、地方のもの〻報たりけり。恁れば一人の所爲にあらず、とばかりにして照驗なければ、豐實の亡骸をも、則這里へ扛もて來たして、只頃衆議を凝す折から、長尾家の副使なる、荻野井三郎が來つるにより、那似兒介の口狀を、告るに及びて衆人の、疑心初て解にけり。畢竟荻野井三郎が、祝の家臣們に對面して、相計ふ趣甚麼ぞや。そは又這下の卷に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳 第八輯 卷之四 上套 終

南總里見八犬傳 第八輯 卷之四 下套

東都 曲亭主人編次

第八十一回

荻野井返命して僞刀奮主に還る
三犬士再會して宿因重て話表す

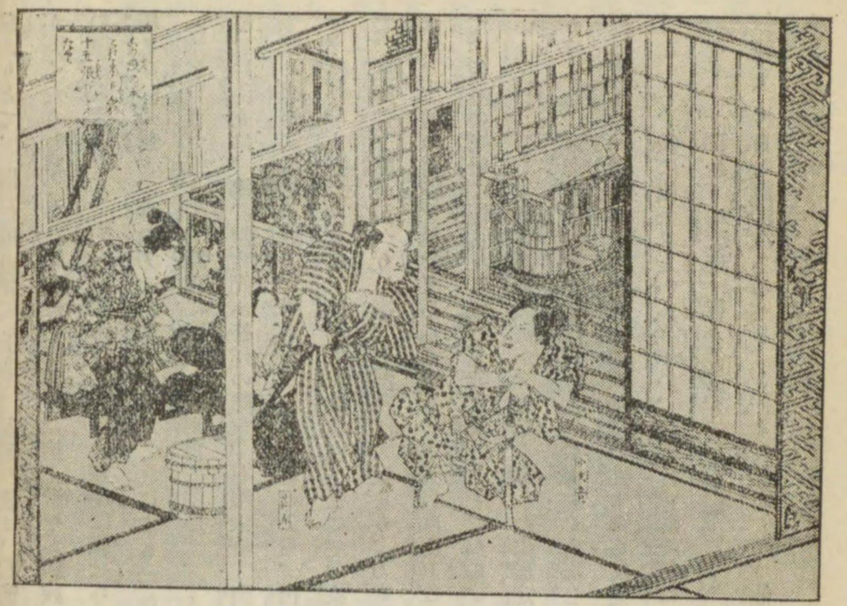
再、說、荻野井三郎は、既に茶店に來會したる、祝の家臣們に對面して、姓名を告り來由を示して、某は主君より、兩東使に隷られたる、副使では候へども、今朝しも勞ることありて、遲く旅舍を出たれば、路の程太く後れて、絆の始末を知らざりしに、幸ひにして證人あり。その故は箇樣々々。と今來ぬる路にして、手擔人似兒介に遭ひし事、他が報たる趣を、遺もなく演知して、某恁て候へば、各々心安かるべし。權且這地に逗留して、越後と武藏へ人を走らせ、主君幷に千葉大石家へ、這凶變を告稟して、進退は下知に由るべし。勿論炎暑の比なれば、東使主從の亡骸は、柩に斂めて程近き、寺院に預け措まく欲す。這義を相計ひ給れはかし。といふに大家疑心釋て、然るにても少年なる、一個の乞兒に主從四五名、皆擊れしは意外の事也。さても〳〵。とばかりに、呆れざる者なかりけり。浩處に三郎が、途に遺せし伴當の、はや似兒介を駝て來にければ、三郎則似兒介に、なほ又鄕武們の擊れたる、その折の始末を尋ねて、那癖者は何とかいひし。その名を聞たることはなきや。と問へば似兒介頭を擡げて、さン候。那乞兒奴が、みづから名告しことはなけれど、落葉の刀を佶と見て、父が擊れしその折に、紛失せしと傳聞く、小篠落葉の兩刀を、今初て見るのみならず、馬加としも名告れるは、逆臣大記常武の、親族にこそあらんずらめ。爾らんには是惡家の餘類、逃しはせじ、と憤きしかば、東人鄕武餘怒て、原來這奴はいぬる年、舞子に化て俺先代の、親子從

類なごりなく、擊果して逃亡たる、犬阪毛野であらんず。といはれしまでは聞たれども、鄕武擊れて俺們まで、痛傷を負ふたる珍事中屑、論語に絕たる大變に、なりにし後は心も冥闇、その餘は覺候はず。但那乞兒は年齡、十七八にやなるべからん、寢れたれども容止の、優質なれば美しく、女子にして見まほしき、形貌に似げなき力量剽姚、今牛若ともいひつべき、神變不思議の武藝あり。恁れば東人の猜せし如く、豫噂に聞えたる、旦開野と敵いひし假少女の、犬阪にもや候はん。といふに大家又駭きて、思はずも目を合しけり。登時荻野井三郎は、祝の家臣にうち對ひて、那癖者の事の趣、照驗既に分明なれば、穿鑿は是までなるべし。暮るゝに程もなからんに、柩の事をいそがせ給へ。と憑めばはやくこゝろを得たる、祝の家臣は、深澤と下の諏方なる長を招きて、絆恁々と吩咐て、却三郎に答るやう。目今聞せ給ふ如く、柩の事は村長に、執計はせ候へば、日の暮るゝとも成るものあり。なほ忽諸にしがたきは、刀傷人の療養也。下の諏方の驛長に、この義をも示し候ひき。はやく旅亭に將てゆき給はゞ、那脚力の事なども、遲滯に及ばで便宜ならん。この議に任せ給はずや。といふに三郎異議に及ばず、そは寔に便利也。左にも右にも計せ給へ。と應て深澤なる村長と、驛長們を勞ひけり。これにより祝の家臣は、件の事の趣を、茶店の主人故老の莊客、通て這里に聚合し者に、屍骸を寺へ遣す迄、よくうち戍れ。と告捉て、三郎と共侶に、軈て茶店を立出て、却三郎に別を告て、宿所を投て還りゆくめり。當下鄕武豐實の伴當は、なほ這處に留りて、主の屍骸を戍るもあり、又似兒介を茶店の板戸に、乘せてこれを舁もあり。這他は鄕武豐實の、兩刀を携へ鎧櫃を扛擔ひ、荻野井三郎に從ひて、旅亭を投ていそぎけり。爾程に荻野井三郎は、下の諏方なる驛長に、案內をせられ路次をいそぎて、主僕旅舍に著しかば、夏の日越に暮にけり。金擔人の、療治には、本驛なる醫生が來て、似兒介の痍を縫ひなどす。この時にしも三郎は、豐實と鄕武の、鎧櫃をうち披かして、那首級を檢するに、故の隨にてありければ、竊に心を安くしつ。又鄕武と豐實の腰刀は、若黨に持せしと、共に此彼七口ありて、一箇も紛失せざりけり。そが中に、小篠落葉の兩刀と、

小文吾の腰刀は、兩東使の腰に跨たるよしを、郷武豐實の伴當們がいふにより、三郎是を預りて臂近に措たりける。されば件の三口の刀は、鵜に莊介小文吾が、竊に拿替たりければ、眞の小篠落葉ならねど、三郎は初より、件の刀を眞僞をよくも見ず、又旅路に赴きても、兩東使に忌嫌れて、推並てゆくこともなく、旅舍を倶にせざりしかば、刀の知るよしもなく、片貝へ注進狀に、首級並に兩東使に、齎し給ひし三隻の刀は、別義なしとぞ寫たりける。有恁しかば三郎は、次の日の曉に、その身の倶したる若黨に、奴隷一名を從して、注進の爲越後へ遣し、又豐實と郷武の伴當の、心利たるもの二三名に、書翰を齎し、武藏へ返して、大塚石濱の兩城へ、這凶變を報にけり。然ば又東使主僕の亡骸は、當夜深澤の村長と、茶店の主人們が柩に斂めて、近き寺院に遣しつ、權且那里に寄せてあり。これにより茶店に遣りし、兩東使の伴當も、次の日下の諏方に聚合來つ、件のよしを三郎に、報て共侶に逗留す。旅宿の徒然爾ぞあるべし。恁而一旬ばかりを歷る程に、大塚石濱の兩城より、士卒此彼十餘名、各々君命に從ひて、鄕に荻野井三郎が遣したる、豐實郷武主僕の伴當を將て、下の諏方なる荻野井が、旅亭に來つゝ對面して、君命を演、非常の役義を勞ひて、却豐實郷武主僕の亡骸は、濱地の道場に瘞むべく、恙なき伴當と、武器行李を受取て、武藏へ還らんといひしかど、三郎いまだその意に儘せず。曩に簸大刀自より、豐實郷武に齎したる、二犬士の首級の事、小篠落葉の名刀と、小文吾が刀の事を、箇樣々々と說示して、今這東西を各位に、遞與しまゐらせて宜しからんや、否は愚意に及び難かり。是により片貝へも、いぬる日注進したりしかば、遠からずしてその左右あらん。且くこの義を等給へとて、理りを舒て留めしかば、大石千葉の士卒們は、只得く共に逗留して、諏方の祝の宿所に赴き、那日郷武們が枉死の折、厄會に預りし、歡びを述てかへるさに、那深澤なる村長許立寄りて、則長を案内にしつゝ、郷武豐實主從の、柩を寄せたる某院に、到りて住持に來意を演て、件の生僕を埋葬す。死して一旬有餘を歷たる、炎暑に亡骸腐爛して、臭氣に面を向けがたければ、主僕の顔を檢するに及ばず。寺へは些の餌を布施して、諏方の旅亭にかへり來にけり。左右する程に、片貝へ遣したる、荻野井三郎が伴當と共侶に、執事由尤の脚力到來して、大刀自御厨の下知狀あり。三郎これを受戴きて、謹て閲するに、豐實郷武枉死のうへは、莊介小文吾兩箇の首級、並に小篠落葉三口の刀を、荻野井三郎に預け遣す。そが儘武藏へもてゆきて、大石千葉へ贈るべし。這他の事は恁々、と最詳に載られたれば、三郎既に其意を得て、千葉大石兩家の士卒に、件のよしを演傳へて、祝の宿所に使を遣し、武藏へ赴くよしを報て、兩家の士卒と共侶に、次の日旅亭をたち出けり。この時似兒介が金瘡の、いまだ瘥り果ねども、杖に携り朋輩に扶けられて、辛くしてゆくめり。これらは然までの不便にあらねど、那二犬士の假首級は、鄕に莊介小文吾が、瓶なる酒を拿棄て、溫湯を入易たりけるに、さらでも炎暑の時にして、初片貝を出しより、二十日ばかりを歷にければ、漸々に腐爛れて、臭氣に堪ずなりたれども、路に棄んはさすがにて、猶そが儘に舁しゆく。三郎が肚裏には、勞しても功なきものを、と思ふものから那伴當們を、丁寧に誡めて、連りに路次をいそぎしかば、七月の初澣に、武藏州豐嶋郡、大塚の城に來著す。この日千葉の士卒們は、よしを主君に聞えあげて、荻野井を待んとて、郷武が伴當を、倶して石濱へ還りけり。爾程に荻野井三郎は、大塚の城に著しかば、仁田山晉五出迎へて、對面して長途を勞ふ、疑待態大かたならず。登時三郎は、簸大刀自より贈來させし、犬川莊介が首級の事、犬田小文吾が刀の事、君命を演來意を示して、豐實郷武が枉死の顚末、郷武が奴隷似兒介が、口狀は箇樣々々。と具に告て、又いふやう、曩に片貝殿の沙汰として、件の首級は小瓶に斂め、美酒に浸され候へども、路にて不慮の事いで來て、滯逗一旬にあまりしに、炎暑酷しき折なれば、既に腐爛の臭氣あり。憚りなきに候はねど、主命なれば持參せり。これらの趣左にも右にも、宜く聞えあげさせ給へ。と慇懃に演訖て、首級を斂めし一箇の小瓶と、那腰刀を恭しく、晉五に遞與して又いふやう、某は且退りて、石濱殿へも速に、稟上べき主命あれば、おん返辭は那首のかへさに、承るべく候なれ。自由の至りに候へども、石濱の使者馬加生も、丁田生と共侶に、枉死によりて兩所の使を、兼て某奉り、那首へも

贈らるゝ、首級あれば遲滯しがたし。この義を允させ給へかし。といふに晉五は留難て、僅にその意に儘せしかば、三郎は遽しく、伴當を俱して石濱なる、千葉の城に赴きつ、冢臣猿島連に就て、君命を演ること通て前條に異ならず。首級を斂めし一箇の小瓶と、那兩刀を拿出して、そが儘連に遞與すにぞ、連はこれを受取て、馬加郷武們が枉死の折、速に報られたる、歡びを述勞ひて、且休息し給へとて、猛可に旅館を宛行ひて、人を隷け酒飯を薦めて、荻野井主僕を管待しけり。恁而荻野井三郎は、その詰朝正廳に召れて、千葉自胤に見參す。原是通家の使者なれば、佶とせし儲はなけれども、近習の家臣幾名與、主の後方に侍りたり。當下自胤は、先大刀自の安否を諮ねて、猿島連をもていはするやう、今番岳母御前より、遙に贈り給はりし、犬田小文吾悌順の首級は、大かたならず腐爛して、半髑髏になりたるよし、連們が稟すにより、今さら實檢の沙汰に及ばず。件の犬田小文吾は、孤も亦いぬる年、畋獵の折見つるもの也。その頸舊のごとくにあらば、必梟首すべかるを、遠路といひ暑氣の折、逆旅に下慮の拒障いで來て、逗留に日を經たらんには、如右なりけるもその以あり、使の過失ならずかし。又贈られし兩刀は、昔年這里にて紛失したる、小篠落葉にあらざる也。こは馬加郷武が、片貝殿に謁せし折、鑒定したるよしなれども、那名刀の亡てより、許多の年を歷し事なれば、郷武が疎忽にて、認違へたる歟、こゝろ得がたかり。因て贈られし兩刀は、この儘返しまゐらする。片貝殿へこれらのよしを、具に聞えあげらるべし。又馬加蛔六郎郷武は、緊要の使に立ながら、故なく非人を斫棄て、遂に又非人の爲に、擊れしは是不覺の所爲也。那折逃たる伴當も、後れてその期にあはずといふ、若黨奴隷も共に罪あり。這義は異日に沙汰すべし。歸北の折件のよしをも執事へ通達せられよかし。遠路の使太義にこそ。と懇に勞はして、歸國の暇を給はりつ、齎したる二口の、刀をそが儘返されけり。恁て罷出るとき、冢臣猿島連們が、片貝の執事由充へ、連署の狀を遞與せしかば、三郎これを受取て、又大塚へ赴きしに、城主大石兵衞尉憲重は、兩管領と長尾景春と、和睦の一議あるにより、乃者五十子の城に在り。子息左衞門尉憲儀は、卿中暑の

恙ありとて、則仁田山晉五をもて、返答の趣は、石濱なる自胤の、口狀と異ならず。首級は酷く腐爛して、鼻首しがたくなりし事、幷に贈られし那刀を、簸上社平が親族なる、甲乙に見せたるに、社平が刀にあらざるよし、稟すもの尠からず。よりて刀を返晉す。この餘は書中に載せられたり。執事に屆け給ひね。と演て憲儀の自筆にて、由充に與る手簡一封と、件の刀を遞與しけり。これにより三郎は、大塚の城を辭し去りて、伴當をいそがしつ、這夜は蕨(地名)まで退きて、濟首に宿投り、那首に憩ひて、ゆくこと則一ヶ日ならず、染月の某の日に、越の片貝に歸著て、執事稱戸由充に、郷武豐實們が枉死の顚末、石濱大塚二箇所の回報を、言詳に告知して、大石憲儀の自筆の手簡と、千葉の老黨が連署の狀と、那返されたる三口の刀を、出して由充に遞與けり。登時津衞由充は、刀を覩て書翰を披かず。怪むべく疑ふべき事、多かるを然らぬさまにて、衣裳を更め書翰を携え、遽しく出仕しつ。却老夫人に見參して、荻野井三郎がかへりし事、石濱幷に大塚より、刀を返されたる緯の趣、自胤憲儀の返答を、箇樣々々と聞えあげて、二通の書翰を見せまゐらするを、大刀自は訝りながら、津衞其首にて、讀むべしとて、讀してつら〳〵うち聽て、首級の炎暑に傷られしは、是非に及ぬことながら、那刀さへ相違して、返されたるは本意なき事也。顧に自胤のいはれしごとく、那折郷武豐實が、よくも認らぬ生鑑定を、信たる故に、得質さで、はる〴〵と壻達へ、贈遣したりけるを、疎忽の所行ぞと思はれけん、最悔しくも恥しけれ。現馬加郷武は、落葉の刀を試すとて、乞兒を斫て、乞兒に擊れし、烏滸の白物也ければ、浮薄の性も知られたり。豐實とても亦爾也。那們が擊れし爲體は、襲に聞たることながら、後に出たりといふ少年の、乞兒は犬阪毛野にやありけん。石濱にては其頭の詮議の、まだ無りし歟、いかにぞや。と問れて由充さン候ふ。石濱にても犬塚にても、郷武豐實が枉死の事、倶に是不覺の罪あり。那折逃たる若黨奴隷も、後日に御沙汰あるべし、と仰られ候ふとぞ。他們は御内の人なれば、左も右もなりぬべし。縱那少年なる、乞兒が犬阪毛野なりとも、戰國割居の今にして、信濃三界北陸南海、隈もなく所在を渉獵て、搦捕せ給はん事は、い



といと難き所行なるべし。就て昨今世の風聲を傳聞候に、縲に誅戮せられたる、犬川犬田兩勇士は、眞の莊介小文吾ならず、武者修行を做すものゝ那名を竊みて人を欺き、渡世の資助にしたりしに、その名の故に搦捕られて、首を刎られたりといふ、世評もこれあるにや。このこと倘寔ならば、三口の刀の相違したるも、理りにこそ候へ。と實事しやかに誘稟せば、大刀自聞つゝ呆果て、しからば刀のみならで、莊介も小文吾も、贋物にてありける歟。その風聲は外聞よからず。いふものあらば召拿て、向後を仡と箴めよ。返されたる三口の刀は、再覽るも忌しきに、津衞儛に取すべし。又荻野井三郎が、今番の計ひ神妙なり。然けれども勞せしのみ、功なきを爭何せん。この事聞えて白井殿（景春をいふ）より、問れずは告ずもあれ。祕めよ〳〵。と聳き示して、初由充が諫し折、用ひざりしを今さらに、後悔の色見えにけり。怎而由充は宿所に退りて、獨竊に思惟るに、今番石濱大塚殿より、返されたる三口の刀は、俺がいぬる比莊介と、小文吾に贈りし刀也。什麼何の間に引替て、那二犬士は、

其身々々の、刀を取りて走りけん。必是鄕武們が、擊れし折に二犬士の、料らずも遭際して、四下に人のなきにより、竊に刀を拿易たる歟、曩に二犬士が別に臨みて、俺們の兩刀の、再手に入る事あらば、便に就て這刀を、返しまゐらせんといひけるを、要なき言ぞ、と思ひしに、その言と行ひと、違はで這里に返されし、刀は俺亦料らずも、老夫人より賜りて、復俺が東西になりけるは、嗚呼奇なるかな奇也けり。これに就ても二犬士は、神物ありて祐くるもの歟。凡人ならぬを知るべきのみ。さてもさても、とばかりに、人に告ぐべき事ならねば、只肚に問ひ肚に答て、感嘆の外なかりけり。案下某生再說。毛野莊介小文吾は、那日哺時の比及に、青柳の驛なる、歇店に宿りを投め、浴湯し飲をたうべ果て、圓居をしつゝ過去來の、閑談數刻に及びけり。折から宿りを俱にすなる旅客もなかりしに、豈は眺し夜は糸を繰る、奴婢們に暇なければにや、夕饌果ては寄も來ず、欵待態の疎なりしを、犬士の興には却に、幸ひ也と思ひたる。小文吾先毛野に對ひて、曩に墨田河にて別れし折、毛野が乘たる柴舟に、趕著んと思ひつゝ、そが儘水中に跳入りて、波濤を凌ぎて泅ぎしかども、舟快ければ竟に及ばず、河上より漕もて來ぬる、別船に身を寓せて、料らず依介に遭ひし事、又市川の事、行德の事、毛野を索ねて鎌倉に、赴きし事はさら也。爾後も又艱苦を經て、越後の少千谷に旅宿せし折、莊介に環りあひし事、次團太丼に磯九郎が事、暴牛の事、酒顚二船虫が事、且莊介が智勇の掙き、酒顚二丼に手下の衆賊を、鏖にしたる事、又片貝の大厄難、稻戸由充が好意にて、死を免れし事の趣、千葉大石の兩東使、鄕武豐實が事さへに、首より尾まで、一事も漏さず說示して、和君は亦那折に、何處を投て走らしたる。這信濃路に流落ひしは、盤費竭たる故なる歟。と問れて毛野は頭を掉て、俺身に盤纏多からねども、その故にはあらずかし。乞兒に形貌を變せしは、なほ石濱の追捕を免れて、親の仇なる縲連が、所在を索ん爲なりき。曩に墨田河の頭にて、那柴舟に乘りし折、風波高く潮快ければ、舟を返すにちから及ばず、水際に立し和君のうへの、心にかゝるにあらねど、勢ひ既にせん術なければ、流に儘し艫を操りて、走らすること五里あまり、羽田の

浦曲に舟を捨て、舊里なれば相摸なる、犬阪村に赴きつ。願成院と嘆做たる、山寺なる住持の僧は、俺母の叔父なりければ、竊に其里に身を寓せて、躲處ること三稔ばかり。いかで諸國をうち巡りて、寃家を索ねて擊果さんず、と思ふ心の已がたかりしを、住持の允し給はねば、空に光陰を過せしに、去歳の十一月某の日に、住持の遷化し給ひければ、中陰閑し這春の、はじめに寺を辭し去て、京師に霎時旅宿をしつゝ、又引返して岐岨路より、諏訪の邊に露宿して、日を彌りしも亦以あり。寃家の面を認らねば、環りあふとも名告らずば、いかにして擊ことを得ん。世に人力の及びがたきも、心を盡して神佛の、冥助を祈らば成ことあらん、と思ふによりて處々の、神社佛閣にあふ毎に、祈念を凝さゞることなし。爾るに諏訪の片頭に、籠山と喚做す村あり。寃家の姓氏と相似たれば、こは遙東太緣連が、苗字の地にあらずや、と思ひつゝこの事の、當否を諏訪の神に祈りて、權且那里に在りけるに、思ひし事は空にして、思ひかけなき和君們に、環會ぬるのみならず、此彼共に一對なる、痣といひ又玉といひ、過世の契を知るに足れり。歡び是に優ものなし。這里に聚合し三人の外に、なほ同因果の弟兄あり、といはれしは什麼誰々なるぞ。是等の緯の本末を、具に知らし給ひねかし。といふに莊介膝を找めて、約は八名なるべきを、天緣いまだ熟せざるにや、方纔同因果の弟兄は、和君を加えて七名あり。その人々は恁々也とて、信乃道節が事、現八親兵衞が事、皆その素生本貫出處を、詳に說示して、恁れば這七名は、當に異姓の兄弟たるべく、俱に里見の家臣になるべき、過世あやしき因緣あり。その故は箇樣々々。と伏姫の自殺、八房の犬の事、金碗八道、大の事、幷に蜑崎照文の事、山林房八と、妙眞沼藺、文五兵衞の事、又濱路の事、世四郎晉晉、力二尺八、曳手單節の事までも、忠信孝烈、節操義俠の、行狀各〻差あれども、多く得がたき良善の、事の槩略恁々。と次第紊さぬ長談佳話に、小文吾も亦語を繼て、その足ざるを補ひし、言の葉果し夏の日ながら、はやくも暮て短夜の、更ゆく鐘は聞えねど、听漏さじとて額を鳩めし、毛野は連りに感激して、或は哀み或は歡び、或は微笑み或は呟く、千態萬狀われにもあらで、慷慨嗟嘆に堪ざりし、身に擒

て知る懷舊の、感淚眼包に餘りけり。

第八十二回

青柳の歇店に胤智詩歌を題す
穗北の驟雨に禮儀行裏を喪ふ

登時小文吾又いふやう、俺們が祕藏の玉は、原是里見治部大輔義實朝臣のお息女、伏姫上の臨終まで、おん衣領に掛させ給ひし、水晶の數珠にして、その數とりの八箇の玉、姫上富山に自刃の折、光を發ち輩颺して、往方はしらずなりしとぞ。件の數珠は姫上の、尙仏かりし比、恁々の事によりて、伎行者の示現あり。是感得の神物にて、就中八顆の大玉には、仁義禮智、忠信孝悌の八箇の文字、おのづから見れたるよし、曩に舊里に在りし時、、大法師に邂逅して、これらの緣故を听知りたり。伏姫の世を去り給ひしは、長祿二年の秋にして、今茲文明十四年、壬寅の夏までは、星霜二十四年を歷たり。恁れば俺們七犬士の、未生以前の事なりき。、大法師は當初、金碗大輔たりし時、伏姫上を妻せんと、義實思食たりしを、いまだ披露に及ざりし、長祿元年の事かとよ、伏姫富山に入り給ひて、遂に身まかり給ひしかば、金碗生は姫上の、菩提の爲に祝髮して、法名、大と喚做しつ、關の八州を行脚して、失たる玉を索んとて、飛錫に世を歷る程に、今よりは五箇年前、文明十年の夏の比、犬塚信乃、犬飼現八、某と俱に三名、件の法師と蜑崎生に、料らず名告あひし折、、大法師の索る玉は、是俺們が幼稚き時に、感得したる玉なるよし、皆その玉に見れたる、文字によりて知られたり。又只這玉のみにもあらず、各その身に痣ありて、形牡丹に似たりしは、那八房の犬の毛色に、類りたらんといはれたり。然ればこそあれ同因果の、犬士八名あるべきよしも、伏姫上は犬士の興に、過世の母ともまうすべき、緣故を詳に說諦されて、世に大諸侯多しといふども、犬士は必里見殿に、仕ふべき由緒明證あり。義實御父子は士にくだりて、賢を愛する明君也。誘給へ、安房へ相伴ん、といはれにけれどその折は、犬江親兵衞と俱に四名のみ、今より這餘の四犬士を、索巡りて具足せば、共に安房へ赴きて、里見殿に仕

へまつらん。且く寛し給ひね、と辭ひて從ざりければ、里見殿より賜るよしにて、沙金を多く惠れたり。這後犬山道節あり、今又和君を得たれども、七犬士にして一人足らず。又犬江親兵衞は、山林が獨子にて、四才になりける秋七月、神隱しとかいふ事にて、往方も知らずなりにたり。那身に恙あらざれば、今玆は八才になりぬべし。猶存亡を知るまでは、一箇は足らず、一箇は闕たり。何の時に具足せん。果しなき世に果しなき、旅宿は只この興なりき。といへば又莊介も、四下を見かへり聲を低めて、犬田犬塚犬飼が、、大法師に値偶せし折、某は大石家の獄舍に在りし程なれば、後に噂を聞たるのみ。恁而近曾石禾なる、指月院にて某も、又道節も、、大法師と、蜑崎十一郎照文に、環會ふことを得たる也。離合に時あり遲速あり。あはで久しくなりぬとも、八犬聿に具足して、素懷を遂る日なからんや。擲には進退火急にして、玉を見するに暇なかりき。俺們が祕藏の玉に、出處各異なれども、皆幼稚き時感得したる、その趣は恁々也。只母の胎内より、握りて生れたりけるは、犬江親兵衞のみ也とぞ。犬江は犬田が侄なれば、小文吾は最細しきを、某は傳聞のみ。獨犬阪生の祕藏の玉は、いまだ出處を詳にせず。そはいかにして得給ひたる、且俺們が祕藏の玉より、見せ進らせん。見給へかし。といひつゝ小文吾と共侶に、護身囊の紐解ひらきて、玉を取出て手に渡せば、毛野は徐に兩箇の玉を、掌に受載せて、燈光に寄りて熟視るに、現此彼一對にて、但その文字同じからず。義の字あり、悌の字ありて、彫れるがごとく鮮明なれば、感ずること大かたならず。先這兩箇の玉を返しつ、遽しく衣領を探りて、はやとり出す一箇の玉を、莊介と小文吾は、迭代に手に受て、見れば這には智の字あり。玉品通て異ならねば、奇也奇なり。と歎賞しつゝ、視果て毛野に返しけり。當下毛野は玉を斂めて、某が這玉は、未生以前に母親の、料らずして得たる也。俺母は父の側室にて、俺身は是その遺腹の子なりき。月滿れども、まだ生れず、懷孕既に三稔にして、粟飯原の家斷絶により、母は相摸の足柄なる、犬阪村に在りし時、點燭時候に外に出しに、忽然として流星に、似たる一隻の光物、南の方より晃めき渡りて、墜ると思へば俺母の、懷にぞ入にけ

る。世に多かるべき事ならねば、吐嗟とばかり駭叫びて、慌て懷を搔撈るに、大小老母草の實に等しき、潔白の玉なりければ、怪みながら宿所に還りて、又よく件の玉を見るに、玉の内に智の字あり。是人作の東西にあらず、おのづからに字體を做して、いと鮮明に讀れしかば、要あるべし、と思ひつゝ、軀て鍼匣に納指きしに、その夜初更の左側に、母は猛可に產の氣つきて、俺身を安らに產にけり。爾後玉の來歷を、母の手して寫著て、玉もろ共に俺が腰著の、護身囊に藏たりしを、稍物情を知る比に、辭恁々と母親の、說示し候ひき。恁る奇特のあるものから、寃家馬加常武が、嫌忌を怕れて某を、女の子に扮て宇育れしより、鎌倉に移住みては、梨園の隊に入るといへども、既にして復讐の、志移ることなく、年十三になりし時、父の諱の一字を取て、名を胤智と命せしは、所得の玉に見れたる、文字をも竊に表せし也。犬川犬田二兄の名乘も、玉の文字に由られし歟。と問へば、莊介小文吾は、共侶に點頭て、遺愛たき玉兒の由來、その趣は異なれども、その奇は自他皆異ならず。亦是不思議といひつべき。玉の文字を名に命ぜしは、俺們も亦爾なれど、和君と三名のみにはあらず、犬塚戌孝、犬川忠興、犬飼信道、犬江仁、這四名も忠孝仁信、各々玉の文字を取たり。いひ合さねど義兄弟の、名號一致は過世の應驗、求ずして成り、知らずして知る。一大奇事にあらずや、と只管稱へて已ざりしを、毛野はいよ〳〵感佩して、犬川生、その兩刀を、小篠落葉と名けしも、亦是緣故あること歟。と問ふを莊介聞敢ず、否這刀に名字はなし。某は只雪篠の、兩刀とこそ喚做たれ。刀の甄に家の服章なる、雪篠あるによりて也。然るを千葉家にありし時、小篠落葉と名けしならん。小篠は亦是甄の花號、猶雪篠といふがごとし。落葉の刀の刃尖に、些の疵あるをもて、如右名けしにやあらんずらん。といふに毛野亦感嘆して、その考は差ふべからず。しからば落葉の葉は刃也、刃の聊闕落たれば、落葉とは名けられしを、那鄕武がこゝろ得ゝに、そをもて人を斫るときは、時ならずして四下の木葉の、零ることありといひ誇りて、罪なき乞丐を砍棄しは、初鄕武に誨しものゝ、俑を造りし僻事なれども、奇を好みしより這失あり。乞丐也とて罪なきを、殺せば

惡事の報ひは覿面、鄕武主僕のみならで、そゝのかしたる豐實も、其里に命を隕したり。總て俗子の似而非推量には、恁る錯誤多くあり。世の胡慮にならんのみ。といへば莊介頷きて、那們は素より斗筲の小人、士君子の齒に掛るに足らず。初和君が這刀を、爭ひ給ひし擧動に、聊亦似たることあり。曩に犬山道節が、村雨の刀の手に入りし折、女弟濱路が枉死の末期に、そを犬塚に返せといひしを、道節はその名刀もて、君父の仇なる定正主に、近づきて擊んず、と思ひにければ承引ず。その折に某は、料らずも遭際しつ、刀をとりも復さんとて、道節と戰ひしに、もの別れになりて往方を知らず。これは是六月の、十九日の夜の事なりき。恁て七月の初旬、荒芽山にて道節も、犬士の隊たる因果を悟りて、刀を犬塚に返したり。然ば和君が這兩刀を、亡父の故主の重寶也とて、最惜み給ひしを、某は亦亡親の、紀念なれば、と爭ひしも、解けて早くも返されたり。給と云恰といひ、忠孝節義の外を出ず。倘這爭ひ徵りせば、異性の弟兄なるよしを、知らで路人に等しからんを、爭ひて和し、和して歡ぶ、造化の配剤妙なるかな。此彼似たるにあらずや。といふを小文吾うち笑ひて、似たりといはゞいひもせん。なれども趣同じからず。信乃現八が許我の組擊、又某に山林房八が角觝の遺恨も、初は怨敵、後は親愛、日を同くして語るべし。犬山犬阪犬川の、上にのみ豈限らんや。といへば、莊介もうち微笑て、寔に然也。と應たる、登時毛野は愀然と、莊介小文吾にうち對ひて、二兄によりて既に知る。犬山生は君父の仇たる、定正主を擊がたくとも、君と父とを害したる、越杉駄一、籠門三寶平、這兩敵を擊捕て、志は致したり。某は馬加常武、父子從類を擊たれども、父を害せし逸東太縁連をまだ得擊ねば、一ト日も心安からず。索る仇には週ずして、思はざりける鄕武們を、擊果せしは偶然也。これを譬はば唐山にて、張公が竊盜して、李公が綱めらるゝといひけん、鄙語にも似たりけり。何の日にか縁連を、擊ことを得て父を祭らん。やる方もなき心盡しを、察し給へ。とうち歎くを、莊介小文吾慰めて、霎時譚き相譚たる、小文吾は遽しく、行囊を解ひらき、金十兩をとり出して、莊介と共侶に、これを毛野に贈ていふやう、迭に宿望ある旅宿に

は、盤費こそ肝要なれ。某們は幸ひに、恁ても盤費に置しからず。勿論今日より後々まで、影の貌に添ふごとく、進退を俱にして、よろづを賄ふべけれども、然りとても腰空しくば、折々不便の事あらん。こはいと薄義に候へども、受納め給へかし。といふを毛野は推禁めて、そは淺からぬ事ながら、某も亦初より、聊盤纏の貯ありしに、願成院主の迂化の折、俗緣あるの故をもて、又十金の遺財を得たり。鄕にも既にいひけらし。形貌を乞兒に變せしは、盤費竭たる故にあらず。この義は心安かるべし。と推辭を小文吾莊介は、なほ懇切に推薦めて、そはその該で候はん。なれども悌順には親の遺財あり。又犬山道節は、軍用の餘財あるをもて、分與へられしも尠からず。里見殿より賜りし、沙金もいまだ用ひ果さず、剩いぬる日由充の、惠れし金もあり。多きを減して寡きに、加るは是理の當然。枉て這議に隨ひ給へ。と連りに諭して果しなければ、毛野はやうやく承引て、件の金を受とりつ、うち戴きて收めけり。當下莊介又いふやう、甲斐の石禾なる指月院には、、大法師住持たり。今那里には犬山道節、蜑崎十一郎も寓居せり。よりて犬田を伴ひて、指月院にゆかまく欲す。和君も共に那里に到りて、、大犬山蜑崎に、快對面し給へかし。と誘ふを毛野は承引ず、某とても那人々の、なつかしからぬにあらねども、索る仇にいまだあはで、迭に歡ぶ良友に、面會の興甲斐にゆきなば、是孝を後にして、義を先にするものに似たり。その義は折もあるべきに、今番は允し給ひね。と固辭を小文吾側より、恁いはるゝも理りながら、今とて寃家縁連の、所在を探り得たるにあらねば、甲斐へ赴き給ふとも、是孝道の虧るにあらず。百足の虫の死しての後も、その倒れざるものは、助け多きによりてなり。恁れば甲斐へ赴きて、料らず仇の所在を知る、よすがあらじといふべからず。且俺黨七犬士は、里見殿の家臣となるべき、二世の因緣あるものから、八犬こゝに具足して、俱に安房へ赴く日を、誰か今より前知せん。某們は犬塚犬飼、犬江這餘の一犬士をも、索ねて竟に環りあふべく、和君も寃家縁連を、索ねて本意を遂られん日を、安房へ赴く時と知るのみ。遲速の料りがたきこと、かくの如くなるものを、這處より石禾まで、二十里に足らぬ路なるに、何にか敎ふこ

とのあるべき。一圓那里へ赴き給へ。と辭を盡して說諭せば、毛野は且く沈吟じて、里見殿の仁政武德、伏姬上の孝烈義俠、この餘も忠臣義士節婦の、那行狀を傳聞ては、心裏恥かしきこの身の不肖、親にはいまだ孝ならず、友にも信を疎にせば、犬士の屑といはれなん。ほと〳〵當惑首鼠兩端、速には決斷しがたし。なほ又再四尋思して、翌の朝開に誨を受ん。且く等せ給ひね。といふを莊介諸なひて、いはるゝ趣理り也。霎時の程と思ひしに、夏の夜なればはや深たり。誘就枕るべし、ねまり給へ。といふに小文吾も强難て、然らば翌の事にせん。閨宅の男女は何の間に、臥房に入りし歟音もせず。軒さへあれば夜は安かり。いざ。とばかりに三枚の臥廐を、手々に開きつ、吊緒を引て、三人して吊る六布七布、萠葱の帳は色後て、八は過ぎたる曉に、枕ならべて程もなく、はや睡にぞ就きにける。爾程に莊介小文吾は、憶ずも熟睡やしけん。明るもしらで臥たりしを、旅舍の婢妾に喚覺されて、駭きながら共侶に、起出んとして傍を見るに、犬阪毛野はゐざりけり。他則へや登たりけん、と思ひにければ掛念せず。軒の下を搔揚て、出んとしたる莊介を、小文吾やよ。と喚止て、犬川生これ見給へ。犬阪が臥たる迹に、這東西あるをよく見れば、五兩包の沙金なるべし。しかも是三包あり。といふに莊介眉根を顰めて、原來毛野は復讐の、宿念を遂るまで、なほ單身であらんとて、潛に出てゆきたる歟。然るにても、這沙金を、遺されたるは本意なき事也。時移らずば趕留ん。といふに小文吾も今さらに、胸安からねば、推續きて、遽しく臥簟を出て、心もとなく緣頰の、這方に建し引亮障子を、見れば數行の文字あり。要こそあらめ。と共侶に、うち吟じつゝ讀くだせば、

凝成白露玉未全　環會流離儘自然

めぐりあふ甲斐ありとても信濃路になほ別れゆく山川の水

問でもしるき胤智が、件の沙金に相添て、遺せし詩歌と猜するのみ。燒捨たる追婚火盤の、浮炭をもて寫たればや、七言二句も、三十一字も、拂はゞ軟て滅つべき、字々咸鮮ならねども、こゝろは通て明なるを、莊介只顧感吟して、

犬田は何と思ひ給ふぞ。現胤智は孝子也。既に過世の因果を悟りて、異性の弟兄八名あるべき、ことをしこゝに知るといへども、なほ復讐の宿望を、果さん爲に見かへらず、飄然として立去りし、こゝろは詩歌に顯然たり。約貴きも賤きも、父母ありて後に兄弟あり、兄弟ありて妻子あり、妻子ありて子孫あり。こゝをもて孝悌・慈愛、并に輕重前後あり。孝は百行の基にして、必後にすべからず。忠信仁義も孝よりして、移して廣く行ふべし。胤智この義を思ふをもて、今俺們と共侶に、甲斐の石禾に赴きて、犬山に對面すればとて、八犬未だ足ざれば、這里の旅舍に異ならで、迭に意中を基さんのみ。身に大望ある故に、自餘の犬士を一チ日も、索巡らん暇はあらず。恁れば寃家緣連を、擊得て後に後安く、義をも盡さめ、信をも致さめ。その折までは己がしじ、逢遇離別に拘らず、成ことありて團圓の、時を俟んといへるこゝろを、這十四言の句中に籠て、凝成白露云々と、寫遺せしにあらずや。といへば小文吾點頭て、寔に毛野は才子也。某文辭に疎ければ、然までに了解せざりしかども、歌のこゝろはなほよく聞えて、理ならずと思はねども、既にして大かたならぬ、交りを結びながら、贈りし金を返せしは、面に從ひ後に譏る、浮薄の友と思へる歟。この事ばかり毛野に似げなし。恨むべし、うらむべし。と繰返しつゝ呟くを、莊介徐に見かへりて、然ないひそ。犬田生、熟思へば這金を、遺されたるも亦所以あり。他と咱とは義を結びて、異姓の兄弟なりといへども、金のみ受て咱が意に悖らば、貪るに似て潔からず。然とて金を返しては、又義を破る憾あり。この故に俺們が、贈りし金を受納めて、沙金三包を遺せしは、是贈答の禮にして、他より咱に餽りし也。昨宵の金を返すにあらねど、沙金は原是煉金より、その價廉ければ、這三包は十金の、答禮によく相當せり。恁てぞ受て貪らず、返したれども義をも破らず。智慧勝れたるものならずば、これらの事をよくせんや。恨むは要なきことにこそ。と諭せば小文吾百會を拊て、然听ては他に脫落はなし。和殿の細注徵りせば、兄弟墻に鬩ぐといふ、詩に似たる後悔あらんを、思はざりしは愚痴なりき。那犬阪が思慮深かる、石濱にて夜討の折も、文あり武ある至妙の進退、及び難し、と感ぜしを、忘れて腹

を立たりき。さこそ可笑しく思はれけめ。と陪話れば莊介含笑て、人おの〳〵得たる所あり。膂力は犬阪和殿に及ばず。智計は和殿いかにして犬阪に及んや。八行の內中智の字の玉を、得たる應驗のなからずやは。恁れば且く度外に措て、甲斐の石禾へ赴くべし。といふに小文吾然なり。と應へて、遽しく緣頻なる、戶を推開つ漱ぎて、身裝する程しもあらず、旅舍の婢妾がもて來ぬる、烹立の饌の早飯も、友を思へば又這里に、一箇缺たる三椀の、高裝飯に味噌羹汁掛て、見れば是さへ山川の、歌にも似たり三人前、なほあまりある壹餉の料の、割龍も俱に受取て、胸の憂也朦也いへばえに、いはで心に包錢、茶錢も添し房賃を、遞與していそぐ朝びらき、立出るとき莊介は、手拭をもて障子の文字を、拂へば滅て迹もなく、往方も知らぬ犬阪を、思ひ捨ても忘られぬ、昨宵の國坐、夢ならで、覺て悔しき鬱悒、胸と峯とに雲の集る、甲斐路を投て出てゆく。莊介と小文吾は、這地に毛野と相別れて、あはまく思ふ道節さへ、既に石禾の指月院に、在らずなりしを知ざれば、空だのめなる朝涼の、霎時こそあれ升る日に、堪ぬ酷暑を菅笠に、凌ぎて俱に久後は、且休題單表、犬村大角禮儀は、曩に（文明十三年）犬飼現八信道と共侶に、自餘の犬士を索んとて、居宅を捨故鄕を離れ、且鎌倉に赴きて、族宿に月を累ねしかども、些も便りを得ざりしかば、箱根山をうち踰て、伊豆駿河いへばさら也、遠三尾勢美濃近江、城下、郊外村落まで、這里に半年、那里に三月、旅より旅に光陰を送りて、はやくも二稔を歷たりけり。當下大角思ふやう、今玆の秋は亡妻の、三回忌に丁りたり。投かたもなき旅なれば、欝且故鄕にかへりゆきて、親の墓に詣づべく、且雛衣の菩提を弔ふて、ふたゝび諸國を巡るべし、と尋思をしつゝ恁々と、現八に相譚ひしを、現八听て異議に及ばず、しかるべし。と應しかば、此年の夏、六月の下澣に、現八と共侶に、下野眞壁の赤岩なる、舊里にかへり來て、所親の宅に寓居をしつゝ、實父母養父母、及雛衣が、墳墓の、苔を拂ひ香華を手向て、念誦に時の移るを覺ず。左右する程に秋にもなりぬ。却雛衣の三回忌には、璧返なる新道場に、僧を聚へ經を讀して、這法筵に列りたる、赤岩大村なる所親氷六們に、饗膳の儲あり。又現八が親糠介夫婦、養

家見兵衞夫妻の靈をも、這時共に祔祭りて、犬村犬飼兩施主たり。准備丁寧なりければ、里人總て感嘆して、招ざれども結緣の、道俗幾百名に歟及びけり。繹果て大角は、又現八と商議するやう、その名をのみ知る犬塚犬山、犬田も東國の人なれば、京師よりして西のかた、九州四國に杖を駐めて、光陰を送るべうもあらず。今番も亦上野より、武藏下總を徧歷せん歟、和殿のこゝろいかにぞや。と問へば現八點頭て、某もその念慮あり。下總の行德は、犬田が故鄕なるにより、曩に那里に赴きしに、小文吾は故鄕に還らず。曳手單節の往方すら、知るよし絕てなかりしかども、既にして光陰を歷たり。那文五兵衞翁は世を去りて、家さへ迹なくなりぬとも、ふたゝびゆかば便りを得ん歟、是も亦知るべからず。這度は且行德を、心當に首途せん。今さら猶豫することかは。といふを大角諾ひて、二稔以來一犬士にだも、得遇ざれば舊里へ、立よりたれど本意にあらず。一ト日も先へいそぐべし。と應をしつゝこの夕、赤岩犬村なる所親氷六們に、遽しく別を告て、その詰且現八と、共に這地を立去りけり。時に文明十四年（小文吾莊介が靑柳の歇店にて、毛野に別れしも是年なり）秋九月中旬なれば、日はいと短くなりしかど、なほ寒からず暑からず、只驟雨のしば〳〵なりしを、現八も大角も、旅宿に熟てものとも思はず。且下野なる宇津宮に、五七日杖を駐めて、彼此となく遊歷しつ、是より江戶へ赴きて、更に又行德に、到るべしとて共侶に、ゆくこと又只一チ日ならず、三日といふ未牌の比に、武藏州足立郡千住の鄕に程遠からぬ、穗北の畷路を過る折。驟雨猛可に降そゝぎて、笠宿せん家もなければ、現八も大角も、菅笠を傾けて、直奔に走りたる、そが中に現八は、路の小石に足を蹴かけて、霎時疼痛に勝ざりければ、思はずも大角に、二町許後れたり。とは知らざりし大角は、なほ只管に走る程に、背に駝ふたる行裹の、結理解けて後方なる、地上へ磯と落たるを、知らでや走る勢ひに、七八間ゆき過て、心づき歩を止めて、其方を急に見かへれば、跡より來ぬる一個の男子が、早行裹を掻攫ひて、逃んとせしを大角は、偸兒等。と喚かけて、裡拿へんとする程に、賊は舊來しかたへかへらず、忽地路を橫ぎりて、河原を投て逃走るを、大角はなほ脫さじと

て、驀地にぞ趕ふたりける。看官まづよく思ふべし。當時の千住河は、河の瀨今と同じからず。這河は是、墨田川の枝川なれども、素よりして小流にあらず。千住は河の東にありけり。昔は鎌倉より、陸奥のかたに到るに、田畑在より、川ふたつばかり渡して、千住に到り、石濱に到り、又石濱より、墨田河を渡して、須田村に到り、柳島に到れり。（長祿の江戸地圖には、阿佐谷ありて千住はなし。阿佐谷は今の淺茅原なるべし。長享の江戸圖には、千住ありて阿佐谷なし）これ三四百年前の、鎌倉街道なるよしなれども、いづれの川にも橋はなし。千住以西は、本街道にあらず。無下の村落なりしを知るべし。今をもて古の地理を論ぜば、舷に契して劍を求る如くなるべし。間話休題。

爾程に偸兒は、なほも連に逃走りて、はやく河原に到るとき、支黨なるべし、一個の癖者、最大きなる衣箱を、卸して堤に鶴立たり。當下件の偸兒は、那癖者を遙に見て、哥々拯へ。と喚かけて、堤に走り登りしを、大角は些も擬議せず、噫偸兒奴が其首より前に、脫るゝ路はなからんを、命惜くば裏を返せ。と罵りつ足に信して、透さずはやく趕近著くを兩個の賊は、よせ立じとて、開き合せし左右より、榮螺に等き拳を固めて、打んと競ふを大角は、右に受左に拄て、烈く當る修煉の拳法に、惱されても懲ずまに、左より組む一個の賊の、項を抓て揉返せば、右より携る已前の偸兒、利手を拿るを振拂ふ、卻含に弗と犬村の、襦衫の袖を曳斷たる、程もあらせず大角は、左右一度に投伏せて、刀の柄に手を掛れば、吐嗟と怕るゝ兩個の偸兒、立つ足もなく堤より、河へ炎と跳入りて、浮きつ潛りつ共侶に、泅ぐもはやき草頭蛇の、水を涉るに異ならず。瞬間に前面の岸なる、千本の蒹葭にわけ入りて、往方も知らずなりにけり。浩處に現八は、稍犬村の跡を慕ふて、後走に來る程に、驟雨ははや歇たりける。登時大角は、現八にうち對ひて、那偸兒の事の趣、箇樣々々と報知して、件の兩個の歹人は、世に畫蔗と歟喚做たる、小賊でありけんかし。此彼共に投伏せて、斫て棄んと刀の柄に、はや手を掛し勢ひに、怕れて河に跳入りて、泅ぎて俱に逃亡たり。爾るに某が行裏は、初搔攫ひて走りたる、偸兒奴が這處へ、もて來にけり、と思ひしに、方纔索るにあることなし。

擱に二賊と挑みし折に、蹴落して水に沈みし歟、しからずば那偸兒が、逃て水中に入る時に、又搔攫ひてもてゆきたらん。這推量に違はずば、驟びても空は起ずといふ、世の鄙語に似たりける、危窮の折にも竊偸に賢しき、手通魔に熟れしを爭何せん。只這損失のみならで、見給へ、襦衫の片袖を、曳斷離られてなくなりたり。是も亦蹴落したる歟、風に吹れて水中へ、自然と落て流れし歟。袖は惜むに足るものならねど、行裏には金もありしを。那偸兒さへ、俺東西さへ、拿も留めず喪ひしは、噫俺ながら遲鈍かりき。跡に遺るは這東西のみ。這衣箱は火家の賊が、先だちて這里にをりし時、そが傍にありしかば、是も亦何處よりか、竊取り駝ひ來て、霎時卸して憩ひしならん。現得失は皆時なり。前面に路なき這堤に、那偸兒を趕稠たる、甲斐なく東西を喪ひて、主も得知らぬ衣箱を、心ともなく拿留めしは、益なかりき。と呟くを、現八然こそ。と慰めて、某は先の程、雨に追れて走る事、幾もあらずして、路の小石に足を蹴かけて、思はずも後れたり。倘初より力を勠して、件の二賊を捕捉なば、行裏をば喪ふまじきに、悔て及ぬことながら、切て這衣箱の、主を索て恁々と、報知しなば陰德の、一端になることもやあらん。といふを大角うち聞て、その議寔にしかるべし。この儘這里に棄てゆかば、那偸兒們がかへり來て、再駝ふて走りやせん。今咱が東西を喪ひしも、人の東西を喪ひしも、その情詎か異なるべき。某は近村なる、家毎によしを知らして、主ありといはゞ將て來なん。和殿は足の疼みもあらんに、憩ひて且く等給ひね。と相譚果て遽しく堤を下んとせし折から、趕蒐來つる地方の莊客、その隊約十名あまり、手に〳〵棒を挾み、勢ひ猛く咄と嚔きて、既に近づく堤の頭に、大角と現八が立在たるを見出して、いよ〳〵競ふ訛聲高く、彼見よ賊は那首にをり。遣るな逃すな。と罵りて、前後を爭ふ血氣の壯佼、走らば擊ん、と二犬士を、はや犇々と拿卷けり。畢竟件の衆人が、大角と現八を捕稠たるは甚麼なる故ぞ。其は次の卷に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳　第八輯　卷之四　下套　終

八犬傳第八輯卷之五附錄

江戸麻布長坂のほとりなるまみ穴は、いと名だたる地名なれば、知ざるものなし。沾涼が江戸砂子に、雌狸穴と書たり。雌狸をマミといふ義は、何に據れるにやこゝろ得がたし。貝原益軒の大和本草には、貒をマミとす。篤信云、マミ、ミタヌキトモ云。野猪に似小なり。形肥て脂多く、味ヨクシテ野猪の如し。肉ヤワラカ也。穴居ス。其四足の指各五ツ、恰如ニ人手指。獵師穴ヲフスベテ捕レ之。行クコト遲シ。貒ハ貒の類ナリ。狗ニ似タリ。並ニ穴居スといへり。又本草綱目（五十一獸之二）貒の下に、稻若水和名を剿入て、マミとす。李時珍云。貒。豬貒也。貒。狗貒也。二種相似。而略殊。狗貒似ニ小狗ニ尖啄。矮足。短尾。深尾。褐色。皮可レ爲ニ裘領。といへり。かゝれども、和名をマミといふ獸はなし。益軒若水の二老翁、一は貒をマミと訓し、一は獾をマミと讀せしは、訛によりて訛を傳ふ、世俗の稱呼に從ふもの歟。今按するに、獾は和名鈔に載せず。貒は和名ミなり。和名鈔（毛群部）貒の下に、引ニ唐韻ニ云、貒（音端、又音旦、和名美）似レ豕而肥者也。本草云、一名獾狚（歡屯二音）といへり。獨野必大本朝食鑑に、和名鈔を引て、貒をミと讀たり。必大云、獾頭類レ狸。狀似ニ小狚。體肥。行遲。短足。短尾。尖啄。褐色。常穴居。時出竊ニ瓜果ニ而食。本邦處處山野有レ之。人多不レ食。惟言。能治ニ水病ニ。予昔見狀。然未レ試レ之。則難レ辨爾といへり。これらの諸說を參考るに、近來世俗のマミといふ獸は、ミを訛れるに似たり。是則貒也。又田舍兒は、これをミタヌキといふ。その面の狸に似たれば也。何まれミとのみは唱よからぬ故に、或はマミといひ、或はミタヌキといふにやあらん。かゝれば麻布なるまみ穴も、むかし貒の棲たる餘波なる歟。遮莫貒は大獸にあらず。よしやその穴ありとても、地方の名に呼べくもおもほえず。且貒をミタヌキと唱るは本づく所あり。是其頭の、狸に似たれば也。又貒をマミと唱るは據ところなし。何となれば、貒に眞鳥の二種なければ也。因て再案ずるに、麻布なるまみ穴は、元來貒の事にはあらで、鼯鼠ならん歟、と思ふよしあり。鼯鼠は和名モミ、一名はムサ、ビ也。和名鈔鼯鼠の下に、引ニ本草ニ云、鼯鼠（上音力水反又力追反）一名鼯鼠（和名毛美俗云無佐佐比）兼名苑注云。狀如レ猴而肉翼。似ニ蝙蝠ニ。能從レ高而下。不レ能ニ從レ下而上ニ。常食ニ火烟ニ。聲如ニ小兒ニ者也。かゝれば鼯鼠の和名は毛美なれども、いとふるくより、むさゝびとのみ唱たるにや。歌にはモミとよみたるものなし。萬葉集第三、「むさゝびは木ぬれもとむとあし引の山のさつをにあひにけるかも」と、よめるにて知るべし。しかれども、古言は多く田舍に遺るものなれば、昔東國にては、鼯鼠を、をさ〳〵もみといひしならん。その證は、今も日光山の頭にて、鼯鼠の老大なるものを、モモングワアといへり。モモンはモミの訛り也。グワアはそが鳴く聲なるべし。さてこの鼯鼠を、下野にてはもゝんぐわあと唱へ、武藏にてはまみといへるにやあらん。（まみはもみ也、マモ音通へり。）然らばむかし麻布長坂のほとりには、人家もあらで、樹立ふかく、晝もいと闇かりける比は、鼯鼠などの栖べき處也。故にまみ穴の名の遺れるにや。今も世人の小兒を權すに、なべてもゝんぐわあといふ也。鼯鼠の形はいともく、恐べき物なれば、まみ穴の名の高かりけるも、（今はこの穴なし。）是等によりて思ふべし。縱その穴に鼯鼠などの、棲たることはあらずとも、いとおそるべき穴なれば、土俗これをもみ穴とも、又訛りてまみ穴とも、呼なしたるにあらんかし。まみ（即もみ也）は則魔魅にも通ひて、是おそるべきの義也。（今もおそるべきものを、ももんぐわあといふが如し。）貒をまみといふよしは、方言なる歟知らねども、考る所なし。（安永七年の夏兩國橋の頭にて觀せたる、千年もぐらといふものは、即貒也。予も觀たり。鼯鼠にはあらず。）然るを若水の、獾をまみと和訓せしは貒と獾とは似たるものにて、共に穴居を做すなれば、貒の和名をミといふに、對へて獾をまみといふにや。しからばまみのまはまねにて、貒をまなぶの義なるべし。又愚說の鼯鼠は鼠類也。穴居する物ならずといふとも、怕るべきの義に憑らば、この名なしとすべからず。とにもかくにも麻布なる、まみ穴を眞名に書ば、鼯鼠に作りて、怕るべきの、義となさば妥當なるべし。

江戸の地名を誌せるものに、かばかりの考だもなきは、遺憾の事ならずや。抑本輯第七卷に、まみ穴の事あれば、此に愚考を附鉄して、下帙の引に代るのみ。

天保三年壬辰夏五月中浣

簑笠漁隱識

南總里見八犬傳 第八輯 卷之五

東都 曲亭主人編次

第八十三回

得失地を易て勇士厄に遇ふ
片袖禍を移して賢女獨知る

復說犬村大角は、犬飼現八共侶に、思ひがけなく莊客們が、推捕稠て擊んとせしを、こは何事ぞ。と許りに、驚きながら些も怯まず、齊一聲をふり立て、人々疎忽の所行をなせそ。俺們は是旅人也。素より怨もなきものを、認錯せば後悔あらん。といふをば听かでなほ囂々と、俱に鬪くそが中に、先に找みし兩三名、持たる棒を突立て、仡と疾視へつ冷笑ひて、噫偸兒の悍々しくも、這期に及びて分說听んや。鄕に若們が竊たる、衣箱は其首にあり、遂に免れぬ天罰なりき、とおもふて快く綁縛の、索に被らばなほ幸ひに、呵責の苦痛をゆるされん。然ずば目にもの見せんず。と勢ひ猛く罵れども、然しも騷ぬ二犬士の、面魂の逞しげなるに、腰に挿たる兩刀さへ、本事の程を料り難て、左右なくは僉打も蒐らず、なほ捕稠たるのみなれば、既にして便りを得たる大角は徐やかに、又衆人にうち對ひて、人人太く譟がずに、俺いふよしを聞ねかし。俺も亦向の程、穗北頭の驟雨に、逐れて連りに走りし折、背にしたる行裹を、盜兒に搔攫れて、趕つゝ這里に來にければ、そが支黨とおぼしき癖者、這衣箱に尻を掛て、堤の上に憩てをり。登時此彼兩個の賊は、近づく俺身を寄せじとて、推並び力を勵して、且く挑戰ひしを、矢庭に蹴倒し投伏せて、立ば擊ん、と刀の柄に、早手を掛し勢ひに、怕惑ひつ共侶に、そが儘河へ滾落て、泅きて前岸へ逃亡たり。爾るにかの折俺が行裹は、憶はず河へ蹴落せし歟、又盜兒が搔攫ひて、もてゆきたる歟、あらずなりて、迹に殘るは俺東西なら

ぬ。這衣箱のみなりき。といへば亦現八も、豫人にうち對ひて、各々あれを听れし歟。俺は聊足を傷りて、後れにければ那期にあはず、事果て這里へ來にければ、遺恨やるかたなかりしを、熟思へば這衣箱も、那盗兒們が、遠からぬ、里人の家などより、竊取てもて來にけるを、重くやありけんうち卸して、後れし火家を俟たる歟、是も亦知るべからず。主を索ねて返さばや、と俺も思へば俺友も、心はおなじ惻隱の、誠は然しも淺からず。現俺が東西を竊れしも、人の東西を喪ひしも、その情等しかるべきに、快近邨に赴きて、よしを報て主あらば、將て來つべし、と商量の、折なりけるに果して違はず、各々も亦那盗兒を、趕つゝ來ぬる事情を、既に推量したれども、情由も得听かで俺們を、疑るゝは田舍兒の、思ひ足らざる所以なるべし。恁まで言語を罄しても、なほ聽れずば是非に及ばず。武士たるものが盗賊の、濡衣を被せられて、阿容々々として田夫野人の、綁縛を受べきや。俺們二名死を見かへらで、大刀折れ勢ひ究るまで、擊ば千軍萬馬なりとも、煞麗けんこと疑ひなし。然るを況や農夫野老の、才に十名十五名、擊倒さんはいと易かり。可惜命を隕さんより、疑念を霽して這衣箱を、拿もて去ば俺們が、素より望む所也。迷ひを取らば必死は覿面、一人なりとも恙なく、還らんと思ふべからず。然でも挑む歟、爭ふ歟。と敦圉懲す勇士の奮激、刀の琫甘げて、寄らば擊ん、と睨へたる、氣色に憚る壯佼們は、それは。とばかり口隱りて、齊一後方を見かへれば、蓬し找め。那口車に、うち乘せられて逃すな。と弱腰推たる二隊の壯佼、なほも執念深羃めくのみ、爭ひ果しなかりける。そが中に一兩名、こゝろ得貌のものありて、罵り已ぬ壯佼們を、推鎭め聶きて、退かすること一反ばかり、大家其首に立聚ひ、額を集めて商議の、折々這方を見るもあり、頷くもあり笑もあり。既に商議し果たる、駁計の莊客二名ばかり、はや豫人に立別れて、穗北のかたへ走りけり。登時壯佼們を鎭めたる、件の莊客一兩名、堤の下に找み來つ、二犬士にうち對ひて、微笑ながら小腰を屈めて、刀禰達允させ給へかし。理も非も分ぬ壯佼們が、宣ふよしを思はずに、太く無禮を仕りぬ。と勸解れば現八大角は、共侶に點頭て、禰らば汝達俺們が、いひつるよしを信

容れて、僉疑ひを釋れし歟。と問かへされてさン候。その衣箱をもて來ぬる、盗兒の事の趣、宣ふよしをなほ疑ふて、又云々といふにはあらねど、いかにせんその衣箱は、小可們が衣裳にあらず、是東人の東西なるに、那盗兒們が何の間に歟、駝搭て逃げしを趕ども及ばで、手を空うせば術もなし。那盗兒を捕捉ずして、懋にその皮箱をのみ、拿もて還らば東人が、俺們をこそ疑ふべけれ。願ふは刀禰達小可們と、倶に東人の宿所に到りて、那盗兒の爲體を、面前に說知し給はゞ、初よりして小可們が、竊ざりしを會得せられん。這義を承引給ひねかし。と懇むを現八うち聞て、そはさる意味もありぬべし。什麼汝達の東人の、宿所は這里より遠からずや。原是豪家歟、村長歟。從類多くありながら、白晝に賊の入るをも知で、是等の東西を歟れしは、故あること歟甚麼ぞや。と再問へば、さン候。小可們が東人は、穗北梅田柳原這三鄕に名もしるき、氷垣殘三夏行と、喚做す鄕士で候也。內儀は曩に世を去りて、家には重戶と喚做たる、只一箇の女兒あり。三稔ばかりさきつ比、菜鮎餘之七有種といふ、壯佼を女婿にして、田園の業を任用して、その身は宿所に在る甲斐に、今朝しも背門なる積藏に、鼠の入りしを見出して、穿ちし穴を塞げとて、僮僕們に吩咐て、內なる東西を拿出さして、修復に時の移りしかば、生平より後れし畫飯を、皆たうべん、と思ひつゝ、跡には心づきなくて、霎時庖厨に退りたる、折を覘ふ盗兒が、背門よりはやく潛び入りて、出し措たる衣箱を、駝もてゆかんとせし程に、一個の小廝が則にをり、立出るときこれを見て、盗兒ありと叫びしかば、盗兒は這聲に、驚されて衣箱を、そが儘其首にうち捐て、慌たりけん背門へは走らず、庭を遶りつ枸橘の、藩離を潛りて逃亡たる、程しもあらず人も咱も、咸庖湢より走り來て、容子を問へば盗兒は、はや逃去て東西も取られず、折から猛可に降る雨に、出せし東西を濡さじとて、手に〳〵擡げて積藏へ、納つゝ見れば衣箱の、五箇なりしに四箇ありて、一箇は足らずなりにけり。原來件の盗兒は、一人ならず支黨ありて、他より先に入りたる奴が、はやく一箇の衣箱を、背にしつゝ逃たるならん。然とは知らず由斷して、聊時の後れしとても、遠くはゆかじ趕蒐よ、と罵譟ぐ闔宅の捫擇、主も

家頼も血眼に、なりつゝ詮議を做す程に、田園に出たる農奴們の、那驟雨に稲刈あへず、濡つゝかへり來にければ、主人は遺なく招聚へて、よしを示し部を定め、そが一隊は竹塚、一隊は梅田柳原、又小可們は千住のかたを、投て這首まで來つる也。恁いふ情由で候へば、那盗兒を捕捉ずして、衣箱をのみもてかへらば、そは東人に疑はれて、外より來つる賊にはあらじ、事の紛れに小可們が、竊てはやく滾す折、小断に見られて忽地に、穿鑿緊しくなりしかば、緯恁々といひ誘へて、駝もて返しつるならん、と思はれもせば身の與歹かり、小可們が東人は、年老たれども心ざま、いと勇悍くして武藝あり。且その皮箱に斂られしは、尋常男女の衣裳にあらず。鐵羅短衣肱甲鬧盾、皆是祕藏の武器なれば、一皮箱でも重價あり。うち見つるより重ければ、那盗兒が得堪ずして、打卸しつゝ憩ひしならん。恁まで具に告まつれるは、旅ゆく刀禰を推留めて、宿所へ伴ひまゐらする、緯皆自他の與なるを、やよや歹うな聞給ひそ。既に是等の趣を、注進の與壯佼を、二名宿所へ還したり。いかで〳〵と訛音に、諄かへしたる長談を、稍聞果し現八は、大角を見かへりて、犬村あれを聞給ひし歟。這輩の所望の一條、餘義なき情由にあらずや。といへば大角點頭て、現那程にいはるゝを、推辭ば後暗きに似たり。素より急がぬ旅なるに、非如十町二十町、立戻るとも厭ふに足らず。と應て軈て理會の、莊客們にうち對ひて、いはるゝ趣その意を得たり。那盗兒を認りしは、便是俺のみ也。俺が奪れし行裹は、拿も復さて人の東西を、拿止めたるそがうへに、後走なる各々の、證人に憑るゝは、寔に烏滸の所行なれども、前路を急ぐ旅ならねば、そは左も右もの事ながら、這衣箱を主人の東西と、正可にいへる證据やある。什麼汝達は從類歟、その名も聞まほしけれ。と問れて歡ぶ兩個の莊客、迭に見返り含笑て、宣ふ趣理り也。それ鬻せその衣箱に、漆繪したる抗豸の蝶は、迺氷垣の家の花號、紛れあるべうも候はず。又小可們は那家に、年來仕る老僕にて、他は小才二、小可は、名を世智介と喚るゝもの也。却東人は這頭にて、大かたならぬ威德あり。これにより奴婢們はさら也。穂北梅田に世渡るものゝ、皆その庇に寄らぬは稀にて、當所中興開發の、大財主にて候

也。噫益もなや虚々と、多辯に時の移りぬべし。誘おん案内を仕らん。といひつゝ後方を見かへりて、僉快來ずや。刀禰達の、承引せ給ひしぞよ。と喚べば大家應と答て、堤の下に找み來つ。已前の無禮を陪話るもあり。然らぬも俱に笑しげに、立並びたるそが中に、逞しげなる、一個の壯佼、堤に登りて二犬士に、揖讓をしつゝ衣箱を、楚と駝搭て立程に、大角も現八も、俱に徐に下立けり。登時世智介小才二は、彖人を二犬士の、前後左右に從して、氷垣の宿所へ案内をしつゝ、連りに路をいそぎけり。恁而現八大角は、穂北の莊に來て問へば、這里は字を操野と、喚做たる一邑にて、巷路を左へ一町ばかり、引入れたる有底坊に、一座の莊院あり。則、是氷垣殘三夏行の居宅也。但見ればば松柏の老たるが、幾株歟繁柱たる、南向に苛めしく、黒く貫高なる衡門を、扉廣に推建たる、左右には枸橘の樹墻を折遶して、裏面には玄關とおぼしき處、書院めきたる茅檐の、樹柱の間に見ゆるのみ。其頭は安定ならねども、門邊よりして十間あまり、這方に流るゝ細小川を、纍塹に取做して、席薦二枚許なる、古石碑の長やかなるを、そが儘橋にしたりしかば、渡るに中は絶ざりし、龍田の秋にあらねども、水上遠く吹風に、丹楓流れて濃薄き、波濤のよるべの綾錦、たゝまくしつゝなほ求食る、鳥は一隻か鶴鴿、尚乃者や渡りけん、雲井迥に落し來て、榎實群食む椋鳥に、鶫鵯うち雜り、噪ぐ下枝に掛藥の、出來秋見えて豐饒なる、三殘毎に餘りあれば、飽て匍匐ふ門の狗、夕辰作る鷄と、共に雌を喚ぶ鴿も、富に集る本邑の、長者なりきと猜したる、現八と大角は、前門より找み入りしを、世智介は這方へとて、玄關よりは請も登せず、母屋の外面をうち遶らして、庭の折戸をうち敲けば、内より一們の若黨出て、そは世智老僕にあらずや。と問へば答て世智介們也。那盗兒を趕走らして、皮箱を拿止め給ひぬる、旅人達を將て來にけり。快開てよ。といそがせば、應と回てそが儘に、找み近著き鎖を披きて、誘とばかりに二犬士に、揖讓をしつゝ先に立て、書院のかたへ案内をす。當時世智介小才二們、なほ幾名の莊客も、咸二犬士の後に跟て、俱に庭にぞ入りにける。爾程に現八大角は、又若黨に案内をせられて、雜貨庫の後なる、樹柱深かる細路を、推續きつ

つゆく程に、思ひもかけず共侶に、大地を禹斜と踏破りて、吐嗟と叫ぶ程しもあらず、愕然として仰反ながら、坎穽に陷りしを、後方に立たる衆人は、獲たりや應と走り寄る。そが中にも魁を爭ふ、壯佼のみぞ件の穴に、跳入り折重りて、現八と大角を、はや犇々と綱めて、宙に吊して推抗るを、上なる衆人受拿て、そが儘控と推居たり。登時現八大角は、怒れる聲をふり立て、蓬きかな莊客們、擲には言を巧にして、賺して這首へ誘引しは、這等の計較ある故賊。僞多きは愚人の本性、賊に等しき非義非法、今更に又若們に、道理を述んは無益に似たり。主人を喚びね、對面して、市虎の疑惑を言下に解ん。快喚ずや。と敦圉て、立まくするを牽禁る、壯佼們の後方より、小才二は世智介と、共侶に找寄て、現八と大角を、左見右見つゝ冷笑ひて、這盜兒們がそのざまに、なりながら俺東人に、對面を願へばとて、誰か怕れて執繃ぐべき。縱あはまく欲せずとも、御面前へ牽居なば、軈て手擊にせられんず。要なき頤を唇んより、覺期極めて念佛でも、唱て俟ね。と窘れば、世智介はいとゞしく、意氣揚々と二犬士に、うち對ひ髯搔拊て、やよ盜兒們、本事を知れりや。然らば末期の念齋しに、這鼻さまが名にしあふ、智慧を揮ひて衆人を、鎭めて首尾よく計り課せし、絆の手段を說示さん。鄕に俺們多勢なりしも、身に寸鐵を帶たるものなく、捍棒農具のみなれば、若們二名の兩刀に、捷を取る事易からず。毛を吹て疵を求んより、哄すに如じ、と尋思して、いはるゝよしの搗鬼なるを、知りつゝ陽には承引て、はやく宿所へ人を走らせ、却東人に絆の由と、計略の趣を、報知し稟せしかば、這里にもはやく准備あり。造措れし坎阱は、近屬倉廩の修復により、這頭の壤を穿取られたる、迹そが儘にあるをもて、思起せし俺妙計。穴の上には薄板を、並べて壤を掩させたれば、絆立地に成就して、重て骨を折るまでもなく、思ひの隨に這個穴に、陷れつゝ生拘りたり。現若們が打扮は、旅ゆく武士に似たれども、出沒不測の盜兒にて、なほ支黨のあるならん。鄕には竊みし衣箱を、傍に措つゝなほ怯まで、いひ瞞めんと欲したる、かの折の擧動、物のいひざま面魂の、外物に似げなき大胆不敵、いと怕るべき辭者也。思ひしるや。と罵るを、大家急に推禁めて、世智

刀禰和主の捍にて、捕捕たる盜兒也とて、談義は要なし、東人の、寢刃磨して俟給はめ。快牽立て往ずや。といふに世智介頷きて、寔に然也快せよ。といそがし立て皆共侶に、庭の假山うち邁り、はや二犬士を書院なる、緣頰近く牽居けり。然ども現八大角は、いよ〳〵怕るゝ氣色なく、左ても右ても這衆人に、理を演虛實を辨ずるとも、炭氷合ねばなか〳〵に、頑愚の惑ひは解がたかり。主人の對面せん折を、俟んずものを、と思ひたる、心は同じ勇士の窮阨、默然として爭はず。犬川大田が去歲の夏、那片貝の別館にて、力士に捕捕れしも、恁ありけん、と後に知る。此彼寃屈の綁縛繩、孔子も陽虎に似ざりせば、陳蔡の阨あるべからず。白龍魚腹をせずもあらば、余且の網に入るべからず。梅蕾春に魁てば、霜雪且これを痛めて、後に微妙の香あり。豪傑未だ時を得ざれば、造物連りに阨に遇して、終に一世の功名あり。看官下まで讀も果さで、こは片貝の一段に、似たりとおもふもあらん歟とて、作者の自注を下すのみ。水滸西遊に見えし重復と、異なるを知る人は知るべし。間話休題。却說當家の主人と聞えし、氷垣殘三夏行は、鄕に盜兒を捕捉よとて、從僕農民此彼となく、許多の人を部して、四方へ出して趕せしに、千住のかたに赴きたる、世智介と小才二が、火家の壯佼二名をもて、內通によりこゝろを得たれば、猛可に坎穽を造らして、今か〳〵と俟程に、世智介們は兩個の賊を、欺詐りつ俱して來て、計りしごとく件の穴へ、陷して捕捕たるよしを、はや若黨が報しかば、掌をうち鳴らし雀躍したる、這夏行はよるとしの、齡も既に長濱の、七瀨過ても生憎に、なほ風波の立騷ぐ、亂れし世とて衰へぬ、武勇の魂人に捷れて、最も逞しかりければ、肚裏に思ふやう、俺知る四下は盜兒も、怕れて徘徊することあらじ、と心寬せし由斷は大敵、しかも靑天白日に、潛入て東西を竊みし、其奴們を今斬て棄ずば、何をもてこの後を懲さん。往る比購得たる、新刃を鋒すに究竟なる、東西を獲たり。と歡びて、准備をいつゝ等程に、老僕世智介小才二は、拿復したる衣箱を、一個の壯佼にうち駝して、衆人と共侶に、犬飼犬村二勇士に、麁繩被て牽立來つ、先衣箱を緣頰に、うち卸さして聲高やかに、大老爺まします歟。計りし如く盜兒を、捕捕て候ぞや。出させ給へ。

と喚りけり。登時主人夏行は、嚮に折戸を開きたる、那若黨某甲に、斬柄掛たる刀を持して、緣頰近く出て來ぬるを。現八と大角は、瞬もせず熟視るに、最堅固なる老人にて、皎々たる頭の霜は、枯野の小草を紈ねし如く、骨立たる松の膚は、深山に立る柚木に似たり。赭石なす面の色、二星を欺く眼の光り、齒は瓠仁に似て、一枚もいまだ脫ず。腰は梓の弓ならで、猶反るべくも見えざりし。身には段々筋を染做たる、仁田山紬に、厚綿斂たる衣を被て、緯組の圓帶を、腰高に結びたる、上には煤竹色なる道服を、下短にぞ被領したる、その爲體田舍備て、鳥なき島の蝙蝠歟、羽織はいまだなき世にも、胸毛も紐と組糸に、管を串たる片襷、斜に掛て苛めしき、武弁氣質の起居も暴く、四下を睨て立たるを、大家敬ひ跪く。そが中に世智介小才二、二個の老僕は笑しげに、頭を擡げ膝を找めて、大老爺御覽ぜよ。貂去られし衣箱は、千住堤の頭にて拿復し候ひき。又這兩個の盜兒を、稍宿所まで誑引寄せて、穿に掛て生拘るまでの、計の趣は、嚮に注進の爲まゐらせたる、壯佼們が口狀にて、大抵知らせ給ひけめ。捕捕たる盜兒們は則これで候。といひつゝ傍を見かへれば、夏行屢點頭て、思ふに優たる若們が、けふの掙きいと愛たし。俺本邑に卜居して、地をひらき農を勸め、穗北梅田柳原の、三鄕を再興せしより、既にして四十餘年、上に仕る領主なく、下に叛る民あらず。今戰國の沿習にて、耕すものも刀を跨へ、耘るものも戟を携へ、畎畝に妻子を養ふものから、皆是武嚢に疎からず。就中俺三鄕は、人の心一致して、勇敢なるは義を守り、質朴なるは足ることを知れるを以爭ひなく、夜は鎖ねども盜賊入らず、路に遺せし東西を拾はず。併俺武勇の致す所と遠近人に、羨れたりけるに、近屬河より這方にも、盜賊ありて徘徊す、と告るものゝありしかど、搗鬼ならんと思ひしに、その言果して違ずして、人多かるに俺宿所を、賊の土足に汚さして、剩武器を貂れては、名實是より衰へて、鄕鄕人に侮られん。世に安からぬ事なれば、彼此へとて部して、趕せしものゝ吉左右を、獨俟不樂たりけるに、西北南三方へ、遣したるはいまだ還らず、然るを東へ出したる、世智介小才二一隊の、才覺により逸早く、手剛かるべき爾賦を、誑引よせて生拘

たる、大功賞するに餘りあり。見るに其奴們兩名の、面魂は惡棍めかず、打扮も亦異樣ならねど、則是外視來歟く、老賊の致す所、出處姓名舊惡まで、招道させて頸擊落さん。程よき處へ牽居よ。快々せよ。と性急なる、武勇に誇る倚老の決斷、承りぬ。と莊客們、又立かゝりて二犬士を、牽分んとしたれども、現八も大角も、立たる儘に動ねば、噫戾かしや。と世智介小才二、身を起し來て二犬士を、推退けん、と左右より、找むを早く引外す、現八と大角は、いひ合さねど勇士の奮激、足を飛して碾と蹴る。蹴られて世智介小才二は、苦と一聲叫びもあへず、此彼齊一身を轉して、三間あまり左右なる、庭樹の幹に投著られて、腰を折かし腕を傷りし、苦痛に堪ねば蠢動くのみ、早には起も得ざりける、本事に懲りたる衆人は、舌を掉ひ目を注して、重て近著くものもなく、取たる索を放さじ、と思ふばかりに阿容々々と、四下を圍みて戍りたり。登時現八大角は、仞と夏行にうち對ひて、和殿は當家の主人よな。その姓名は衆人の、告誇るにより聞知りたり。菽麥をだも辨ことなき、蒙昧愚痴の僕從は、謬て俺們を、疑ふことのありとても、絆の虔實を問糾さで、俺們をもて不良の人とせらるゝは、是甚麽なる道理ぞ。知ずば具に說示さん。膝を找めてよく听ね。俺們も亦盜兒に、行裏を奪れたり。その故は箇樣々々。と告るを夏行聞敢ず、怒れる辭をふり立て、噫盜兒們が悍々しくも、筋なき虛談を正しげに、いひ瞞めんと欲するとも、其頭の事は壯佼們が、注進により俺も亦、總て遺なく聞知たり。今さら詞を巧にして、懸河の辯に儘するとも、證人なければ誰かは信ん。今その口を鉗すべき、正しき證據こゝにあり。天罰思ひしらずや。と罵りながら遽しく、懷を搔撈りて、出す襦衫の片袖を、引伸し又拿抗て、やをれ盜兒これを見よ。然こそは胆の潰るゝまでに、駭きもせめ悔しく思はん。是等の事は衆人の、知らざるべければ說示さん。皆共侶に听ねかし。鄕に這盜兒們が、小斷に趕れて逃し折、慌たりけん枸橘の、樹墻を推破りて、潛り出んとせし程に、襦衫の袖を枸橘の、下枝に縫れて引斷離りしを、そが儘にして逃亡たる、迹に遺りし這片袖を、俺見出せしは驟雨の、天霽亘りし比なりき。おもふに必其奴們に、襦衫の片袖なきものあらん。

衆人心つかずや。と問へば大家さん候。剛才這奴們兩人を、細る折初て見たり。左に立たる盜兒の、襦衫は斷離れて片袖なし。しかも此彼相似たる、淺葱木綿で候。といふを大角見かへりて、人々知ざる所あり。俺這襦衫の片袖を、喪ひつるは堤にて、兩個の賊を捕へんとて、挑みし折に引斷離られしを、風に吹れて川へや落けん、索しかどもあらざりき。といはせも果ず夏行は、呵々とうち笑ひて、恁迄證据分明なるに、尙爭ふは無慙の癖者、骨を拗ぎて招道させん。跪ずば毆倒せ。噫手寬し。と敦圉けども、既に懲りたる衆人は、承りぬ。と答るのみ。又近づきなば蹴られやせん。棒もて足を拂はん歟。左してやよけん右せん歟とて、困じて進み難しかば、夏行いよ〳〵焦燥て、いふかひもなき弱虫們が、多寡の知れたる兩個の賊に、今さら怕るゝことやはある。譬ば保輔張樊に、捷れる勇あり術ありとても、重索掛て綱めたれば、檻の獸に異ならず。俺せんやうを見よやとて、後方に侍る若黨に、持せし刀を搔拿て勢ひ猛く緣頰より、走下んとせし程に、思ひがけなき屛風の背に、竊聞したる女子あり、忽地に聲をかけて、やよ等給へ家尊の大人、稟すべき事侍るなる、權且等せ給ひね。と喚禁めつゝ遽しく、屛風の端を搔遣りて、見れ出しは別人ならず。いぬる年招壻して、落魄餘之七有種に、妻せたりと聞えたる、主人殘三夏行が、獨女兒の重戸なり。當下重戸は緣頰に、跪きつゝ父に對ひて、喃爹々公、恁稟さば、淡き女子の身の程をしも、思はぬまでに舌長しとて、叱らせ給ふ歟知らず侍れど、盜賊詮議の御聲の高さに、胸安からねば端近う、出て已前より那里にをり、一五一十を聞もしつ、闕窺もしつ、しかすがに、思へば疑ひなきにも侍らず。人の心の好歹は、相貌によらぬものながら、捕捕られし旅人達は、ものゝいひざま人柄さへ、竊盜をすべきものに似ず。勿論斷離れし襦衫の袖の、這里に遺りてあるからは、左ても右ても動きなき、絆の證に似たれども、那人々も堤にて、趕稠たりし盜兒の、爲に引れて片袖を、喪ひにきといはるゝが、實事なりせば那身に賓緣る、是禍鬼の所爲なるを、よくも思はで只管に、懦りておん手にかけ給はゞ、最憐むべき事にして、後假其首に立がたかり。是等の虐實を糾すべき、證人は外ならず。絆の始に盜兒を、

見出せし小斷の還るを俟て、那人々を見せ給はゞ、墻を潛りて逃亡たる、盜賊は那旅人歟、別人なる歟立地に、おん疑ひを解るべき、捷徑にこそ侍るめれ。既に這義をおもふをもて、禁めまうすは名も知らぬ、那人達の興のみならず、罪疑しからものを、殺せばその子、孫の世まで、祟を受るといふことの、物の本にも侍らずや。賢慮を旋し給ねかし。と理りを演義を推て、獨惑はぬ賢女の諫言、耳に逆へど夏行は、然しも恩愛父女の情、腹も得立ず諸ひもせず、見かへりながら冷笑ひて、憐むまじきものをしも、愍むは是婦人の仁、いはるゝ隨に做すならば、讐に刃を借すに似て、世の胡慮にならんのみ。墻を潛りし盜兒を、認し小斷は得手吉也。他は南へ遣したる、一隊の追捕と俱に、まだかへらねど、還るを俟て、見するは易きことながら、正しき證据の片袖あるを、棄て今さらいかにぞや。二十に足らぬ小猴子の、一言隻句を取るよしあらんや。朝の炊の多き寡き、或は衣の脩き短き、費を厭ふて云々と、いふこそ相應しかるべきに、傍痛き女子の裁判、益なき意見は聆く耳あらず。快々立ね。と窘るを、重戸はなほも推返して、然迄に思召ならば、力及ず侍れども、餘之七刀禰もいまだ還らず。況やけふは母刀自の、忌日なりしをおん憤りに、紛れて忘れ給ひし歟。いかで翌まで呵責を禁めて、那儘繫措き給はゞ、遂に虛實の安定に知られて、御後悔あるべうも侍らず。這誼は一入願しきを、允させ給へ。とうち陪話て、浮世の秋を身に占る、脆き涙の夕露や、茨が下の女郎花、くねらで直く怜悧さを、側聞する二犬士は、憶ず目と目を對するまでに、竊に感じて、十室の邑にも、忠信ありと思ひけり。爾ば悍かる夏行も、言の道理に迫られて、沈吟ずること半晌許、やうやくに頷きて、やよ重戸、いはるゝ趣宴に由あり。日屬萬事を任したる、有種もいまだ還らず。且亡者の命日忌辰に、非如罪人なりとても、殺すは要なき所行なるべし。恁れば爾の願ひに儘して、翌まで一室に閉籠措ん。涙脆きも折にこそよらめ、そを泣く事歟。と慰めて、外面見かへり、やをれ衆人、いひつるよしを聞たらん。その盜兒們を那里なる、盆樹室に閉籠て、緊しく鎖して、一兩名、迭代にうち戍れ。又那奴們が兩刀と、只一箇なる包裹は、重戸且く預り措て、有種がかへりなば、よしを

告て見せよかし。倘毫ばかりも憐愍を、被なば俺女兒にあらず。然ることあらば仇と思ん。衆人も恁こゝろ得て、等閑にすべからず。其頭の事を做し果なば、僉共侶に奥へ來よ。賞祿に酒を飲せんず。太義々々。と勞ひて、引提し刀を若黨に、持して奥へ退るにぞ。若黨も亦身を起して、主の後にぞ從ひける。爾程に衆人は、二犬士の兩刀と、裹を重戸に遞與もあり。又綠頰なる衣箱を、積藏に斂るゝもありて、這餘の壯佼幾名歟。おそる〳〵索拿縮て、二犬士を牽退るに、現八と大角は、既に重戸が心操の、世に捷れしを竊に感じて、胸膈豁け怒氣理り、奮勇初に似ざりしかば、俱に時運を天に儘して、恁ても再爭はず。牽るゝ隨にうち連立て、盆樹室に赴くを、人僉送るそが中に、世智介と小才二は、撲傷に堪ず捍棒を、杖に衝つゝ足引の、山あり水ある庭ながら、二三十歩の程をしも、人な笑ひそけふばかり、千町を過る心地す。と呟きつ面を醜めて、怨しげにぞ辿りける。

第八十四回

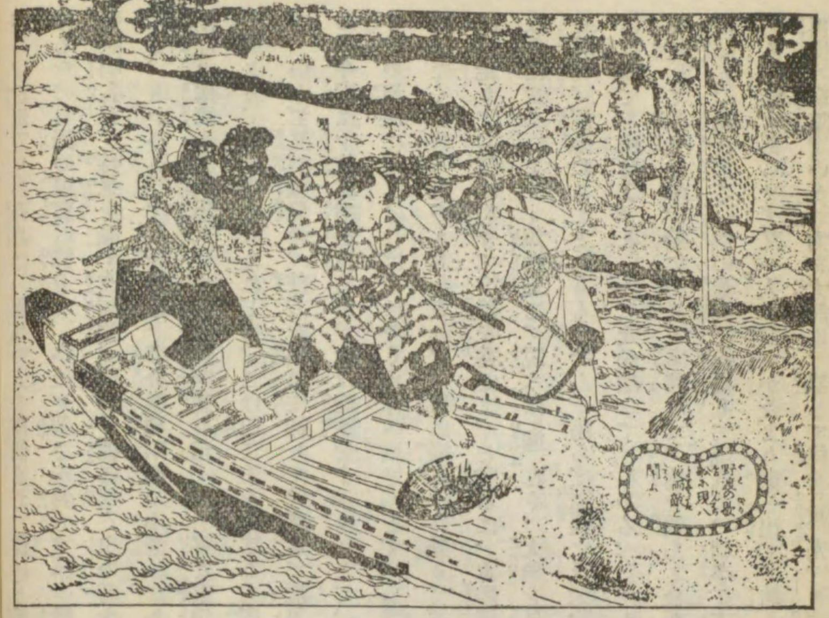
夜泊の孤舟暗に窮士を賁く
逆旅の小集妙に鄕豪を懲す

秋の日なれば短くて、はや黄昏になる隨に、奥に吹擂めく衆僕の醼會、主翁と一席でも、恩賞免許の盃なるを、今這折に喫ずもあらば、何の時を期すべきやとて、迭に挑む獻酬に、沙量も浮れて高笑ひして、酒菜を暴す猫脚の、折布空しくなるまでに、啖盡して又啖ふ、箸さへ暇なかりけり。然ば重戸は折を得て、獨奥より出て來つ、四下を屢見かへりながら、携へたりし袱包を、且書院なる綠頰の、戸袋に推隱して、外面見出す聲潛やかに、夢介壁藏其首にやをる。快々來よ。と喚立れば、盆樹室の頭に土居て、張番したる兩個の小廝は、應と答て共侶に、遽しく出て來ぬるを、重戸は招き近づけて、やよ夢介よ、壁藏よ、爾二名は盃を、手にだも拿らぬ沙量なれば、巢衞にせられて徒然に、堪ずや東西の欲しくなりけん。然とて奥では酒宴の、最中なれば誰もかも、代らする人はなし。這里は那里を目融して、遠くもあらぬ程なれば、俺身が這里より見つゝをらん。はやく庖温に赴きて、夕厥たうべて來よかし。

といはれて歡ぶ夢介壁藏、含笑ながら手を揉て、そは忝き御心操、仰に悖るべうはあらねど、倘大老爺に知られなば、等閑也とて叱られん。影護きは這事のみ。といふを重戸は聞あへず、其頭の遠慮はせずもあれ。爺々公の叱らせ給ふとも、俺身が口を鉗みてをらんや。好も歹きも這身のうへに、あるべきものを快ゆきね。やよいなずや。と急せば、いよ〳〵歡ぶ夢介壁藏、然らば仰に從ひまつらん。いかで宜くよろしく。と憑む詞の露の間も、重戸は心いそがれて、出し遣りつゝ、戸袋なる、袱包を搔拿抱きて、閃りと下たる綠頰より、はやくも傳ふ卷石に、裳引して潛やかに、盆樹室に近著て、帶の間に隱したる、鍵を取出つ、戸を推開きて、恭〳〵しく二犬士に、うち對ひ聲を密めて、事急なれば、詳に、告まゐらする暇も侍らず。禰に奴家が父親に、いひつるよしを聞給ひけん。竊に出てゆき給ひね。おん身達の兩刀と、行裹は這里にあり。快々出させ給ひね。といひつゝ軈て二犬士の、綁縛の索を解捨れば、驚きおもふ現八大角、多く得がたき賢女の慈善に、且感じ且躊躇て、言語齊一答るやう、思ひがけなきおん身の明察、俺們を那賊ならず、と知られて放遣るゝとも、主人はさら也衆人の、無明の醉の醒ずもあるを、この儘にして身を隱さば、何の日にか恥辱を雪ん。かくの如きは武士たるものゝ、最も恥べき事なれば、今さら敎に從ひがたかり。這義を猶し給ひてよ。と推辭むを重戸は聞あへず、宣ふよしは然ることなながら、懲に道を守りて、死を待給ふは疎鹵なるべし。恁いはゞ奴家さへ、なほ疑ふに似たれども、非如おん身に惡事ありとも、奪去られし衣箱を、とり復したれば這里に損なし。然るを執念深頑に、斬んといひし父よりも、良人は心いよ〳〵悍かり。今にもあれかへり來て、よしを聞かば忽地に、怒りて屠殺をいそがさん。その折奴家が諫るとも、いかにして聽るべき。恁れば霎時暗からぬ、身を暗して近鄕に、杖を駐めて密々に、又那賃の盜兒の、所在を索ね生拘て、親と良人に見せ給はゞ、その折にこそ疑ひ解て、俱に先非を悔侍らん。這義を思ひ給はずや。といはれて悟る現八大角、共侶に歎賞して、遯微妙き賢女の敎誨、いはるゝ趣皆理あり。遮莫敎に從ひて、俺們這里を出てゆかば、咎おん身のうへに及ん。身を殺して仁を做す、義俠

なりとも俺們が、心にこれを忍んや。といふを重戸は推返して、その義も豫て思念あり。願ふはお身達這室の、壁を内より突毀ちて、背門より出てゆき給へ。奴家は又這室を、鎖して髪をふり亂し、倒れて人の來ぬるを俟ん。これにより親も良人も、皆うち駭き走り聚ひて、喚活てよしを問はゞ、奴家則詭りて、室を戍りたる小厮們に、夕飯をたうべさせん、と思ふによりて曇時の程、奴家が代りて緣頰より、那里を目戍りて侍りしに、那旅人們は術やありけん、室の内にて綁縛の、索を解捨壁を毀て、出て這方へ來にければ、奴家は吐嗟と駭きて、人を喚んと身を起す、程もあらずはや近づくを、推禁んとせし折に、胸を撲れて緣頰より、落て黑白も知らずなりにき。思ふに件の旅人們は、鄰に奴家が次の間に、措たる刀と行裹を、探拿て逃亡し歟。黄昏時の事にして、奥には酒宴、庖湢には、烹炙に暇なき折なれば、今まで人の知ずやありけん、危き事でありけるよ、といはゞ必實事にせられて、奴家に咎めなかるべし。快々壁を。と急したり。女子に稀なる思慮才幹に、現八も大角も、いよ〳〵感じて推辭に由なく、然らばその意に任せんとて、袱包をうち開きて、手に〳〵とり出す兩刀を、腰に佩たるそが中に、現八は行裹を、駝ひつゝ四下を見かへるに、盆樹を擔ふ朸あり。是究竟と拿抗て、力を極めて室の壁を、突摧くこと三尺ばかり。又大角も手傳ふて、緯よく拵へたりければ、共に重戸にうち對ひて、再生の恩、知己の義を、演る間なき辭別、猶豫して人に知られじ、と思ふ心のいそがれて、詞短き秋の日の、暮て隈なき月影は、潛ぶに便り蘆垣の、蔭に添ひつゝ出てゆくを、重戸は霎時目送りて、手ばやく室の戸引よせて、鎖しをしつゝ緣頰の、頭近くかへり來て、鬢搔亂し櫛笄を、捨て地上に臥てをり。當下重戸おもふやう、いかなれば家尊の大人は、勇悍を旨とし給ふのみにて、人の虚實を猜することの、思足らずやをはすらん。縱襦衫の片袖の、此彼似たることありとても、いかにして那人達が、眞の盗兒なるべきや。倘亦眞の盗兒なりとも、奪去られし衣箱の、舊の儘にて復りしかば、只その罪を罵懲して、追放ち給ひなば、茲悲ある人といはれんに、諫めて用ひ給はねば、已ことを得ず胆太くも、女子に似げなき計ひは、罪怕るべきことな

がら、亡母刀自の命日に、必死の人を兩個まで、救はゞ追薦冥福の、よすがにならん、と見し夢に、奇しき敎のありけるを、日屬の氣質に憚りて、いはで親さへ良人さへ、欺くまでの不正事、允させ給へ、と胸にのみ、思ひつゞけて彌陀唱名の、持念を凝す夕間曛、庭の千種に鳴く虫の音を、枕に聞つ濕冷に、痞發りてすべをなみ、鄰には夕飯たうべよ、といひ誘て退けたる。夢介壁藏兩個の小厮の、かへり來ぬるを今さらに、いと〳〵遲しと思ひけり。話分兩頭。爾程に犬飼現八、犬村大角兩個の勇士は、賢女重戸が惻隱忠恕の、資助によりて必死を免れ、氷垣が宿所の背門邊より、竊に走去りたれども、こは已ことを得ざりし所行にて、武士たるものゝ本意にあらず、と思へば迭に聶きて、いかで又那盗兒の、往方を索ね生拘りて、牽もて這里に歸來て、主僕の惑ひを解ずもあらば、何の日にか恥を雪ん。今宵は千住に宿を投めて、なほ商議をすべけれとて、連りに路次をいそぎてぞ、夜はまだ五鼓にならざりしに、千住の河邊に來にければ、はやく前岸へ渡さんとて、屢船を喚たれども、夜川は渡さゞりけるにや、這方の岸には船もなく、答るものもあらざれば、俱に堤にうち登りて、彼此と見亘すに、一町あまり河上に、苫葺たる船ありければ、走りて其首に赴きて、船を寄せよ。と喚るに、水際近く繫ぎたる、船のみにして人在らねばや、寂寞として答もなきに、心いよ〳〵焦燥たる、現八は遽しく、大角を見かへりて、這里にも筒師處らずとて、猶豫せば氷垣が多勢を將て、趕來ぬることありもやせん。爾らば難義に及ぶべし。俺那船に乘移りて、漕寄せて和殿と俱に渡さん。水際に找みてをはせよ。といふに大角頷きて、しかるべし。と答しかば、現八は腰刀に、兩手を掛つゝ身を跳らして、岸を離れて歇りたる、船に閃りと乘移りて、篙を拔んとせし程に、船苫の内に人ありて、盗兒等と喚禁めて、苦推抗つ猛然と、見れ出る一個の暴男、走蒐りて現八の、利手を丁と扼るを、こゝろ得たり。と身を淪して、振拂んと角ひたる、程もあらせず又一人、左のかたより衝と出て、組んと找む左右の掙き、這方の岸には大角が、うち見て驚く、再度の窮阨、いかで力を犬飼に、勠して仇を拉ん、と思ふもかひなき陸と水、淺瀨を索て彼此と、走入らまくしつ



（野渡の歇船に現八夜間敵と鬪ふ）

れども、不知案内なる夜川の深淺、測難つゝ村胆の、心ばかりは慄るのみ、よるべの便りなかりけり。爾程に現八は、敵を左右に引受て、熟得の拳法、術を盡せば、掄めく船に水入りて、辷る板子を踏留め、且く挑爭ふ折から、霎時隱れて又叢雲を、拂ふて出る秋の月の、清光夜水を照しては、金波流れて細鱗跳り、氷輪激瀨に俵りては、玉兎競ふて晩潮落つ。金天變化瞬間に、隈なくなりし月光に、三人は面を佶と見て、共に駭く聲も齊一、（句）和殿は犬飼（句）現八ならずや。（句）しかいふ二兄は犬山犬塚。（句）然也道節信乃なるぞ。（句）こは〳〵いかに。と呆るゝ迄に、捉りつ捕られし手を解きて組を綟せし糾糸の、結びし義とて憑もしき、長き別を今こゝに、環りあひぬる迭の歡び、比んよしも南麻與民の、甲斐ある世とぞ思ひける。登時現八先いふやう、思ひがけなき今宵の再會、二兄は原是何等の故に、孤舟の内にをはしたる、俟人ありて賊、甚麼ぞや。と問へば道節微笑て、否俺們が這船に、乗りつゝありしは從れて來ぬる、人を俟べき類にはあら

ず。這等の事は姑く置て、和殿は亦何等の故に、岸を離て繫ぎし船に、いと慌しく蜚乘りたる。こゝろ得がたき事にこそ。と問復されてさればとよ。けふしも不慮の大阨あり。辛く必死を免れて、這河邊まで來つれども、航船のなかりしに、稍這船を見出して、寄せよと喚びしに應せざれば、みづから漕て渡さん、と思ふによりて蜚乘たり。絆の難義は俺のみならず。といひつゝ岸邊を見かへりて、見給へ那里に立たるは、是同因果の義兄弟、犬村大角禮儀と、喚做す文武の俊傑也。他も亦感得の靈玉あり、痣もあり。鄰に某下野に、旅宿せし折邂逅しつ、犬士の一人たるべきよしを、迭に悟りて義を結びしより、他は則家を棄、所親に別れて只管に、和殿們自餘の犬士にも、環會まく思ふばかりに、それより以來某と、倶に諸國を徧歷の、光陰二稔に及びたり。と報れば歡ぶ信乃道節、しからば船を岸に寄せて、犬村生に對面せん。吁愛たし。と諸聲に、含笑ながら壽祝つゝ、繫索を解き篙を拔きて、撐つゝ船を岸に寄すれば、現八は遽しく、船より出て笑しげに、大角にうち對ひて、犬村生立疲れて、さぞ俟不樂しかりつらん。既に這里より見られし如く、某船にうち乘りて、事ありけるは沒怪の禍にて、料ずも犬塚犬山、二兄弟に再會したり。快々對面し給へかし。と告るを大角うち聞て、そは歡しき事なりき。初和殿が船の内にて、敵を左右に引受たる、勝負をこゝに測り難て、最大う氣を悶しかど、遠くもあらぬ程ながら、俺身は山里に生育て、水技自由ならざれば、鄙語にいふ隔水なる、鬪諍に似たる絆の不便は、いふべうもあらざりしを、はやくも解けて和睦の光景、いはれしよしも聞えしからに、憂を轉して歡びに、なりぬることの憑しさよ。といふ間に信乃道節も、岸に登りて共侶に、身邊に來ぬるを大角は、恭く、しく找迎へて、犬塚犬山二賢兄、某犬村禮儀也。二兄のうへは豫より、犬飼生に承知して、景仰の懷ひ已がたく、倶に諸國を巡りし甲斐に、今宵面會の歡びを罄すこと、幸ひ是に優ものなし。といへば信乃道節も、禮を返して却いふやう、犬村生の來歷素生は、いまだ詳ならねども、俺們に異ならぬ、玉あり痣もありとし聞けば、亦是異姓の弟兄也。生れし時日は同じからで、異鄕に成長したりとも、今よりして後憂を分ち、禍福苦樂を

共にして、皆同郷同日に、死んと願ふ外に仇事なし。爾るに犬飼共侶に、危窮の厄を免れて、這河邊まで來給ひにき、と聞ぬるのみにて後の安危を、具にせざれば胸安からず。その義を知らし給ひね。と問へば大角歎息して、絆の起本は俺身に在り。犬飼生は連累也。その故は箇樣々々。とけふ驟雨のふりし折、行裏を盜兒に、奪去られし絆の趣、又這河の堤にて、二個の賊を拿へんとて、且く挑戰ふ程に、那盜兒們は逃亡て、行裏さへあらずなりたる、迹には件の盜兒們が、近郷より竊拿て、もて來し衣箱の遺りし事、これにより盜兒を、追隊の衆人疑ひて、大角と現八を、欺きて穗北なる、宿所に伴ひ舁に陷て、摘捕りたる事の光景、并に襦衫の片袖の、恁々の事あるをもて、此彼暗合したるにより、那衣箱の主と聞えし、穗北の郷士、氷垣殘三夏行が、その辯論を聽ずして、現八と大角を擊果さんとて敦圉きしを、女兒重戸が賢才良智の、詞を盡して諫めしかば、その堺落鮎餘之七の、還り來るまで俟んとて、現八と大角を、盆樹室に禁獄したる、黄昏時に件の重戸が、資助によりて脫れ出たる、絆の顚末恁々と、その崖略を說示せば、現八も亦共侶に、重戸が婦德を賞贊して、俺們憶ず寃枉に、身を危くしたれども、一婦人の資助により、免れたるを幸にして、不覺に命を惜みしにあらず。いかで又那盜兒を、捉へて恥を雪んと、思ふによりて闇からぬ、身を暗くして阿容々々と、脫れて這里まで來つる也。この義を猜し給ひね。と告る詞の不樂しげに、俱に嗟嘆に堪ざりしを、信乃道節はつく〴〵と、聞つゝ憶はず目と目を合して、奇なるかな妙也けり。犬村犬飼兩兄弟の、話說に就て又、一條の話說あり。且聞給へ。と慰めて、迭代に說示す。その顚末を原るに、這朝信乃道節は、栗橋なる旅舍を出て、千住堤に來にけるに、既にして日は暮たり。河を前面へうち渡して、千住に宿を投んとて、航船を索ねしに、航場には船なくて、這里に繫ぎし苫船あり。船には兩個の篙師が、何にかあらん東西を論じて、云々といふ程に、信乃道節に喚かけられて、うち驚きたる聲ざまにて、應をしつゝ來由を聞て、夜川は渡さぬ製度目なれども、船賃多く賜らば、竊に渡しまゐらせん。誘々乘せ給へとて、船を撐つゝ寄せしかば、信乃道節は、邊しく、件の船にうち乘りしに、篙

師們が又いふやう、竊に渡す船なれば、客人達を乘せまゐらせしを、人に見られんことを厭へり。前面の岸へ漕寄するまで、權且苦の下に臥て、音なし給ひそ。と誨しを、信乃は心に訝りて、密と道節の袂を引きしを、道節も亦意中に悟りて、疑ひながら然氣なく、いはれしごとく共侶に、苫を被ぎて横臥たり。登時兩個の篙師は、持たる篙を引抗て、信乃道節が咽吭を、刺串んと閃かすを、信乃はさら也道節も、臥つゝはやく身を反せば、寃外れて篙師們は、板子を愚慾と串きけり。以あるかなその船篙の、石突には猪を製作みて、鋭こと鎗に異ならねば、かくの如き利害あり。既にして篙師們は、突外せしに心慌て、引拔んとせし程に、信乃道節は些も透さず、身を起し篙を手繰て、此彼共に引つけて、組んとしたる横面を、撻惱し蹴倒して、纜をもて施囘卷に、推雙べ細めて、流るゝ船を撐止め、篙を建繫索を掛て、却件の賊篙師們を、息も吻せず鞭撻懲して、緊しく拷問したりしかば、二賊は苦痛に堪ずして、遂に招道しつゝやう、小可們は宿もなくて、這船にのみ起臥すなる、尻肛玉河太郎、無宿貓野良平と、喚做すものでぞ候也。無筆無算の癖なれば、世度る業には疎にて、賭鈔を好み酒を嗜む、慾に底なき性なれば、俱に惡事を宗として、夜毎に這里の河にをり、又ある時は墨田川にも、船を繫ぎて旅ゆく人の、渡りを求ることあれば、絆恁々と欺詐りて船に臥さして這篙をもて、突殺し盤纒を奪ふて、屍骸を河へ投棄しは、幾番に歟候ひき。恁ても夜川に幸なき折は、近郷なる人の東西を、竊みし事も屢なりける、冥罰終に免れず。武藝に長たる刀禰們とは、知らで虎髯を曳損わ、細められて、後悔の、こゝに立よしなけれども、今より野心を改めて、法師にならんと思ふのみ。願ふは慈眼視衆生の、佛心を垂給ひて、許させ給へ、と同音に、哀請ふて已ざりしを、信乃は聞つゝ冷笑て、俺が這河邊に來たりし折、若們は這船にて、只管に東西を論じて、云々といふ聲の、洩聞えしを今おもへば、竊みし東四を分たんとてその損益を論ぜしならん。這義は甚麼、と又責問れて、それすら隱す事を得ざりし、野良平がいひけるやう、御推量に違ふことなく、けふ河太郎と共侶に、穗北の郷士の宿所を覘ひ、背門より竊入りし折、河太郎は逸速く、其頭にあ

りける衣箱を、ものして出てゆきけるに、小可はまだ東西も得取らず、鈍や小斷に見出されて、籬笆を潛りて逃去にき。却その路にて小可は、旅ゆく武士の遺したる、袱包を搔攫ひて、走るを武士は遣らじとて、趕蒐來ぬる堤の頭に、河太郎は衣箱を、卸して憩ひをりしかば、援を得つゝ那武士を、擊仆さんとて挑みしかども、思ふに倍たる猛者也ければ、矢庭に左右へ投伏られて、命も俱に危かりしを、河太郎も小可も、そが儘河に滾入て、辛く必死を脫れたり。恁る折にも小可は、又那武士の袱包を、搔攫ふて逃たれども、河太郎は卸措きたる、衣箱をうち捨て、再拿るよしあらずなりたり。是により河太郎は、小可がものしたる、袱包の內なる金を、二分にせよといひしを、小可その議に從はず、那衣箱を捨ずもあらば、いはるゝ如く此彼共に、二分にすべかれども、俺がものしたる金をのみ、半分分ちて取せんや、と推辭を他亦諾なはず、噫身勝手なることをないひそ。那折に堤にて、倘俺力を勦せずば、和郎は包を拿復されて、命果敢なくなるべきを、恙もあらずその包さへ、拿留めしは俺功也。然るを咨みて今さらに、云云と論ずるは、吭下過て熱を忘るゝ、只是烏滸の誣言也。四も五も入らず二ッに分よ、と論じて果しなかりし折、刀禰達に喚かけられて、口を鉗みつ又掙一掙、せばやと思ひし胸算用の、玉が狂ふて細められ、絆皆畫餅になりにたる、包は隱して船當にあり。金を刀禰達にまゐらせん、命を助け給ひね、といはせも肯ず道節は、眼を瞪らし鬣苛立て、這奴們は苦しき隱に、我們を盜兒の、皮肉蠶と思へる歟。かくの如き畜生に、理義を說んは無益也。八創にして積惡の、報ひを思ひ知せんず、と敦圉悍く身を起すを、信乃は霎時と推禁めて、今這奴們を推並て、斬るは輒き所爲なれども、素より急ぬ旅なれば、程遠からぬ村長に、よしを報牽渡して、地方の法度に儘しなば、這奴が竊みし行裏を、亦その主に返し遣す、絆の便宜もあらんかし。性急るは要なき事ならずや。といふを道節諾なひて、爾らば船を岸に寄せて、舊來し里へ赴ん。同是その行裏の、內を檢めてもてゆくべし。然とて軈て野良平が、板子の下に隱し措たる、袱包を索出して、うち披んとしつる折、岸を離れし船なるに、忽地閃りと乘るものありしを、信乃道節

は驚きながら、亦是野良平河太郎が、火家の歹人なるべし、と思ひにければ些も擬議せず、道節はやく立出て、推捕へんとせし程に、信乃も亦苦屋形の、內より出て共侶に、痛捕んと挑みたる、この時明月雲に入りて、霎時朧影なりけるに、迭に爭ふ折なれば、信乃道節はその人の、現八なりしを思ひもかけず、現八も這兩敵の、信乃道節ならんとは、知らで同士擊をしたりしに、雲忽地に月を吐て、光隈なくなりしかば、迭に面を認得しより、方僅再會の本意を遂て、這話說に及べる也。然ば信乃道節は、件の絆の趣を。大角と現八に、遺もなく說示して、恁れば疑ふべくもあらぬ、野良平が贓物は、犬村生の行裏にて、穗北の鄕士の衣箱を、竊拿て千住堤へ、卸措きしは河太郎也。又只這義のみならで、襤に件の兩賊を、細る折初て見たり、那野良平が被たる襦衫は、左の片袖なかりし也。よりておもふに穗北の鄕士の、宿所に遺りし襦衫の袖は、是野良平が逃るとき、物に破られて遺りしを、犬村生の片袖と、此彼暗合しつるをもて、鄕士の疑ひ解ずして、絆の難義に及びけん、その所以なきにあらずかし。今宵野良平河太郎を、鄕士の宿所へ牽もてゆきて、よしを示して寃屈を諦さば、尤愉快といひつべし。那行裏は船に在り。且兩賊を一見して、行裏を取收め給へ。俱に穗北に赴くべし。といふに大角現八は、雀躍したる不勝の歡び、共に滿面笑片向て、額を拊貌を改め、信乃道節にうち對ひて、宿世の契憑しく、今宵料らず和君們に、環會ぬるのみならで、二賊を捕り給ひしは、實に得がたき幸ひ也。誘然らば船に到りて、俱に二賊を牽立て、氷垣が宿所に赴てん。さても〳〵。とばかりに、只管感じて已ざりしを、信乃道節はさもこそとて、先に立つゝ共侶に、船にうち乘り笘反落して、船桁に繫ぎたる野良平と河太郎を、大角現八に見するにぞ、大角は先月を燭に、見れば果して這二賊は、襤に千住堤にて、水を潛ぎて逃亡たる、歹人們でありければ、立向ひ睨へて、やをれ盜兒認忘れはせじ。俺は若們が遺措きたる、衣箱と襦衫の袖の、慾に分明ならねば、皮箱の主なる夏行に、疑れ囚れて、不慮の難義に及びしかども、神明佛陀の冥助によりけん、一夜も過さで若們を、はや這所に獲たりしは、是俺異姓の弟兄の、賜ものなるを知らざるや。と辭

せわしく罵れば、野良平と河太郎は、うち駭きつゝ仰視て、哀請んと思ひけん、立たる膝を折布て、跪んとせし程に、現八も亦找寄て、二賊を撲地と蹴倒して、怒に堪ず聲高やかに、這盜兒們が今さらに、何事をかいはんとするや。若們が故をもて、俺さへ氷垣に囚れて、姜里の思ひを做たれども、寃を伸恥を雪る、因果は環の旋れる如く、善惡必應報あり、天罰恁こそあるべけれ。思ひ知るや。と罵責て、跅跳らんとしたりしを、大角急に推禁めて、やよ犬飼生等給へ。今はしも俺們が、濡衣を乾す時は來つるに、那憤を洩さんとて、撻は要なき所行なるべし。犬塚犬山兩個の理會に、うち儘し給はずや。といへば現八有理と應て、舊の處へ退きけり。當時信乃道節は、大角にうち對ひて、犬村和殿の竊れたる、行裹は這里に在り。快展檢て受取給へ。といひつゝ遞與す袱包を、大角は受戴きて、是將二兄の賜也。包の內には當用の、爲にとて出し置たる、八九兩の金もあり。被替の衣もなきにあらねど、そは喪ふとも惜むに足らず。緊要なるは一袱に、藏めし親の木主也。いで〳〵。といひつゝも遽しく、袱包を披きて見れば、東西皆あり。總て水に濡たるのみ、そもはや半分は乾きたり。當下大角は、實父母養父母兩家の木主を、恭しく取出して、小高き處に閣きつ、うち對ひ合掌して、涙を流し額をつき、某疎忽の失にて、姑くも四尊の靈位を、賊人の手に汚されて、賸河水に濡されしを、朽をしく思召されけん。時の不祥といひながら、勸解奉るも面俯なる、罪を償ふ由なかりしを、うち歎きて候ひしに、料らず未見の義兄弟の、資助によりて尊靈位を、迎取ることを得たる也。先非を許させ給ひねかし。彌陀佛々々と唱へたる、孝義殊更老實にて、禮あり義ある誠心を、信乃道節現八は、齊一感じ俱に稱へて、謹愼德行多く得がたき、君子也とぞ思ひける。既にして大角は、親の木主を拜し訖りて、又袱に包みしかば、道節は照る月を、つく〳〵と瞻仰て、喃犬飼犬村生、千萬言にも盡しがたかる、過去來の話說は、迭に聞まく欲しかれども、そは目今の急務にあらず。夜ははや二更になりぬらん。其盜兒們を穗北の出へ、牽もてゆきて和殿們の、與に寃屈の怨を雪ん。快々准備し給はずや。といそがし立る程しもあらず、穗北の

かたより人許多、這方を投て來るにやあらん、蕉火の光晃めきたるを、四犬士遙に佶と見て、那は穗北の夏行們が、しうねく趕蒐來つるにこそ。とばかりいふて些も騷がず、そが中に道節は、呵々とうち笑ひて、やよ犬村生、犬飼も那奴們を、何とか思ひ給ひぬる。俺們水際に立迎へて、よしを報て盜兒を、牽遞與遣さば、那奴們は趕甲斐ありて、更に歡ぶべけれども、然では嚮に和殿們の、いひ解よしも聽ずして、武勇に誇る偏見もて、むごくしたりし返報を、舒るにいまだ足るべからず。恁れば俺先立出て、那夏行がみづから來たらば、箇樣〳〵に相計ん。犬村と犬飼は、推續き水際に立て、徐に他們に對面の折、夏行怒て無禮に及ばゝ、拉ぎて懲し給へ。犬塚は霎時の程、船に遺りて好潮合に、その盜兒們を牽出して、夏行主僕に見せ給へ。這它の事は恁々、とその進退を說示せば、現八聞つゝ笑坪に入て、その議寔におもしろし。快々立出給ひね。と應をしつゝ身を起せば、信乃は笑つゝ點頭のみ。大角は然ばかりに、あらずもがな、と思へども、否といはんはさすがにて、現八と共侶に、進む道節に推續きて、はや水際にぞ下立ける。不題再說。氷垣夏行が宿所には、重戶が虛仆したりしを、半晌ばかり知らで在りしに、小斯夢助壁藏が、見出しつ駭躁ぎて、連りに人を喚びしかば、夏行幷に奴婢們まで、沸がごとくに周章したる、大家重戶を抱起して、共に喚活け湯液を沃ぎて、療術章等ならざりければ、重戶は逆諜りし如く、稍甦生りしおもゝちして、絆恁々と報る折から、女壻なりける、落魚有種、幷に嚮に部をせられて、那盜兒を趕蒐て、彼此へ赴きたる、衆人も共侶に、這時かへり來にければ、夏行は有種に、嚮に捕へし盜兒の事、衣箱の事、片袖の事、重戶は胸を擂られて、死べかりしを剛才やうやくに、喚活たれども盜兒は、逃去にきといふことまで、敦圍暴く說示して、俺思ふに那奴們は、西南へは去るべからず。千住川をうち渡して、遠く東へ赴ん、と欲せし事もありつらん。河より東は他領にて、俺手の屆かぬよしもあれば、其頭の用意なからずやは。遮莫夜河を渡さねば、輒く前岸へ赴きがたかり。時は聊後れたりとも、今速に趕蒐なば、手に入る事もありぬべし。饑ては進退不便也。僉快腹を拵へて、推續きて河原へ來よ。先に還り

し壯佼們は、俺に續け。と吩咐る、怒氣盛なる火急の隊配、そが儘納戸に走入て、身裝して出んとすれば、壻有種も立ながら、湯飯をたうべ身を固めて、器械拿て共侶に、はや門外に立出たる、後方に從ふ血氣の壯佼、方僅還りしも相加えて、其隊約莫三十餘名、鋸叉捍棒なンど、手に〳〵利器を挾み、先に找むは蕉火を、掉照しつゝ河原を投て、飛が如くに趕ふ程に、千住堤に近著けり。爾程に道節は、はやく船より立出て、水際を距ること三反許、追隊の主僕に聲をかけて、其首に來給ふ人々は、穗北の鄕士と聞えたる、氷垣殿にあらずや。と問ふを訝る夏行有種、持たる鎗を横たへて、歩を駐めつ佗と見て、爾いふ和殿は何處の人ぞ。と問へば道節阿容たる色なく、某は近國より在土へ赴く逆旅の武士也。甲夜に料らず這津にて、兩個の盜兒を拿へしかば、佶と絪めて責たりけるに、那奴們苦痛に堪ずして、做しゝ惡事を招道したり。これにより那奴們が、貴老の宿所に潛入て、衣箱を竊みし事、その折襦衫の片袖を、喪ひしといふ事までも、初て具に聞えしかば、軈て貴宅へ牽もてゆきて、よしを告んと思ふ折、囂塵として衆人の、這方を投て走來ぬれば、是必盜兒を、追隊の人々なるべし、と猜して這里に立迎て、緣由を示すのみ。是等の事に覺あり耶。と問れて歡ぶ夏行有種、共に莞爾とうち笑て、そは忝き事なりき。某則穗北の鄕士、氷垣殘三夏行也。實に示談に違ふことなく、けふ未の左側に、衣箱を竊て逃去たる、兩個の盜兒を生拘りて、緊しく禁獄したりしに、黄昏時のことにやありけん、索を脫け室を踰て、又逃亡て往方を知らず。程經て恁と聞えしかば、聊時の後れしかども、他們が去向は這頭ならん、と思ふによりて女壻共侶に、多勢を俱して趕蒐來つるに、料らず和殿にはやく知られて、這吉左右を聞ぬるは、意外に出たる歡び也。といふに落鮎有種も、道節にうち對ひて、某は氷垣が女壻落鮎餘之七有種也。その盜賊は何處に在るや。願ふははやく遞與し給へ。といへば道節含笑て、そは勿論の事ながら、那盜兒を生拘りしは、某一個の力にあらず。同行の武士三名あり。皆是異姓の兄弟にて、某と共に四名也。その內中二名は那里にをり。且他們にも對面して、なほ又詳に所給へ。誘這方へ。と先に立て、そが儘水際に倒

導ふにぞ、夏行も有種も、然るべし。と應つゝ、俱に堤をうち踰て、既に水際に赴く程に、從ひ來つる衆人は、堤の下に聚合たり。登時大角現八は、夏行にうち對ひて、こは氷垣老人歟。某們は不幸にして、疑似の惑に虐られて、辱を受たれども、料らず令愛に扶出され、いかで眞の盜兒を、捕捉ん爲に脫れ來て、不思議に本意を遂たる折、うちも揃ふて光臨ありしは、いと歡しく候。といはせも果ず夏行は、怒れる聲をふり立て、這盜兒們は胆太くも、趕稠られてせんかたなさに、火家の賊と諜合して、はふらかさんと欲する歟。芋鰌にして艱んず。と罵りつ鎗を捫て、面も掉らず大角が、胸前望て刺んとす。方纔這絆の爲體に、有種も亦三犬士を、强人也、と思ひしかば、些も擬議せず共侶に、持たる鎗を振閃めかして、はや現八にうち對ふ。勢ひ兩虎の暴たる如く、當るべうもあらざりしを、現八も大角も、騷ず敵を引受て、電光石火と衝き出す。鎗の刃頭を彼此と、遣錯し反踰て、一上一下と術を盡す、修煉の剽姚瞬く間なく、且く敵を疲勞したる、大角は即にはや、腕亂るゝ夏行の、鎗の蛭卷丁と抓て、閃りと馮入る至妙の捍き、現八も亦有種の、鎗を戞哩と踏落して、透さず共に引組て、又姑くは挑みしかども、二階松山城と犬村蟹守の奥義を極めて、就中緝捕には、世に敵なしと稱られたる、犬飼犬村兩雄に、捷を取るべきよしのなければ、既にして夏行は、大角に組伏られ、有種は現八が、膝に布れて呻吟のみ、反復さんと掙扎ども、壻も舅も窮所を捉られて、然しも餓たる暴鷹の、羽節の下なる野鷄より、脆かりけり、と蹇おもふ、なほ憤りに堪ざりけり。恁りし程に夏行に、從ひ來つる衆人は、二犬士の刀も拔かで、氷垣落鮎壻舅の、烈しき鎗を物ともせざりし、海內無雙の胆勇武藝に、鷙き呆れて醉るが如く、うち目戍りてありけるに、脆くも夏行有種は、持たる鎗を打落されて、はや組伏られたりければ、吐嗟と再駭き譟て、各々鋸叉を、兩手に拿群立て、多勢を憑む無謀の力戰、大家齊一咄と嘯て、競蒐らんとする程に、道節はやく推隔て、若們牛糞馬涎の小人、玉歟、石歟も別ことなく、身の程をしも見かへらで、敵對做さば先若們が、兩個の主の頸を搔して、しかして後に推並て、屠りて這里の河を埋ん。然ても找む歟援る歟。漫に譟

ぎて後悔せんより、且俺們が做よしを、其首にて見ずや。と禁めたる、聲百千の霹靂の、頭の上に墮るが如く、耳を貫き胆に响し、勇士の奮激當るものなく、進難たる衆人は、今爭はゞ兩個の主の、斬られやすらん刺れやすらん、と思ふ心のいよ〳〵後れて、一言半句も返し得ず、咸阿容々々と逡巡して、一縮にぞなりにける。その間に大角現八は、大刀の緒左手に解出して、夏行と有種を、最も緊しく細めて、水際に立る二株の、楊柳に繫留しかば、夏行も有種も、堪ぬ怨に聲狂しく、若們殺さば快殺せ。俺們命運爰に竭て、强人の手に死ん事、生前の恥、身後の怨、譬るに物なけれども、勇士の弓折れ勢窮る、例は世々にこれ多かり。寃魂雷神夜叉とも做りて、怨を復さで休むべきやとて、蹉跎しつゝ罵るを、現八と大角は、うち對ひ左見右見て、氷垣の翁壻刀禰も、怒を鎭めてよく聽ね。俺們素より害心なし。先度の恥を雪ん、と思ふによりて仔細を示さず。こは戲るゝに似たれども、疑似の惑ひの覺ずして、人に寃屈を搭すれば、人亦報ふに寃屈をもてす。善には善の報ひあり、惡には惡の報ひあり。天網疎にして漏さねばこそ、今宵料らず義兄弟の資助によりて、那衣箱の盜兒を捕へたれ。耳を洗ひ目を拭ひ、見も聞もして善人を、寃げたりし愆を、みづから思ひ知りねかし。といひつゝ後方を見かへれば、信乃は野良平河太郎が、索拿縮つゝ牽立て、船より出て夏行們の、面前へ推居て、やをれ夏行これを見よ。這一人は尻肛玉河太郎と喚做たる、出沒不測の强盜にて、鄰に和主の衣箱を、竊出して這頭の堤に、うち棄て逃たるは、則是這奴也。又一人は無宿猫野良平と喚做したる、こも河太郎が支黨にて、鄰に和主の宿所の籬笆を、潛りて出んとしつる折、被たる襦衫の片袖の、樹枝に縢みて斷離れしを、そが儘にして逃亡たる、盜兒は這奴也。これ見よ襦衫の片袖なし。初咱們はこれを知らず。這里に津を求めし折、這奴們が竊に謀りて、殺して盤纏を略んとしたる。その機を猜し生拘て、毆きて積惡を責問ひしに、苦痛に堪ず恁々と、招道により野良平が、襦衫の片袖なき情由も、那衣箱の事さへに、聞知ることを得たれども、なほ外事ぞと思ひしに、俺二箇の義兄弟、和主の息女の資助により、脫れて這里に來にければ、絕て久しき面會に、素懷を遂たるのみ

ならず、鄰に這犬村が、竊れたりし行裹を、拿復したる歡びの、折から和主們主從が、疑似の惑のまだ醒ず、偏見愚痴の心を師として、俺兄弟を逞兇來つれば、爲に恥辱を雪んとて、故意と怒を起させたり。先や再盜兒們に、いはして聞せんよく聽ね。と言爽に說諭して、腰より出す鐵骨の、扇を抗て二賊の背を、割るゝ可に鞭惱し、又撻惱して、やをれ强盜、前の如くに今一番、做しゝ惡事をいはずや。と責懲されて苦と叫ぶ、河太郎も野良平も、疼痛に堪ず恁々と、彼衣箱の事、袖の事、又大角の行裹を、竊し折の事までも、招道分明なりければ、驚思ふ夏行有種、初て夢の覺たる如く、今さら慚愧後悔の、頭を擡得ざりけり。這段はなほ長やかなれば、言に姑く筆を輟めて、編を蠶き卷を更め、第八十五回の肇に、說果すを聽ねかし。

南總里見八犬傳　第八輯　卷之五　終

南總里見八犬傳 第八輯 卷之六

東都 曲亭主人編次

第八十五回

志を傾けて夏行四賢を留む
夢を占して重戸讖兆を說く

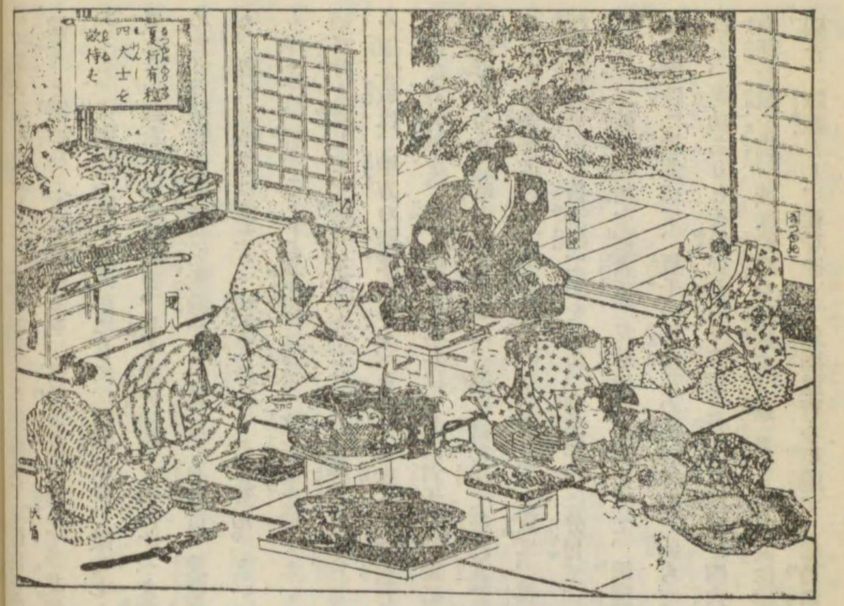
再説、夏行有種們は、四犬士既に證據を取て、寃を伸恥を雪る、智辯勇敢飽までに、讙懲されて共侶に、羞て頭を低てをり、登時犬村大角は、道節に威伏せられて、堤の下に退聚ひし、夏行の從僕們に、うち對ひさし招きて、若們衆人這盜兒の、招道の趣は、皆推並て听つらん。擲に這野良平が、籬笆を破りて逃し折、認得し小斷ありと歟聞にき。件の小斷も這里に來て、その一隊にあるならば、找み近著て這奴を見よ。那賊なる歟、ならざるか、いよ〳〵分明なるべきぞ。快々來よ。と急がせば、衆人は二個の主を、保質に拿られたる、勢ひ推辭べうもあらざれば、大家齊一應と回て、一個の小斷を見かへりつゝ、得手吉那折盜兒を、見出せしは和郎なるに、はやく出よ。と日星に指る、得手吉は困じ果て、頭を搔きつゝ逡巡りして、速には立も出難しを、衆人聽ず、推出されて、却已べきにあらざれば、持たる棒をうち捨て、おそる〳〵大角の、身邊に找み近著て、細められたる兩個の賊を、左さま右さま得と見て、刀禰さま擲に小可が、斷より出る折、正可に見たる盜兒は、是這奴にて候。といひつゝ野良平に指させば、大角さこそと頷きて、爾らば汝になほ用事あり。兩個の賊を戍るべし、といはれて得手吉固辭に由なく、信乃に代りて野良平們の、索を拿つゝ戍りたり。恁而亦大角は、夏行にうち對ひて、氷垣老人今這小斷が、いひつるよしを听たる歟。河太郎と野良平が、招道分明也といへども、這盜兒を認得たる小斷ありと聞えしに、見せて密合せざりせば、

なほ疑るゝ事もやあらん、と思ふによりて面前に、這小斷をも紲したり。恁ても惑ひの解ずや。といへば又道節も、舊の水際に退き來つ、夏行有種にうち對ひて、頑愚の老人無智の壯佼、さこそは胆の潰れけめ。俺義兄弟犬飼は、勇士なれども怒に乘して、人を害することを欲せず。況這犬村は、料ずも二賊を獲て、和主們が疑ひを、解よしあるを歡ぶのみ。折から和主們主從が、這所に來ぬるに及びて、絆恁々と說示して、二賊を見せんといひしかど、然ばかりにては和主們が、飽まで君子を虐げたる、愈を知るのみにして、犬飼犬村二兄弟の、恥を雪るになほ足らず。懲して思ひ知せんず、と思ひにければその議を否して、かくの如くに計りたり。疑心暗鬼を生ずといひけん、世の常言に違ふことなく、疑似の迷ひを解けども悟らで、その身の破滅に及ぶこと、いと愚なる所行ならずや。恁ても先非を悔ずして、いふよしある歟甚麼ぞや。と詞徐に責問れたる夏行と有種は、いよ〳〵羞て今さらに、後悔の外なかりける、そが中に夏行は、嗟嘆に堪ず肅然と、四犬士を見かへりて、某暗愚の思慮足らで、女兒重戸の意見を用ひず、漫に二君子を寃げたる、その罪實に萬死に當れり。非如目今この儘に、縛頸を擊るゝとも、自業自得に候へば怨はあらず。しかはあれど、重戸が忠恕惻隱の、心に顯て增有種を、許し給はゞ身後の幸ひ、冥府も後安かるべし。這義を海容あれかし。と憑むを有種推禁めて、そは亦思ひがけなきこと也。諸君願ふは听給へ。某は初より、二君の囚れ給ひしを知ず。那盜兒們を趕難て、日暮て宿所にかへりし折、養父が二君逐電の、綽の顚末箇樣々々と、報るによりて共侶に、這里へ趕蒐來つる也。虛實を糾すに暇もなかりし、綽倉卒に起るといへども、俱に惴りし這身の不覺、罪を免るゝ所なし。只某が首を刎て、親を許させ給ひね。と喞語がましき孝烈慈愛に、死を爭ふて已ざりしを、四犬士齊一感じたる、中に大角現八は、歎賞しつゝ左見右見て、氷垣老人落鮎生、擲にいひしを聞ざる歟。俺們素より害心なし。過て改るに憚ることなかれとある、聖敎を思はずや。先非を悟りし怠狀の趣を聞からは、俺們も亦怨なし。今さら死活を論ぜんや。と詞等く慰めて、夏行と有種に、被たる索を解捨て、分捕したる兩刀を、誘とて

返し與るにぞ、夏行も有種も、いよ〳〵羞て左右なく取らず。共侶に跪きて、某們幸に、寛仁大度の意を示されて、首を續し給はること、是再生の洪恩也。さるにても四君子は、素是何州の豪傑ぞ。願ふは本貫高姓を、具に知らし給へかし。子孫に傳へて後の世まで、永く武德を仰ぐべし。いかで名告らせ給ひね。と請求ること兩三度、眞實歸伏の心操、亦他事もなく聞えしかば、歡びおもふ現八大角、俱に莞爾とうち笑て、逋愛たき懺悔の誠心、愈を知るものは、誰もかくこそあるべけれ。身不肖なれども犬死の一人、某は下野なる赤岩の人氏にて、義に仗て故鄕を去たる、犬村大角禮儀也。と名告れば亦現八も、俺は下總許我の退糧人、犬飼現八信道也。と告りつゝ傍を見かへれば、信乃道節も共侶に、武藏豐島の大塚人、犬塚信乃戌孝、同國煉馬平左衞門倍盛主の殘黨に、然るものありと知られたる、犬山道節忠興也。過世に結びし義兄弟、なほこの外に三名あり。相別れしより往方を知らねば、年來諸國を巡りし甲斐に、今宵料らず犬飼犬村、二兄弟に環あふ、ことをしこゝに得たる也。と名告るをうち聞く夏行有種、驚きながら目を合して、原來五六年前つ比、這頭に風聲隱れなかりし、那大塚より程近かる、庚申塚の法場を、思の隨に鬧して、同盟寃枉の罪人を、拯拿にきと聞えたる、犬士とやらんにをはする歟。と問へば信乃現八は、共に含笑頷きて、問るゝ如く俺們が、拯拿たる義兄弟は、犬川莊介義任と、喚做す一箇の俊傑なり。なほ這外に犬田犬江の、二犬士と俱に七名、忠信孝義も伯仲す。優劣のなきもの也。と報ればいよ〳〵驚き感ずる夏行は、恭しく、道節にうち對ひて、犬山賢君某が、女壻有種は煉馬の舍兄、豐島刑部左衞門尉信盛主に仕へたる、ものにこそ候なれ。といへば亦有種も道節にうち對ひて、烏滸がましく候へども、某が父落魄岩水員種と喚れしもの、則豐島の家臣也。二親はやく世を去ければ、某も亦總角より、信盛主に使れて、童扈從で候ひしに、豐島の一族滅亡の折、懋に擊漏されて、身を措く所なかりしに、養父氷垣殘三の妻は、某が爲に伯母なりければ、竊に這地に落留りて、そが女兒を妻せられ、義父と稱へ、義子と喚れて、今日に及べる也。爾るに和君は豐島の一族、煉馬の舊臣にてをはせしを、こゝに初

て教諭せられて、懷舊の情大かたならず。先考犬山道策大人は、江五田池袋の戰ひに、比類なき搏きして、陣死をし給ひたる、その絆の趣も、傳聞久しくなりぬれども、故にし事を相譚ん、詞敵もなかりしに、君家の與に舊緣をはせし、賢者に因を結ぶこと、這身の光を增すに似たり。今より諸君に事あらば、一臂の力を盡しまつらん。おん目を給はり候へかし。と肝胆を吐、素性を演て、世に隔なく聞えしかば、道節も亦怡悅に勝ず。這年來義兄弟を、索て諸國を徧歷りしに、豐島煉馬の殘黨には、名告あふことあらざりしに、憶ず和殿の素生を聞て、故人に遇ぬる心地ぞする。いと憑しく候。とその歡びを舒るにぞ、信乃現八大角も、共侶に稱贊して、怨讐還て知己となる、世は塞翁が馬也けり。寔に愛たし、めでたし。と齊一奇偶を祝しけり。且して現八は、又夏行にうち對ひて、鄕に衆人のいへれば知りぬ。和殿は這頭三鄕を、開發の功あるにあらずや。この義も聞まくほしけれ。と問れて夏行、さン候。某原は丹治黨にて、弱冠の比、鎌倉の管領持氏朝臣に仕へたり。爾れば持氏御滅亡の後、春王安王兩公達のおん興に、結城の城に盾籠りて、武藏の人氏大塚匠作三戍と共侶に、城の一方を戍りしに、公達御武運開かせ給はず、諸將の防禦畫餅となりて、落城に及びし日、某は懋に、寄隊の圍を殺脫て、遠く這地に落留り、地頭穗北氏に身を寓せて、做す事もなくありけるに、結城にて某が、隊に隷たる士卒百名許、某が迹を慕ふて、俱に這地に聚合たり。當時穗北梅田柳原の三鄕は、年來の兵火に荒れて、一歩を耕すものもなく、農商離散したりしかば、地頭も棄て見かへらず。妻子眷屬を拽て、愁訴の爲京師に赴き、室町殿に仕たりしに、應仁の亂により、戰死しつ、と聞えしのみ、その妻子だもかへり來ざれば、這地はいよ〳〵草野になりたり。當日某落人們に、力田を薦め地を闢して、俱に心力を盡せしに、年に水旱の患なく、利を得ることの大かたならねば、人咸某を德として、推て三鄕の長とせり。是より先に某は、舊地頭穗北氏の從弟女の、獨遺されて這地に在りしを、娶りて女兒を產せしのみ、不幸にして男兒あらず。妻は近屬身まかりにき。爾程に豐島の落人、落魄餘之七有種は、亡妻の侄にして、武勇の壯佼なるをもて、舍

藏措くこと兩三年。その行狀を試たるに、心ざま勇悍くして、人の尻馬に乘るものならず、よく耕農を奬して、資助になること尠からねば、女婿養嗣にしたりしに、又那豐島の落人們が、有種のうへを傳聞て、身を寓せ庇に立まくせしもの、八九十名に及びしかば、又么們にも田地を取せて、繁昌都會に劣らずなりにき。恁れば某が結城を落て、穗北氏に寓居せしより、今に至りて四十二年。恁而三鄕の長に做りしより、十四年を歷たる也。と報れば現八道節は、俱に掌をうち鳴らして、これも亦一奇偶也。氷垣老人いまだ知らずや。俺這兄弟犬塚生は、和殿が共に結城にて、城の一方を戍りにき、といはれたる、犬塚匠作三戍の爲には嫡孫、その嗣犬塚番作一戍の、獨子で候ぞや。といふに夏行胆を潰して、原來亦是舊緣あり。嘉吉に結城籠城の比、某年尙弱かりければ、匠作主に指南せられて、師弟のおもひを做したりけるに、那人は戰歿して、忠誠武名を世に知られ、某は存命て、田舍翁と做りし事、識者の爲には羞ること多かり。犬塚主は何等の故に、爹々公の時より家系を捐て、他姓を冒し給ひたる。と問れて信乃は愀然と、目をしばたゝき嗟嘆して、その疑ひはあるべき事也、父番作は多病によりて、故鄕に退隱したりしに、姊夫大塚蟇六の、奸曲不義を忌よしありて、大塚の大の字に、一點を加えたり。他姓を冒したるにあらず。是より俺身に及ぶまで、犬塚をもて家號とす。絳偶然に出るといへども、是宿因の致す所、いひ易からぬ緣故あり。某甲斐に旅宿せし折、外戚に舊緣ありける、四六城木工作と喚做すものに、名告あふことを得たりしに、今又こゝに大父の舊友、氷垣の翁に値偶せしは、思ひがけなき幸ひにて、見ぬ世の事も聞まほし。感悅この義に候。といふに歡ぶ夏行有種、某們は衣食足て、這地に年を歷たるのみ。させる親類なきものなるに、犬塚犬山二君子に、舊故を辱うせるうへは、犬飼犬村自餘の諸君も、介意なからんことをこそ、願しく候なれ。恁いけゞ身の程を、思はざるに似たれども、某們も武藝を嗜みて、强敵にあふといへども、後れを取ることなかりしに、今宵犬村犬飼の、二君子を刺んとせし折、その胸前より忽然と、光を放ち眼を射て、衝出す鎗の狂ひしかば、些も捷を讓ること得ならず、大刀すら拔ぬ二君の爲に、組伏られ候ひしは、武藝力量その差ありて、勝負分明なるものから、故ある事歟。然るにても、こゝろ得がたく候。と疑惑ひとしく問けるを、信乃道節は慰めて、某們がうち見し所、今宵和殿們親子の武藝の、疎なりしにあらねども、犬飼は二階松の高弟にして、絆捕には、敵なしと稱せらる。犬村生の修煉の程は、今宵初て見つるのみ。いまだその師を詳にせざれど、是も亦犬飼に、伯仲すべき武藝也。且俺們七犬士は、感得の靈玉あるを、各々懷に藏めたり。是等の故歟。と說諭せば、夏行と有種は、交復驚き感服して、原來諸君は尋常なる、勇士にはあらざりけり。既にはや夜は深たり。宿所へ伴ひまゐらせん。といひつゝ、衆僕を見かへりて、若們は三四名、はやく宿所へかへりゆきて、听つるよしを重戶に報て、賓客儲をせよといひね。快々ゆきね。と急せば、承りぬ。と壯佼們、はや三四名身を起して、穗北を投て走りけり。登時現八大角は、又夏行にうち對ひて、義兄弟の資助によりて、生拘られたる這二賊は、地方の法度もあるべきに、和殿の隨意計ひ給へ。といへば夏行異議もなく、貴敎の趣承りぬ。地方に稀なる兇賊を、輒く擒捕られしは、是四君子の武德に憑る。俺三鄕の幸のみならず、患を鋤き害を除く、隣郡までの慶祥ならん。此の如き草賊は、速に首を刎て彼此人に示すべし。權且等せ給ひね。と應て聽て有種にも、こゝろ得さしつ、共侶に、河太郎野良平にうち對ひ罪を責て、俱に刀を拔閃めかす。有種は河太郎が、首を碾と擊落せば、夏行は野良平が、首を刎て刃を斂め、却得手吉に分付て、船の板子を拿寄せて、腰なる墨斗の筆をもて、板子の背へ恁恁と、二賊の罪科を記著て、又壯佼們を召よせて、箇樣々々と分付れば、壯佼們はこゝろ得て、二箇の首級を水際なる、樹枝に梟並べて、板子の札はその樹の幹へ、索もて括著にけり。四犬士は夏行の、決斷に礙滯なく、且神速の計ひを、老功ありとぞ思ひたる。事果て夏行有種は、四犬士に相俱して、穗北へ歸ゆく程に、三十餘名の從類は、夏行有種の鎗を携、或は船篙を拿抗て、鎭叉ともろ共に、一滕にして荷擔ふもあり、又續松を秉もありて、先に立後に跟き、陸續として從ひけり。恁而這宵の更闌て、信乃道節現八大角は、氷垣親子に伴れて、穗北の宿所に來にけれ



（夏行有種四犬士を欵待す）

ば、家僕們玄關に出迎て。客房に案内をす。欵待態大かたならず、且して夏行有種は、衣裳を更め出て來て、准備の夜飯を四犬士に、産めなどせし程に、はや曛になりしかば、客も主も翌と契りて、辭して枕に就にけり。却詰朝夏行は、莊客們に吩咐て、那賊船を破却させ、這日宿所に酒宴を儲て、四犬士を管待たる、野蔬海錯數を盡して、田舍に稀なる調理なりしを、四犬士は相稱へて、盃を受巡らしけり。この時世智介小才二は、手足の撲傷まだ癒らねど、四犬士の綽の趣を、傳聞つゝ駭怕れて、有種に就きて、現八大角に、昨日の無禮を陪話しかば、現八と大角は、今さらに烏滸しく思ひて、いかでかは爾ることあらん。這方へ召せ給へとて、世智介と小才二を、席末に招きよせて、その痛所を問慰め、介意なからん爲にとて、共に盃を取せにければ、世智介小才二歡び稟て、初て安心せしといふ。信乃道節も是等の情由を、こゝに初て聞知りて、那計略を譽めしかば、大家咄と笑ひ興じて、隔もあらずなりにけり。然ば現八大角は、這折を

もて夏行に、重戸が人を知る才ありて、圖圖の内に拯出せし、德を稱へ恩を感じて、いかで一たび面前に、這歡びを演まく欲す。餘之七主も共侶に、宜く傳へ給はるべし。と憑めば夏行含笑て、犬飼犬村二君子の、拙女を褒美は分に過たり。勿論他は貞實にて、親に不孝の行ひなく、良人に不遜の事もあらず。母親の世を去りしより、只よく内を理るのみ。這地の字を操野と、喚做す甲斐のあるに似たれど、何でふよく虚實を辨じて、人を知るの才あらんや。然るを昨日は他一人、犬飼犬村二君子を、那賊ならずと鑒定て、某を諫めしに、聽るべうもあらざりければ、謀りて落しまゐらせし、その智慧も亦廣大にて、日屬に十倍したりけり。故ある事歟、こゝろ得がたし。といへば有種眞實立て、そは左まれ右もあれ、重戸を這里へ參らせん。姑く等せ給ひね。といひつゝ奥へ退りけり。そを俟程に道節は、夏行にうち對ひて、令愛の慈善賢明、犬飼犬村の拯れたる、那件の趣は、その崖略を聞知りたり。多く得がたき善巧方便、人僉感佩せざるはなし。しかれども今試に、その可否を論ぜんには、聊破綻なきにあらず。坐興に這義をいふべき歟。といへば夏行うち笑て、そは何事歟知らねども、願ふは教給へかし。と應て膝を找るにぞ、道節扇を笏に把て、恁いはゞ善を喜せて、猶且人に備らん、ことを求るに似たれども、令愛の初より、犬村大飼の賊ならぬを、知り給ひしは世の人の、是及ばざる所也。知りたる故に親に隱して、放遣り給ひしは、寃屈の興に人を殺して、後の祟のあらせじ、と思ひ給ひし誠心にて、是も亦世の人の、及ざる所也。然ども昨宵和殿親子の、犬飼犬村を趕蒐て、千住河原に來給ひし折、犬飼犬村某們まで、只那怨を復さんとて、和殿親子を許ことなく、從類までも屠りなば、是令愛の慈悲善行は、還てその身の仇にして、親を損ひ良人を害する、愆となるを爭何はせん。かゝる故に知命者は、仁も亦做すこと勿れ。好事もなきに如ずといへり。現仁を做さんと欲して、危殃にあふものあり。宋襄の敗軍、微生の橋梁、仁を行ひ信を守れど、その機變を知ざる故に、遂に身を殺す禍あり。好事は吉事善事也。よき事なければ、歹事なし。仁を做さんと欲するより、不仁を做さじと慎むに如ず。好事あれと願んより、歹事なきには如ず。

仁もなく不仁もなく、好事もなく歹事も、なきを名づけて無爲といふ。這義によりて蘇東坡も、無事は靜坐といへる也。恁りけれども犬飼犬村、及某們に至るまで、和殿を害する心なく、怨讐還て知己となりて、歡びを盡すこと、主も客も幸ひに、免れたるにあらずや。と膝拍鳴して論ずるを、信乃は急に推禁めて、犬山和殿の辯論は、是刑名家の旨にして、今戰國の人意には、さしもあふべきことながら、俺おもふよしは然らず。昨主人の令愛の、科なき者を愆て、殺さば遂に祟を稟て、親はさらなり子孫の與にも、宜しからじと思はれしは、勉て仁を做せしにあらず、是その苦計は他人の與にて、意は親と良人の與也。恁れば他人に厚くして、親には薄しといふべからず。その做す所公ならねば、親に叛くに似たれども、よくその親の愆を、補ふ旨は是孝也。孝あり義ある、慈悲廣大の、誠を以て二犬士を、放遣り給ひしかば、犬村犬飼某們まで、恩を感じ德を喜して、主人を害する心なく、恥を雪めしのみなりしは、則賢女の致す所、天鑒虛しからざるにあらずや。善には善の報ひあり。惡には惡の報ひあり。宋襄の仁、微生の信と、日を同くして語るべからず。然は思はずや。と徐やかに、理義を演たる討論に、道節耳を傾けて、現いはるればその理あり。愚論は思ひの足らざりき。氷垣主人、某が、醉語を意に掛給ふな。と陪語つゝ呵々とうち笑へば、現八も大角も、信乃が議論を喜したる、そが中に夏行は、听果て貌を改め、信乃道節にうち對ひて、犬山主の宏論は、うち聞く所分明にて、このうへあらじ、と思ひしに、犬塚主はうち超て、道理を罄し給ひぬる、妙論は耳新にて、伉と老學になりぬべし。實に感服つかまつりぬ。と稱て亦復四犬士に、盃を薦めけり。浩處に主人の女兒、重戸は衣裳を更めて、良人に引れてやうやくに、客房に出て來にければ、現八大角は、遽しく、席を避け相迎へて、こは落魚生の御內室、良善の御志念屆きて、某們幸ひに老大人御親子と、友垣を結ぶこと、皆是賢婦人の貺なり。最歡しく候。といへば、重戸は額をつきて、淺き女子の計ひも、棄させ給はぬ刀禰達の、海成す御心廣ければ、怨を解きて風波の、立ずなりにしけふの圓坐は、千金にこそ侍るめれ。素より田舍の事なれば、歌侍聽の愚にて、まるらす

る東西も侍らねど、父も丈夫も日を經るまでに、只おん宿をせまくほし、と稟すより外は侍らずかし。といふをうち聞く信乃道節も、共に名を告り對面して、きのふの計ひを譽めしかば、夏行は笑しげに、女兒を身邊に侍らして、重戸听ね、賓客達が、儞は人を知る才ありとて、太く譽させ給ひしかども、親ながら年來日屬、儞が然までに眼力の、あるべうは思はぬ也。そを那襦衫の片袖の、明證あるすら退けて、犬村犬飼二君子を、那賊ならずと鑒定めしは、故ある事歟、いかにぞや。と聞れて重戸は羞白みたる、頭を怡げ衣領搔拊て、おん疑ひは理り也。奴なりとて初より、那人さまの賊ならぬを、知るべうは侍らねど、隔昨日の曉に、いと美しき神女の、枕方に立せ給ひて、奴を喚て宣ふやう、翌未申の比及に、箇樣々々の旅客二名、儞の親に疑れて、脫得がたき大厄あらん。他們は決して歹人ならず、俺與に過世ある、志氣潔白の義士にして、そが義を結びて弟兄たるもの、他們と共に八名あり。這們が厄難ある折每に、俺影に立形に添ふて、救ざることなかりしかども、おもふに翌の厄難は、疑似の一種あるをもて、そを解んこといとかたかり。儞先よく這意を得て、面を犯し親を諫めて、なほ聽れずば便直をもて、他們を放遣りねかし。恁計らはゞ憂を轉して、歡びと做す福ひあらん。然るを惑ふて共に狐疑せば、禍還て禍と、なること瞬く間にして、親も良人も非命に死ん。努謹めよ、忘るな。と妙音高く示し給ふ、とおもへば夢は覺侍り。覺ての後も胸轟き、宍動きて平ならねば、いと怪しくも惶さに、心に祕てありけるに、果してきのふ盜兒を、穿鑿の事猛に起りて、旅ゆく兩個の刀禰達の、這里に囚れ給ひしかば、原來正夢也けり、と心に悟りて霎時もあらず、性起らせ給ひしおん身を諫て、詞を盡し侍りしかども、泡沫夢幻と世にもいふ、果敢なき事を告稟さば、只叱らるゝのみにして、いよゝ聽れずなりぬべし。いはぬはいふに優ことあらん、と思へばいはで見し夢に、神の敎に儘してぞ、示現に違はぬ昨宵の事、けふの圓坐も皆是神の、神謨にてありけるものを、知らでをはせば倒に、奴を賢女よ才女よ、と宣はすること恥しけれ。といふに驚く夏行有種、原來然るよしありける歟。奇也々々。と感歎の、聲より先に四犬士は、思はず目と目を

あはしつゝ、倶に悟りてその意を隱さず。正に是伏姫上の、神靈擁護に疑ひなしとて、則夏行有種重戸に、那姫上の事の顚末、箇樣々々と說示して。伏姫上は俺們が、過世の母にてましませば、恁る靈驗ありつらめ。今さら思へば犬塚が、許我と行德、猿石の窮阨、又犬川が大塚にて、軍木籤上に誣られたる、又道節們五犬士の、荒芽山にてありし事、萬死を出て一生を得たりしも、又現八大角が、赤岩返璧の大厄難も、皆是那姫上の、影に立形に添ふて、護らせ給ひし冥助ならんを、神ならぬ身のけふまでも、悟らで空に過したり。許させたまへ。と各々、念じて霎時合掌の手を解きて却夏行們に、那物語に及びしかば、夏行有種、いへばさら也、重戸も膝の找むを覺ず、いよ〳〵驚きます感じて、里見殿の姫上の、神靈應驗灼然なるすら、世に有がたき奇事なるに、各位の幾番か、危窮の厄にあひながら、その志移らずして、年を歷るまで友同士の、所在を索給ふこと、亦是得がたき義士也けり。凡眼珠玉と魚目を辨ぜず。越に昨の非をおもへば、霎時也とも賊をもて、論ぜしことの悔しさよ。願ふは一年三箇月、杖を駐めてなほ寬やかに、誨給へ。と叮嚀に、勸解て終日相譚けり。恁而饗餼果しかば、四犬士はその次の日に、別を告て去んとせしを、夏行有種推禁めて、などて强顏く速に、出てゆかんと宣ふぞ。亦復自餘の犬士の所在を、索巡らんとおもほすとも、限り知られぬ旅なるに、權且這里にをはせかし。緣だに竭ずは居ながらに、再會の時なからずやは。やうやく冬に赴けば、雪を犯し霜を踏て、遙けき路をゆかんより、春まで逗留し給はずや。急くは要なきことなるべし。と詞を盡して放さねば、四犬士は已ことを得ず、遂にその意に儘しけり。是より後犬士們は、人の側にをらぬ折、過去方を迭に報るに、道節は五箇年前、荒芽山の窮難より、犬川莊介と共侶に、四國九州の盡處までも、徧歷既に四稔に及びし、去歲は甲斐の石禾なる、大法師の寺院に宿して、大井に照文に、名告あひし事の趣、爾後犬川莊介は、自餘の犬士を復索んとて、石禾を首途したる事、この冬信乃が窮阨を、道節謀りて拯ひし事、四六城木工作、丼に里見の五の尹濱路姫の事、淫婦夏引、泡雪奈四郎、その僕媼內幻內們の事、甲斐の國守武田氏の、信乃道節に對面の事、

これにより信乃道節は、武田氏招待の、催あるを聞知りて、十一月の下浣に、蛋崎照文們と共侶に、濱路姫に俱しまるらせて、はやく石禾を立去て、武藏下總の封疆なる、墨田河に來ぬる道中、四谷の原にて那奈四郎は、惡僕媼內に傷つけられ、信乃は料らず奈四郎を、擊果して姫のおん與に、四六城木工作の怨を復せし事、この日蛋崎照文は、濱路姫に從ひまつりて、河を渡して安房へ赴き、信乃道節は莊介を、索ねて甲斐に在らずなりにし、絆の由を告んとて、豫て約束の國郡を、那這とうち巡りしに、何處にゆきけんいまだ得あはず、今玆は奧の會津より、白河を經て下野なる、奈須二荒山、いへばさら也、投かた空になりしより、甲斐が峯近く立かへり、大法師に消息して、莊介が歸來ぬるや、否を問んと思ひつゝ、遂に這里まで來ぬるといふ、憂苦艱難瑰奇も多かる、過にし事の物かたらひに、現八と大角は、耳を側て嘆唱しつゝ、听くこと約莫一响許、就中濱路姫の、一大奇事に胸を潰して、左にも右にも俺黨は、里見殿に宿因あること、いよ〳〵符節を合する如く、犬山生の女弟と聞えし、犬塚生と合巹の、約束を得遂ざりける、濱路亡女と五の君と、同名なるも亦奇なり。就て某們がうへはしも、箇樣々々の事ありきとて、迭代に說示す。現八は五稔已前、荒芽山にて危難の折、敵の重圍を殺脫て、獨四犬士を索ねし事、この比行德に赴きて、小文吾を訪けるに、他は故鄕にかへり來ず。曳手單節の往方すら、竟に知るよしなかりし事、京師に赴き旅宿して、一稔あまり在りし事、爾後又岐岨路より、下野に赴く折、荒芽山に立寄りし事、網緒の茶店賜平の事、庚申山の奇異惟倒して、よくその良人の危窮を拯ひ、且現八が豫て謀りて、角太郎の淺傷の鮮血を、親の髑髏に沃ぎしかば、親子の證據揭焉、角太郎の惑ひ醒め、妖怪越に發覺て、角太郎に擊れし事、是よりして角太郎は、字を大角と改めて、家を售り故鄕を離れ、自餘の犬士に遇んとて、現八と共侶に、徧歷二稔に及びしに、一犬士にだも遇ざりければ、權且故

鄉に立かへりて、二親の墓に詣、并に亡妻雛衣の、三回忌辰に、佛事を執行し、更に行德に赴きて、小文吾は今もなほ、在や不や問んとて、又現八と共侶に、良這地まで來つる事、頭より尾まで、現八これを談ずれば、大角も亦語を續ぎて、閑談に日の暮るゝを覺ず。說果て大角は、護身囊に藏めたる、那禮宇の玉を取出て、信乃道節にこれを見せ、又衣領を推開きて、左のかたなる乳の下より、腋の邊に及びたる、痣さへ這折見せしかば、信乃道節は聞見る毎に、共に感嘆の聲を斷ず。那折の勢を、嘗に倩想像れば、現八の義勇、大角の純孝、雛衣の苦節はさら也、那山猫の事までも、皆未曾有の珍說にて、憐むべく哀むべく、驚くべく歡ぶべき、事情の然ぞありけんを、又今さらに見る心地して、節を拍つゝ稱へけり。當下大角又いふやう、某が犬飼と俱に舊里に立寄りしは、世になき妻をおもひ續けて、女々しく故鄉を慕ひけん、勇士の本意にあらずとて、笑ひ給ふ歟知ねども、那雛衣は某が、養家の獨女にて、養父は小父也。師匠なり。然るを亡妻雛衣は、俺身の與に刃に伏して、仇を仆せし大功あり。且某は其比まで、父の非命に終りしを、知らで變化に仕へてありしに、犬飼主の好意にて、父の仇たる妖怪を、擊捕ることを得たれども、是すら孝とするに足らず。況養父の洪恩德義に、報ひもせず義もあらで、そが莊園すら護らねば、心に恥ること多かり。切ては妻の三回忌に、故鄉に還りて菩提を弔はゞ、養家の與に萬一の、恩義に答るよすがにならん、と思ひとりつゝ犬飼主と、計りて形のごとくにしたり。這意を查し給ひねかし。と報る詞の不樂しげなるを、信乃は听つゝ慰めて、その事も亦理義に稱へり。誰か歹しとおもふべき。異邦なる聖と聞えし、禹が洪水を理めし折、六七稔歷る隨に己が家の頭を過れど、立寄らざりきといふ事あるは、臣たる道を盡せばなり。犬村生はいまだ仕へず。只同因果の友あり、と聞得て索巡れるのみ。進退不定の旅なれば、非如然る意味あらずとも、幾番故鄉へ立寄ればとて、忌むこと一切なかるべし。且犬山を初として、犬飼犬川俺身まで、皆故ありて舊里へ、立寄ることを得ざるもの也。然ば年來二親の墓に詣ること克はず。只うち歎くのみなるに、犬村生は異にして、所縁に置酒して別を告げ、公然と

して舊里を、愛たく立去り給ひしは、最淡しき事也き。といふに道節現八も、寔に然也と應ぜゝ、信乃が評語に身を不樂て、且大角の人と爲り、溫順にして孝義に厚きを、亦得がたしとぞ思ひける。

第八十六回

道節再復讐を謀る
大巧に妖賊を滅す

復說。信乃道節現八大角は、主人夏行有種が、留ることの懇切なれば、憶ず這里に日を彌りて、秋は過ぎ冬もはや、十月の中澣になりけり。恁而有一日信乃道節は、現八大角に對ひていふやう、去歲の冬某們が、石禾の指月院を立去りし折、蜑崎十一郎照文に從ひ來たる、雜兵一兩名を留め措れて、事ある折は相告げよ、と約束をせられしかども、一ト たび那處を去りしより、いまだ莊介に環りも會ず。且某們は國の守、武田殿の招きに應ぜず。然るを今さら立かへりて、那道場に到らんことは、髣髴き所あり。這里より脚力を遣して、莊介が那寺に、還りて處るや否を訪ふべく、幷に今番和君們と、環會ひたる趣を、、大法師に報まく欲す。這義をこゝろ得給へかし。といふを現八大角は、つら〳〵とうち听て、その義尤宜からん。然とても人を央ふて、甲斐へ遣すまでもあらず。某們うち連立て、指月院に赴くべし。然すれば文署の煩ひなく、、大法師に對面して、委曲を演るに便よし。且犬川がかへり來て、那處に在らば伴ふて、速にかへり來てん。いまだ那處にあらずといはゞ、時宜により逗留して、歸來ぬるを俟べきなり。這義に儘し給はずや。といふに信乃道節は歡ぶこと大かたならず。和君們那處に赴き給はば、百書翰にも彌倍て、意を盡んこと自由なるべし。進退隨意し給へ。と相譚果て却恁々と、夏行有種に告しかば、夏行們はよしを聞て、しからば伴當をまゐらせん。俱して首途し給へ。といひしを現八大角は、共に推辭て從はず、伴當ありては煩し、程なくかへり來つべしとて、その詰旦別を告て、甲斐路を投て出てゆく。旅に熟たる壯士の、行裝も繕はず、舊の儘なる眷笠と、雨衣をのみ携て、急ぐを送る夏行有種、信乃道節も河原まで、出て袂を分ちけり。是より先に

夏行は、幹淨たる小室を、四犬士の出居と定めて、東西不自由なく是を賄ひ、三たびの饌も等閑なく、その間には果子を薦め、酒を勸る折々には、有種を侍らしつ、その身も倶に武を講じ、兵を論じて慰めたる、その用意親切にて、貳ごころなく見えしかば、道節竊に歡びて、一日側に人なき折、有種に聟くやう、傳聞れし事しもある歟。曩に某上毛なる、白井の城の郊外にて、寃家扇谷定正に、欺詐寓りつ組伏て、刺殺して首級を捕りしに、敵にも逆用心ありて、そは眞の定正ならず、池袋の戰ひに、俺君煉馬殿に鎗を鎬たる、扇谷の家臣にて、越杉獸一郎遠安、と喚做ものて有ける也。這折に父の仇なる、鑪門三寶平を擊しかど、いまだ宿志を果すに足らず。剩敵の謀臣、亘田助友に謀られて、荒芽山の危難あり。俺のみならで犬塚犬川、犬飼犬田も敵に當りて、四零八落になりしより、今なほ全聚らず。且猜平の世四郎と、その妻音音は戰歿しけん、曳手單節もいかにかなりし、生死存亡詳ならず。實に君父の讐敵なる、那定正を討漏して、怨に年を累れども、大敵なれば又さらに、狙ひ擊つ便りもなく、過世ありける義兄弟に、環りあふて後にこそ、と思ひ、おもはず立ことはやき、光陰五稔を過したり。しかるに今番料らずも、貴宅に寓居するのみならで、扇谷定正は、五十子の城に在と聞にき。四五里に足らぬ程なれば、虚實を覘ふ事も易く、寃ふに便り反からず。土兵百名借し給へ。他が外出を覘ふて、短兵急に責擊ば、宿望立地に成就せん。那大敵を討捕て、その家裏に安房に赴き、里見殿に仕まつらば、世に恥ることなかるべし。這義を承引給はんや。と思ひ入つゝ相譚ひしを、有種听て異議に及ばず、且歡びて答るやう、盛なるかな忠義の魂。某なンどが今さらに、企及ぶ所にあらねど、幸ひにして用ひらるゝ、事しもあらば驥尾に附く、一臂の力を盡すべし。那定正は、俺亡君、豐島殿の與にも仇也。曩に白井にてありし事、君が武勇の風聲を、知ざるにあらねども、當時俺身は年もなほ、二十に足らぬ程にして、志も定らず、資るものもなかりしかば、復讐の事などは、及びがたしと思ひしのみ。今は進退一定して、事を行ふに便りあり。且豐島の殲兵の、某が迹を慕ふて、當日這里に緊合しもの、無慮八九十名あり。皆壯客になりたれ

ども、軍陣に熟たるもの也。他們に機密を聟示して、復讐の日に從せん。他們も亦亡君の、怨を復すよしを聞かば、咸歡びて從ふべし。某も亦親に告て、倶に定正を一箭射ん。這義を允させ給へかし。といふを道節推禁めて、その事は決して無用也。和殿は人の後となりて、妻子あり養父は老たり。倘本意を得遂ずして、敵の爲に戰歿せば、歎きを遺すのみならで、養家の與には不義とならん。縱本意を遂るとも、その事後に敵に知られて、大軍這里へ寄來るならば、何をもて防ぐべき。是災害を遺すに庶し。和殿もしその意あらば、俺與に五十子の、城を折々覘ふて、虚實を知せ給はるべし。某も亦折々、那里へゆきて覘ん。這義に儘したまはずば、大義の念慮を轉して、猶又時を俟んのみ。といふに有種困じ果て、然までに思召すならば、今さらに力及ばず。俺身は思ひ止りて、那莊客們に機密を傳ん。御心安くおぼされよ。と相譚果て退きけり。爾後又道節は、信乃に件の宿望を、箇樣々々と告しかば、信乃は听つゝ頭を掉て、その義甚しかるべからず。曩に和殿は白井にて、君と父とを害したる、越杉鑪門兩個の仇を、漏さず其首に擊捕て、復讐の義を果せしにあらずや。そを今ふたゝび思ひ起して、定正主を狙擊ん、と揣るは危き事なるべし。約軍陣の常態にて、討ことあれば擊るゝことあり。豐島煉馬の滅亡は、小をもて大に仕へず、寡をもて衆に敵したる、愆なるを爭何はせん。且和君は俺身と共に、里見殿に宿因ありて、安房へまゐりて仕ふべき、約束あるを忘れて歟。徒舊君の與にのみ、その身を殺すことあらば、忠なりとても義に錯へり。誰か感心するものあらん。なほ又三省し給へかし。と密やかに諫めしかば、道節心に歡ばず、沈吟ずること半晌許。頭を擡げ歎息して、和殿の意見もその理あり。俺いかにして里見殿の、恩遇を忘れんや。しかれども人として、始ありて終なくは、大丈夫とすべからず。曩に某白井にて、寃家定正を擊漏せし折、還て敵に聒惱されて、和殿們さへに難義に及べり。そを那儘に見かへらで、里見殿に仕へなば、始ありて終なく、做ことあるをせざる也。是大丈夫の所行ならんや。とは思へども今速に、寃家を擊んといふにはあらず、虚實を覘ひ時を俟て、折もあらば一箭射ん。時至らずは天なり命也。その期に思

ひ絶んのみ。然まで劬勞にしたまふな。と答て再這義をいはず。信乃には隱して密々に、五十子に赴きて、城の虛實を覘ひけり。左右する程に、十一月の中氣になりつ。有一日甲斐の石禾なる指月院より、現八大角が脚力として、去歳の冬照文が那寺に遺し措たる、安房の雜兵一兩名、氷垣夏行の宿所に來て、現八大角が連署の狀を、取出て恁々と報しかば、信乃道節は、遽しく、件の書翰を受拿て、使役を勞ひ留措て、退きてその書を見るに、現八と大角は、指月院に到著せし日、大法師に面謁して、信乃道節に再會したる、其身那身の來路を、遺もなく報知して、莊介の事を問稟せしに、犬川生は往る夏、六月の下浣、犬田小文吾と連立て、越路よりかへり來つれども、目今は寺内に在らず。その故は箇様々々と、小文吾が事の顚末、犬阪毛野胤智の事、莊介小文吾が越後にて、萬死を出て一生を、得たりきといふ事の越、毛野も亦同因果の、犬士たること分明にて、智字の玉と痣もある事、又毛野が石濱にて、親胞兄弟の仇なりける、馬加常武一家のものを、鏃にしたる事、又信濃にて千葉大石家の、佞臣們を擊し事、なほ又寃家緣連を、擊果さんと思ふにより、青柳の歇店にて、詩歌を遺して立去たる、事しも漏さず恁々と、、大法師の說示せしを、聞たる隨に書つらねて、これにより犬川犬田は、毛野がうへも心もとなし。なほ又自餘の犬士を索ねて、遇ずとも這度は、快本院にかへり來てん。春まで過すべからず、といひつゝ出てゆきしかば、是年の暮には音信あらん。權且逗留し給へ、と、大法師の宣すれば、先このよしを消息して、報まゐらするもの也。と最も細しく寫たりければ、信乃道節は迭代に、讀つゝ俱に歡びて、恁れば非如遲くとも、明年の春までには、犬川犬田もかへり來て、四犬士這里に來會せん。然るときは毛野親兵衞の、二犬士も亦會よしありて、八犬終に具足せん。日を僂へて俟べきのみ。しかはあれどもいかなれば、俺黨は往ところとして、窮阨難義に遇ざるものなく、就中小文吾は、相摸灘の破船、石濱の危難、越後片貝の大阨は、莊介と俱に萬死を出て、實に一生を得たる也。さるにても曳手單節は、いかになりけん不便なり。又那犬阪毛野とやらんは、智勇倫快の壯士也。單身にして犬敵を、鏃にせしといふ、兵法武略

泛々の、勇士の及ぶ所にあらず。なほ又殘る一個の仇を、紫ん興に小文吾們に、俟ざりしも思慮深き、胆勇獨歩といひつべき、得がたき俊傑なるかな。と嘆唱しつゝ件の雜兵を、召のぼし對面して、猶且絆の仔細を問ふに、那雜兵們が答ていふやう、指月院の後住の事も、望むもののいで來にければ、、大大德の歡び給ひて、來春は寺を遞興て酒家は俺投かたへゆくべし。汝達は穗北より、路の便りの歹からねば、安房へ還りて照文に、七犬士の事を告よ。這它の事は書中にありとて、蜑崎主へ與らせ給ふ、法翰を遞興されたり。是等の一議も候へば、おん回翰を賜ふに及ばず。安房へ御要も候はゞ、承らん。といひけるを、信乃道節はうち听て、然ば亦俺們も、言傳を憑む也。時いまだ至らずして、守に拜見せざるをもて、蜑崎生へ書狀をおくらず。這義もこゝろ得給はるべし。と叮嚀に意衷を示して、二封の銀子を取せけり。恁りし程に夏行有種は、莊介毛野小文吾們の、事恁々と傳聞て、駭歎じ且歡びて、指月院より來つる雜兵に、飯を啖せ酒を飲して、牽出物さへ與へにければ、雜兵們は受歡びて、その夜を這里に曉しつゝ、辭して安房へぞ還りける。是により信乃道節は、現八と大角が、莊介小文吾を相伴て、かへり來る日を俟不樂て、嚮をしつゝ彌る日の、今玆は爰に果敢なく暮て、明れば文明十五年の、春なほ寒き正月の、十日あまりになりにけり。話分兩頭。這時石禾の指月院には、現八大角寓居して、莊介小文吾を俟たるに、年は暮れ春立かへれど、那二犬士はかへり來ず。折から後住の老僧の、入院も既に近きにありとて、、大法師に事多かれば、現八大角は身を措難て、且穗北へ還らん歟、恁ても這里にあるべき歟とて、思ひ難つゝ在りける程に、正月の十日可に、莊介と小文吾は、又信濃路よりかへり來にければ、迭の歡び驚くまでに、その宵は、大も團居に入りて、四犬士は各々來路を報げ、意衷を演べして、寺を預るものもなく、且その遺囑の默止がたさに、憶ず這里に錫を住めて、似而非住持になりたるは、是已ことを得ざる所爲也。然るをやうやく讓るべき、後住の法師あるをもて、そが入院の日の近づきたり。いまだその日を

卜めねども、下旬ならんと思ふ也。恁ればはやく寺を遞與して、抽僧は當所を辭し去り、結城の故戰場に赴きて、櫂且那首に住んと欲す。その故は、抽僧出家の初より、那八顆の靈玉の、往方を索極ん與に、抖擻行脚に二十餘年の、星霜を歷たれども、菩提の勤如意ならで、なほ塵中に在るに似たり。方僅しも八顆の玉の、往方を安定に知るよしありて、そを感得せし八犬士の、出世姓名遺もなく、聞知ることを得たりしかば、稍宿念を果すに足れり。そが內中なる犬江犬阪の、往方詳ならねども、時至らば索めずして、竟に來會することあらん。こゝをもて抽僧は、結城の故戰場に庵を締びて、義實朝臣のおん先考、里見大炊介季基朝臣、幷に大塚匠作三戌、（信乃が祖父）、井丹三直秀、（信乃が外祖父）、這它嘉吉に戰死したる、名將勇士勁卒の、菩提の爲に一百日の、大念佛を修行して、罪犯赦免の君恩に、答まつらんとこそ思ふなれ。去向の便り歹からねば、穗北の旅舍に立寄て、犬塚犬山二賢者に、面會して結城に到らん。各位もその折まで、逗留して抽僧と、俱に當所を立去り給へ。といふを莊介うち听て、しからんには一旬あまり、暇ある身になりにたり。鵜に某道節と、本院にありし日は、幾程もなく他鄕へ走りて、簑生その它の靈山靈地を、一箇所も登陟せず、犬江の小兒は神隱しにて往方もしらずなりしといへば、某諸州を巡りし折、山に遇へば必登りて、那親兵衞を索ねたり。他恙もなく在るならば、今玆は九歲になりぬべし。爾るを殊に山多かる、這地の靈場名山を、漏さば遺憾しからん。後住の入院ある日まで、某們は當國の、高峰に登りて親兵衞を、索ねてはやくかへり來てん。犬飼犬田犬村生は、這義に從ひ給はんや。といへば現八小文吾大角、一議に及ばず皆點頭て、そは俺們も同意也。翌の旦開に立出て、二十日前後にかへり來つべし。さばれ大德は是等の事を、允させ給ふ歟、いかにぞや。と問へば、大は微笑て、そは左も右も隨意なるべし。快ゆきて快還り給へ。といふに大家歡びて、その詰旦、莊介現八、小文吾大角們の四犬士は、身裝して出る時、非如他山は漏すとも、先簑生へと去向を定めて、うち連立ていそぎけり。爾程に後住の入院の、下旬は障ること有とて、四犬士の出てゆきたる、次の日に讖定せられて、すでに中一

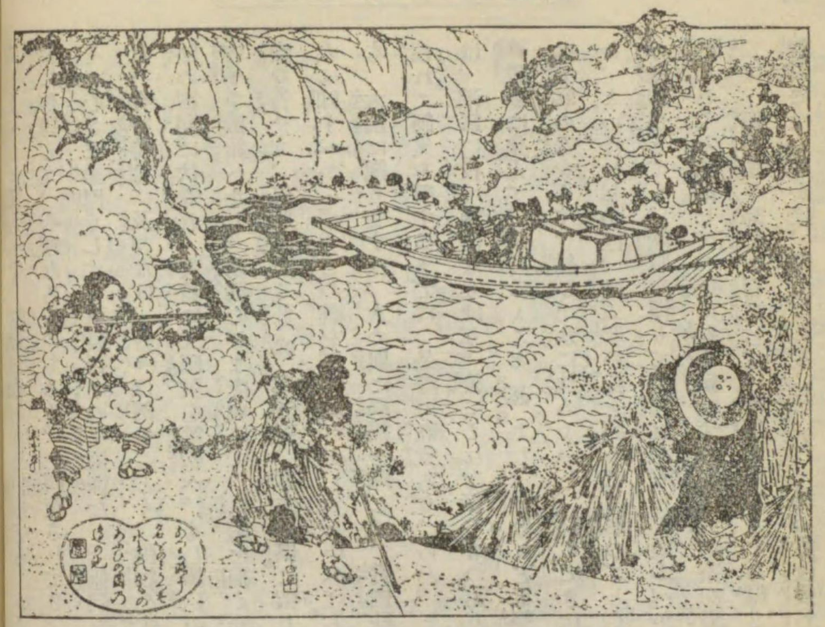
日隔て、はやく入院をしたりけり。登時、大は思ふやう。豫の約束岩鼎ひて、後住に寺を遞與せしに、那四犬士の還るを俟て、なほ本院に在んこと、今さら愛惜しつるに似て、影護き所あり。はやく當所を退きて、穗北に到りて四犬士を、俟こそよけれ。と尋思をしつゝ、却念戌と無我六に、那四犬士が歸來なば、猛可に入院を急れて、後住に寺を遞與せしかば、酒家は當所を退きて、穗北に到りて俟つゝ在らん、といひにき、と傳へよかし。這義を忘るべからず。と叮嚀にこゝろを得させ、後住の法師に別を告て、准備の頭陀袋を項に掛け、戒刀を懷にして、脚絆を穿、檜笠を戴き、錫杖を突鳴して、飄然として立去りけり。恁而、大は石禾を去りて、夜に宿り日に步み、ゆくこと則一日ならず、武藏州豐島郡、麻生の鄕に程遠からぬ、葵岡といふ一村落を過る折、春の日既に傾きて、下晡になりしかば、宿を請んと思ひつゝ、村人の門に立よりて、云々と呼內に、當所は村の法度にて、出家に宿を借さずといふ。こゝろ得がたく思へども、强て乞んはさすがにて、又その先なる家に到りて、云々と呼門に、這家にても承引ず。約莫かくの如くなること、五六軒に及びしとき、大はいよ〳〵訝りて、强顏く答て見かへりもせぬ、家主を喚かけて、老禿這村の家毎に、宿を投ること既にして、五六軒に及びしかど、推辭るゝこと皆異ならず。單身逆旅の故なる歟。凡俗ならば然もあらめ、酒家は出家の事にして、且抖擻行脚の身也。枉て一宿を曉させ給へ。と憑めば主人は澁澁に、身を起して端近う。出て、大にうち對ひて、長老知ざる所あり。俺村は年毎に、東四の沒ること多かれば、村長より徇られて、法施宿をせざる也。といふを、大はうち听て、そは然る所以もありぬべし。然らば生貨で留給へ。素より頭陀の身にしあれば、路費多くはもたらねども、房錢は製度目の如く、人並にまゐらせん。恁ても承引給はずや。と問せも果ず家主は、頭を左右にうち掉て、否、房錢を賜るとも、出家を宿所に留るな。と捉られたる村長の、法度を今さら背きがたかり。快々出てゆき給へ。と固辭むを、大は又訝りて、そは亦甚麼なる所以なるぞ。と問へば主人は舌うち鳴らして、噫情剛し然ばかりに、疑れなば說示さん。框に尻をうち掛て、疑ひ霽しに聽ねかし。今

より五六年前つ夏、當所に水損の患ひあり。本邨の大沼より、間なく時なく雲霧起りて、屢大雨を降せしかば、五穀登らず。籠より、蛙を生ずるまでになりたり。爾ば村人うち歎き、鎭守の神社に祈禱凉して、七日の神樂を獻り、鉦を鳴らし鼓を鳴らして、連りに請晴を催すものから、些も應驗なかりしに、一日行脚の法師あり。みづから知雨老師と名告て、村の家毎に誨るやう、今茲は鄕鄕豐年なるに、本村にのみ水損あるは、みづから招く孽にて、神の祟のあるを知らずや。抑本村なる大沼には、昔より暴神あり、なれども慈悲廣大にて、自村他鄕の差別なく、貧民を憐み給ふ、大誓願をはしませるを、汝達夢にも知らずして、靈なき鎭守の神をのみ、祟る故に恁る祟あり。今より愆を改めて、咱教に從はゞ、憂を轉して歡びとなさんこと、踵を旋すより速なるべし。恁ても惑ひ醒ずして、件の神を祭らずは、村人總て餓死に及ん。いと怕るべき事ならずや。と鼻蠢めかして示されければ、人衆听つゝ駭き怕れて、しからばいかなる祭祀をして、祟を鎭め候はん、と只管請問稟せしかば、老師の誨給ふやう、件の神の祭祀には、吹鼓舞踏る事などをすべからず。約莫年の正月には、永樂錢五十貫文を、分ちて五箇の蒲簀に斂め、新衣十襲を、分ちて二箇の皮籠に斂め、これを藻刈船にうち乘して、沼の中央に流すべし。夏は又畑物の、瓜茄子何くれとなく、初生を十箇の籠に斂めて、流すこと前のごとくせよ。秋は又新穀の精白米三十苞に、味噌醬油二十樽を相添て、流すこと前のごとくせよ。這祭禮は年に三番、供物に增減あることなく、正五九月に興行せば、縱鄕鄕の凶年なるも、本村は年毎に、五穀登りて豐饒ならん。努々怠慢すべからず、と叮嚀に敎給ふを、大家疑訝りて、仰うけばり候へども、然ては村の東西沒多かり。勿論神の事なれば、供物の錢米衣などは、後に誰にか取すべき、と問ふを老師は聞あへず、愚なることをいふものかな。那神感納あるときは、供物は通てその夜の中に、何處ともなく喪る也、といふを大家又訝りて、そは不思議なる事にこそ候へ。神は只靈ありて、形なしと聞たるに、然しも凡夫のまゐらする、錢米衣を受收めて、什麼何にかし給ふらん、といへば老師は冷笑ひて、淺き凡夫の了簡には、恁思ふべき該なから、件の

神は貧民を、救せたまふ大慈悲あり。よりて凡夫のまゐらする、錢まれ米まれ受給ひて、自村他鄕の差別なく、貧者に授け給へど、人よくこれを知ることなし。こゝをもて汝達が、夏作秋作野菜の類を、おもふに倍して價貴く、賣て闔の多かること折々あるは、那神の授させ給ふ也。這義を査して疑ふことなく、村人心一致して、錢を出し米を裒め、三番の供物に懈怠なくば、五穀熟して病厄なく、繁昌他鄕に優るべし。但那神は外より來ぬる、法師と巫覡を忌給へば、一夕も留むべからず。又那供物はその月の、十五日と相定めて、夜亥の時に船に乘して、沼の中央に推遣らば、些も後を見かへらで、僉快走りて宿所に歸りて、ふたゝび門へも出べからず。當夜は家毎に灯を點さで、門を鎖して謹處るべし。祭祀は正五九月なれども、今茲は月に拘らで、這六月より興行して、正月五月二度の供物を、今番一度にまゐらせよ。等閑にな思ひそ、と神託がましく告誨えて、形は消てなかりけり。こは未曾有の奇事なれば、村人駭嘆せざるはなく、信ずるもあり信ぬもありて、狐狸の所爲にやあらん。不覺に怕れて妖されな、と罵るも多かりければ、評議商量區々にて、三十餘日を過せしに、天一日も霽るゝことなく、剩十五六なる少女子の、往方もしらずなりし事、兩三番に及びしかば、村人總て駭憂ひて、然らば那知雨老師の、敎諭の如くせよやとて、錢を集め東西を整へ、大沼祭祀を剏しかば、爾後は女の子も亡せず。天もやうやく晴亘りて、秋に至りて半減の實入りあり。是よりして後年毎に、三度の供物を闕ことなく、けふは正月の祭禮日にて、今宵錢五十貫と、新衣十襲を、大沼にもてゆきて、船に乘して備る也。是等の東西は村長の、宿所へ集てものせらるれば、咱們は錢を出せしのみ、四鼓より戶鎖して就寢るかし。恁いふ情由で候へば、出家は決して留めがたし。外に宿を投め給ひね。這村にては益なし。と心長閑き田舍兒の、暮るゝも厭ぬ長物語に、、大は呆れて鳥滸しさを、然らぬさまにてうち頷き、所謂を听けば推辭るゝを、今さら無理とは思はぬ也。抑這里の村長刀禰の、姓名は何といふらん。宿所は何處に候ぞや。と問ば主人は眞實だちて、然也。這里の村長は、磐井右衞門二と喚れたる、宿所は畧を東へゆくこと、約は三町許にして、

南に見ゆる衝門は、長刀禰の屋舗也。又只投宿の所望ならば、ゆき給ふとも益なきに、芝崎村まで急せ給へ。といふに、大は應をしつゝ、別を告て遽しく、走去りつゝおもふやう、那村人が云々と、說知したる大沼祭の、供物の事こそ信られね。そは必幻術に、長たるものが村人們を、哄して東西を奪ふならん。しかりとも是等の事を、明々地に論しなば、素より愚直の田舍兒の、還て洒家を齬悒く思ひて、惑ひはいよ〳〵醒ざるべし。要こそあれ、と肚裏に、尋思をしつゝ忽地に、その計決りければ、聞たる隨に村長の、宿所に赴き喚門て、執拨の老僕にいふやう、愚僧は曩に村人に、大沼祭祀を敎給ひし、知雨老師の從弟にて、知風道人と喚るゝもの也。則師父の幹人として、一大事を告ん爲に、今宵猛可に來つるかし。主人に通達し給ひね。といふに老僕は胆を潰して、敬ふこと大かたならず。且く等せ給へとて、走りて奥へ退りけり。折から點燭時候也ければ、村長磐井右衞門二は、よしを聞て遽しく、奴婢們を召て客房へ、燭奴二脚ばかり出さして、布袴の紐結びもあへず、みづから門邊に出迎へ、大法師にうち對ひて、在下主人右衞門二也。遙這方へと先に立て、客房へ案内をす。登時、大は草鞋を脫て、引れて上坐に著しかば、右衞門二は額づき拜みて、老師の塵俗を忘れ給はで、御弟子を差されしこと、有がたきまで忝し。法體恙ましまさずや。願ふは慈敎の趣を、傳示させ給へかし。といふに、大は爪繰る數珠を、止めて法衣の袖搔合し、老師の法敎餘の義にあらず。曩に敎諭せしごとく、大沼の供物等閑なく、今宵は亦正月の、祭祀を執行せらるゝこと、感心尤淺からず。しかるに昨日沼の神の、俺師父に託宣あり。近曾不思議の妖賊ありて、村人們の獻供物を、竊略ることしば〳〵なれば、いとうれはしく思へども、那辯者の術長たれば、神ながらも立地に、罪なはん事最かたかり。願ふは老師俺與に、退治せよ、と宣へり。因て拙僧師命を稟て、這里に到來しつる事、今宵那沼の頭に赴き、終宵四下に心を屬て、辯者ありと見るならば、討滅さん爲ぞかし。這義をこゝろ得給ひね。といふに右衞門二駭呆れて、そは思ひがけもなき珍事にて候也。然らば大德はその辯者を、法術もて退け給ふ歟、或は亦劍戟をもて擊平げ給ふ歟。と

問ふを、大は聞あへず、拙僧法術ありといへども、かくのごときの辯者は、鐵砲をもて擊捕るべし。本邨に獵戶の、銃術に修煉して、心剛なるものあるや。と問復されてさん候。本邨の獵戶に、種平島平と喚做たる、兩個の獵夫あり。その心ざま勇悍くして、百發百中の手煉なり。他們を用ひ給はんや。といふに、大は頷きて、現その二人よかんめれ。今宵時刻に及びなば、各々は例のごとく、供物を大沼にもてゆきて、船に乘して退くこと、約二三町にして、路の樹間に伏躲れ、其首にて暗號を等給へ。もし鐵砲の音聞えて、丸响のしたらんには、大家はやく走り來て、絆の容子を觀給へかし。勿論心ざま虛弱にて、鬼胎を抱く嗚呼の者、或はその性噪しくて、事に忍ばぬ白徒は、今宵件の隊を省きて、但壯健なる莊客四五名、和主と俱に留りて、その它のものは返すべし。事成るまでは推祕して、叨に人に知すべからず。この義を愼み給へかし。といへば右衞門二額をつきて、仰うけばり候ひぬ。恁稟さんは恐けれども、大沼に鎭りますは、人の與に禍福を降して、賞罰殊に妖然なる、暴神とこそ思ひ候ひしに、何どてその妖賊を、怕れて師父を勞するまでに、是等の託宣ありつらん。といふを、大は冷笑ひて、聞ずや唐山戰國の時、楚の大夫屈原は、汨羅に投て神になりけり。後にこれを祭るものあり、五月五日に供物を備て、その水中にまゐらせしに、屈原の神靈夢に見えて、祭らるゝこと甚よし。然けれども祭祀の供物は、蛟龍の爲に奪れて、奈何ともせん術なし。願ふは五彩の糸をもて、結びて水に沈めよかし。然るときは件の蛟龍が、怕れてこれを奪ふこと得ならず。この義を憑む、といはれしかば、則五彩の粽を製りて、形のごとくに祭りしとぞ。端午の粽卽是也。恁る例もあるなれば、沼の暴神也とても、妖賊を憚りて、託宣ありしを疑ふべからず。快々准備をし給はずや。と急されたる右衞門二は、只顧かしこみ感激して、遂に些も疑はず。先、大に茶を看め、夕饌を羞めなどす。管待極めて叮嚀也。その間に右衞門二は、獵戶種平島平を召來して、密議を示しこゝろ得さして、竊に准備をしたりける。春の夜既に深初て、はや亥の初刻になりしかば、祭祀に關る故老、村の壯佼幾名歟、村長右衞門二の宿所に聚來て、五蒲簀の錢、二皮龍の衣



（あつまの路に名を名のみすうつら鳥水のかものもあふひの岡のひの邊の池）

裳を、五疋の馬にうち駝して、大沼の畔にもてゆく程に、蕉火二行に導くもの、宰領のものありて、亂雜を制め、清淨を旨として、犯し穢すことを許さず。右衞門二は麻の社杆に、五箇服章ある黑綿布の衣を被て、藤柄の中刀を、瑞短に横佩て、一分反の菅笠を戴き、斑竹の杖を衝ながら、伴當一名を從へて、陸續として徐行けり。約莫這祭祀に關るものは、皆新衣を被て、剪綵を挿頭とす。しかれども鉦鼓を用ひず。人の觀ることを許さねば、路次の煩ひなかりけり。恁而件の衆人は、大沼の畔に馬を駐めて、蒲簀と皮籠をうち卸し、准備の藻刈船に積乘しければ、禰宜代なる一個の故老、布の白袴を穿き、蔓草を襷俾に採掛て、手に鈴を振鳴し、沼に向ひ跪きて、中臣の祝詞を、齷烏滸しげに誦すること一遍、白幣を彼此と、振動しうち戴きて、軈て水際に建るとき、大家齊一身を起して、素發、時分は今なるぞ、快おん船を推出せ。と罵りつ散動めきて、篙を把るもの一兩名、船を沼の中央へ、撐もて流し出と聽きて、蕉火はそが艤に、沼に投

棄て、五疋の馬を、牽走らしつ、異口同音に、後を見るな。と相警めて、喘々て逃るが似く、別れて宿所へ還りけり。そが中に右衞門二は、故老兩三名と、心利て小膂力ある、村の莊客六七名に、大の機密を箇樣々々と、甲夜に聲き示せしかば、逆より僉こゝろを得て、宿所まではかへりも去らず、途より竊に引外し、右衞門二に從ひて、沼を距ること一町あまり、樹柆の間に伏躲れて、那種平們が鐵砲を、放ことあらば聞漏さじ、と思へば俱に耳を澄して、今か〳〵と等たりけり。爾程に、大法師は、獄戸種平島平を、竊に招き近づけて、件の機密を說示すに、種平們は異議もなく、軈て宿所に走り還りて、身裝しつ鐵砲を、引提て再出て來て、磐井の宿所に躲れてをり。既にして村人們が、祭祀の供物を沼の畔に、もて出すを遣り過して、大も徐に立出て、草鞋を穿き錫杖を挾み、種平島平を從へて、間道より找み近づき、村人們が祭果て、齊一かへり去りし時、大は竊に立替りて、且這沼の光景を觀るに、思ふに倍たる大沼にて、周匝は五六町あまり、八九町もやあるべからん。水際には菰草菖蒲の枯たるあり。夏は水葵も多しといへば、村の宇を葵岡、と喚べるはこれに緣る歟とおもはる。時氣は正月の望の宵なれば、月明に星稀にて、風いと寒く霜深かり。氷を摧く水鳥の、立かた遠く向上れば、西は赤阪靑山に、降置く霜の眞白なる、目黑に落る鴉が音も、黃ばみ朽たる蘭塚を、欝悒くや思ふ夜視ながら、五色もよしや四方天、南は麻生高畷、芝浦近く寄る波も、東へ續く入江潟、北は芝崎神田の岱、漁村樵徑相雜ひて、目に見ゆるあり見えぬあり。征客常に膓を斷べかりける眺望也。當下、大は沼の地理と、進退さへに鑒定めて、兩個の獄戸共侶に、小篠の蔭に身を潛めて、那癖者が來ぬるや、と息を凝して覘ふ程に、夜は丑三とおぼしき比、麻生の方より忽然と、癖者五名逮立來て、沼の畔に立在たる、そが中に一個の癖者、罩頭巾を目笄に戴き、長き刀を横へたるは、頭領の賊なるべし。迭に指さし聟きて、手下と見えし癖者が、腰に附たる鉤索を、船に戞哩と投掛て、引よせつ、うち乘て、蒲簀の錢を引抗て、肩に乘せんとせし處を、寬澄せし種平島平、俱に繫たる鐵砲の、火薮を撞と切て發せば、寬差はず那頭領と、船なる一個の

癖者の、乳の下腕下此彼ひとしく、擊傷られたる兩銃丸に、霎時も得堪ず苦と叫びて、手足を張て仆れけり。畢竟、大が智計にて、這癖者們を擊仆したる、後の話說甚麼ぞや。そは又這次の卷に、解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳　第八輯　卷之六　終

南總里見八犬傳　第八輯　卷之七

東都　曲亭主人編次

第八十七回

天機を談じて老獸舊洞を惜む
蕉火を照して勇僧猘穴に入る

再說。那癖者們は、種平島平が擊出す、鐵砲の响きと俱に、頭領とおぼしきと、船に乘たる一人の、矢庭に擊れて仆れしかば、這它三個の癖者は、吐嗟とばかり駭慌て、頭領を披起すもあり、然らぬは船に倒れしを、扶けて引抗んとせし程に、連放被けたる鐵砲に、又一人は擊仆され、一個の丸は那頭領の、眉間を再擊碎く、勢ひ猶豫すべくもあらねば、殘る兩個の癖者は、尸骸をそが儘うち捨て、往方も知ず逃亡けり。爾程に村長右衞門二は、纔方種平們が二度まで、筒音高き鐵砲の、暗號を錯へず樹間より、故老佼壯們と、共侶に出て來て、おそる〳〵、大法師の、身邊に找近著て、絆の容子を諮ねけり。登時、大は那癖者們の、絆の趣箇樣々々と、有つる隨に報知して、那五個の癖者を、過半汀渚に擊留たり。二賊は逃て往方を知ねど、息絶ざるもありぬべし。快々那首へ赴きて、死活を見屆け給はずや。と遽しつ先に立て、件の汀渚に赴くにぞ、獵戶種平島平も、鐵砲を引提て、齊一走近著て、擊仆したる癖者們を、此彼と檢するに、頭領とおぼしきと、船の內なる一人は、胸骨眉間を擊れたる、窮所なれば息絶て、銃搶よりも口よりも、吐きし鮮血に身を浸されて、絳に染たるそが中に、後に擊れし一人は、膝節をのみ碎かれたれば、痛傷なれどもまだ死なず、身を起さんとて掙扎きしを、種平はやく走り蒐りて、楚と押へて動せず。島平も亦手傳ふて、腰に附たる列卒索もて、兩手を緊しく綑めて、背を酷く毆懲し、敲き惱して來歷を、問へば癖者苦痛に堪ず、遂

に招道しつるやう、咱們は今宵擊れたる、頭領と俱に五名、長坂山の頭なる、洞中に年來住る、山客にて候也。頭領は原修驗者にて、鷲鐸坊と喚做したり。初奮里に在りし時、好らぬ技を旨として、地方に毒を流せしかば、國守に聞え捕捕られて、緊しく獄舍に繫れしを、幻術をもて脫出て、迹を那里に瘞めたり。然ば這鷲鐸坊は、毎に蜥蜴を養狎して、そをもて竊に禱るときは、雲起り雨降そゝぎて、日を累れども歇ことなし。又隱形の術をよくして、形を變すに自由也。因てこの二術をもて、彼此に雨を降して、その村人を欺くに、神の祟のあるよしを、告示し酷く詬して、許多の米錢衣なンどを、供物と倡へ備措して、夜深てこれを奪ふこと、只是今宵のみならず、這村の獻供物も、五箇年以來受納して、朝夕の資用にしたり。さばれ教誨を疑ひて、祭らざる村あるときは、又術をもて村の女の子の、醜からぬを奪略りて、犯して後に售りしもあり、或は左右に侍らして、愛妾にしたるもあり。村人これを知らざれば、忽地に駭怕れて、こは神祟なめりとて、遂に供物を准備して、祭祀を興行せざるはなし。咱們初は鷲鐸坊の、術あるよしを知らざりしに、祭祀の夜毎に錢米なンどを、運拿る人足に、央れしより聞知りて、他が居ながら衣食に富たる、然しも快樂の羨しさに、顧ふて洞に留りて、却手下にはなりたれども、火家四名は雨を降し、形を隱す術を知らず。只頭領の隨意なりしに、法術至妙の老僧も、命運越に竭たる歟。那里に人の在りしを悟らで、不意を擊れし兩銃に、胸前さへ眉間さへ、腦を破り骨を摧かれ、見らるゝごとく仆れたり。又活くべうもあらずかし。といひつゝ嘆息したりしを、、大は聞つゝ冷笑ひて、酒家推查に錯ふことなく、這惡僧の幻術賊情、世に未曾有の奸惡は、若們がいふ如くなるべし。鷲鐸坊は始より、件の洞に住みたる歟。若們は原何處のものぞ、何の比より手下になりて、這が惡を賣けたる。汝と共に四個の火家の、名は何と喚做したる。具に報よ甚麼ぞや。と問へば種平島平も、一人聲を苛立て、快々稟せ、いはずや。と引提し鐵砲振抗て、背を礫と毆憇せば、賊は得堪ず苦と叫ぶ、聲戰してやよ等給へ。今さら何をか隱すべき。鷲鐸坊は當初今の洞より程遠からぬ、谷蔭に葬を結びて、權且其處に在りけれども、なほ人家

に近しとて、竊に所住を移せしとぞ。然而小可は破吹革風九郎と喚做たる、一所不住の博徒也。又擊れたる這火家は、獏七といふ山客にて、諱名を四疊半と喚れしもの、又逃亡たる兩個の火家は、賽保輔、金山魔夫太と喚做するもので候也。皆是烏滸の間民にて、身を措所なかりしかば、這頭領の手に屬て、兩三稔を歷たれども、只這祭祀の獻供物を、竊に洞に運容るゝを、身の務にしたるのみ。這餘の惡事は候はず。願ふは上人法衣の袖もて、掩ふて救はせ給へかし。けふより渡襃乞丐になりて、鉦を敲き念佛を唱へ、徐に餘命を送るべし。いかでいかで。と哀しげに、諄返しつゝ陪話にけり。思ひがけなき這招道に、村長右衞門二、その餘の莊客、獵戸種平島平們まで、呆れて目と目を合するのみ。惑ひはいまだ解ざりしを、、大はさこそ。と見かへりて、各那を听たる歟。這風九郎とやらんが招道にて、賊僧の伎倆發覺れたれども、尙わがうへを說諦さねば、こゝろ得がたく思はれん。擲に酒家村長許赴きて、知雨老師の徒弟也、と名告て恁々といひつるは、這賊あらんと思ふをもて、今宵必退治して、人の迷ひを醒さまく欲せし間の方便なり。酒家はいぬる日、甲斐州、石禾の道場を退院して、下野を投て赴く程に、けふ這村まで來つる折、黃昏近くなりしかば、宿を借らんと思ひつゝ、村人の門に立よりて、一夕の宿を請ひしかど、皆强顏て承引ず。事情を原れば、大沼祭祀の供物の事、幷に法師覡巫を留ずといふ事まで、一家主の話說にて、初て詳に聞知りたり。因て思ふに五箇年前、大沼祭を村人に、誨えしといふ行脚の僧は、幻術を得たる奸賊にて、形のごとくに村人を、嗔して供物を竊むならん。今宵は正月の祭禮日なれば、例の如く錢と衣裳を、藻刈船にうち乘して、備へまつるといふよしを、うち聞だにも傍痛かり。然らば件の賊僧が、衆人去て小夜深し比、沼頭へ潛來て、竊拿ることなからずやは、とはやく亮查したれども、田舍兒は愚直也。那奸賊に魅されて、年來を歷しうへなれば、縱酒家這意衷を盡して、明々地に諭すとも、只先入を旨として、還て酒家を疑はゞ、信用るものなかるべし。要こそあれ、と深念をしつゝ、却村長許赴きて、思の隨に讀りしかば、長はさらなり、這衆人も、皆承引て些も拒ず、通て指揮に從ふのみ。汝達這們の

賊僧を、亡すことを知らずして、賊僧幷に小嘍囉、此彼三名を滅したり。酒家俗姓は金碗氏にて、法名を、大といへり。弱冠の比安房の國守、里見殿に仕へたりしに、愆る事ありければ、軈て祝髮入道して、關八州を履歷の星霜、二十餘年になりにたり。神を僞り愚俗を誑して、民の財帛を掠奪る、這賊僧の徒弟なりき、と今も思ふ歟、甚麼ぞや。譬ば今宵酒家單身にて、這沼の邊に埋伏して、是等の賊を擊捕るとも、かたくはあらぬ事ながら、恁しては汝達の、迷ひを醒すになほ足らず。非如兒賊也とても、出家の手づから命を斷ば、五戒を破る怕れあり。この故に獵戸を、央ふてこれを擊したり。夫外道を祛けて、正法を盛にし、兇賊を退治して良民を濟度しつるが、則如來の本願なれば、酒家一身に關らぬ、事を好み功を求て、屠殺を旨としつるにあらず。この義をも亦思ふべし。那地獄天堂の、空談をのみ宗として、衆生の興に力を用ひず、個を賣て錢を求る、凡僧と日をおなじくし、年を同くして語るべからず。恁てぞ迷ひは醒ぬらん。こゝろを得よや。と說諭せば、驚きおもふ村長右衞門二、以下の莊客獵戸們まで、初て夢の覺たるごとく、齊一地上に跪きて、俺們凡眼明ならねば、慈悲廣大なる活佛に、をはしませしを知るよしもなく、恁るべしとは思ひもかけず、既に這期に及びても、胸中なほも穩ならで、疑ひ奉りしこそ悔しけれ。粤に昨非を省れば、大德の善巧方便にて、出沒不測の妖賊を、瞬間に誅滅せられて、今より俺村に利益多かり。永代不易の大功德を、何の時にか忘るべき。許させ給へ南無阿彌陀佛、彌陀佛々々々、とうち陪話て、渴仰隨喜數行の感涙、坐に衣領を濡すまでに、伏拜み又額づくを、、大は急に喚立して、既に賊首を獲たれども、なほ逃亡たる二賊あり。莠草その根を遺すときは、再稻田の害とならん。這風九郎を鄕導にして、又那洞に赴かば、二賊を其首に獲さらんや。やよ快々。と遽がせば、大家有理。と諾ひたる、そが中に右衞門二は、故老們にうち對ひて、各々は一二名、快村かたに赴きて、襤に還りし衆人に、是等の義を報知して、船なる錢と衣裳皮龕を、運び返さし給へかし。その餘は道里に居遲りて、船を成るもよかめれ。といふに此彼異議に及ばず。現年老たる俺們は、件の洞に赴くとも、賊を捕

捉る資助には　なるべうもあらずかし。然ば這里より罷り還りて、熟睡をしけん人々の、門を敲きて將て來つべし。こはいふまでにあらねども、洞にはなほも支黨の、多く在ん歟料りがたかり。其頭の用心し給ひね。とこゝろを屬て、恭しく、大に辭してゆくもあり、這里に留るものもありけり。當下種平島平は、風九郎にうち對ひて、やをれ兇賊听たる歟。汝を肩に引掛て、洞の案內に立まく欲す。命惜くば去向を報よ。然ば立ね。と左右より、手を拿り軈て掖立るを、壯佼二名受捕て、肩に掛け足を持つ、金瘡人に熟たる戰國の、民とて疎鹵ならざりけり。爾程に、大法師は、右衞門二幷に莊客們と獵戸を從へて、件の洞に赴く程に、天よく晴て望月の、光隈なく明かりけるに、風九郎を案內にしたれば、更に岐道の迷ひもあらず。ゆくこと半里餘りにして、長阪山の頭なる、一條の岨路に、老たる弱き枝を參へて、樹木間なき處あり。大家其里に來ぬる時、風九郎は聲をかけて、那首の小山の半腹に、見ゆる洞こそ鷲鷹坊の、所躲で候なれ。といふに大家左右なく找ず。登時種平島平は、俱に持たる鐵炮を、拿直し、洞に向ひて、火蓋を反んとせし程に、洞內より夫婦とおぼしき、老翁老婆忽然と、出て手を抗げ推禁めて、人々卒爾し給ふな。俺們は賊徒にあらず。年來妖賊鷲鷹坊に、這所栖を奪れて、怨腸を斷といへども、他は素より術長て、よく鳥獸を厭勝せることと、那唐山なる黃公の、神符に捷る手段あり。この故に阿容々々と、その毒氣を避け躲ひて、空に光阴を過したり。爾るに今宵善知識の、那賊情を明查ありて、輒く仇を誅滅せられし、歡び何事か是に捷すべき。初はこの義を知らでありしに、襤に脫れてかへり來にける、寢保輔金山魔夫太が、その進退を決難て、云々とうち相譚ひしを、心ともなく竊聞て、怨敵旣に亡びたる、絆の趣を詳に知られ、且件の兩賊は、那朕勝の術もあらず、只是寃家の殘黨なれば、俺們これを殺したり。賊徒は才に五名にて、他們が外に支黨なし。洞內にはいぬる比より、拿はれたりし女子們と、金錢衣裳家伙あるのみ。快々入て見給へかし。といふに大家亦驚きて、近著くものゝなかりしを、獨、大は些も颯かず。樹柱の間を漏る月を、燭にしつゝつら〳〵と、件の翁と媼を見るに、腰に梓の弓を張る、八十路の齡なるべ

き歟。頭に霜を戴けども、色黑くして形肱膊み、訥辯にして引聲なし。身には海松の如く搔垂れたる、布の濃黑衣を被て、手に鹿杖を携へたり。必是妖怪ならん、と思へば仡と立對ひて、やよ老牝牡何とかいふ。剛才若們が說ところ、その據あるに似たれども、いまだ素生を詳にせざれば、衆人怪ざるはなし。憶ふに是若們は、狐狸歟しからずは、山魅木精の屬ならん。はやく素生を報ずや。といはれて怕るゝ老翁老婆は、杖をうち捨跪きて、大德許させ給へかし。既に明査せられし如く、俺們は人倫ならず、三百年來這洞に、栖たる眞猫で候也。和名は素よりみの一字にて、猫てふ獸で候へども、面は狸に似たるをもて、みたぬき(猫狸)と喚ぶものもあり。這頭の俗はまみ(眞猫)とぞいふなる。性鈍ければ狐狸と遊ばず、こゝをもて髑髏を被ぎて、人を魅す靈もなし。形肥たれば、ゆくこと遲かり、この故に人を啖ふ、豺狼の悍きに似ず。毎に穴居して他を求ねば、園圃を暴さず、稻穀を竊ず、可もなく不可もなきもの也。といふを、大はうち听て、原來老たる猫でありける歟。徒穴居して人の與に、害を做すことなしといふとも、その身には相應しからぬ、最廣大なる洞を造りて、栖たる故に妖賊の、奪て這里に憑ることあり、是若們が罪ならずや。今より他所に移るべし。酒家這洞を伐崩さして、後の患を除んず、と責懲されて老猫は、詞ひとしく陳ずるやう、緣の故を知召ねば、その譴責は然ることながら、這洞は俺們が、穿鑿りしものにあらず。此は是大古の、古墳崩て洞になりしを、咱們が所栖にしたる也。目今埋させ給はずとも、是よりの後百二三十年、星霜を歷るに及ば、人畜總て泰平の、聖化に遇る歡びあらん。その折にこそ這頭まで、繁華古昔に類なく、士民名處を得て、屋上に屋を加る、魚米の鄕と熟閙しく、徒眞猫穴の名をのみ遺して、この跡もなくなりぬべし。且く等せ給ひね。といふ歟とおもへば老翁老婆の、狀形は見えずなりにけり。今又這等の奇異ありけるを、見も聞もせし衆人は、胆を潰し舌を掉ひて、いよよ、大の德高かるを、曉得て信心彌增しけり。登時、大は此彼と、衆人を見かへりて、剛才老猫の云々と、いへりしは實事にて、洞には餘賊なかるべし。酒家先入て檢せんに、四下の竹を伐採りて、快手炬を造らずや。といふに大家

こゝろ得て、作り出せし竹手炬に、種平們が鐵炮の、火藥を借つ、火を吹移して、振照したる壯佼們は、、大法師に從ふて、種平島平共侶に、找みて洞に入る程に、右衞門二さへにおそる〳〵、後に跟てぞ入りにける。怎而、大は壯佼們と、俱に洞內に找入て、火を抗さして四下を見るに、奧はいと廣やかにて、席薦六枚を布たるは、鷺鱗坊の臥房なるべし。夜物あり、家伙も多かり。只這東西のあるのみならで、年尙弱き三個の女子の、累り俯てよゝと泣を、、大はうち見て、右衞門二們に、扶起さしてよしを問ふに、則是五箇年已前、鷺鱗坊に搔攫れて、他が愛妾にせられしといふ。故鄕を問へば葵岡にて、這人々の相識れる、某甲某乙の女兒なりければ、迭に名告りつ驚くまでに、歡ぶこと大かたならず。然ば件の女子們は、、大法師の方便にて、妖賊誅滅せられたる、譯を聞得て再生の、洪恩德義をうち仰ぐ、感淚の外なかりしを、、大は然こそと慰めて、又右衞門二們と共侶に、その次の房を檢するに、這里には果して賽保輔、魔夫太們の尸骸あり。俱に咽喉を破られて、全身鮮血に塗れたり。必是牝牡の老猫に、啖殺されたりけん、と人僉猜して嘆息す。這餘は錢あり、米さへ多きを、、大は一切見かへらず、只女子們を勸らして、軈て洞より出にけり。當下村長右衞門二は、壯佼們に指揮して、東西皆運び出さしたる、そが中に酒もあり、菓子もあり、飯もありしを、、大に羞めて、餘れるを、皆共侶に飮食ひして、饑たる腹を頤ひけり。爾程に、大法師は、洞內より出したる、贓物を熟〻視て、米錢は是國土の至寶、咖なりとも棄べからず。這餘は汚穢れし不義の材、燔捨るこそよかめれ。といふに大家推辭難て、椀碟盃盤家伙席薦まで、出せし隨に積累ねて、はや蕉火を差寄れば、折から曉ゆく山風に、吹れて燃る程こそあれ、皆灰燼になりにけり。事やうやくに果しかば、種平と島平は、洞に入る折樹下に、繫措きたる風九郎を、牽立んとしてけるに、こも亦咽喉を破られて、何の程にか死してあり。原來又那老猫が、漏さじとて啖殺せしならん。といふを、、大は見かへりて、這風九郎は鷺鱗們と同惡の草賊なれども、這者獨死ざりければ、鷺鱗坊が積惡も、その賊巢さへ知られたり。他膝節を擎破られて、癈人になりたれば、命を助け得させん、と思

ひにけるを未いはぬ間に、那老貐が殺せし歟、正に是天罰を、脫れ得がたき業報ならん。南無阿彌陀佛。と念じつゝ、却業人をいそがして、立かへらんとせし程に、山峽既に明にけり。浩處に人許多、這方を投て來ぬるとおぼしく、聲喋しく聞えけり。此は是別人ならず、鄰に大沼より返されたる、故老一二名は、村人們の門を敲きて、有つるよしを報知せ、更に亦促して、藻刈船なる錢と衣裳を、右衞門二許拿斂さしたる、その事既に果しかば、大丼に右衞門二們を、迎の爲に來つる也。然ば又右衞門二們は、目今來つる村人に、洞の光景女子の事、又小嘍囉三名は、皆老貐が啖殺せし、絆の趣箇樣々々と、一五一十を報知して、三個の女子を指示せば、その親なるもの叔父なるものも、迎に來つる隊にあり。往方も知らず存亡も、知らで五稔過したる、親子の再會、迭の歡び、熟に疎鹵あることなければ、手を拿るもあり、携るもありて、外視も羞ずうち泣きしを、やうやくに心づきけん、こは全く大德の洪恩、世に有がたき活佛に、引接せられし利益にこそ。と稱へて俱に身を轉して、大法師を伏拜みて、齊一歡びを演にけり。是よりして殊さらに、人多くなりければ、幾十貫の錢を分ちて、藤蔓に縢て擔荷ふもあり、又米苞を駝搭ふもあり、或は、大の先に立て、連りに路を開くもありけり。爾程に、大法師は、朝日高く登りし比、豪人に懇請せられて、又村長右衞門二の、宿所にかへり來にければ、一家兒の男女出迎へたる、尊敬尤淺からず。軈て客房に請待して、齋を羞めなどせし程に、主人右衞門二、故老、種平島平、いへばさら也、昨宵祭祀に管りしも、管ざりしも推並て、老弱男女二三百名、咸這宿所に聚合來つ、、大を拜み、功德を謝して、願ふは大德俺村に、葬を造りてまゐらせん、いかで留り給ひね。と請求るもの多かりしを、、大は聽ず、頭を掉て、いかでかは然ることをせん。洒家は年來、行脚を旨とす。且志す義ありて、去向を急ぐものなれども、這村人們が妖賊に、魅されしを聞くに忍びず、竊に智計を旋らして、地方の患を除きしのみ。一ト日も留る暇はあらず。と强面く答へ別を告て、はや立去んとしたりしかば、右衞門二故老們も、留難つゝ商議して、供物の類に集めたる、那五十貫の錢をもて、金に兌へ、布施

と唱へて贈んと欲せしを、、大は些も受ずして、詞正しく諭すやう、捨は是有漏の緣にして、法師を肥す毒藥也。出家は菩提を寶とす。恁る故に大集經に、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、と說れしをいまだ聞ずや。洒家は乞食行脚して、菩提を求るものなるに、千金なりとも何にせん。利に緣り心を動して、この布施物を受納せば、亦那鷲鷹が奸計と、相距ること遠からず。五十步百步の間なるべし。近來は山內、扇谷兩管領の武威既に衰へて、東國一ト日も靜ならねば、奸民盜賊折を得て、山に澂り海に浮み、奪へどもなほ飽ざるは、是良民の不幸也。定正主は程遠からぬ、五十子の城にありながら、軍旅に遑なき故歟、長阪山なる一賊だも、緋捕の沙汰の聞えねば、代りて民の迷ひを醒して、苦を救ひしは、浮屠家の慈悲也。報ひを受る義あらんや。願ふは村長故老、輩、要なき錢と衣を散して、鰥寡孤獨を賑さば、布施して浮屠家に媚んより、遙に捷たる功德ならん。暇まうす。といひ捨て、人禁れども留らず、袖うち拂ひ、外面へ、出て手ばやく草鞋の、紐を結びつ、錫杖を、突鳴らし又回向して、北を投てぞ立去りける。功に誇らず、利に疎なる、這勇僧の擧動に、村人いよ〳〵尊信して、總て餘韻を惜みけり。恁而、大は旅舍を出て、ゆくこと又只一日ならず。肚裏に思ふやう、いぬる日洒家石禾なる、指月を退院しつる折、那四犬士に言を遺して、穗北の宿所で俟んず、と約束をしたれども、つら〳〵思へば穗北の長なる、氷垣殘三夏行は、原是結城の落人にて、嘉吉に籠城せしもの也、と傳聞ぬることしもあるを、立寄て逗留せば、夏行必大念佛の、施主にならんと請ふなるべし。約莫今番の念願は、里見殿の奉爲なるに、他姓の施主を參へては、本意に錯へるのみならず、俺君侯の瑕瑾也。囊に君侯より賜りたる、盤費も今なほ殘れるあり。加るに這年來、募緣の一錢、微塵蘊りぬ、今番の費用を辨ずべし。恁れば氷垣が宿所へは、立寄ざるを上策とす。非如四犬士（莊介、現八、小文吾、大角）信乃道節們に、約束の差ふとも、犬塚の大父大塚三戍は、結城で戰沒せしものなれば、四月十六日の忌辰には、招ずとても信乃們は來つべし。因て去向を復思ふに嘉吉の亂の總大將、結城氏朝主の季子なる、結城四郎成朝主は、成氏朝臣の御方にて、今は

結城の舊城に在り。是も亦洒家大念佛の、事情を聞れなば、施主にならんといはれやせん。此に就き彼に就きても、今番嘉吉の亡魂を、弔ふよしは深祕して、その期に及びて執行せん。吁爾なり。と肚に問ひ、腹に答つゆく程に、分別既に決りければ、穂北の莊を過りしかども、氷垣が宿所へ立寄らず、其頭は笠を傾けて、連りに路次をぞいそぎける。

附ていふ。金碗、大は、長祿二年に、伏姫自刄の折、祝髮入道して、安房を去りにき、是年伏姫は十七歳、、大は二十二歳也。是より以降、今玆文明十五年に至り、星霜既に二十六年。履歷かくの如く年闌て、その志移らず。竟に八靈玉の止る所と、犬士の由來を知ることを得たり。しかれども、這僧の世に見れしは、第四輯なる、行德の一チ二段と、第七輯なる、石禾の段のみ。いまだその趣を、盡すに遑なかりしかば、世の人只等閑に、看過したるも多かるべし。因て今這一チ二回あり、、大の興に演る所、眞面目を顯したる、その智慧と勇敢と、越に初て瞭然たり。かくの如くにあらざれば、伏姫の義俠と對するに足らず。又犬士們を鄕導の、大先達と做すに足らず。這書をいふもの尠からねば、婦幼の輿に贅言す。よく看る人は余が言を俟ずして、分明なるべし。

○按ずるに、麻生に龜前坊と喚做す所あり、那里は二百年已前、荼毘所なれば、と物に見えたり。しからば龜前坊は、人の名にあらざるに似たり。此には稱呼を借用すれども、字の同じからざるが、則作者の用心也。這餘鵜穴の考證は、本輯五の卷の附錄に載たり。

第八十八回

湯島の社頭に才子藥を賣る
聖廟の老樹に從者猴を走らす

話表、武藏州豐島郡、湯島の鄕に祭られ給ふ、天滿天神の神社は、いぬる文明十年に、扇谷の內管領、持資入道建立しぬ。這地は夫木集に見れたる、登蓮法師が、

見し人の忍の岡の花すゝき靡くは招く心地こそすれ

（又廻國雜記にも、忍の岡の歌見えたり）と詠みけり、岡の邊の南にあり。（北國紀行に油島のやしろにて、わすれずは東風吹むかへ都まで、遠くしめのゝ袖の梅が香」とよめりしは、文明十九年の春なれば、この回の歲月より、五箇年後也。）又東北は上野の原、（上野の地名も亦ふるかり。北條分限帳に見えたり）淺草寺に至るまで、都の手態知るよしもなき、無下の田舍でありけれども、這神社のみ月に日に、詣る道俗多かりければ、餳餅果子などを、鬻ぐ坊賈鄙からず。呪師放下師刀玉の、猿樂を做すもあり。そが中に、巫擊鮠鎌の技をもて、肬黑子を拔く藥と、磨齒砂を賣るものあり。地方の花と華やぎし、白面優美の壯佼にて、打扮さへに精悍しく、身には太織紬の染衣を被て、裁著の括袴を、肱膝に跨做たる、肩には緋の縟帶の攀襌を掛て、高足鴕をなん穿たりける。這里には看官多かりければ、巨竹をもて、手搦の埒を締繞らして、戲擊場の界とす。後方には八九尺なる、花田と薄柿の天幕を、仰反形に張亘して、坐擊大刀と鑣鎌を、堅ざま横ざまに飾光らしたる、左手に黃銅の皆具ある、賣藥箱子を臺に措て、その身は凳兒に尻を掛たり。姑して坐擊師は、凳兒をはなれて恭しく、群集の衆人にうち對ひて、今日も相替らず、各位諸君御機嫌よく、本社へ御參詣の序次を以、小可店舗へ處陜まで、立寄らせ給ふこと、歡びこれに捷ものなし。日毎に御披露仕りぬる、小可家方の妙藥は、唐山玄宗皇帝のおん時に、羅公遠といふ仙人が、楊貴妃に傳授したる。神仙丹鼎の靈劑にて、面部手足に生じたる、肬黑子を拔去ること、箒の塵を拂ふより易かり。又這磨齒藥は、世に多くある所の、房州砂をもつてせず。寒水石を打碎き、水に浸し細末にして、加るに、丁字麝臍、肉桂、乳香、沒藥を以ず。寒水石は石膏也。石膏は味辛微寒て毒なし。心下の逆氣、驚喘、口乾き舌焦れて、息すること能ざるに卽効あり。又乳を下し、齒を揩ひ齒を益し、胃熱肺熱を除き、氣を益し陰邪を散し、留飯を下し、太く渴きて飲を引くと、中暑の潮熱、牙痛を治す。這餘の効能最多かり、枚擧るに遑あらず。縱その汁液を飲て、腹內に到るといふとも、大益ありて

小損なし。那房州砂の齒を損じ、脾胃に害ある類にあらず。藥劑御用のおん愛敬には、坐擊刀の拔ざまと、鎌鎌の使ざまを、おん笑ひに欺へまつらん。倘又吉凶悔吝の刀禰達もましまさば、人相手相好に儘して、吉凶を判斷せん。此は是面部の黑子も、人相の吉凶に、拘るよしのあるをもて、小可這技に疎鹵ならず、相術の義は坐擊の後に、おん好に儘すべし。然る刀禰達は居遺りて、徐に問せ給へかし。却是よりは坐擊の辯論、その崖略を稟し演ん。坐擊は原是巷路軍、又組擊より起る所、坐して脩刀を拔んとするに、その術を知らざれば、腰に刀劍ありといへども、奈何ともせんすべなし。此は是唐山にて、所云十八般の武藝にもなきもの也。那十八般の武藝と云ば、一に弓、二に弩、三に鎗、四に刀、五に劍、六に矛、七に盾、八に斧、九に鉞、十に戟、十一に鞭、十二に簡、十三に槁、十四に殳、十五に叉、十六に杷頭、十七に綿繩套孛、十八に白打是也。明朝の武藝は白打を第一とす、白打は拳法の類也。河西の少林寺の拳法は、世間になき所、と一書に見えたり。這餘、捍棒、打擂、火砲、擊丸等の武藝あり。兵錄に載する所、槍棒の題目極て多かり。近屬明の英宗の正統の季年に、山西の李通といふもの、武勇にして人のよく敵すべきなし。その技藝を試るに、十八般あり。これをもて京人に敎しかば、遂に首選に應じて、武職を授けらる。しかれども勵業をもて、顯れずなりしとぞ。水滸傳に、宋の徽宗の時、八十萬禁軍敎頭といふ武職あり、皆十八般の武藝をよくすといふ、此は是寓言也。本邦にも中葉より、武藝の題目多くなりて、今に二十八般あり。噂にその崖略を稟さば、一に弓、二に擊劍、三に騎馬、四に眉尖刀、五に鎗、六に水戲、七に隱形、八に拳法、九に鐵炮、十に暮目十一に火矢、十二に棒、十三に鍬、十四に鐵扒、十五に鐵叉、十六に十手、十七に烽火、十八に大銃、是也。これに加るに、流鏑馬、笠掛、犬追物、牛追物、水馬、坐擊、鎌鎌、騎射、騎馬炮、銃鋺、共に二十八般、是後世、用る所の武藝也。上古は矛ありて鎗なし、弓ありて鐵炮なし。拳法は近曾、明人の傳る所、又是白打の一法歟、又斥候にも吻抛あり。又甲冑の擬ざまにも、舊傳ありて武士の一術とす。新田左中將家の相傳し給ひたる、義家朝臣擬甲の圖說

あり。擬甲とは、甲を被ること也。就中鎌鎌は、本邦古より、最上の武器とせらる。然ばにや、太職冠鎌足公藏卷の鎌をもて、逆臣入鹿を誅し給ひき。又唐山の鉤は鎌に似て、最上の武器たるよし、吳越春秋に見えたり。吳王の鉤は、干將莫邪と伯仲す、鉤は劒の名也、又曲刀也、又熊手の類とす。這餘なほ種々の口傳あれども、長口上はおん退屈の、方ざまもをはするならん。然て先坐擊刀の、拔ざまを御覽に入れん。といひつゝ扇を推疊みて、腰に挿し、見かへりて、後方に掛たる亘大刀を、左右に拿りつゝ徐やかに、又看官にうち對ひて、本邦近來軍陣に、亘大刀を用るは、武威を示せる與のみにて、多くは箔打の木刀也。唐山には恁る器械なし。水滸傳に、關勝の綽號を、大刀といへり。大刀は雜刀の類也、大かたなにあらず。是鬱せ這亘大刀は、木刀に候はず。長短は柄頭より瑞まで、通て四尺八寸あり。刀は脩し、臂は短し。拔んとするに拔くこと克はず。是を拔くこと腰にあり。といひつゝ刀を拿直して、箱子枕頭二三十を、臺の上に積登して、高足獸を穿ながら、件の枕兒の頂上に、片足を踏掛け立あがれども、なほ自若として眸がず、軈て片膝を折り、片足を、後ざまに遣伸して、腰に挿たる亘大刀を、拔んとしつゝいまだ拔かず。忽地に耶と聲をかけて、丁と引拔く刃の電光、煞人活人祕訣の刀法、瞬間もなきまでに、使ふこと半晌許、精神連りに佳境に入りて、月落る時星流れ、雨霽るゝ時虹横り、朔風雪を散すが如く、沙水に布を曝すに似て、閃閃晃々微妙の絶藝、又いふべうもあらざれば、看官齊一喝采る聲、霎時は鳴も已ざりけり。既にして坐擊師は、徐に刃を鞘に斂めて、枕兒を拂ふ片足と俱に、礮と頻るゝ數層の臺子を、はやく閃りと下立たり。世に珍しき剽捷を、只頭感嘆せざるはなく、或は齊齒除黑子の、藥を買ふもの多かりけり。賣果て坐擊師は、又衆人にうち對ひて、是より又鎌鎌の、一術をおん目に被くべけれども、今朝より數遍の事なれば、聊疲勞ざるにもあらず、且中休に仕らん。遽せ給はぬ刀禰達は、なほおん足を駐め給ひて、鬱〻給へかし。といふに衆人俟不樂て、還るは多く止るは、兩三人に過ざりけり。そが中に一個の武士あり、皇蛇皮絹の小袖を被て、朱鞋の兩刀を跨へ、深編笠を戴きたるが、向よ

り後方に立在て、件の坐撃を觀たりしに、傍に人の稀になりしを、折よしとや思ひけん、找寄りつゝ坐撃師を、こやこやと喚びながら、編笠を脱捨るを、と見れば月額の迹長く伸て、色薄黑く眉秀、眼瑩淨に鼻梁直卬りて、身材高き壯佼也。却這武士は鷹揚に、坐撃師にうち對ひて、俺も向より這里にありて、和郎の技藝を熟覽せしに、江湖上の坐撃師の、浮たる技と同じからず、一進一退法に稱ひて、聊も空隙なし。是を軍陣鬪戰の間に施すことあらば、よく當るものなかるべし。又只武藝のみにもあらず、和漢の故實を並擧げて、衆人に示したる、こも亦架空の談義にあらず。文備あるもの武備ありとは、恁る人をやいふべからん。只管感じおもふをもて、今亦問まく欲き事あり。和郎は藥を賣る與に、面相手相も需に應ず、といひつるは實語なる歟。賄黑子の面相に、宜しからざるその所奈何。と問ふをうち听く坐撃師は、更に阿容たる氣色なく、憶ずも微笑て、仰うけばり候ひぬ。世渡り種なる拙技を、日毎に觀る人多かれども、君が如きはいと稀也。風鑑の技はしも、學得たるにあらねども、その書あれば古人を師とせし、獨學孤陋。杜撰もあるべし。恁れば坐撃の事とても、然までに譽させ給ひては、なか〳〵に當りがたかり。いと恥しき事ながら問せ給へば稟すなり。風鑒家に十觀あり。眼下を男女とす、又名けて淚堂といふ。陳氏の相書に、淚堂に黑痣斜紋あれば、老に到て兒孫を剋すといふ是也。又眉後を移遷とす、左は移宮、右は遷宮なり。相論に云、遷移宮若昏暗缺陷て、及黑子あれば、出入るに宜しからず、虎狼に驚さるゝといへり。かくの如き胱黑子も、拔去るときは患ひなし。といふを武士は冷笑ひて、俺聞く、荀子に非相の篇あり、荀卿の論に云、形を相するは、心を論ずるに如かず、心を論ずるは、術を擇むにしかず。形は心に勝ず、心は術に勝ず。術正うして心これに順ふ。則形相は惡といへども、而心術善なれば、君子たるに害なし。形相は善なりといふとも、而心術惡なれば、小人たるに害なし。君子の吉をいひ、小人の凶をいふ、故より長短小大善惡形相は、吉凶にあらずといへり。且これを徵すに、古の聖人大賢、黙の公孫呂、楚の孫叔敖、葉公子高、孔子、剛公且、皐陶、閎夭、傅說、伊尹、傅巖、禹湯は、皆醜相にあらざるよしを以て。

その言听くべく、その論味ふべし。然るを說相家の取捨する所、龍形、虎鶴形、獅形、孔雀形、龜形、牛形、猴形、豹形、象形、鳳形、鴛鴦、鷺鷥、駱駝、黃鸝、練雀等の形に似たるを、富貴の相とし、猪形、狗形、羊形、馬形、鹿形、鴉形、鼠形、狐形、狸形の如きを、凶暴貧薄、夭折の相とす。夫人は萬物の靈にして、これより貴きはなし。龍虎、鳳凰、獅子、孔雀は、皆是禽獸にして、人に及ばず、人の身これに似たりといふとも、焉ぞ吉兆あらん。加、旃、味耜高彥根神は、天稚彥と相肖たり。亦壹岐直眞根子は、武內宿禰と相肖たり。共に是一身二體あるが如し。こゝをもて、妻子兄弟といへども、よくこれを識別するものなし。しかるもその心術と、命の長短同じからず。又平將門の家臣に、主と相肖たるもの六名あり。しかれども、その勇將門に及ばず。又源頼朝は、身材矮くして、頭一斗の瓢に似たり。しかれども名將たるに害なし。又梶原景季は、面白くして狐に似たり。しかれども勇士たるに害なし。是史傳に載せし所也。然るを矧五尺の身に、粟粒ばかりの黑子ありとも、憂を做すことあらんや。と詞せわしく說破るを、坐撃師聞つゝ頭を掉て、御論は寔に然ることあり。然けれども、五尺の身に、一分の鋭芽の入るときは、苛々として堪がたし。倘拔ずして日を經るときは、遂に患を做すことあり。面部の黑子もこれに同じ。淚堂移遷にあるものを、はやく除き去ざれば、憂を做すことなからずやは。人の身に在る所の、黑子は隱るゝを好として、見るゝをもて歹しとせり。漢の高祖は身の內に、七十二の黑子あり、こゝをもて異相とす、黑子の吉凶推て知るべし。又應神天皇は、おん腕に蝦の形あり、こゝをもて異相とす、和漢の明證、類して推すべし。抑風鑒の一術は、孔子の敎になきをもて、一方に偏る學者は、荀子の非相を甘じて、信ざるがいと多かれども、素問內經に色脈あり、色脈は觀相也。唐山には上古より、その人に賢しからず。只人の形局を、よく相するのみならず、牛を相し、馬を相し、劒を相し、笏を相せし、寧戚、伯樂、虔煥、東方朔が如きに至て、是を小技といふといへども、多く得がたき神術也。是等は形を相するのみ。よく人を相するものは、色脈を觀て、生死を辨